

# 鷹ノ巣Ⅲ

— 第4次調査の成果 —

2018

ひ たち な か 市  
公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社



# 鷹ノ巣Ⅲ

－第4次調査の成果－

2018

ひ た ち な か 市  
公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社





鷹ノ巣遺跡全景(北から)



第77号住居跡炭化材出土状況(西から)



## 序 文

ひたちなか市は、茨城県の中央部からやや北東に位置し、県都水戸市に接した那珂川河口部左岸の人口約16万人の街です。

当市は、東京から約110kmの距離にあり、観光スポットである国営ひたち海浜公園、建設中の重要港湾「茨城港常陸那珂港区」、生産量日本一である干しいも、県内有数の那珂湊漁港、電機・機械等の工場群など、農工商がバランスよくそろい将来性が見込まれる街であります。

市域には、太平洋を望む約13kmの海岸線が続き、内陸には那珂川をはじめとした河川が流れ、その流域は原始・古代から人々の生活の場として栄え、3百数十箇所の集落跡・古墳・城館跡などの遺跡が確認されています。

ひたちなか市では、鷹ノ巣遺跡が所在する部田野地区において市営たかのす霊園拡張事業を実施することになり、地区内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて関係諸機関で協議した結果、記録保存の処置が講じられることになりました。

発掘調査は、2005年度と2012年度にも実施し、弥生時代の住居跡から市内で同時期としては初の出土となる58点ものガラス玉や、古墳時代の住居跡から赤色顔料である「ベンガラ」が詰まった小型の壺が出土しました。また、奈良時代の住居跡からは「山田文マ子夜兎」と刻まれた文字瓦も出土し、その成果は近隣にあります十五郎穴横穴墓群の解明にも期待されます。2016年度に実施しました発掘調査では、弥生時代や古墳時代、奈良・平安時代の住居跡を確認し、過去の調査とあわせて、鷹ノ巣遺跡の全容が明らかになりつつあります。

本報告書が、学術資料としてはもとより地域の歴史を解明する資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

最後になりますが、発掘調査から本報告書刊行に至るまで、多大な御協力をいただきましたひたちなか市環境保全課、御指導いただきましたひたちなか市教育委員会をはじめとする関係諸機関、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成30年1月

公益財団法人 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社  
理事長 永盛 啓司

## 例 言

- 1 本書は、ひたちなか市の委託を受けて、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が実施した鷹ノ巣遺跡発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査は、ひたちなか市部田野地区の市営たかのす霊園拡張工事予定地域内に存在する埋蔵文化財の事前調査を目的とする。
- 3 発掘調査および整理報告は、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社の文化課文化財調査事務所が実施したものであり、組織は次のとおりである（2017年9月現在）。

理 事 長	永盛 啓司	
副 理 事 長	木下 正善	
常 務 理 事 兼 局 長	鈴木 隆之      横須賀 重夫	
事務局次長	大和田 幸治	
理 事	杉山 和子      大和田 健      綱川 正      永井 喜隆      鈴木 一成      加藤 恭子      須藤 雅由	
監 事	武藤 猛      安 智範	
文 化 課 文化財調査 事 務 所	参 事 兼 課 長	西野 均
	副 参 事 兼 所 長	鈴木 素行
	課 長 補 佐	佐々木 義則
	係 長	稲田 健一
	嘱 託	菊池 順子

- 4 発掘調査は、2016年5月18日から11月30日まで実施した。発掘調査の従事者は次のとおりである。  
調査員：稲田健一  
調査補助員：相田三郎、石川 勉、石崎寿子、石崎洋子、榎澤由紀江、江橋和子、海老原四郎、岡野政雄、海後晴美、栗原芳子、小池 清、助川 諒、飛田とし子、坪内治良、中嶋順子、廣水一真、見越広幸、矢野徳也、渡辺恵子
- 5 整理作業及び本書の作成に従事したものは、次のとおりである。  
稲田健一、榎澤由紀江、海後晴美、菊池順子、桐嶋美子、後藤みち子、佐々木義則、佐藤富美江、助川 諒、鈴鹿八重子、鈴木素行、中嶋順子、西野陽子
- 6 本書は、稲田健一が編集した。
- 7 本書の執筆と分担は、以下のとおりである。  
Ⅱ・Ⅲ：鈴木素行      Ⅴ（遺物）：佐々木義則      Ⅰ，Ⅳ，Ⅴ（遺物以外），Ⅵ：稲田健一  
Ⅶ：パリノ・サーヴェイ株式会社
- 8 石器及び礫の石材の同定は、矢野徳也氏に御指導をいただいた。
- 9 炭化材の樹種及び炭化種子の同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 10 発掘調査の出土資料は、本報告書刊行後に、ひたちなか市教育委員会へ移管される。
- 11 本書の作成にあたっては、次の方々に御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（50音順・敬称略）  
石井 篤・梅田由子・栗田昌幸・斉藤 新・住谷光男・蓼沼香未由・千葉美恵子・照沼沙保里・早川麗司・三井 猛・矢野広子  
大洗町教育委員会

# 目次

I 遺跡の概要	1	VI その他の遺構と遺物	114
1 遺跡の位置	1	1 溝状遺構	114
遺跡の位置 遺跡の周知と既往の調査 周辺の遺跡		2 性格不明遺構	114
2 調査の経緯と概要	4		
調査にいたる経緯 調査の経過 調査の概要		VII 自然科学的分析	116
II 縄文時代の遺物	7	鷹ノ巣遺跡から出土した炭化材の樹種および炭化種実	116
		はじめに 炭化材の樹種同定 種実遺体の同定	
III 弥生時代の遺構と遺物	10	写真図版	
1 住居跡の調査	10		
第68号住居跡			
2 調査区の遺物	16		
3 鷹ノ巣遺跡における弥生時代後期前半の土器群について	23		
IV 古墳時代の遺構と遺物	35		
1 調査の概要	35		
住居跡の分布 住居跡の規模 住居跡の形態			
住居跡の主軸 貯蔵穴			
2 住居跡の調査	38		
第69号住居跡 第71号住居跡 第73号住居跡			
第76号住居跡 第77号住居跡 第83号住居跡			
第85号住居跡 第86号住居跡			
3 遺構に伴わない古墳時代の遺物	72		
4 古墳時代後期の大型住居跡について	73		
5 古墳時代遺物観察表	81		
V 奈良・平安時代の遺構と遺物	89		
1 調査の概要	89		
住居跡の時期 住居跡の分布 住居跡の規模 竈			
2 住居跡の調査	91		
第70号住居跡 第72号住居跡 第78号住居跡			
第80号住居跡 第81号住居跡 第82号住居跡			
第84号住居跡			
3 土坑・溝状遺構の調査	107		
第13号土坑 第3号溝状遺構			
4 奈良・平安時代遺物観察表	110		



## I 遺跡の概要

### 1 遺跡の位置

**遺跡の位置** ひたちなか市は、茨城県のほぼ中央の太平洋岸に位置する。東は太平洋に面し、西は那珂市、南は那珂川を境に水戸市・大洗町、北は東海村と接している。市域は、東西約13km・南北約11kmで、総面積は99.93km<sup>2</sup>、人口は約16万人である。

鷹ノ巣遺跡は、ひたちなか市のほぼ中央に位置し、字名では字部田野（へたの）宮後（みやご）と西原に所在する。

ひたちなか市域の地形は、那珂台地、那珂川段丘、砂丘、沖積低地の4つの地形面に大別できる。鷹ノ巣遺跡は、沖積低地を望む標高25m前後の那珂台地上に立地する。沖積低地には中丸川が流れ、国道245号線湊大橋付近で市域の南端を流れる那珂川に合流する。遺跡の西側には、中丸川の支流の本郷川が流れ、その流れは狭小な支谷を縫うように北上する。本郷川の上流には、馬渡埴輪製作遺跡や製鉄遺跡の後谷津遺跡、原の寺瓦窯跡等が存在している。

遺跡の位置する台地には南側から2つの谷津が入り、それらの谷津により舌状の地形を呈す。東側の谷津には湧き水が流れており、西側の谷津付近には現在東水戸道路のインターチェンジがある。遺跡の現況は、ひたちなか市名産の干し芋の畑地となっていた。

**遺跡の周知と既往の調査** 茨城県内市町村の遺跡を集成した地名表及び地図の中に、鷹ノ巣遺跡が記載されたのは、1976年の『那珂湊市遺跡分布調査報告書』[井上他1976]が初出である。報告書の中には、「昭和42年頃、ごほう深耕中に竪穴式住居址が発見され、古墳時代前期の古式土師器の破片が出た」とある。

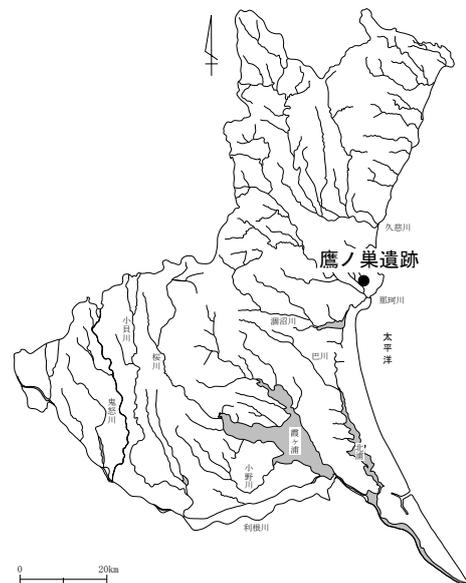
鷹ノ巣遺跡における調査は、3回実施されている。第1次調査は、1992年度に鷹ノ巣遺跡発掘調査会が実施している。この調査は市営たかのす霊園造成に伴うもので、調査期間は1992年11月4日から1993年3月17日である。調査対象面積は約3,300m<sup>2</sup>。調査では、住居跡28基（古墳～平安時代）、土坑3基、性格不明遺構1

基が確認されている。

第2次調査は、2005年度に当公社が実施した。この調査は市営たかのす霊園の拡張に伴うもので、調査期間は2005年7月29日から2006年2月28日である。調査対象面積は7,363m<sup>2</sup>。調査では、住居跡43基、溝状遺構3条、土坑8基を確認したが、調査期間等の関係から東側の調査区の遺構と西側の遺構の一部のみを調査対象とし、西側の住居跡3基と溝状遺構2条は次年度以降とした。

第3次調査は、2012年度に当公社が実施した。この調査は市営たかのす霊園の拡張に伴うもので、第2次調査で遺構は確認したが調査を実施していなかった遺構の調査である。調査期間は2012年5月15日から7月11日である。調査対象面積は600m<sup>2</sup>。調査では、住居跡3基と溝状遺構2条を調査した。

**周辺の遺跡** 鷹ノ巣遺跡周辺には、旧石器時代から近世にかけて数多くの遺跡が存在している。第2図は、鷹ノ巣遺跡を中心として、約3km以内の範囲に分布する遺跡を25,000分の1の地図に記したもので、各遺跡の状況は第1表の通りである。



第1図 遺跡の位置



第2図 鷹ノ巣遺跡の位置(A:鷹ノ巣遺跡/1～90の遺跡番号は第1表に対応する/[茨城県2001]を一部修正・加筆)

各時代ごとの詳細については、2007年度の報告にすでに記載しているので、ここではその後に調査が実施された十五郎穴横穴墓群と宮後遺跡について記載する。

十五郎穴横穴墓群では、ひたちなか市教育委員会と当会社が2007年度から2014年度にかけて史跡指定に向けての調査を実施した[稲田他2016]。その結果、横穴墓が約1 kmの範囲に274基あることが判明した。また、確認調査では、未開口の状態の横穴墓(館出支群I区第35号墓)を検出し、発掘調査を実施した。横穴墓の玄室からは、

人骨とともに、土器1点、大刀1口、刀子5口、鉄鏃19点、鉄釘181片、砥石1点、炭化物、漆片と思われるものが出土した。大刀は8世紀中葉で、土器は9世紀前半の時期と推定される。玄室の外の羨道部と墓前域からは、須恵器が57個体出土した。時期は8世紀後葉と推定される。出土した遺物の時期には、鷹ノ巣遺跡で同時期の住居跡が存在することから、当遺跡が十五郎穴横穴墓群の造営や被葬者と深い関わりがある可能性が推定できる。

宮後遺跡では、茨城県教育財団によって2010年に続い

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					
		P	J	Y	K	N	T
A	鷹ノ巣遺跡	○	○	○	○	○	
1	峯ノ山遺跡		○				
2	道理山古墳群				○		
3	道理山貝塚		○				
4	道理山遺跡	○	○	○	○		
5	寺前前方後円墳				○		
6	寺脇遺跡		○	○	○		
7	大田房遺跡		○	○			
8	柳沢十二所遺跡	○	○	○	○	○	
9	御所内Ⅰ遺跡			○	○	○	
10	御所内Ⅱ遺跡			○	○	○	
11	鍛冶屋遺跡					○	○
12	前方遺跡			○	○	○	
13	坂ノ上遺跡		○	○	○	○	
14	宮前古墳群				○		
15	下高井遺跡	○	○	○	○	○	
16	柳沢原山遺跡		○	○	○	○	
17	天王前遺跡		○	○	○	○	
18	三反田古墳群				○		
19	上高井遺跡		○		○	○	
20	高井古墳群				○		
21	三反田上河原遺跡			○	○		
22	三反田遺跡		○		○		
23	蜷塚西貝塚		○				
24	三反田蜷塚貝塚		○				
25	三反田蜷塚遺跡			○	○	○	
26	峠遺跡			○	○	○	
27	八幡ノ上遺跡		○	○	○	○	
28	大部坂砂利山遺跡		○				
29	ほんぼり山遺跡	○	○	○	○	○	
30	船窪遺跡	○	○	○	○	○	
31	廻り目遺跡			○	○	○	
32	鍛冶屋窪遺跡		○	○	○	○	
33	神敷台遺跡		○	○	○	○	
34	館山横穴墓					○	
35	田宮原Ⅱ遺跡		○	○			
36	田宮原Ⅰ遺跡		○	○			
37	新堤横穴墓群					○	
38	新堤遺跡		○	○			
39	小谷金遺跡		○	○	○	○	
40	小谷金東遺跡		○	○	○	○	
41	部田野富士山遺跡		○	○	○	○	
42	部田野古墳群				○		
43	部田野西富士山遺跡		○	○	○	○	
44	部田野横穴墓群					○	
45	上ノ内遺跡		○		○	○	
46	上ノ内貝塚		○				
47	宮前貝塚		○				
48	尼ヶ裾館跡						○
49	尼ヶ裾遺跡		○	○	○		
50	釜神山遺跡			○	○		
51	宮後遺跡		○	○	○	○	
52	部田野西原遺跡	○				○	
53	差洪遺跡	○	○	○		○	
54	中浦見遺跡		○		○		
55	石沢遺跡		○		○	○	
56	西浦見遺跡		○		○	○	
57	北西原遺跡		○		○	○	
58	部田野猪Ⅰ遺跡		○	○			
59	部田野猪Ⅱ遺跡		○	○			
60	部田野猪Ⅲ遺跡		○	○			
61	部田野山崎Ⅰ遺跡		○	○	○	○	
62	部田野山崎Ⅱ遺跡		○	○	○	○	
63	山崎遺跡		○				
64	前原A遺跡		○	○			
65	西並木下遺跡		○		○	○	
66	前原B遺跡			○	○	○	
67	馬渡古墳群				○		
68	前原C遺跡				○	○	
69	本郷東遺跡			○	○	○	
70	本郷西遺跡			○	○	○	
71	十五郎穴横穴墓群				○	○	
72	指洪遺跡		○	○	○	○	
73	虎塚古墳群				○		
74	下原遺跡		○				
75	北谷遺跡			○	○	○	
76	中根北谷北遺跡		○	○	○	○	
77	君ヶ台遺跡	○	○	○	○	○	
78	君ヶ台貝塚		○				
79	笠谷古墳群				○		
80	館出遺跡		○	○	○	○	
81	笠谷遺跡		○	○			
82	大和田遺跡		○	○	○	○	
83	東中根清水遺跡	○	○	○	○	○	
84	中根城跡						○
85	東中根堂山遺跡			○			
86	野沢前遺跡		○	○	○	○	
87	石光遺跡		○		○	○	
88	中根中区古墳群				○		
89	中根中区遺跡				○		
90	西中根遺跡		○	○			

<第1表凡例>「時代」 P:旧石器時代 J:縄文時代 Y:弥生時代 K:古墳時代 N:奈良・平安時代 T:中世

て2015年に調査が実施された[根本2017]。調査では、縄文時代の住居跡1基、古墳時代後期の住居跡3基、奈良・平安時代の住居跡6基などが検出された。これらの調査成果からは、2010年の調査成果と同様に、宮後遺跡が鷹ノ巣遺跡とほぼ同時期の集落跡であることが確認された。また、6世紀後葉に比定された第18号住居跡は、一

辺が8.40mという大型住居跡であり、鷹ノ巣遺跡と比較しても最大規模となることが注目される。

## 2 調査の経緯と概要

**調査に至る経緯** 2015年度、ひたちなか市においては、ひたちなか市営墓地たかのす霊園拡張事業が計画され、約1万㎡の範囲が対象とされた。

対象地内には、周知の遺跡として鷹ノ巣遺跡が所在することから、ひたちなか市市民生活部環境保全課とひたちなか市教育委員会総務課文化財室、当公社の三者協議会がもたれた。その結果、2016年度に発掘調査が計画された。調査区は、第2次調査区の北東側に隣接する場所である(第3図)。

**調査の経過** 2016年5月 鋤入式(18日)。調査は、まず重機を使ってトレンチを設定し、遺構の分布状況を確認する作業から開始した。トレンチ掘削後、遺構を確認したトレンチを拡張するように表土除去を行った。掘削で生じた表土の置き場は、調査区北側で遺構が確認できなかったのものでその場所とした。また、調査区南側は、第2次調査で埋没谷が確認された部分の隣であるため、埋没谷があることを予想しトレンチを設定し、結果として埋没谷が確認されたため、トレンチ調査で終了とした。**6月** 重機による表土除去後、調査補助員による遺構確認を行い、住居跡16基と溝状遺構2条、土坑1基を確認した。遺構確認後、調査区西側の第68号住居跡から調査を開始した。

**7月** 調査区西側から東側に位置する住居跡を中心に調査を実施した。公社主催の小中学生を対象とした講座「ふるさと考古学」の受講生が第77号住居跡で発掘体験をした(30・31日)

**8月** 調査区中央から東側に位置する住居跡を中心に調査を実施した。市内佐野中学校2年生が職場体験として発掘体験をした(25・26日)

**9月** 調査区東側と南側に位置する住居跡等を中心に調査を実施した。市内枝川小学校5・6年生が来訪(15日)。当月は台風の影響で調査が中止となる日が多かった。

**10月** 住居跡の覆土除去がほぼ終了し、住居跡の竈と溝状遺構の調査を実施した。

**11月** 遺構の覆土除去が終了し、図面を中心に調査を実施した。22日には空中写真撮影を実施した。市内大島中学校2年生が職場体験として発掘体験をした(9

日)。30日に機材を撤去し、調査を終了した。

### 調査の概要

ローム層上において検出された遺構は、弥生時代後期の住居跡1基、古墳時代後期の住居跡8基、奈良・平安時代の住居跡7基と溝状遺構1条、土坑1基、時期不明の溝状遺構1条である(第4図)。

住居跡は他の住居跡と重複せず、点々と分布する。古墳時代後期の住居跡では、4基が一辺7mを越える大型の住居跡で、1遺跡の1時期に4基もの大型住居跡が確認されるのは市内で初めての事例となる。第3号溝状遺構は、第2次調査で確認されたものに接続する溝で、瓦片等が出土した。同じく第1号溝状遺構も第3次調査で確認されたものに接続する。

第4次調査の時代ごとの住居跡番号は以下の通りである。なお、住居跡等の遺構番号は、第1～3次調査で付された番号に続くものとし、遺構が確認された順に付けている。

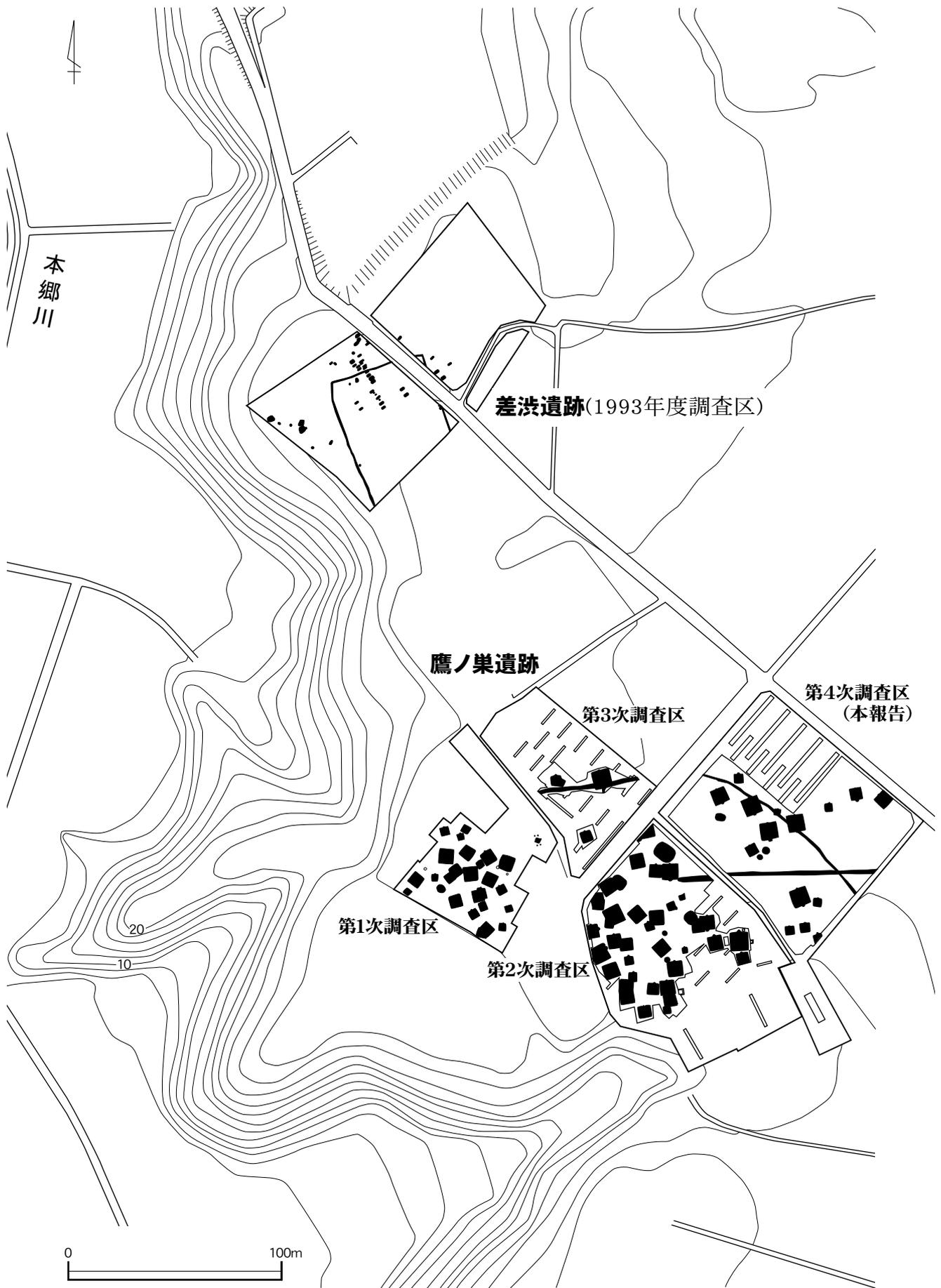
弥生時代：68

古墳時代(後期)：69・71・73・76・77・83・85・86

奈良・平安時代：70・72・78・80・81・82・84, SD3, SK13

### 参考文献

- 井上義安他 1976 『那珂湊市遺跡分布調査報告書』那珂湊市教育委員会
- 井上義安 1994 『那珂湊市鷹ノ巣遺跡』那珂湊市鷹ノ巣遺跡発掘調査会
- 稲田健一他 2008 『鷹ノ巣-第2次調査の成果-』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第37集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 稲田健一他 2013 『鷹ノ巣Ⅱ-第2・3次調査の成果-』(財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告第41集 財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
- 稲田健一他 2016 『十五郎穴横穴墓群』(公財)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告第42集 ひたちなか市教育委員会・公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
- 根本康弘 2017 『宮後遺跡2 一般国道245号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第422集 公益財団法人茨城県教育財団



第3図 鷹ノ巣遺跡調査区位置図

I 遺跡の概要



第4図 第2・3・4次調査遺構分布図(SD:溝状遺構/SK:土坑/グリッドは1辺10m)

第2表 第2・3・4次調査住居跡一覧表

住居跡番号	グリッド	時期	住居跡番号	グリッド	時期
第28号住居跡	B・C-7・8	古墳(後期)	第55号住居跡	E・F-11	弥生
第29号住居跡	D-5・6	8世紀1	第56号住居跡	H-17	9世紀3
第30号住居跡	E-8・9	古墳(後期)	第57号住居跡	G-12	9世紀2
第31A号住居跡	H-17	8世紀後半?	第58号住居跡	H-14	9世紀中
第31B号住居跡	H-16・17	古墳(後期)	第59号住居跡	G・H-13・14	古墳(前期)
第32号住居跡	C・D-17・18	8世紀2	第60号住居跡	F-12・13	古墳(前期)
第33号住居跡	D・E-16・17	8世紀3	第61号住居跡	F-13・14	8世紀4
第34A号住居跡	D・E-15・16	8世紀2	第62号住居跡	E・F-13・14	古墳(前期)
第34B号住居跡	D-15・16	古墳(後期)	第63号住居跡	D・E-13・14	8世紀3
第35号住居跡	D・E-14・15	弥生	第64号住居跡	F・G-14・15	古墳(後期)
第36号住居跡	F・G-15・16	古墳(後期)	第65号住居跡	D-17・18	8世紀3
第37号住居跡	G・H-16・17	古墳(後期)	第66号住居跡	F-15・16	9世紀中
第38号住居跡	H-15・16	8世紀1	第67号住居跡	D-14	8世紀3
第39号住居跡	I-16・17	古墳(後期)	第68号住居跡	Z-12	弥生
第40A号住居跡	I-15	古墳(後期)	第69号住居跡	Y・Z-11・12	古墳(後期)
第40B号住居跡	H・I-14・15	古墳(前期)	第70号住居跡	X-11・12	8世紀前
第41号住居跡	H・I-12・13	古墳(前期)	第71号住居跡	X・Y-13	古墳(後期)
第42号住居跡	H-11・12	古墳(後期)	第72号住居跡	X-14	8世紀中~後葉
第43号住居跡	F・G-11	古墳(前期)	第73号住居跡	X・Y-14・15	古墳(後期)
第44号住居跡	G-11	8世紀1	第76号住居跡	Z-14・15	古墳(後期)
第45号住居跡	F-11	古墳(後期)	第77号住居跡	Z・A-17・18	古墳(後期)
第46号住居跡	D・E-11	古墳(前期)	第78号住居跡	Z-18・19	8世紀4
第47号住居跡	C-11・12	弥生	第80号住居跡	A-19	8世紀4
第48号住居跡	B・C-10・11	古墳(後期)	第81号住居跡	A・B-18・19	8世紀4
第49号住居跡	H・I-13・14	古墳(後期)	第82号住居跡	A-20	9世紀前
第50号住居跡	C・D-12・13	古墳(後期)	第83号住居跡	W・X-15・16	古墳(後期)
第51号住居跡	D-12	古墳(後期)	第84号住居跡	V-16	8世紀2
第52号住居跡	F・G-12	古墳(前期)	第85号住居跡	T・U-16	古墳(後期)
第53号住居跡	G・H-12・13	古墳(後期)	第86号住居跡	T-17・18	古墳(後期)
第54号住居跡	H・I-14・15	9世紀3			

\*第74・75・79号住居跡は欠番

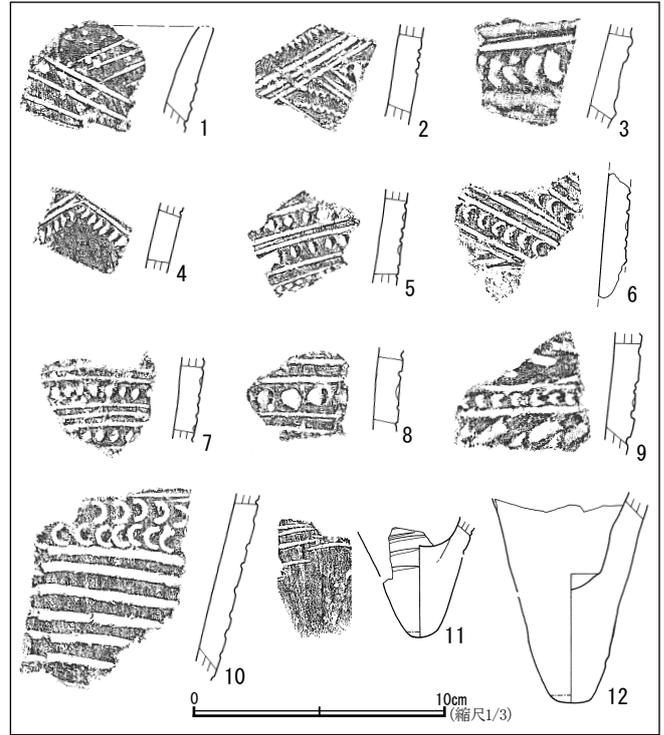
## II 縄文時代の遺物

### 縄文時代遺跡としての鷹ノ巣遺跡 1976 (昭和 51)

年の『那珂湊市遺跡分布調査報告書』には、鷹ノ巣遺跡が古墳時代の集落跡として解説されている(井上・宮田編 1976)。縄文時代の遺跡の複合については、1985 (昭和 60)年、「縄文早期中葉」の遺跡として「鷹ノ巣遺跡(田戸下層期～)」が記載された(那珂湊市教育委員会編 1985)。1992 (平成 4)年度に実施された第 1 次調査の報告書にも、この「田戸下層」についての記述がある。「墓地公園を造成する西原 2854-1 を中心とした畑地には、山林寄りに縄文時代早期の田戸下層式土器、…が散在していたところであった」、「かつて田戸下層式土器を採集した畑地は、その後 3,000 m<sup>2</sup>にわたって、表土下約 40～50 cm の深さまで削平されてしまい、前面にロームが露呈した状態となっている」(井上 1994)。事前の削平により、田戸下層式土器を出土する地点が発掘調査の対象とならなかったことから、当該期については、遺物が報告されないままになった。調査区から採集されていた田戸下層式土器が、第 1 次調査の出土遺物とともに保管されていたので、これを図化し掲載する(第 5 図)。

第 1 次調査(井上 1994)では、古墳時代の遺構に混在して縄文時代後期の土器片が 1 点、石鏃が 1 点報告されている。第 2 次調査(小松崎・窪田 2013)では、調査区内から出土した縄文時代の遺物をまとめて報告した。土器は、早期・中期・後期があり、中期後葉と後期前葉の破片が比較的多い。早期に田戸下層式土器が 1 点だけ含まれており、これは、第 1 次調査区「山林寄り」に形成された遺跡の周縁部として捉えられる。石器は、草創期の槍先形尖頭器、有茎尖頭器も検出された。第 3 次調査では、縄文時代の遺物は出土していない。第 4 次調査は、第 2 次調査に隣接した調査区であり、ここからも中期後葉と後期前葉の破片が比較的多く出土した。また、中期前葉の阿玉台式も数個体分が見られた。しかしながら、現在までの調査で、縄文時代の遺構は確認されていない。

**土器** 第 4 次調査で出土した縄文時代の土器について、主要なものを第 6 図に示し、以下に観察を記述する。



第 5 図 第 1 次調査区採集の田戸下層式土器

### 第 6 図

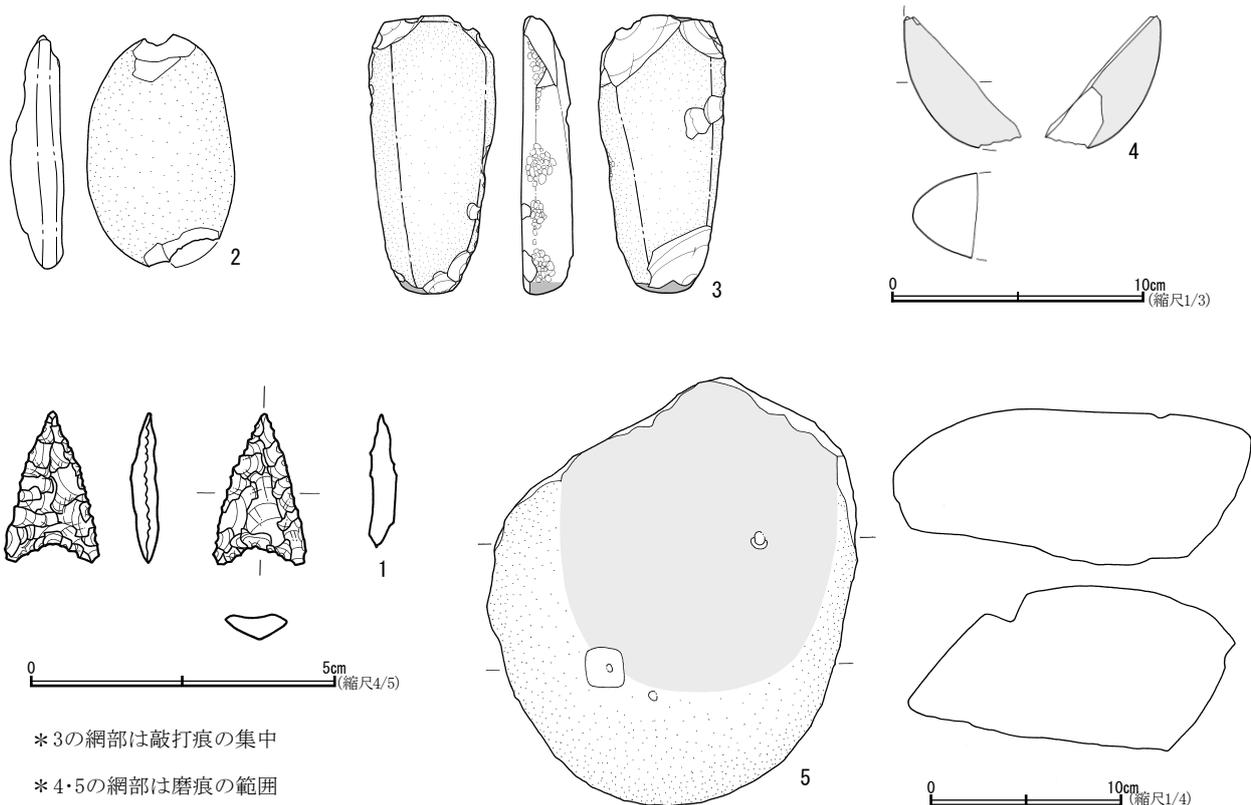
- 1 出土位置・注記:73 住No.2 時期:中期(阿玉台 I b 式) 文様:口唇部刻み(窠), 口縁部貼付文
- 2 出土位置・注記:69 住No.4, SD3 No.18 時期:中期(阿玉台 I b 式) 文様:押引文
- 3 出土位置・注記:72 住No.1 時期:中期(阿玉台 I b 式) 文様:押引文  
備考:胎土に金雲母を含む
- 4 出土位置・注記:SD3 No.21 時期:中期(阿玉台式か) 文様:刺突文
- 5 出土位置・注記:71 住No.4～6・10, 3 トレNo.3 時期:中期(中葉) 器種:深鉢形土器 法量:胴径 80 mm(残存率 14%) 文様:口縁部貼付文, 無節斜縄文(L, 口縁部は横回転, 胴部は縦回転)
- 6 出土位置・注記:71 住No.3・5・6・11・14, SK13 No.3 時期:中期(加曾利 E 2 式) 器種:深鉢形土器 法量:最大径 230 mm(残存率 14%) 文様:隆帯, 沈線文, 複節斜縄文(RLR, 口縁部は横回転, 胴部は縦回転) 備考:他にも同一個体の破片 4 点あり
- 7 出土位置・注記:SD3 No.3 時期:中期(加曾利 E 2 式) 文様:沈線文, 撚糸文(LR を巻いた絡条体)
- 8 出土位置・注記:SD3 No.21 時期:中期(加曾利 E 2-3 式) 文様:沈線文, 複節斜縄文(RLR)

II 縄文時代の遺物



第6図 調査区出土の縄文式土器

- |  |  |
|--|--|
| <p>9 出土位置・注記:70 住№3 時期:中期(加曾利E3式) 文様:隆帯, 単節斜縄文(LR)</p> <p>10 出土位置・注記:SD3 №21 時期:後期(称名寺式) 文様:沈線文, 単節斜縄文(LR)</p> <p>11 出土位置・注記:80 住№3 時期:後期(称名寺式) 器種:深鉢形土器<br/>法量:胴径106mm(残存率21%)文様:沈線文, 単節斜縄文(LR) 備考:<br/>擬口縁を形成して再利用</p> <p>12 出土位置・注記:SD3P57 時期:後期 文様:隆帯, 単節斜縄文(RL)<br/>備考:胎土に泥岩片を含む</p> <p>13 出土位置・注記:6 トレ№10 時期:後期(堀之内1式) 文様:沈線文<br/>備考:把手部分か</p> | <p>14 出土位置・注記:83 住№6 時期:後期(堀之内1式) 文様:沈線文,<br/>単節斜縄文(LR) 備考:胎土に金雲母を含む, 器内面変色(黒化)</p> <p>15 出土位置・注記:SD1 №5 時期:後期(堀之内1式) 文様:沈線文,<br/>単節斜縄文(LR)</p> <p>16 出土位置・注記:83 住№4 時期:後期 文様:沈線文</p> <p>17 出土位置・注記:SD3 №17 時期:後期(安行1式) 文様:沈線文, 単<br/>節斜縄文(LR)</p> <p>18 出土位置・注記:71 住№6 時期:晩期か 文様:沈線文, 撚糸文(Rを<br/>巻いた絡条体)</p> <p>19 出土位置・注記:19 トレ№25 時期:中期 文様:単節斜縄文(RL)</p> <p>20 出土位置・注記:SD3 №21 時期:中期 文様:単節斜縄文(RL) 備</p> |
|--|--|



\* 3の網部は敲打痕の集中

\* 4・5の網部は磨痕の範囲

第7図 調査区出土の石器

考:胎土に金雲母を多量含む

21 出土位置・注記:72住No.1 時期:中期 文様:単節斜縄文(RL)

22 出土位置・注記:SD3P58 時期:後期か 文様:反振り縄文(LL)

の付着あり

5 出土位置・注記:SD3S6 器種:砥石・凹石 石材:砂岩 法量:長さ225mm, 幅195mm, 厚さ84mm 重量:4,310g 備考:焼痕(赤化)あり, 農耕具によるガジリあり

**石器** 第4次調査で出土した石器について, 他の時代と判断されたものを除き第7図に一括して示し, 以下に計測と観察を記述する。このうち, 礫石錘は, 縄文時代中期後葉に伴うものと考えられる。

### 第7図

1 出土位置・注記:SD3No.18 器種:石鎌 石材:メノウ 法量:長さ24mm, 幅15mm, 厚さ4mm 重量:1.4g

2 出土位置・注記:68住S3 器種:礫石錘 石材:花崗斑岩 法量:長さ91mm, 幅57mm, 厚さ19mm 重量:118.9g 備考:一部欠損する

3 出土位置・注記:SD3S1 器種:敲石 石材:砂岩 法量:長さ110mm, 幅51mm, 厚さ20mm 重量:158.5g 備考:上下端部に敲打痕が集中, 側面の一部にも敲打痕が分布する, 農耕具によるガジリと赤錆の付着あり

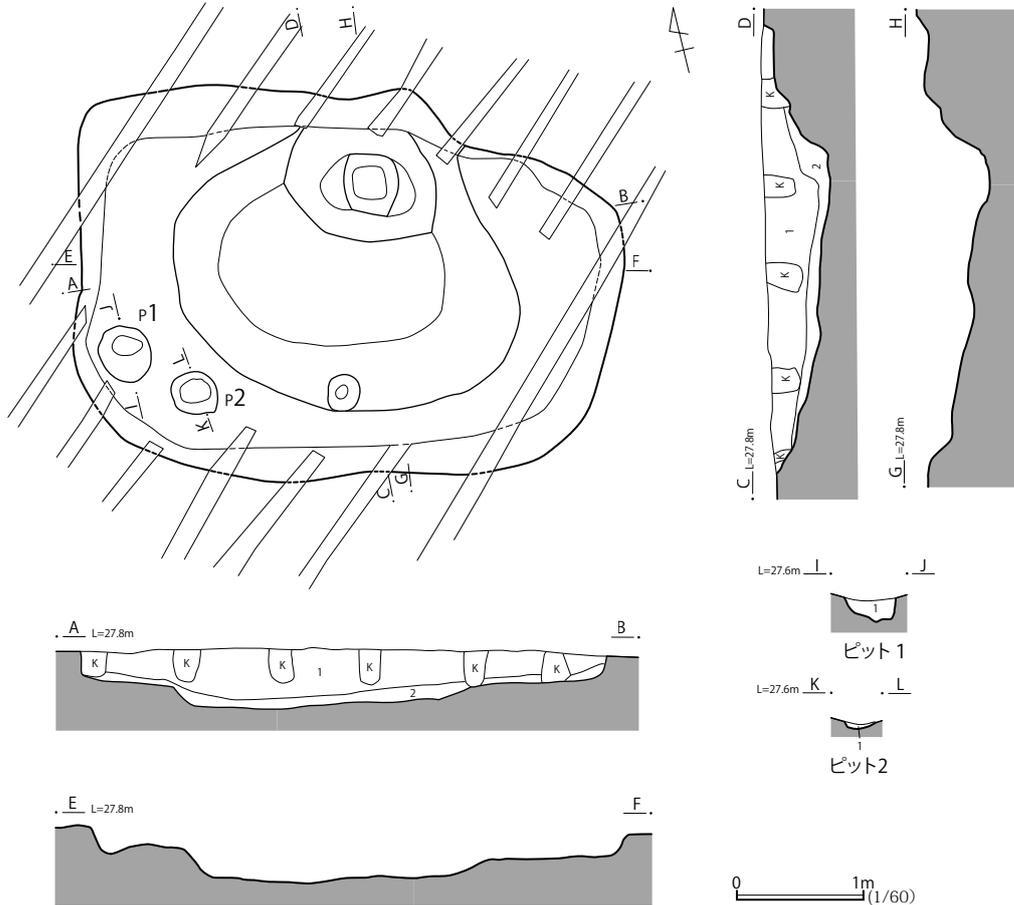
4 出土位置・注記:SD3No.20 器種:磨石 石材:デイサイト 法量:長さ52mm, 幅45mm, 厚さ34mm 重量:50.3g 備考:農耕具による赤錆

### 参考文献

- 井上義安 1994 『那珂湊市鷹ノ巣遺跡』那珂湊市鷹ノ巣遺跡発掘調査会  
井上義安・宮田毅編 1976 『那珂湊市遺跡分布調査報告書』那珂湊市文化財調査報告Ⅱ 那珂湊市教育委員会  
小松崎恵子・窪田恵一 2013 『縄文時代の遺物』『鷹ノ巣Ⅱ 一第2・3次調査の成果』公社文化財調査報告第41集 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 15-22頁  
那珂湊市教育委員会編 1985 『私たちの郷土那珂湊の歴史(埋蔵文化財理解のために)』(考古編) 那珂湊市教育委員会

### Ⅲ 弥生時代の遺構と遺物

#### 1 住居跡の調査



**第 68 号住居跡堆積覆土**

第 1 層: 黒色土層(ローム粒少量, 炭粒微量含む 締まり有り)  
 第 2 層: 暗褐色土層(ローム粒多量, 炭粒微量含む 締まり有り)

**第 68 号住居跡ピット 1 堆積覆土**

第 1 層: 暗褐色土層(径約 1 cm ロームブロック少量, ローム粒多量含む 締まりやや有り)

**第 68 号住居跡ピット 2 堆積覆土**

第 1 層: 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)

第 8 図 第 68 号住居跡

**第 68 号住居跡**

**遺 構** Z-12 区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けており、一部は床面まで掘り込まれている。平面形は、歪な隅丸長方形を呈する。竪穴部の規模は 4.28 × 3.10m である。壁は垂直には立ち上がらず、床面も平坦面がなく、すり鉢状を呈する。壁周溝はない。床面に硬化面はみられない。

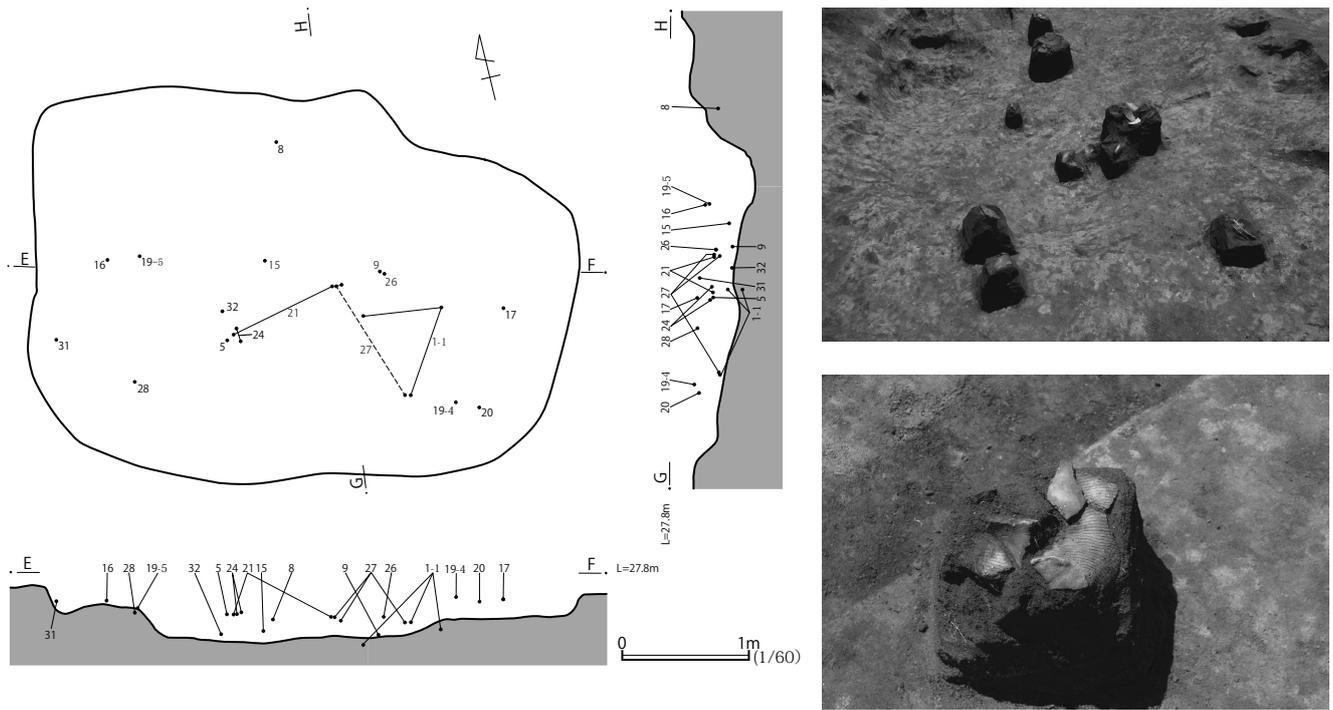
竪穴部覆土は、黒色土が主体で、下層に薄く暗褐色土が堆積する。

炉跡はみられない。

ピットは 4 基確認できるが、支柱穴ではない。

**遺物出土状況** 出土した遺物は全て破片資料で、一部接合関係がみられる。平面分布では、点々と散在する。垂直分布は覆土下層から床面で出土している。

**遺 物** 遺構内から出土した遺物には、石器が 1 点含まれていたが、礫石錘であり、これは縄文時代の遺物の混在と判断して前章で報告した(第 7 図 1)。その他は、土器である。全て破片であり、接合により完全に近く復

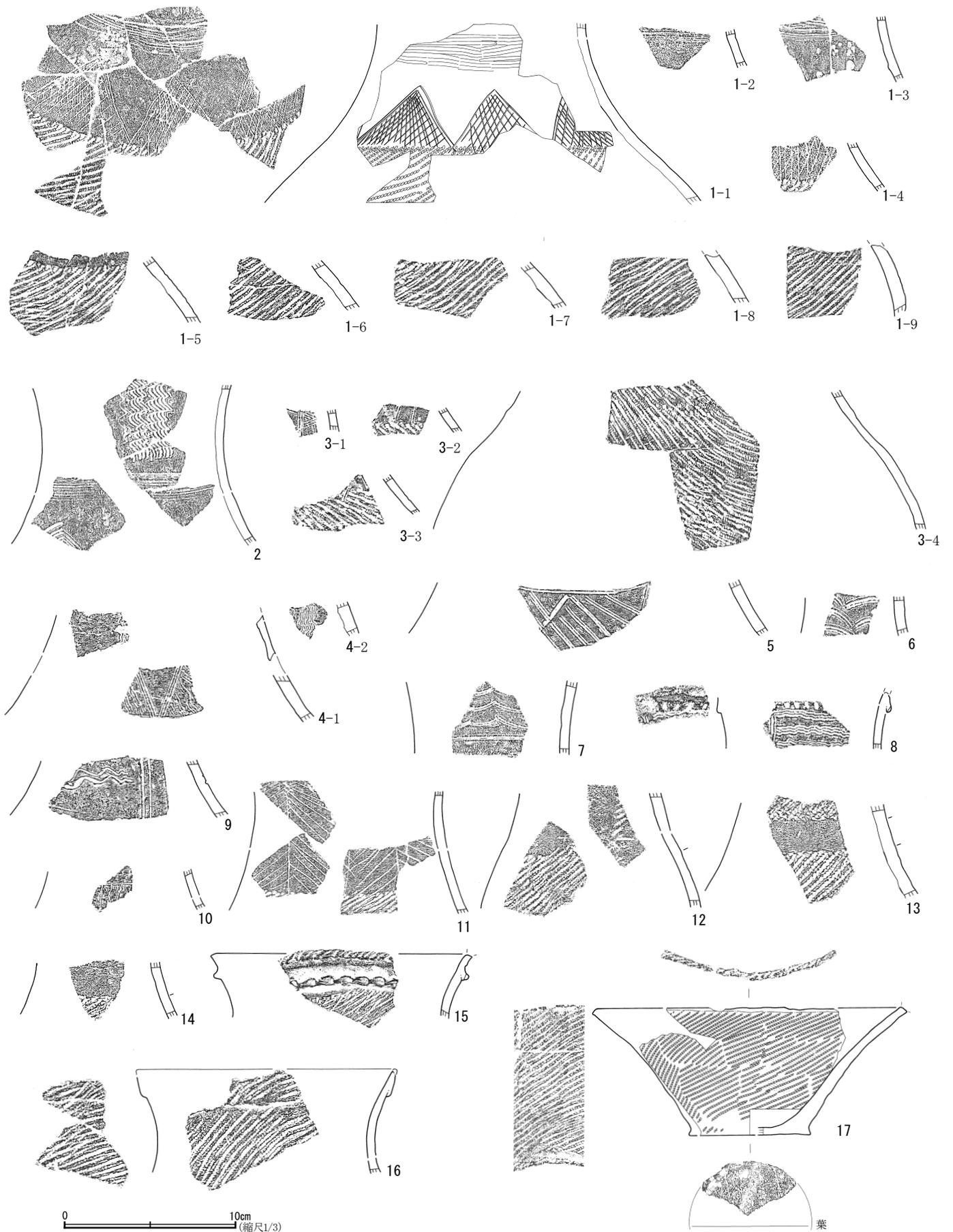


第9図 第68号住居跡遺物出土状況

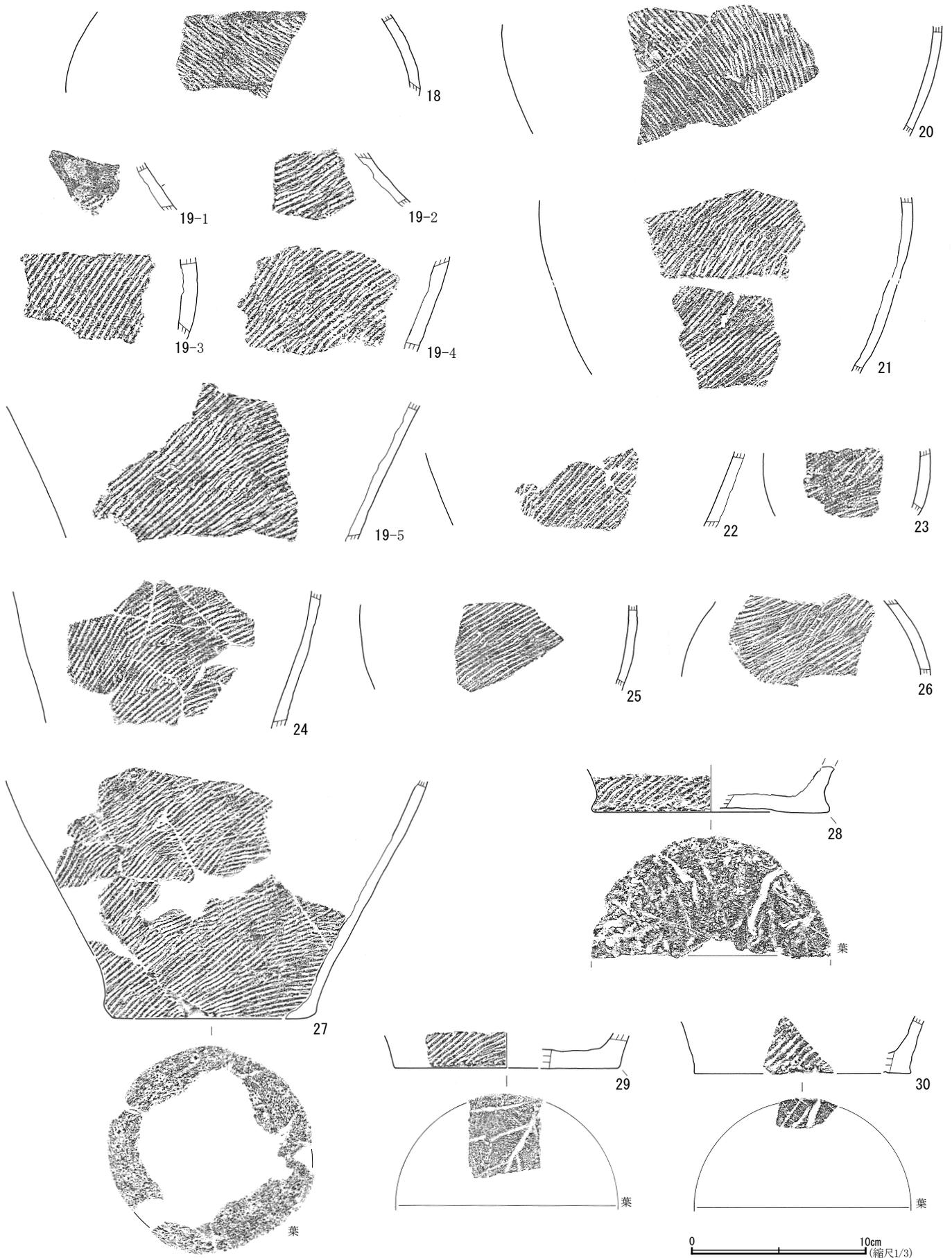
元されるものもなかった。口縁部，底部の部位を含む破片，無文部を含めて縄文以外の文様が施された破片については，ほぼ全てを報告する。縄文のみの胴部破片については，残存部位の法量が推定できるもの，縄文原体の種類が網羅できる破片を選択して報告した。これらを第10～12図に示し，以下に計測と観察を記述する。

## 第10～12図

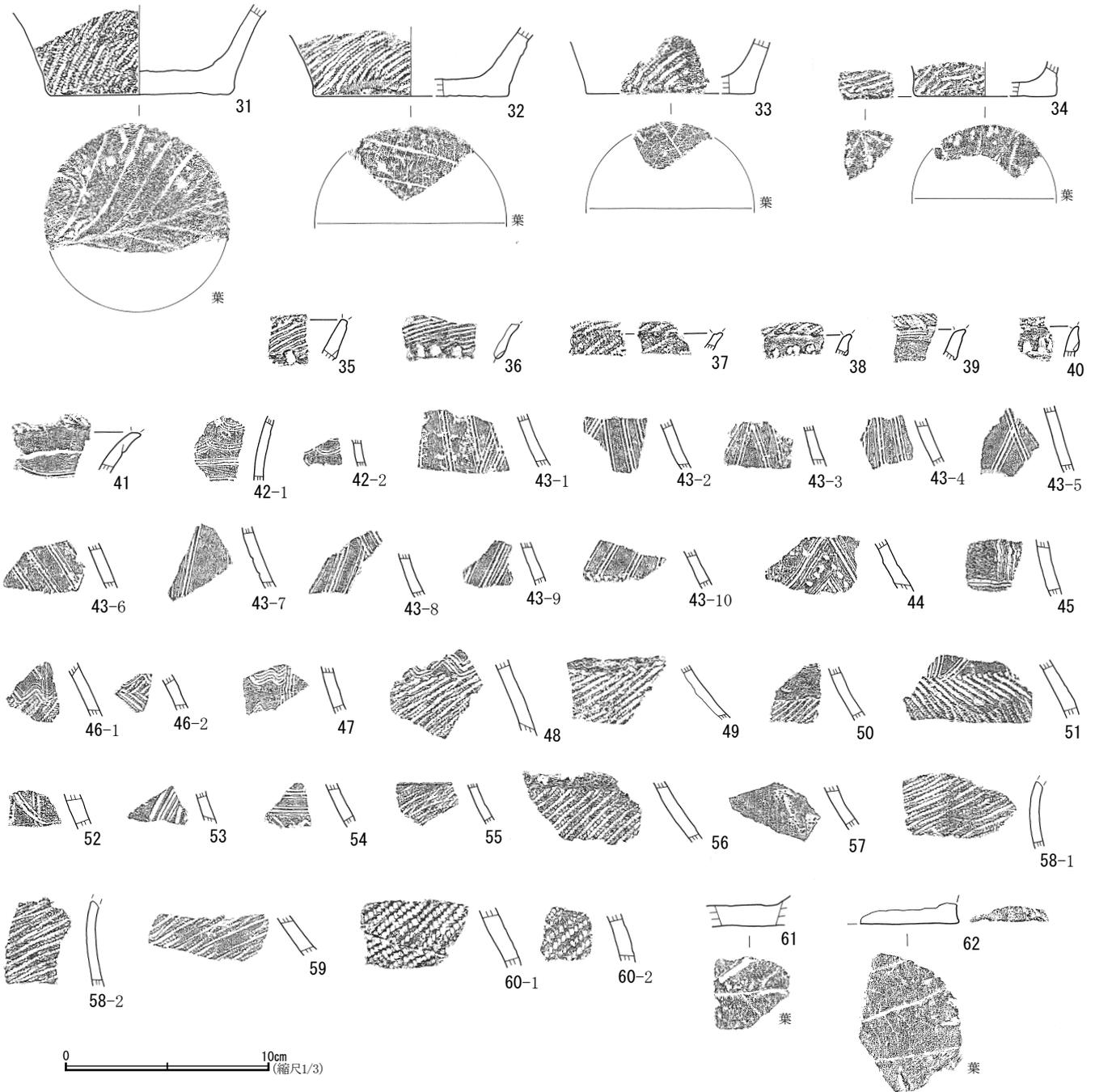
- 1 出土位置・注記:68住P18・27・30～32, №3～5・7～9・12・14 器種:壺形土器(大型細頸形) 法量:最大径250mm(残存率19%の部分より推定) 文様:沈線文(匏状工具), 櫛描文(櫛歯4本, 不揃い), 付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に白雲母細片を多量含む, 器内面剥落, 第14図51は同一個体, 図示した以外にも同一個体の破片あり
- 2 出土位置・注記:68住№4・7 器種:壺形土器(中型細頸形) 法量:頸径104mm(残存率14%の部分より推定) 文様:櫛描文(櫛歯7本, 不揃い) 備考:胎土に白雲母細片を多量含む, 器内面剥落
- 3 出土位置・注記:68住№3・7 器種:壺形土器(大型細頸形) 法量:最大径282mm(残存率12%の部分より推定) 文様:櫛描文(櫛歯3本), 付加条縄文(RL+2L) 備考:器内面剥落あり
- 4 出土位置・注記:68住№4・7 器種:壺形土器(中型細頸形) 法量:最大径178mm(残存率8%) 文様:櫛描文(縦位波状文は櫛歯9本, 他は櫛歯3本), 櫛描文以外の器外面赤彩 備考:胎土に金雲母と骨針を含む, 器内面剥落, 第14図33は同一個体
- 5 出土位置・注記:68住P8 器種:壺形土器(大型細頸形) 法量:最大径206mm(残存率13%の部分より推定) 文様:平行沈線文(半截竹管) 備考:3本櫛歯に見える部分は二度描きと判断した
- 6 出土位置・注記:68住№11 器種:壺形土器(小型細頸形) 法量:最大径61mm(残存率13%) 文様:櫛描文(櫛歯3本)
- 7 出土位置・注記:68住№4 器種:壺形土器(中・小型) 法量:最大径98mm(残存率14%の部分より推定) 文様:櫛描文(櫛歯3本) 備考:胎土に泥岩片を含む
- 8 出土位置・注記:68住P13, №4 器種:壺形土器(小型) 法量:最大径100mm(残存率17%) 文様:刻み(棒状工具), 櫛描文(櫛歯3本) 備考:擬口縁
- 9 出土位置・注記:68住P23 器種:壺形土器(中・小型) 法量:最大径124mm(残存率19%) 文様:平行沈線文(半截竹管) 備考:胎土に金雲母と多量の骨針を含む, 器外面炭化物付着, 第13図27は同一個体
- 10 出土位置・注記:68住№5 器種:壺形土器(中・小型, 細頸形か) 法量:最大径98mm(残存率8%の部分より推定) 文様:沈線文(匏状工具) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む
- 11 出土位置・注記:68住№3・10 器種:壺形土器(中・小型) 法量:頸径108mm(残存率17%の部分より推定) 文様:沈線文(匏状工具), 付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に白雲母細片を含む, 器外面炭化物付着
- 12 出土位置・注記:68住№12 器種:壺形土器(中・小型) 法量:最大径127mm(残存率9%の部分より推定) 文様:縄文原体圧痕文



第10図 第68号住居跡出土遺物1



第 11 図 第 68 号住居跡出土遺物 2



第12図 第68号住居跡出土遺物3

- (LR+2R), 付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に白雲母細片を多量含む, 器内面剥落, 図示した以外にも同一個体の破片あり
- 13 出土位置・注記:68住No 35 器種:壺形土器(中・小型細頸形) 法量:最大径122mm(残存率14%の部分より推定) 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に骨針を含む, 器内面剥落
- 14 出土位置・注記:68住No 3 器種:壺形土器(小型, 細頸形か) 法量:最大径90mm(残存率14%の部分より推定) 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に白雲母細片を多量含む, 器内面剥落, 図示した以外にも同一個体の破片あり
- 15 出土位置・注記:68住P12 器種:壺形土器(中・小型) 法量:口径150mm(残存率12%) 文様:口唇部縄文, 隆帯上指頭押圧, 付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む, 器外面炭化物付着
- 16 出土位置・注記:68住P3, No.11・14 器種:壺形土器(中・小型太頸形, 甕形に近い) 法量:最大径148mm(残存率19%の部分より推定, ほぼ口径) 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む, 器外面炭化物付着
- 17 出土位置・注記:68住P17 器種:鉢形土器 法量:器高74mm, 口径180mm(残存率18%), 底径70mm(残存率31%) 文様:口唇部縄文,

- 付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に骨針を多量含む, 第2次調査区第35号住居跡の報告(色川2008)第13図30は同一個体の可能性あり
- 18 出土位置・注記:68住No.10 器種:壺形土器(中・小型) 法量:最大径200mm(残存率13%の部分より推定) 文様:付加条縄文(RL+2L)
- 19 出土位置・注記:68住P4・19, No.3・11 器種:壺形土器(大型細頸形) 法量:最大径233mm(残存率18%の部分より推定) 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む, 器内面剥落, 図示した以外にも同一個体の破片あり
- 20 出土位置・注記:68住P20, No.3 器種:壺形土器 法量:最大径249mm(残存率13%の部分より推定) 文様:付加条縄文(RL+2L)
- 21 出土位置・注記:68住P10・14 器種:壺形土器(中型) 法量:胴径210mm(残存率13%) 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に骨針を含む, 器内面剥落, 図示した以外にも同一個体の破片あり
- 22 出土位置・注記:68住No.4 器種:壺形土器(大型) 法量:最大径180mm(残存率12%の部分より推定) 文様:付加条縄文(LR+2R)
- 23 出土位置・注記:68住No.13 器種:壺形土器(小型) 法量:胴径94mm(残存率15%) 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:被熱により赤変, 図示した以外にも同一個体の破片あり
- 24 出土位置・注記:68住P5・9, No.3・4・8 器種:壺形土器(中型) 法量:胴径174mm(残存率21%の部分より推定) 文様:付加条縄文(LR+2R)
- 25 出土位置・注記:68住No.11 器種:壺形土器(小型, 細頸形か) 法量:胴径156mm(残存率12%) 文様:付加条縄文(LR+2R)
- 26 出土位置・注記:68住P15 器種:壺形土器(小型) 法量:最大径140mm(残存率18%) 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に骨針を含む, 器内外面炭化物付着
- 27 出土位置・注記:68住P14・22・24・25, No.3・7 器種:壺形土器(大型) 法量:底径120mm(残存率92%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に骨針を多量含む, 器内面剥落, 器外面に暗褐色の付着物あり, 底部穿孔なのか不明, 図示した以外にも同一個体の破片あり
- 28 出土位置・注記:68住P1 器種:壺形土器(大型) 法量:底径132mm(残存率52%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に金雲母と骨針を多量含む, 器内面剥落
- 29 出土位置・注記:68住No.12 器種:壺形土器(大型) 法量:底径126mm(残存率12%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕
- 30 出土位置・注記:68住No.12 器種:壺形土器(大型) 法量:底径122mm(残存率9%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に骨針を含む
- 31 出土位置・注記:68住P2 器種:壺形土器(中・小型) 法量:底径90mm(残存率63%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:器内面に炭化物付着
- 32 出土位置・注記:68住P11 器種:壺形土器(中・小型) 法量:底径94mm(残存率23%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕
- 33 出土位置・注記:68住No.4 器種:壺形土器(中・小型) 法量:底径82mm(残存率15%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に骨針とメノウ粒を含む
- 34 出土位置・注記:68住No.4・12 器種:壺形土器(中・小型) 法量:底径70mm(残存率40%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕
- 35 出土位置・注記:68住No.7 文様:口唇部縄文, 付加条縄文(LR+2R), 口縁部下端刻み(縄文原体)
- 36 出土位置・注記:68住No.7 文様:付加条縄文(LR+2R), 口縁部下端刻み(指頭) 備考:胎土に白雲母細片を含む, 器外面に炭化物付着
- 37 出土位置・注記:68住No.4・8 文様:口唇部縄文, 付加条縄文(LR+2R)
- 38 出土位置・注記:68住No.4 文様:口唇部縄文(LR+2R), 口縁部下端刻み(縄文原体) 備考:器外面に炭化物付着
- 39 出土位置・注記:68住No.7 文様:口唇部縄文(RL+2L), 口唇部直下に櫛描文か?
- 40 出土位置・注記:68住No.7 文様:口唇部縄文(LR+2R), 頸部に櫛描文 備考:器外面に炭化物付着
- 41 出土位置・注記:68住No.4 文様:口唇部縄文(RL+2L), 平行沈線文もしくは櫛描文
- 42 出土位置・注記:68住No.3・11 文様:櫛描文(櫛歯3本) 備考:胎土に金雲母を含む, 器外面に炭化物付着
- 43 出土位置・注記:68住No.3・4・7・11・12・14 器種:壺形土器(大型) 文様:櫛描文(櫛歯3本), 付加条縄文(RL+2L) 備考:胎土に骨針を含む, 図示した以外にも同一個体の破片あり
- 44 出土位置・注記:68住No.8 器種:壺形土器(大型か) 文様:櫛描文(櫛歯6本, 不揃い), 刺突文(植物莖) 備考:胎土に骨針を含む, 器内面剥落, 第2次調査区遺構外の報告(色川2013)第19図57は同一個体
- 45 出土位置・注記:68住No.5 器種:壺形土器(細頸形か) 文様:櫛描文(櫛歯7本以上, 不揃い)
- 46 出土位置・注記:68住No.3 文様:櫛描文(櫛歯4本, 不揃い), 付加条縄文(LR+2R, RL+2L) 備考:胴部羽状縄文
- 47 出土位置・注記:68住No.1 文様:櫛描文(櫛歯5本) 備考:胎土に金雲母と多量の骨針を含む
- 48 出土位置・注記:68住No.10 文様:櫛描文(櫛歯4本, 不揃い), 付加条縄文(LR+2R)
- 49 出土位置・注記:68住No.10 器種:壺形土器(大型) 文様:櫛描文(不

### Ⅲ 弥生時代の遺構と遺物

- 揃い)、付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む
- 50 出土位置・注記:68住No.10 文様:櫛描文、付加条縄文(LR+2R) 備考:器外面に炭化物付着
- 51 出土位置・注記:68住No.4 器種:壺形土器(大型)文様:櫛描文(櫛歯3本)、付加条縄文(RL+2L)
- 52 出土位置・注記:68住No.8 文様:平行沈線文(半截竹管)
- 53 出土位置・注記:68住No.11 文様:櫛描文(櫛歯5本、不揃い) 備考:胎土に白雲母細片を含む
- 54 出土位置・注記:68住No.3 文様:櫛描文(櫛歯3本)、付加条縄文(RL+2Lか)
- 55 出土位置・注記:68住No.3 文様:平行沈線文もしくは櫛描文、付加条縄文(LR+2R)
- 56 出土位置・注記:68住No.4 器種:壺形土器(大型) 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に骨針を多量含む
- 57 出土位置・注記:68住No.11 備考:胎土に骨針を含む、無文
- 58 出土位置・注記:68住No.3・7 器種:甕形土器か(大型) 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に金雲母と骨針、メノウ粒を含む、擬口縁か
- 59 出土位置・注記:68住No.3・7 器種:壺形土器(大型) 文様:付加条縄文(軸縄1段3状のLR+Rか)
- 60 出土位置・注記:68住No.5・8 器種:壺形土器(大型) 文様:単節斜縄文(LR)
- 61 出土位置・注記:68住No.4 文様:底面木葉痕 備考:胎土に金雲母を含む

- 62 出土位置・注記:68住No.13 器種:壺形土器(大型) 文様:付加条縄文(RL+2L)、底面木葉痕 備考:器内面剥落

遺構内に「十王台式」は含まれておらず、全てが弥生時代後期前半の土器群で占められている。第68号住居跡は、第2次調査で検出された第35・47・55号住居跡(色川2008・2013)とともに当該期の集落を構成した遺構と捉えられる。

**註** 第68号住居跡は、福島県いわき市輪山遺跡(松本・山内1977)において「土坑」の第1類として報告された遺構(第1号土坑)に規模や形態が似ている。常陸大宮市上ノ宿遺跡(大淵・小川他2014)では、このような遺構を「楕円形堅穴遺構」と呼び、茨城県内の類例を集成検討して、「一人もしくは二人程度の少人数で行う作業場と考え、併せて貯蔵用途をも兼ね、常住とししない簡易小屋」と想定している。

#### 参考文献

- 井上義安 1994 『那珂湊市鷹ノ巣遺跡』那珂湊市鷹ノ巣遺跡発掘調査会
- 色川順子 2008 「弥生～古墳時代前期の遺構と遺物」『鷹ノ巣 一第2次調査の成果一』公社文化調査報告第37集 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 9-62頁
- 色川順子 2013 「弥生時代の遺物」『鷹ノ巣Ⅱ 一第2・3次調査の成果一』公社文化財調査報告第41集 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 23-27頁
- 大淵淳志・小川和博他 2014 『上ノ宿遺跡Ⅳ 一携帯電話基地局建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一』茨城県常陸大宮市埋蔵文化財調査報告書第17集 常陸大宮市教育委員会
- 松本友之・山内幹夫 1977 『輪山遺跡 一先土器・弥生時代遺構の調査一』いわき市埋蔵文化財調査報告第4冊 いわき市教育委員会

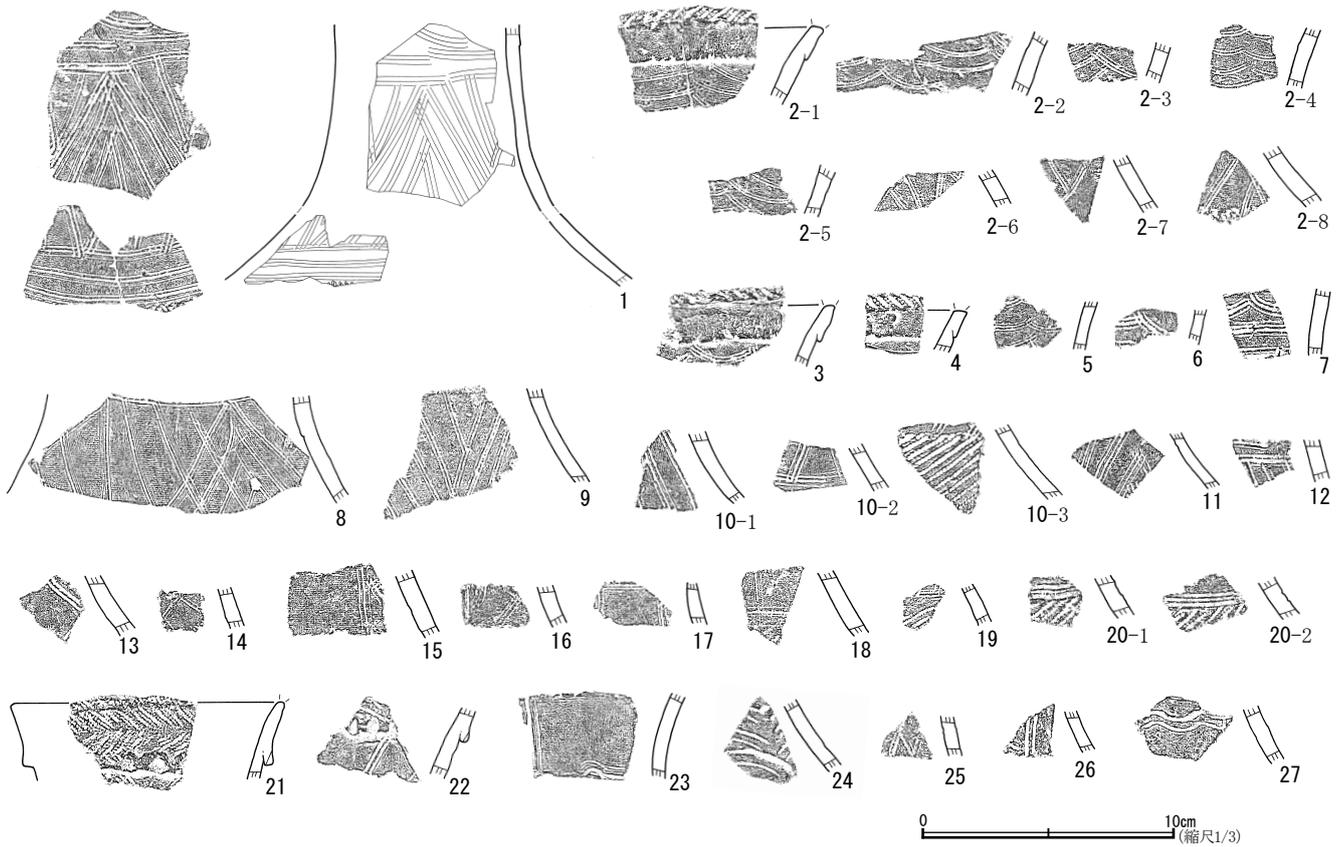
## 2 調査区の遺物

表土と後世の遺構内から出土した弥生時代の遺物を、調査区出土として一括した。土器には、弥生時代後期前半の土器群と、後期後半から古墳時代前期にかかる「十王台式」の土器群が含まれている。第68号住居跡で記述した資料の選択に準じながら、第13～16図に後期前半の土器群を、第17図に「十王台式」を示し、以下に計測と観察を記述する。

### 第13～16図

- 1 出土位置・注記:SD3 No.18 器種:壺形土器(中型細頸形) 法量:頸径72mm(残存率23%)文様:櫛描文(櫛歯3本)、付加条縄文(RL+2L)、赤彩
- 2 出土位置・注記:SD3 No.16・18・19 器種:壺形土器 文様:口唇部付加条縄文(LR+2R)、櫛描文(櫛歯3本)、胴部付加条縄文(RL+2L) 備考:破片2・2にネズミの齧り痕あり
- 3 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:口唇部付加条縄文(RL+2L)、櫛描文(櫛歯3本)

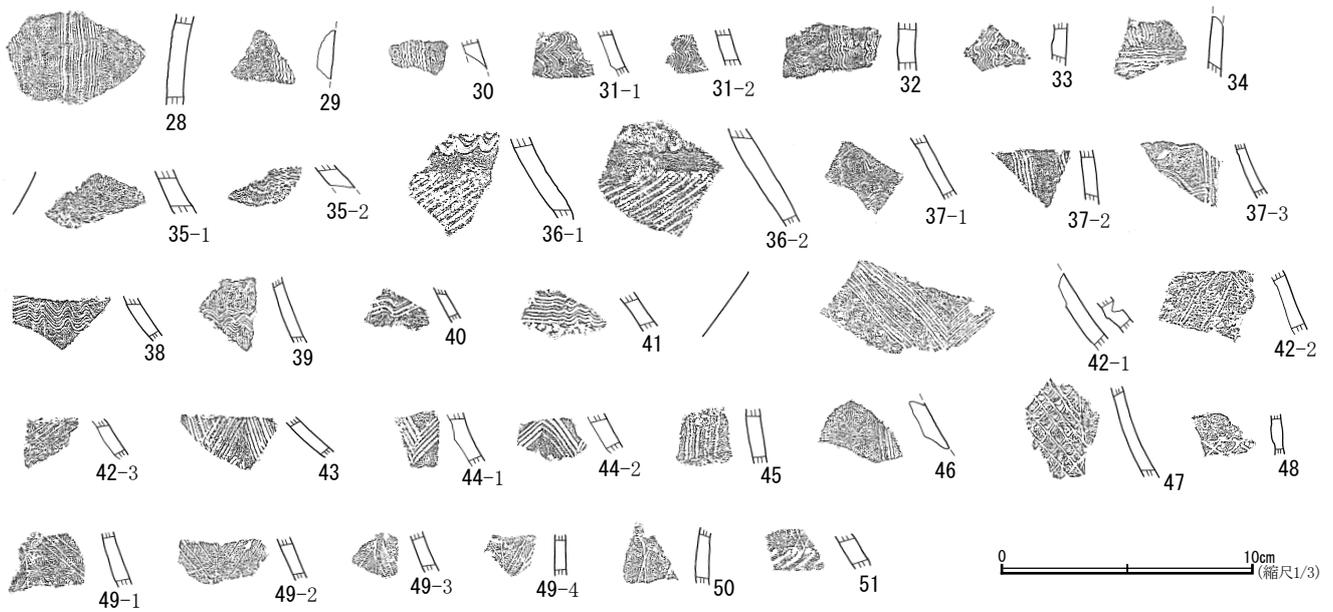
- 4 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:口唇部付加条縄文(RL+2L)、櫛描文(櫛歯3本)
- 5 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯3本) 備考:器内面変色
- 6 出土位置・注記:SD3 No.18 器種:壺形土器(小型細頸形か) 文様:櫛描文(櫛歯3本)
- 7 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯3本) 備考:胎土に骨針含む
- 8 出土位置・注記:SD3P27 器種:壺形土器(中型細頸形か) 法量:最大径134mm(残存率18%) 文様:櫛描文(櫛歯3本) 備考:器外面に種子圧痕あり
- 9 出土位置・注記:3トレNo.3 文様:櫛描文(櫛歯3本)
- 10 出土位置・注記:SD3 No.18、SK13 No.3 文様:櫛描文(櫛歯3本)、付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に骨針含む
- 11 出土位置・注記:73住No.4 文様:櫛描文(櫛歯3本) 備考:胎土に骨針含む



第13図 調査区出土の弥生式土器1

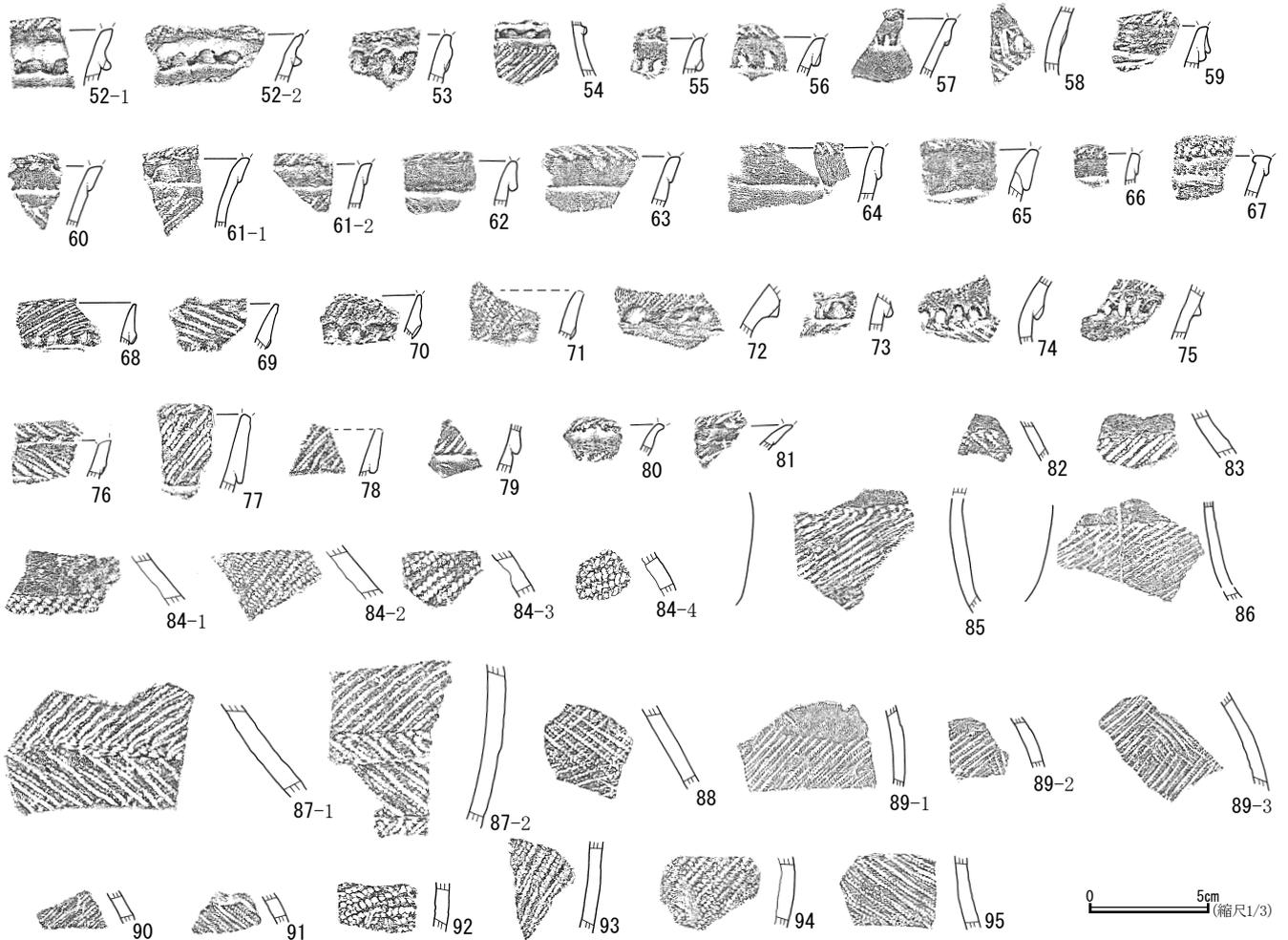
- |  |   |
|--|---|
| <p>12 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯3本)</p> <p>13 出土位置・注記:SD3 No.19 文様:櫛描文(櫛歯3本)</p> <p>14 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯3本)</p> <p>15 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯3本) 備考:器内面発泡状に剥落</p> <p>16 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯3本)</p> <p>17 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯3本か)</p> <p>18 出土位置・注記:SD3 No.19 文様:櫛描文(櫛歯3本), 付加条縄文(R-S)</p> <p>19 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯3本), 付加条縄文(LR+2R)</p> <p>20 出土位置・注記:69住No.7, 70住No.1 文様:櫛描文(櫛歯3本), 付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に白雲母細片を含む 器外面に炭化物附着</p> <p>21 出土位置・注記:SD3 No.18 器種:壺形土器(中・小型細頸形か) 法量:口径106mm(残存率15%) 文様:口唇・口縁部付加条縄文(RL+2L), 口縁部下端刻み(指頭), 櫛描文(櫛歯3本) 備考:口縁部の羽状縄文は同一原体の縦回転と横回転</p> <p>22 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:付加条縄文(RL+2L), 口縁部下端刻み(棒状), 櫛描文(櫛歯3本)</p> | <p>23 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:口縁部下端刻み(縄文原体), 櫛描文(櫛歯3本, 不揃い) 備考:胎土に骨針含む, 器外面に炭化物附着</p> <p>24 出土位置・注記:80住No.4 文様:平行沈線文(半截竹管) 備考:密な弧文という文様からは, 蓋形土器の可能性あり</p> <p>25 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:平行沈線文(半截竹管) 備考:胎土に骨針含む</p> <p>26 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:平行沈線文(半截竹管) 備考:胎土に骨針含む</p> <p>27 出土位置・注記:73住No.19 文様:平行沈線文(半截竹管) 備考:68住第10図9と同一個体, 胎土に骨針含む</p> <p>28 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯10本) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む, 大型の土器</p> <p>29 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯6本以上) 備考:胎土に骨針含む</p> <p>30 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯6本) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む, 大型の土器</p> <p>31 出土位置・注記:80住No.4, 83住No.4 文様:櫛描文(櫛歯6本) 備考:胎土に骨針含む</p> <p>32 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯9本) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む, 大型の土器</p> |
|--|---|

III 弥生時代の遺構と遺物



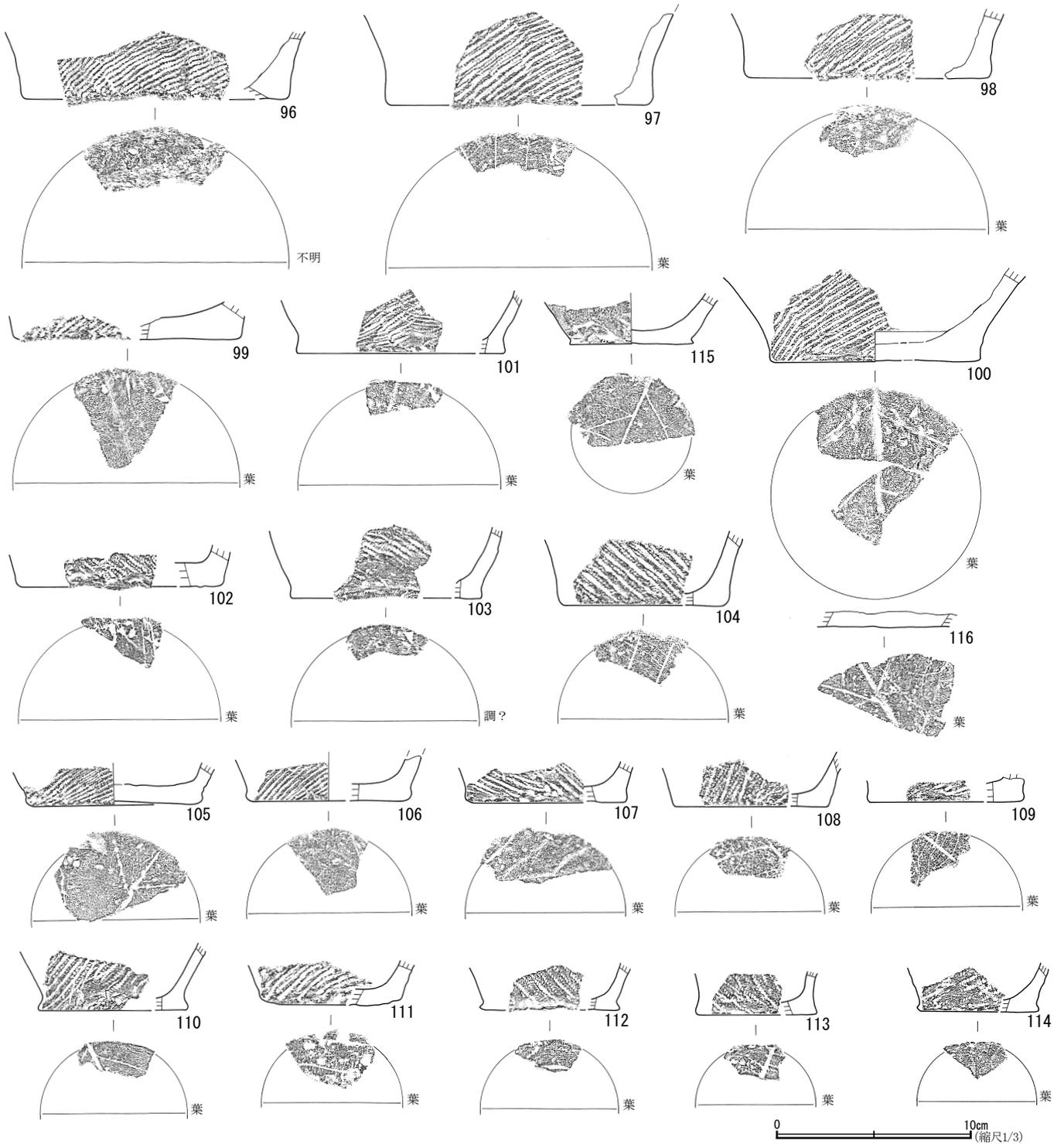
第 14 図 調査区出土の弥生式土器 2

- |   |  |
|---|--|
| <p>33 出土位置・注記:73 住No.4 文様:櫛描文(櫛歯 9 本) 備考:68 住第 10 図 4 と同一個体, 胎土に金雲母と骨針を含む</p> <p>34 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯 6 本か) 備考:胎土に骨針含む</p> <p>35 出土位置・注記:SD3 No.18 器種:壺形土器(小型細頸形) 法量:最大径 72 mm(残存率 13%) 文様:櫛描文(櫛歯 8 本以上) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む</p> <p>36 出土位置・注記:SD3 No.16・18 文様:櫛描文(櫛歯 3 本以上), 付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に白雲母細片を多量含む</p> <p>37 出土位置・注記:70 住No.2, SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯 4 本) 備考:胎土に骨針含む</p> <p>38 出土位置・注記:SK13 No.3 文様:櫛描文(櫛歯 7 本) 備考:胎土に骨針含む</p> <p>39 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯 6 本) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む</p> <p>40 出土位置・注記:71 住No.2 文様:櫛描文(櫛歯 4 本) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む</p> <p>41 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯 6 本), 付加条縄文(LR+2R) 備考:大型土器</p> <p>42 出土位置・注記:76 住No.2 器種:壺形土器(大型) 法量:最大径 160 mm(残存率 16%) 文様:櫛描文(櫛歯 10 本) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む, 器内面剥落, 器外面に焼成後の穴あり</p> <p>43 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯 6 本か) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む</p> <p>44 出土位置・注記:73 住No.12, SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯 5 本) 備</p> | <p>考:器内面剥落</p> <p>45 出土位置・注記:73 住No.5 文様:櫛描文(櫛歯 4 本) 備考:胎土に白雲母細片を多量含む</p> <p>46 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:櫛描文(櫛歯 6 本以上) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む, 器内面剥落, 大型土器</p> <p>47 出土位置・注記:69 住No.3 文様:沈線文(匏状工具) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む</p> <p>48 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:沈線文(匏状工具) 備考:胎土に骨針含む, 器内面剥落</p> <p>49 出土位置・注記:76 住No.4, SD3 No.18 文様:沈線文(匏状工具) 備考:胎土に骨針含む</p> <p>50 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:沈線文(匏状工具) 備考:器外面炭化物附着</p> <p>51 出土位置・注記:SD1 No.4 文様:沈線文(匏状工具), 付加条縄文(LR+2R) 備考:68 住第 10 図 1 と同一個体, 胎土に白雲母細片を多量含む</p> <p>52 出土位置・注記:76 住No.10, SK13 No.1 文様:口唇部付加条縄文(LR+2R), 隆帯刻み(指頭), 胴部縄文 備考:胎土に金雲母と骨針を含む</p> <p>53 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:口唇部付加条縄文(RL+2L か), 隆帯刻み(指頭) 備考:胎土に金雲母含む</p> <p>54 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:隆帯刻み(指頭), 付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に骨針含む</p> <p>55 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:口唇部付加条縄文(LR+2R), 口縁部下端刻み(縄文原体) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む</p> |
|---|--|



第15図 調査区出土の弥生式土器3

- 56 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口唇部付加条縄文(RL+2L), 口縁部下端刻み(縄文原体)
- 57 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口唇部付加条縄文(LR+2R), 口縁部下端刻み(縄文原体), 胴部櫛描文か 備考:器外面炭化物付着
- 58 出土位置・注記:SK13 №1 文様:口縁・胴部付加条縄文(RL+2L, 浅い施文), 口縁部下端刻み(半截竹管状)
- 59 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口唇・口縁部・胴部付加条縄文(LR+2R), 複合口縁は積上げが一周して余りを重ねた部分, その積上げは胴部縄文の施文後 備考:胎土に金雲母含む
- 60 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口唇・胴部付加条縄文(RL+2L)
- 61 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口唇・胴部付加条縄文(LR+2R) 備考:器外面炭化物付着
- 62 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口唇部付加条縄文(LR+2R), 胴部縄文か 備考:器外面炭化物付着
- 63 出土位置・注記:SK13 №4 文様:口唇部付加条縄文(RL+2L) 備考:64と同一個体か
- 64 出土位置・注記:SD3 №19 文様:口唇部付加条縄文(RL+2L)
- 65 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口唇部付加条縄文(RL+2L)
- 66 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口唇部付加条縄文(LR+2R)
- 67 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口唇部縄文(LRもしくはLR+2R) 備考:胎土に石英粒を多量含む
- 68 出土位置・注記:76住№2 文様:口唇部施文なし, 口縁部付加条縄文(LR+2R), 口縁部下端刻み(指頭) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む
- 69 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口唇部施文なし, 口縁部付加条縄文(RL+2L), 口縁部下端刻み(指頭)
- 70 出土位置・注記:69住№7 文様:口唇・口縁部付加条縄文(LR+2R), 口縁部下端刻み(指頭) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む
- 71 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口縁部縄文(LRもしくはLR+2R), 口縁部下端刻み(指頭) 備考:口唇部施文不明
- 72 出土位置・注記:76住№3 文様:口縁部付加条縄文(LR+2R), 口縁部下端刻み(指頭) 備考:胎土に石英粒を多量含む, 鉢形土器か
- 73 出土位置・注記:76住№2 文様:口縁・胴部付加条縄文(LR+2R), 口縁部下端刻み(指頭) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む
- 74 出土位置・注記:SK13 №3 文様:口縁部付加条縄文(RL+2L, 施文浅



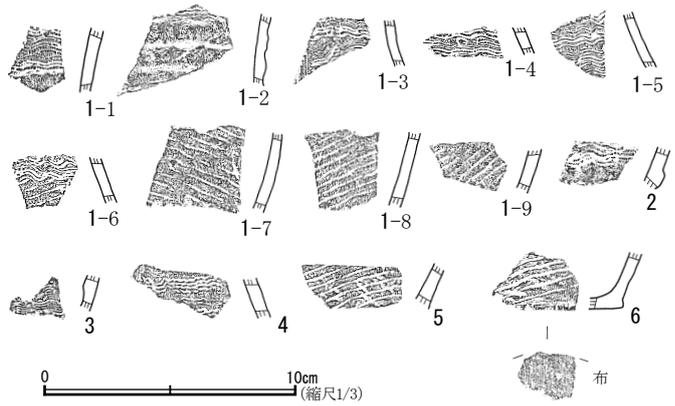
第 16 図 調査区出土の弥生式土器 4

- |  |  |
|--|--|
| <p>い、口縁部下端刻み(半截竹管状)、胴部付加条縄文(RL+2L) 備考:<br/>器外面炭化物付着</p>                    | <p>77 出土位置・注記:69 住№2 文様:口唇・口縁部付加条縄文(LR+2R)</p>   |
| <p>75 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口縁・胴部付加条縄文(LR+2R)、口<br/>縁部下端刻み(棒状) 備考:胎土に骨針含む</p> | <p>78 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口縁部付加条縄文(LR+2R) 備考:<br/>口唇部施文不明</p>   |
| <p>76 出土位置・注記:69 住№5 文様:口唇・口縁部付加条縄文(RL+2L)<br/>備考:器内面炭化物付着</p>             | <p>79 出土位置・注記:71 住№12 文様:口縁部付加条縄文(LR+2R)</p> <p>80 出土位置・注記:SD3 №18 文様:口唇・胴部付加条縄文(LR+2R) 備<br/>考:胎土に骨針含む、単純口縁の鉢形土器か</p> |

- 81 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:口唇・胴部付加条縄文(LR+2R) 備考:高坏形土器と推定 様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に白雲母細片を多量含む, 器内面剥落
- 82 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:付加条縄文(RL+2L) 101 出土位置・注記:SD3 No.18 法量:底径 104 mm(残存率 13%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:器外面炭化物付着, 器内面発泡状剥落
- 83 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む 102 出土位置・注記:71 住No.5 法量:底径 104 mm(残存率 13%) 文様:付加条縄文(RL+2L), 底面木葉痕
- 84 出土位置・注記:69 住No.4, SD3 No.18, 2 トレNo.16 文様:単節斜縄文(LR) 備考:大型土器 103 出土位置・注記:80 住No.2 法量:底径 96 mm(残存率 14%) 文様:単節斜縄文(RL), 底面調整か
- 85 出土位置・注記:SD3 No.19 器種:壺形土器(小型) 法量:頸径 87 mm(残存率 18%) 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:胎土に石英粒多量含む 104 出土位置・注記:SD3 No.23 法量:底径 86 mm(残存率 19%) 文様:付加条縄文(RL+2L), 底面木葉痕 備考:器外面炭化物付着
- 86 出土位置・注記:SD3 No.18 器種:壺形土器(小型細頸形か) 法量:頸径 66 mm(残存率 27%) 文様:付加条縄文(LR+2R) 105 出土位置・注記:SD3 No.19 法量:底径 86 mm(残存率 21%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に白雲母細片を多量含む, 器内面炭化物付着及び変色
- 87 出土位置・注記:71 住No.4・5, 73 住No.5 器種:壺形土器(大型) 文様:付加条縄文(LR+2R, RL+2L) 備考:胎土に白雲母多量含む, 羽状縄文, 第2次調査区第47号住居跡の報告(色川 2008)第24図92は, 同一個体 106 出土位置・注記:SD3 No.18 法量:底径 84 mm(残存率 17%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:器内面から破断面にかけて炭化物付着
- 88 出土位置・注記:SD3 No.18 器種:壺形土器(大型) 文様:付加条縄文(LR+2R, RL+2L) 備考:羽状縄文 107 出土位置・注記:SD3 No.18 法量:底径 82 mm(残存率 32%) 文様:付加条縄文(RL+2L), 底面木葉痕 備考:器外面炭化物付着, 器内面変色
- 89 出土位置・注記:SD3 No.18 器種:壺形土器(中・小型) 文様:付加条縄文(LR+2R) 備考:同一原体の縦回転と横回転による羽状縄文, 器外面炭化物付着 108 出土位置・注記:69 住No.2 法量:底径 77 mm(残存率 17%) 文様:付加条縄文(LR+R), 底面木葉痕 備考:胎土に石英粒を多量含む, 器外面炭化物付着
- 90 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:付加条縄文(LR+R か) 109 出土位置・注記:SK13 No.1 法量:底径 77 mm(残存率 13%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕
- 91 出土位置・注記:73 住No.10 文様:付加条縄文(RL+L, 軸縄1段3条か) 110 出土位置・注記:SD3P28 法量:底径 75 mm(残存率 17%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕
- 92 出土位置・注記:SD3 No.20 文様:単節斜条縄文(RL) 111 出土位置・注記:69 住No.2 法量:底径 70 mm(残存率 23%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕
- 93 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:単節斜条縄文(LR) 112 出土位置・注記:SD3 No.18 法量:底径 70 mm(残存率 16%) 文様:付加条縄文(RL+L もしくは RL+2L), 底面木葉痕 備考:器外面炭化物付着, 器内面変色
- 94 出土位置・注記:SD3 No.18 文様:単節斜条縄文(LR) 備考:器内面剥落 113 出土位置・注記:SD3 No.18 法量:底径 62 mm(残存率 17%) 文様:付加条縄文(RL+L か), 底面木葉痕
- 95 出土位置・注記:SK13 No.2 器種:甕形土器か 文様:付加条縄文(RL+2L) 114 出土位置・注記:SD3 No.18 法量:底径 61 mm(残存率 15%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕
- 96 出土位置・注記:SD3P17 法量:底径 136 mm(残存率 18%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面不明 備考:胎土に白雲母細片を多量含む, 器内面剥落 115 出土位置・注記:2 トレNo.17 法量:底径 62 mm(残存率 47%) 文様:底面木葉痕
- 97 出土位置・注記:73 住No.12 法量:底径 135 mm(残存率 15%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:器内面剥落 116 出土位置・注記:69 住No.2 文様:底面木葉痕 備考:胎土に金雲母と骨針を多量含む, 器内面剥落, 大型土器
- 98 出土位置・注記:76 住No.3 法量:底径 124 mm(残存率 12%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に金雲母含む, 器内面剥落
- 99 出土位置・注記:SD3 No.18 法量:底径 116 mm(残存率 15%) 文様:付加条縄文(LR+2R), 底面木葉痕 備考:胎土に金雲母と骨針を含む
- 100 出土位置・注記:SD3P25・No.18 法量:底径 106 mm(残存率 25%) 文

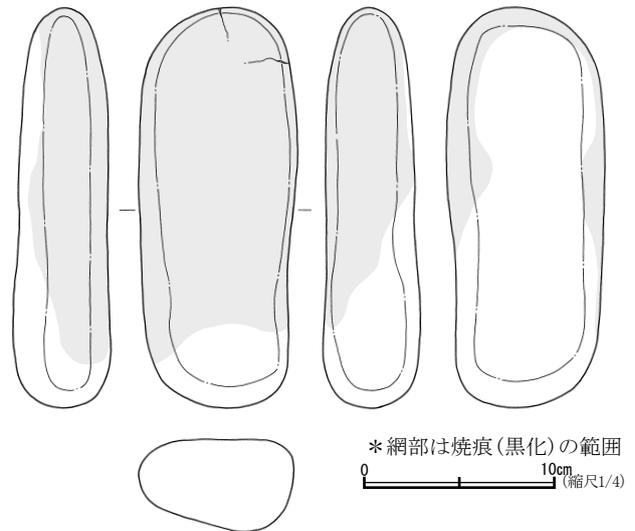
第 17 図

- 1 出土位置・注記:73 住No.3～5・13・28 時期:後期(十王台式) 器種:壺形土器(中・小型) 文様:櫛描文(櫛歯 6 本), 付加条縄文(L-Z, R-S), 隆帯 3 条(指頭押圧)
- 2 出土位置・注記:71 住No.5 時期:後期(十王台式) 器種:壺形土器(大型) 文様:櫛描文(櫛歯 4 本) 備考:胎土に金雲母を含む
- 3 出土位置・注記:表採No.3 時期:後期(十王台式) 器種:壺形土器 文様:櫛描文(多条か) 備考:胎土に金雲母と骨針を含む
- 4 出土位置・注記:SD3 No.18 時期:後期(十王台式) 器種:壺形土器(中・小型) 文様:櫛描文(櫛歯 4 本) 備考:胎土に金雲母を含む
- 5 出土位置・注記:73 住No.3 時期:後期(十王台式) 器種:壺形土器(中・小型) 文様:付加条縄文(R × R)
- 6 出土位置・注記:5 トレNo.9 時期:後期(十王台式) 器種:壺形土器(中・小型) 文様:付加条縄文(R × R), 底面布目痕



第 17 図 調査区出土の弥生式土器 5

土器の他には、炉石と判断される焼けた礫が出土している。第 2 次調査(色川 2008)で検出された後期前半の住居跡には炉石の付属がなく、「十王台式」を伴う第 43・59・60 号住居跡には炉石が付属する。第 1 次調査(井上 1994)の第 5・7・11・16・18・21 号住居址など古墳時代前期の住居跡にも、付属が認められる。「十王台式」を伴う古墳時代前期の住居に付属した炉石が抜去されたものと考えられる。



第 18 図 調査区出土の石器

第 18 図

出土位置・注記:SD3S7 器種:炉石 石材:砂岩 法量:長さ 212 mm, 幅 83 mm, 厚さ 50 mm 重量:1,211.1 g 備考:焼痕(黒化, 亀裂)あり, その分布から裏面を接地して燃焼されたことが推定される

参考文献

井上義安 1994 『那珂湊市鷹ノ巣遺跡』那珂湊市鷹ノ巣遺跡発掘調査会  
 色川順子 2008 「弥生～古墳時代前期の遺構と遺物」『鷹ノ巣 一第 2 次調査の成果』公社文化財調査報告第 37 集 ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 9-62 頁

### 3 鷹ノ巣遺跡における弥生時代後期前半の土器群について -「鷹ノ巣式土器」の設定-

#### 1 はじめに

鷹ノ巣遺跡の発掘調査で出土した弥生式土器のうち、第35・47・55・68号住居跡(第19図)を形成した後期前半の土器群について、属性を分析する。その対象は、報告書に掲載された資料に限定し、同一個体を1点と数えた448点である<sup>註1</sup>。内訳は、住居跡の第35号が29点、第47号が121点、第55号が46点、第68号が62点、遺構外の190点となる。方法は、武田遺跡群及び船窪遺跡群において実践した「十王台式」の分析(鈴木2001)に準じる。

#### 2 胎土の分類

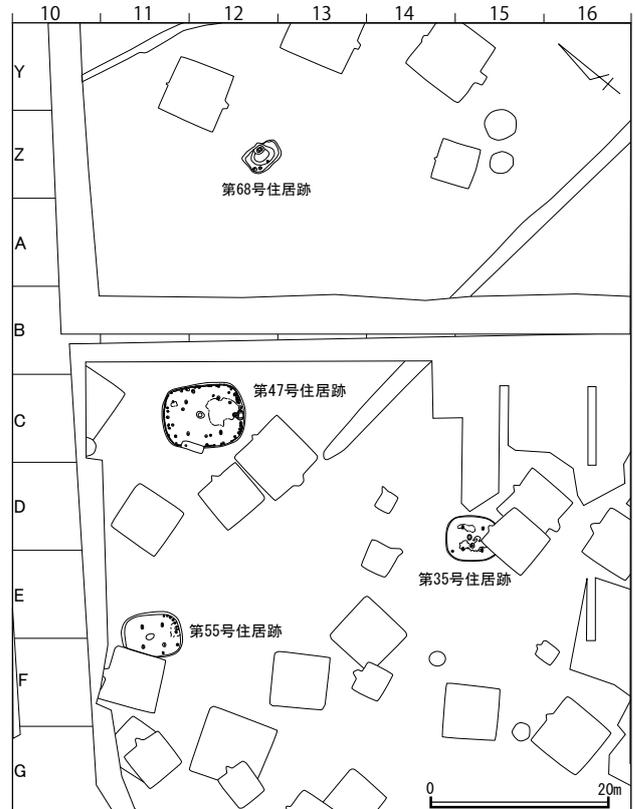
土器群の胎土を観察すると、一部に明瞭な特徴として金雲母(鉱物名称としては「黒雲母」)、骨針(海綿動物の骨格の化石)、銀雲母(鉱物名称としては「白雲母」)の含有が認められた。このうち金雲母と骨針は同一の胎土に観察されることが多く<sup>註2</sup>、銀雲母と骨針がともに観察されることはない。金雲母と骨針にはそれぞれの含有量に多寡があるのに対して、銀雲母は細片が多量に含まれている。破片の大きさや、表面だけの観察で、金雲母あるいは骨針の一方もしくは両方が観察されないことにも注意が必要である。含有物には、粘土や混和材の由来する地質的な環境が異なることを想定し、胎土を大きく3つに分類する。

胎土A 胎土に金雲母、骨針を含有する。

胎土B 胎土に銀雲母を含有する。

胎土C 胎土に以上の含有物が認められない。

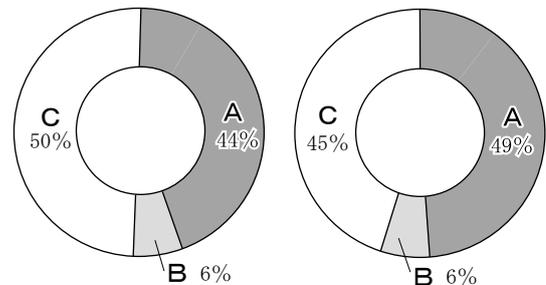
土器群の全体(448点)に占める胎土A～Cの比率は、胎土Aが44%(198点)、胎土Bが6%(25点)、胎土Cが50%(225点)である(第20図1)。底部(88点)のみでも、胎土Aが49%(43点)、胎土Bが6%(5点)、胎土C(40点)が45%となる(第20図2)。胎土Aが44～49%、胎土Cが45～50%とほぼ等しく、胎土Bは6%を占めると捉えられる。鷹ノ巣遺跡の近在で獲得される材料で土器が製作されたとすれば、それは胎土Cに相当するはずであり、胎土A・Bは、他所で製作された土器が持ち込まれたことを考えなければならない。



第19図 鷹ノ巣遺跡における弥生時代後期前半の遺構分布

1. 全部 (n=448)

2. 底部 (n=88)



〈凡例〉 A 胎土A B 胎土B C 胎土C

第20図 胎土A～Cの組成

#### 3 鉢形・高坏形土器の抽出

鉢形として抽出された土器は5点(第21図18, 第22図50, 第25図23, 第27図25)、高坏形として抽出された土器も5点(第22図23, 第27図26～28)であった。数量は、4基という住居跡数にほぼ相応している。これらは、胎土A及び胎土Cであり、胎土Bは見られない。鉢形は、第68号住居跡に全形が復元された土器(第25図23)がある。単純口縁が特徴的で、体部は縄文。これと同じ構成の口縁部破片3点が鉢形と推定された。また、



第21図 鷹ノ巣遺跡第35号住居跡出土土器抄録(色川2008より引用)

複合口縁で、体部が無文という構成(第27図25)もある。高坏形は、4点が口縁部、1点が脚部の破片であり、坏と脚との接合部を欠く。複合口縁(口縁部成形技法Ⅱ)の下端を指頭で押圧し、器内面の口唇部直下に櫛描波状文が施された土器(第27図26)が1点、他は最上段の積上げ成形を複合口縁(口縁部成形技法Ⅰ)として、体部外面はいずれも縄文である。

これらを抽出した残りの大部分が、壺形あるいは甕形土器ということになる。なお、鉢形及び高坏形については、土製蓋として使用されたものがあることについて指摘(鈴木2017)してあり、この視点からは、下向きの弧状文が密に施文された破片(第27図29)にも土製蓋の可能性を付記しておく。

#### 4 壺形・甕形土器の法量と形態

壺形と甕形を分離して分析できないのは、いずれであるのかを判断できない破片が多いことによる。「十王台式」の分析では、壺形と甕形を一括して壺形土器と呼び、形態を「細頸形・中頸形・太頸形」に分類した。その基準は、「細頸形 頸部直径が胴部直径の約2分の1かそれ以下。中頸形 頸部直径が胴部直径の約3分の2。太頸形 頸部直径が胴部直径の約4分の3かそれ以上。」というもの。細頸形は非煮沸具の壺形、太頸形は煮沸具の甕形に相当する形態ではあるが、「十王台式」の煮沸具は、これらの中間形態を典型とし、形態どうしが漸移的であった。鷹ノ巣遺跡の土器群のうち、頸部と胴部の直径が計測された資料は、細頸形寄りの比率を示す一群と、太頸形寄りの比率を示す一群に分離されることから、これが明らかなものについては、壺形、甕形とそれぞれ表記する。

壺形と甕形の土器は、器高により、大型・中型・小型の



第22図 鷹ノ巣遺跡第47号住居跡出土土器抄録(色川2008より引用)

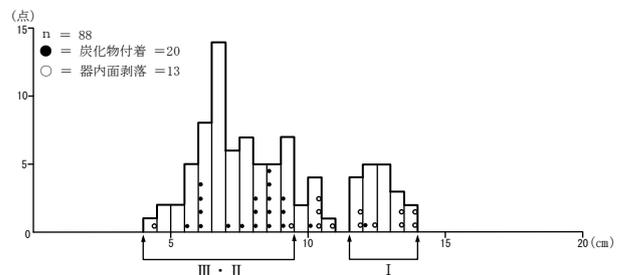
3つの法量に大きく分類される。但し、器高が明らかな資料が少ないため、区分は大略的である。

大型(I) 器高が50cm以上のもの。完形はないが、第21図1(残存高386mm)・2(残存高405mm)、第24図1(残存高480mm)などは全て、残存部位の計測値から、器高50cmを超えることが確実である。

中型(II) 器高が30cm前後のもの。第21図5(器高322mm)、第24図2(器高261mm)が相当する。

小型(III) 器高が20cm前後のもの。第22図2(器高180mm)、第24図3(器高236mm)が相当する。

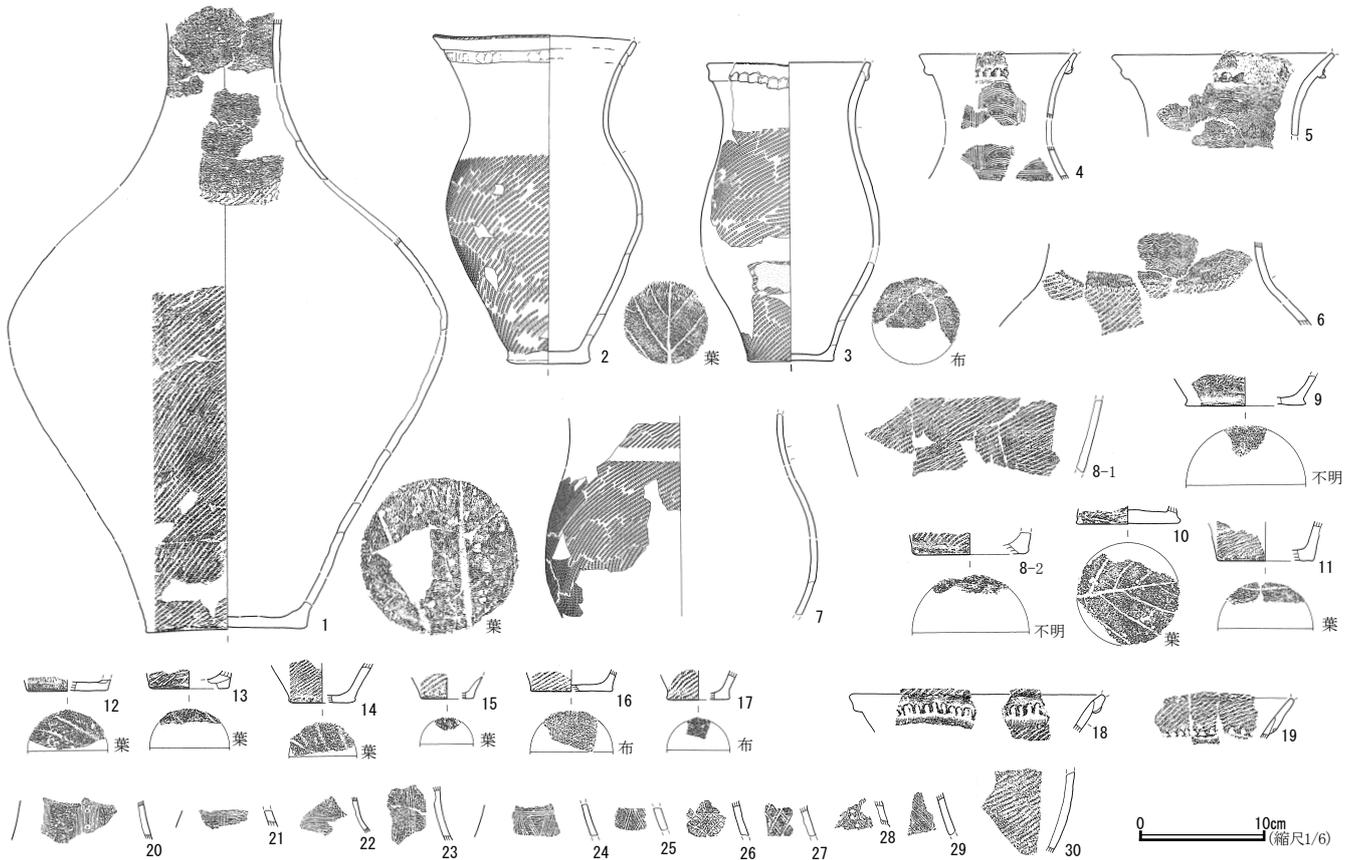
大型のほとんどは壺形であるが、頸部の括れが弱く甕



第23図 壺形・甕形土器の底径分布

形と推定される土器(第25図39)も少数が見られる。中・小型のほとんどは甕形であるが、頸部の括れが強く壺形と推定される土器(第21図4)も少数が見られる。

器高が明らかでないものについても、器高と部位直径



第24図 鷹ノ巣遺跡第55号住居跡出土土器抄録(色川2008より引用)

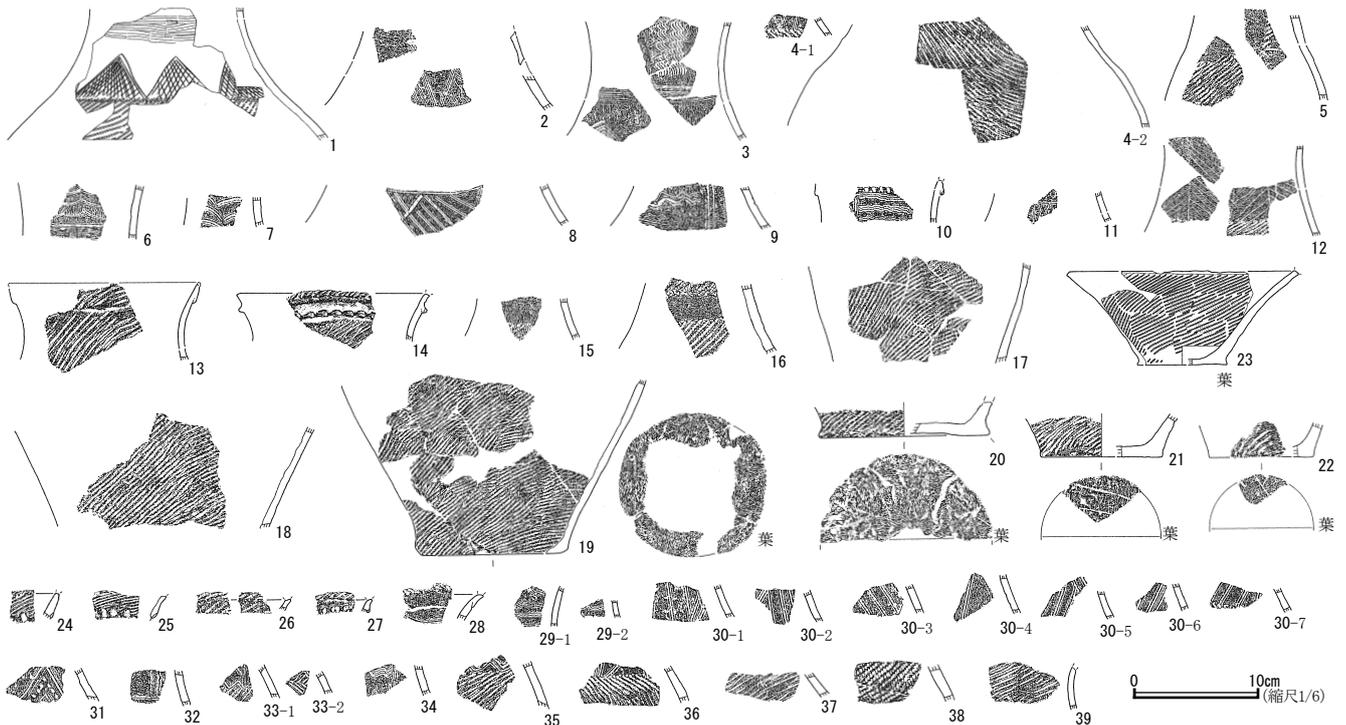
の対応関係から、法量が推定される。特に、大型と中・小型とでは、底部直径を指標として分別される。底部直径を推定し得た個体数は88点であった。これらの底部直径の分布は、6.6～7.0cmを頂上としてほぼ正規分布を示す(第23図)。11.0cmで分布が断絶することから、4.1～11.0cmの範囲の69点を中・小型、11.6～14.0cmの範囲の19点を大型と見ることができる。この場合、大型の比率は22%となる。但し、中・小型のほとんどが煮沸具の甕形であることから、その使用痕跡である炭化物の付着を勘案すれば、9.5cmまでが中・小型の確実な範囲と見られる。逆に、大型の壺形に特徴的な器内面の剥落を勘案しても、ほぼ同様な範囲が想定されてくる。したがって、中・小型の比率は70～78%、大型の比率は22～30%と幅をもたせて捉えておきたい。大型の底部に炭化物の付着が認められたことは、頸部破片から推定した大型の甕形の存在を裏付ける。ただ、その個体数は少なく、大型はほぼ壺形と見做してよい。一方、中・小型の底部に炭化物の付着が認められないことは、中・小型に壺形も含まれるが、部分的な破片からは判断できないことが大きく関与している。

大・中・小型という法量の組合せは、胎土A～Cのいずれにもあり、煮沸具と非煮沸具が組成する。大型壺形の形態には、球胴形と長胴形の2つがあり、胎土Aには球胴形(第24図1)と長胴形(第21図2、第22図12)が、胎土Bには球胴形(第21図1)が確認された。第35号住居跡の球胴形(第21図1)には、「被籠土器」と呼ばれる痕跡が残されている。

### 5 口縁部の成形と文様

壺形・甕形土器の口縁部は、全て複合口縁である。その成形の技法には大きく2つがあり、これを口縁部成形技法I・IIと呼ぶ。さらに、鷹ノ巣遺跡では、特殊な事例<sup>註3</sup>が見られたので、これを口縁部成形技法IIIとして付け加えておきたい。

**口縁部成形技法I** 積上げ成形の最上段をそのまま複合口縁とする(第26図1)。器外面の継ぎ目が残され、これが沈線として口縁部を区画する。成形は、頸部から連続しており、頸部を施文した縄文の一部が無文の口縁部にかかることもある。複段は2段のものが1点(第24図2)あり、積上げ2段分の継ぎ目が残される。



第25図 鷹ノ巣遺跡第68号住居跡出土土器抄録

**口縁部成形技法Ⅱ** 積上げ成形の最上部と重複するように口縁部を貼付し有段の複合口縁とする。口縁部幅の半分ほどが重複するもの(第26図2)から、大部分が重複するもの(第26図3)までである。一周させた口縁部の端部どうしが重ねて残されたものも見られた(第26図6)。横位の撫で調整は、重複部分の接着のために、押圧が加えられて窪みが生じる。この窪みにより、口縁部の縄文に施文の浅いものがある。成形は、頸部と不連続で、頸部の施文が完了した後であり、複合口縁の有段部に頸部文様の一部が入り込んでいる。複段は2段のものが2点(第27図13・14)あり、下段の施文の後に上段が成形されている。下段の一部に上段が重複するため、下段の幅は狭くなる。

**口縁部成形技法Ⅲ** 積上げ成形の最上部が口唇であり、これに重複しない貼付で有段の複合口縁が作出される(第26図4・5)。幅2cmほどの隆帯の下端を有段部として1段(4)の、上下の両端を有段部として2段(5)の複合口縁を模倣したという印象である。3個体分が確認されており、そのうち2個体は、胎土・焼成・色調、口縁部下端の刻み方もよく似ている。

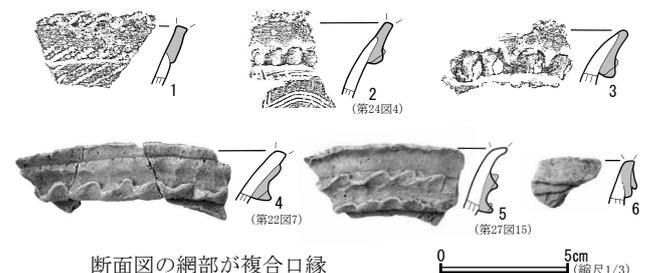
口縁部成形技法Ⅰ・Ⅱは、「十王台式」の成形技法Ⅰ・Ⅱのうち、「成形技法Ⅱ 接合部の断面が外削ぎ状を呈しており、外側から内側に押し当てるようにして胎土を接

合したことが考えられる」(鈴木 2001)に相当し、これは全体の成形技法を反映したものと考えられる。「成形技法Ⅰ 接合部の断面が内削ぎ状を呈しており、内側から外側に押し当てるようにして胎土を接合したことが考えられる」(鈴木 2001)は認められない。

複合口縁は1段のものが圧倒的に多く、複段は2段が口縁部成形技法Ⅰに1点、口縁部成形技法Ⅱに2点、口縁部成形技法Ⅲに1点があるに過ぎない。1段の口縁部幅は、1.5～2.0cmに集中する。2.5～3.0cmの幅広の複合口縁はごく僅かであり、口縁部が縄文に限られている。

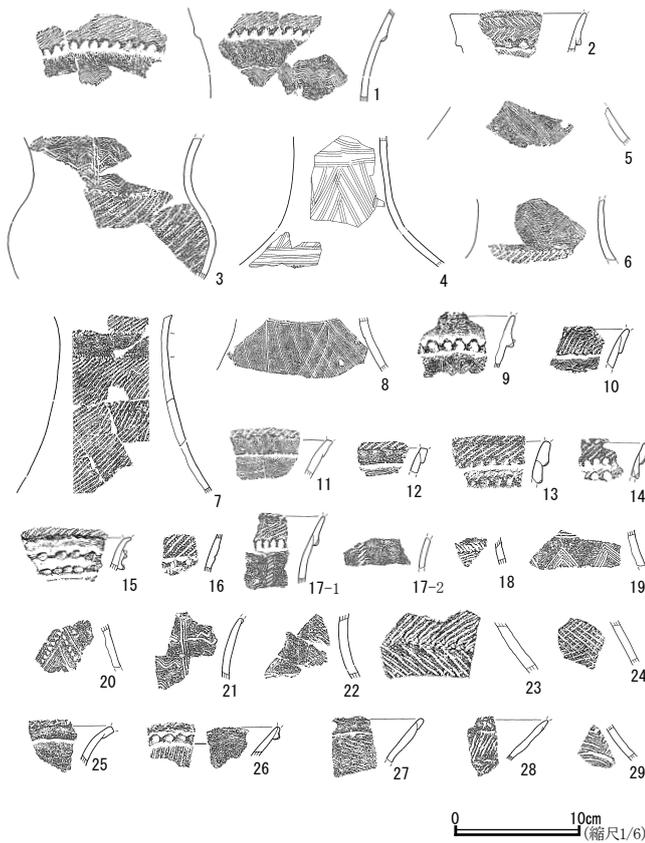
口縁部の文様は、無文か縄文のいずれかである。これが判断できる口縁部破片は144点であり、無文が83点、縄文が61点であった。胎土A・Cには無文と縄文があるが、胎土Bには縄文のみで無文が見られない。

口縁部の上端すなわち口唇部が残存する破片は120点であり、口唇部に縄文が施文されたものが102点で85



断面図の網帯が複合口縁

第26図 複合口縁の成形



第27図 鷹ノ巣遺跡遺構外出土土器抄録

(色川 2008・2013 より一部引用)

%を占め圧倒的に多い。他は、施文がないものが12点で10%、不明が6点で5%である。縄文は全て回転施文されており、縄文原体や、篋・棒状の工具による刻みは見られない。

口縁部の下端が残存する破片は138点であり、ここに刻みが施されたものがある。刻みがあるのは、92点の67%。46点の33%には刻みがないが、これには口縁部成形技法Ⅰの口縁部が含まれており、口縁部成形技法Ⅱの口縁部は、刻みが施されることを典型としている。刻み(92点)は、指頭によるものが60点で64%を占める。そのうちの2点(第22図26、第27図16)は、口縁部の下端付近を沈線で区画し、その区画内に刻みが施されている。口縁部無文(第22図26)が胎土A、口縁部縄文(第27図16)が胎土Bである。これは、「梯子状刻み隆帯」(鈴木 2016)からの変化として注意すべき資料であろう。口縁部無文には、指頭で複合口縁の下端をめぐり上げるような刻み方が特徴的であり、爪痕が残るもの(第26図3)もある。これは胎土A・Cに特有な刻み方ということになる。指頭以外では、縄文原体による刻みが10点で11%、篋・半截竹管・棒状の工具による刻みが32点で35%

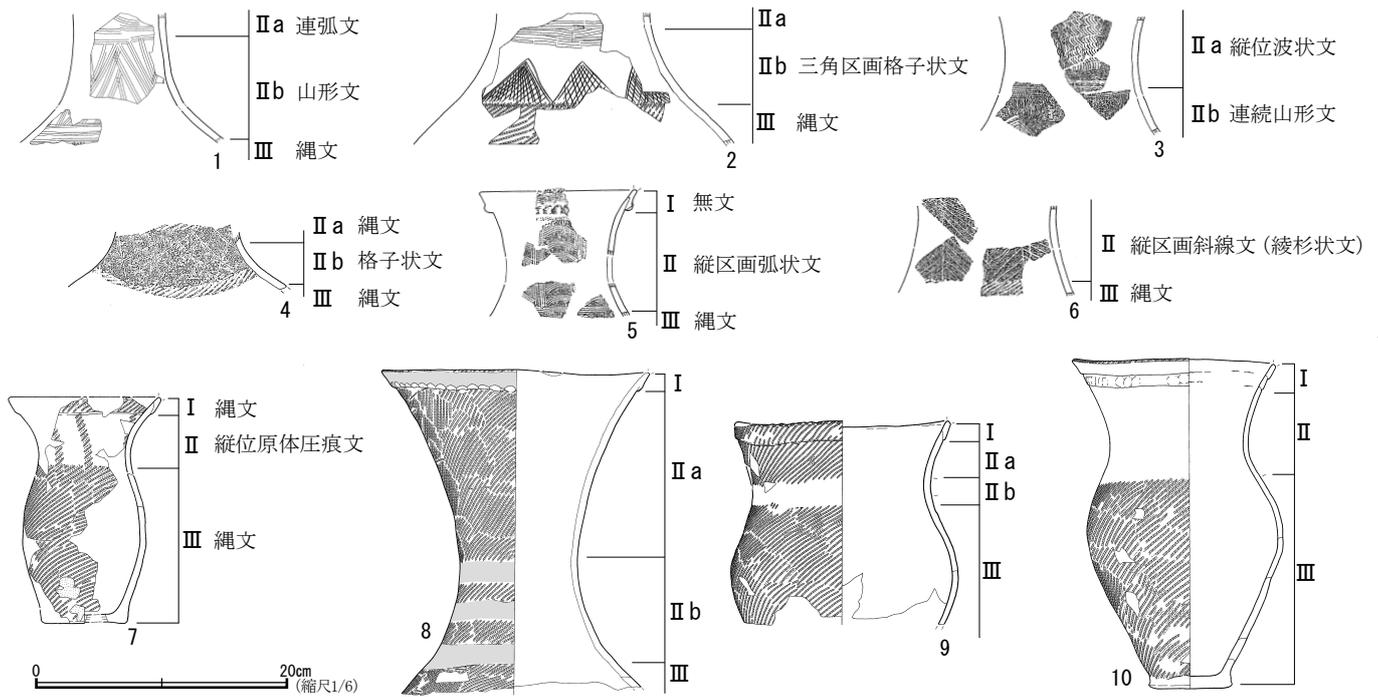
を占める。これら原体・工具による刻みは胎土A・Cのみで、胎土Bには見られない。胎土Bには専ら指頭による刻みが施されている。

## 6 頸部の文様

壺形・甕形土器の器外面を横位に分割して構成される文様帯については、その位置から口縁部を文様帯Ⅰ、頸部を文様帯Ⅱ、胴部を文様帯Ⅲと記号化する。文様帯Ⅱは、さらに分割されて二段に構成されるものがあり、その上位を文様帯Ⅱa、下位を文様帯Ⅱbと呼ぶ。櫛描文等の文様が施文された土器のうち文様帯Ⅱa・Ⅱbの構成が推定されたのは、いずれも大型の壺形(第28図1～4)である。第55号住居跡の第24図1も、上位には縦位の波状文、下位には横位の波状文が施文されている。一方、分割されない文様帯Ⅱの構成は、中・小型の甕形(5～7)に推定された。縄文のみが施文された土器にも、大型の壺形に文様帯Ⅱa・Ⅱb(8)、中・小型の甕形に文様帯Ⅱ(10)に相当する無文帯の構成が見られる。中・小型の甕形には、頸部に幅狭の無文帯を介在させた文様帯Ⅱa・Ⅱbの構成(9)もある。区画文については、区画内の充填文との相関が認められたことから、充填文の記述を先行させる。

**篋描沈線文** 先端の鋭利な篋状工具で施文された単線により文様が構成される(第28図2・4・6)。文様の形象には、右傾と左傾の集合沈線を重複させた格子状文(第21図14、第22図3・38～42、第24図26・27、第25図11)と、右傾と左傾の斜線文を交互に配置した綾杉状文(第22図4、第24図29、第25図12)とがある。格子状文は、縦区画の有無があり、縦区画により無文部が組み込まれる(第22図40～42、第24図26)。また、三角区画に充填されることもある(第25図1)。綾杉状文は、右傾と左傾が縦区画で区別されている。格子状文の1点(第22図3)のみが胎土B、他は全て胎土A・Cである。

**平行沈線文** 2本の沈線が同時に施文された平行沈線文により文様が構成される。沈線間の断面がD字状を呈することから半截竹管状の工具と判断されるものがほとんどであるが、2本の篋描沈線のような印象の平行沈線文(第25図9)が1点のみ見られた。文様の形象には、連弧文(第22図6・29)、山形文(第21図15)、波状文(第25図9、第27図3)と、山形文の変異であろうか、三



第28図 文様帯の構成

角区画に斜線を充填した構成(第25図8)もある。連弧文は、上向き(弦の位置が上にくる)の弧のみ。波状文は、縦区画を伴い、波形が大振りである。胎土Bは認められず、全て胎土A・Cである。

**櫛描文** 3本以上の沈線が同時に施文された櫛描文により文様が構成される(第28図1・3・5)。櫛歯数には、3～14本前後までの変異がある。櫛歯数6本以上を多条櫛歯として一括し、3本櫛歯、4・5本櫛歯、多条櫛歯の3つに分けて文様の形象を比較する。

3本櫛歯による櫛描文の形象には、連弧文(第21図3・4、第22図28・33、第25図6・7・29、第27図4・10～12)、山形文(第22図36・37、第24図24・25、第25図30、第27図4)が多い。文様帯II a・II bの構成では、文様帯II aが連弧文、文様帯II bが山形文という組合せが確認される(第28図1)。波状文(第25図10、第27図21)と、山形文の変異であろうか、三角区画に斜線を充填した構成(第27図8)もあり、これらは、平行沈線文による文様の形象に共通する。但し、波状文には、三角区画に斜線で充填された構成(第25図2)が見られる。他には、縦位直状文(第22図5)、縦区画弧状文(第24図4)がある。連弧文には、上向きと下向き(弦の位置が下にくる)の弧があり、上向きの弧が多いのに対して、縦区画弧状文は、下向きの弧に限られている。

4・5本櫛歯による櫛描文の形象には、波状文(第21

図16、第25図33～35)、連続山形文(第27図19)、縦区画弧状文(第22図43)があり、波状文には、縦位波状文が2点含まれている。部分的な破片ながら、縦位直状文もあるらしい。縦区画弧状文はこれも下向きの弧である。

多条櫛歯による櫛描文の形象には、波状文(第21図13・16、第22図24～27、第24図1・5・6、第25図2・3・32、第27図1)、連続山形文(第22図44、第25図3・31、第27図5・6・19)、縦位直状文(第22図45・46、第24図20～23)があり、縦位波状文(第21図13、第22図24、第25図2・3・32)が横位の波状文とほぼ同等に含まれている。波状文に縦区画が伴わないこと、波形が大振りでないことも、3本及び4・5本櫛歯とは異なる。なお、植物の茎断面が施文具と推定される刺突文が3点に認められ、うち2点は同一個体である(第24図20、第25図31、第27図20)。刺突文のみで文様が構成されることはなく、多条櫛歯による櫛描文のみに付加されている。いずれも大型の壺形が推定され、胎土Bは認められず、胎土Aと胎土Cが1点ずつである。

以上のことから、4・5本櫛歯という中間領域を挟みながら、3本櫛歯と多条櫛歯による櫛描文には、文様の形象に異なりを認める。3本櫛歯は、上向きの連弧文、山形文、縦区画を伴う横位の波状文を、多条櫛歯は、縦区画を伴わない横位の波状文、縦位波状文、連続山形文、

縦位直状文を典型とする。さらに、下向きの弧に限られる縦区画弧状文、三角区画への充填は、3本櫛歯にのみ出現している。また、3本櫛歯と多条櫛歯には、歯数だけでなく工具の構造が異なることも想定される。3本櫛歯は、3本とも同じ太さの沈線が等間隔に並ぶのを典型とするが、多条櫛歯は、沈線の太さと間隔が不揃いで、櫛歯の先割れが細かい擦痕として出現し条数の決定が困難なものも少なくない。3本櫛歯は、ほとんどが胎土A・Cであり、これも平行沈線文に共通する。

**縄文原体圧痕文** 縄文原体を押圧した圧痕文により文様が構成される(第28図7)。圧痕文は、縦位直状(第22図2・47、第25図5、第27図17)であり、間隔が均等ではないが、1条を単位とするように窺える。横位の圧痕文が1点(第27図18)のみあり、これは、胴部との区画文に相当する。胎土Aは認められず、胎土Bが1点、他は胎土Cである。

いずれにも、充填と同じ工具で、頸部の縦区画及び横区画、三角区画が施文されることを認める。篋描沈線文の格子状文と綾杉状文は、縦区画も篋描沈線文であり、文様帯Ⅱa・Ⅱbの構成が推定される破片(第24図26)では、横区画も篋描沈線文で施文されている。平行沈線文についても櫛描文についても、これは同じである。縦区画は、篋描沈線の綾杉状文が1条区画に限られるのに対して、平行沈線文及び3本櫛歯の櫛描文には、1条区画とともに間隔を空けた2条区画が見られる。横区画も、篋描沈線文が1条区画に限られるのに対して、平行沈線文及び3本櫛歯の櫛描文には、1条区画とともに間隔を空けた2条区画が見られる。4・5本櫛歯と多条櫛歯の横区画は、密集した施文で櫛描の太い横帯(第25図1・3)を構成することに特徴がある。

頸部と胴部の区画は、櫛描文のうち3本櫛歯の連弧文・山形文(第27図4)、縦区画弧状文(第24図4)の土器が、頸部の下端に横位直状の2条、3条区画を付属する。これに対して、篋描沈線文、平行沈線文、多条櫛歯による櫛描文、縄文原体圧痕文は、ほとんどが区画文を欠き、無文と縄文の境界をそのまま頸部と胴部の区画としている。

## 7 胴部の縄文

縄文は、口唇部、口縁部、胴部に施文される。それぞ

れが異なる原体で施文されることはなく、胴部を施文した原体で、口縁部、さらには口唇部が施文されることが普通である。その縄文原体を観察した306点は、付加条縄文が297点で97%、単節斜縄文が7点で2%、不明が2点で1%であった。付加条縄文には、第2種及び第3種と認められるものは含まれておらず、ほぼ全てが第1種と見られる。そのうち、付加条第1種付加2条と判断されたものは282点であるのに対して、付加条第1種付加1条は、確実に判断されたものが5点、可能性のあるものが5点に過ぎなかった。つまり、付加条第1種付加2条が縄文の典型であり、これに付加条第1種付加1条と単節斜縄文が伴う。なお、これらの縄文に結節文は見られない。

施文の構成は、斜行が典型ではあるが、羽状が僅かに認められた。羽状を構成する施文には2つの方法がある。1つは、同一の縄文原体で横位と縦位に回転方向を変えたもの(第25図33、第27図24)で、口縁部(第27図2)の羽状もこの方法による。もう1つは、最終段の撚りの方向が異なる2つの縄文原体を交互に施文したもの(第22図13、第27図23)で、第47号住居跡と遺構外から1個体分が検出されている。「十王台式」の羽状縄文と同じ方法であり、これは胎土Bで大型の壺形に出現している。

## 8 底面痕跡

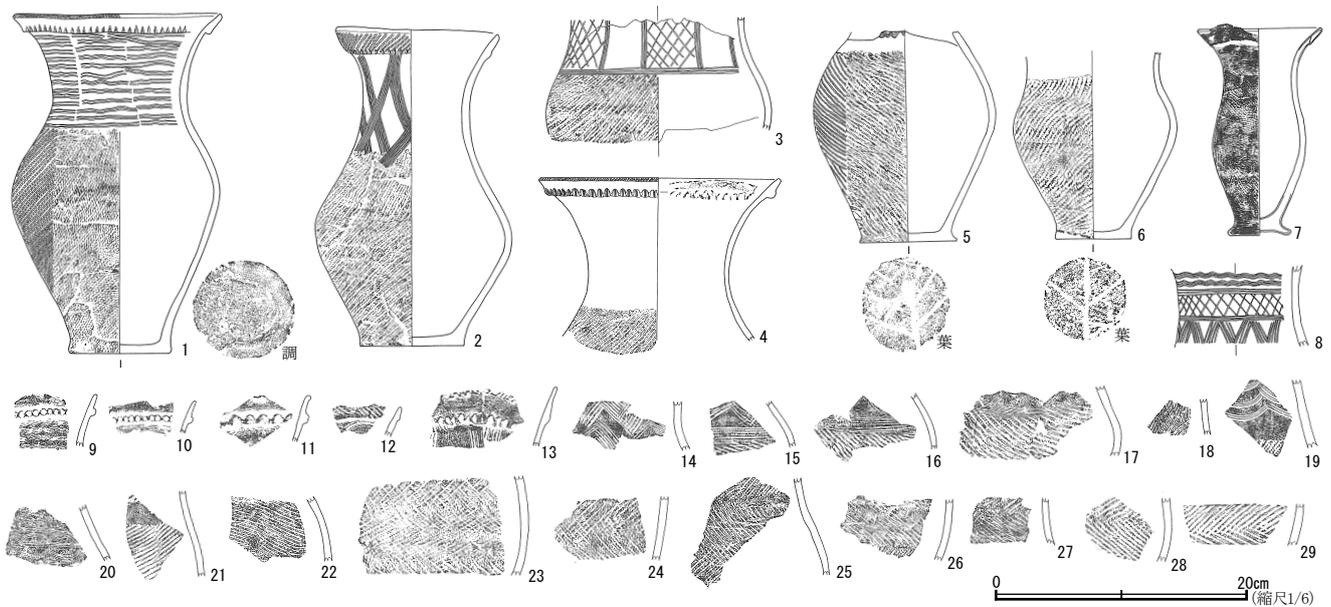
底部の底面痕跡には、木葉痕と布目痕があり、これに調整の痕跡が加わることもある。「十王台式」に特徴的な砂痕は認められなかった。底部88点のうち、不明とした4点を除く84点の底面痕跡は次の通り。

**木葉痕** 78点あり、そのうち1点は調整痕が複合する。胎土A～C、大型・中型・小型のいずれにも認められる。

**布目痕** 4点ある。胎土Aの中・小型にのみ認められる。

**調整痕** 3点あり、そのうち1点は木葉痕が複合する。胎土A・Cの中・小型に認められる。

底面痕跡の比率は、木葉痕92%、布目痕5%、調整痕3%であり、木葉痕が圧倒的に多い。胎土Aにはごく少数ながら布目痕と調整痕が組成するが、胎土Bは全て木葉痕である。なお、鉢形土器(第25図23)の底面痕跡も木葉痕である。



第29図 髭釜遺跡第11号住居跡出土土器抄録(井上編1980より引用)

9 「鷹ノ巣式土器」

鷹ノ巣遺跡の土器群について、属性を分析した結果を箇条書きで概括する。胎土はA～Cに分けられるが、以下は総体としての属性である。

1. 器種組成 ほとんどが甕形と壺形であり、他に鉢形、高坏形が組成する。

2. 甕形・壺形の度量 甕形と壺形には、大型・中型・小型があり、大型はほとんどが壺形、中・小型はほとんどが甕形で占められる。中・小型の甕形が70～78%に対して、大型の壺形は22～30%を示す。

3. 文様帯の構成 大型の壺形は、頸部の文様帯が横位に分割される文様帯Ⅱ a・Ⅱ bの構成であるに対して、中・小型の甕形は分割されない文様帯Ⅱの構成を典型とする。縄文のみが施文された土器には、頸部全体を無文帯とするものと、頸部の下位に無文帯が設定されるものがある。

4. 口縁部 甕形と壺形の口縁部は、複合口縁で、縄文と無文がある。口縁部下端は、指頭による刻みを典型とする。

5. 頸部の区画文 頸部文様帯内の横区画及び縦区画は、充填文と同じ工具で施文される。

6. 頸部の文様 頸部の文様は、篋描沈線文、平行沈線文、櫛描文、縄文原体圧痕文のいずれかで構成される。

7. 文様の形象 篋描沈線文に格子状文・綾杉状文、平行沈線文及び3本櫛歯の櫛描文に連弧文・山形文・縦区画波状文・縦区画弧状文、多条櫛歯の櫛描文に波状文・連続

山形文・縦位直状文が対応する。連弧文は上向きが主体であり、多条櫛歯の櫛描文では、縦位の波状文が特徴的である。3本櫛歯の櫛描文が施文された大型の壺形は、文様帯Ⅱ aが連弧文、文様帯Ⅱ bが山形文という構成を典型とする。

8. 横位区画文 頸部と胴部の境界の区画文は、3本櫛歯の櫛描文にのみ認められる。

9. 縄文 縄文は、付加条第1種付加2条が典型であり、付加条第1種付加1条と単節斜縄文がわずかに伴う。斜行縄文が典型であるが、羽状縄文が極わずかに含まれている。同一の縄文原体の回転方向を変える施文と、異なる縄文原体の交互施文がある。

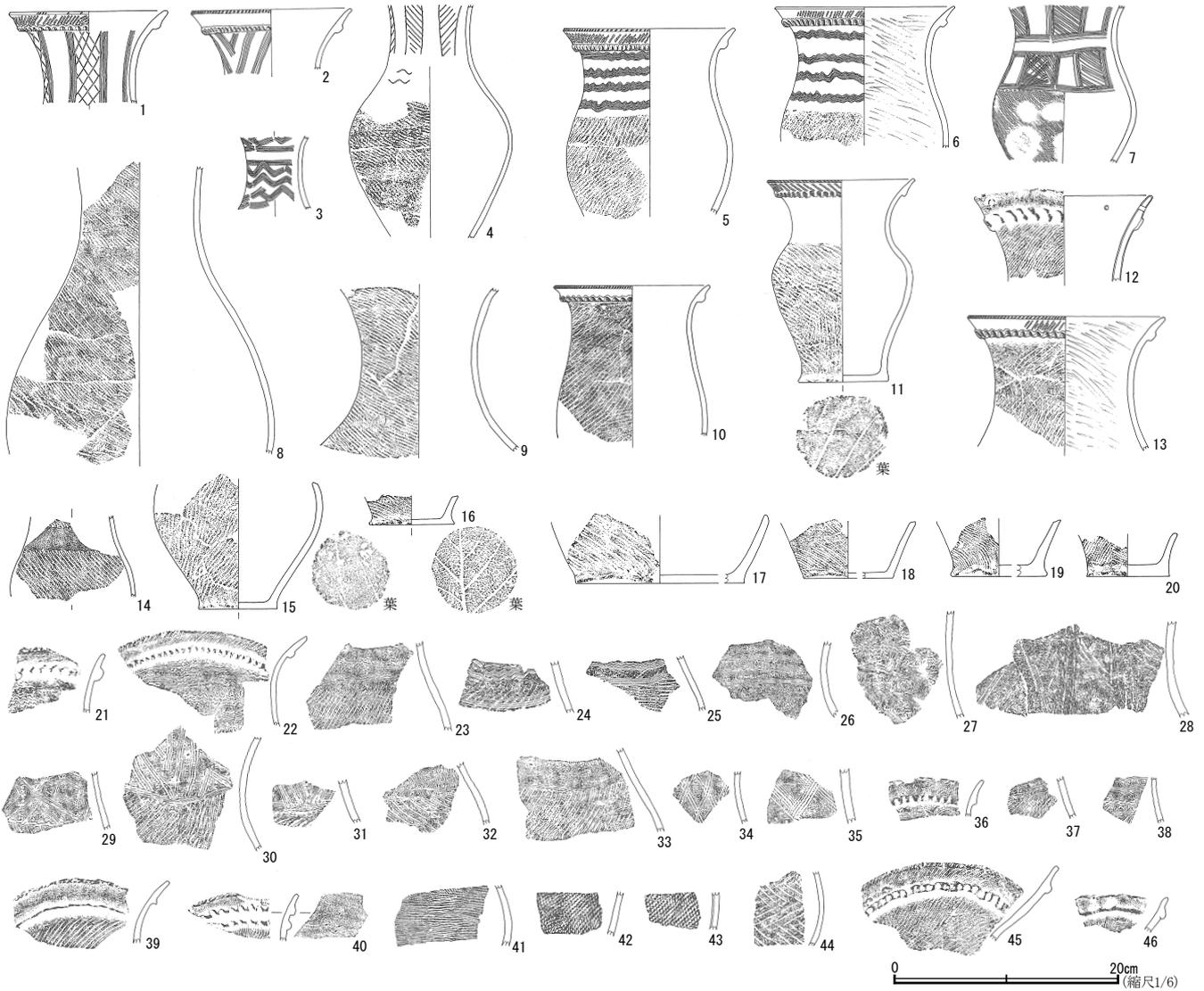
10. 底面痕跡 底面痕跡は、木葉痕が典型であり、わずかに布目痕と調整痕が認められた。

現在まで、これらの属性を充たす土器型式は設定されておらず、鷹ノ巣遺跡の土器群を「鷹ノ巣式」と呼んで検討に備えたい。

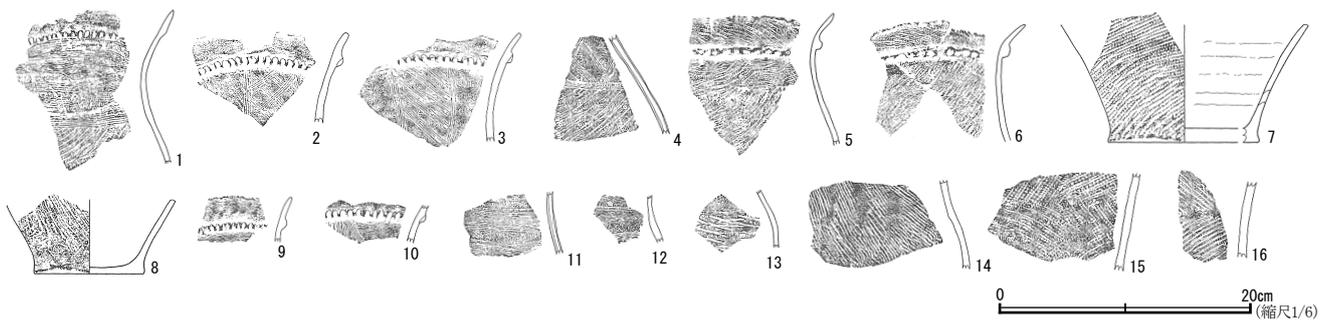
10 「鷹ノ巣式」と「髭釜式」

「鷹ノ巣式」の属性を多分に共有する土器型式に「<sup>ひいがま</sup>髭釜式」がある。「髭釜式」は、鈴木正博により1982年に設定された(鈴木正1982)。大洗町髭釜遺跡(井上編1980)第11・30・40号住居址の土器群を基準として、土器群の属性の特徴は、次のようにまとめられている。

「H-1:多条櫛目文土器の定着……東中根式・長岡式の櫛歯数を越える原体によって描かれている。文様は格子



第30図 髭釜遺跡第30号住居跡出土土器抄録(井上編1980より引用)



第31図 髭釜遺跡第40号住居跡出土土器抄録(井上編1980より引用)

目文・横走波状文が主となるらしい。連続山形文の例もある。多条でない一般的な櫛歯数は3～4本である。

H-2: 頸部文様帯は多段化せず、充填の例が多い。

H-3: 縦区画充填格子文及び縦区画斜線文の定着……縦区画文と内部充填文との間に原体が使い分けられる場合が屢々ある。

H-4: 櫛描連弧文土器の僅少数

H-5: 頸部無文帯土器の定着……頸部を無文帯とする縄紋施文には2種の定着がみられる。1つは口縁部下より無文帯とするものであり、他は、口縁部下に縄紋帯を配し、更にその下を無文帯として胴部の縄紋帯に至るものである。

**H-6:** 縄紋のみの土器に於ける羽状手法の定着……特徴的な羽状手法である。即ち、一般に十王台式の羽状手法という、体部に羽状縄文を施すのであるが、「髭釜式」では体部は斜行縄文となっている。斜行の向きを違えるのは、口縁部と体部に於いてである。

**H-7:** 縄紋は附加条第1種の斜行縄文を主体とする。」

第11・30・40号住居址の土器群(第29～31図)には、遺跡に重複する「十王台式」までの破片も含まれており、全ての破片を「髭釜式」と見做すことはできない。また、報告が実測・拓影図のみで観察の記載が欠落することから、例えば櫛歯数について正確に判断できないものもあるが、「H-1～7」の指摘も含め、「鷹ノ巣式」と「髭釜式」の異同について、前項1～11の属性を検討する。

**1. 器種組成** 髭釜遺跡にも高坏形(第30図45)、鉢形(46)と見られる破片があり、組成は共通すると考えられる。但し、髭釜遺跡の壺形・甕形には、中頸形(第29図1・2, 第30図11)の形態が見出せる。

**2. 甕形・壺形の量** 大型の甕形が確認できないものの、髭釜遺跡でも大型のほとんどが壺形、中・小型のほとんどが甕形で占められる。

**3. 文様帯の構成** 髭釜遺跡でも大型の壺形は文様帯Ⅱa・Ⅱbの構成(第29図8・20, 第30図26～28)、中・小型の甕形は文様帯Ⅱ(第29図1・2, 第30図5・6・22, 第31図1)の構成を典型とする。「H-2」の指摘は、甕形についてのものなのであろう。但し、甕形にも文様帯Ⅱa・Ⅱbの構成(第30図7)は見出せる。「H-5」の指摘の通り、頸部全体を無文帯とするもの(第29図4, 第30図11)と、頸部の下に無文帯が設定されるもの(第29図21, 第30図14)がある。なお、髭釜遺跡では、体部全体に縄文が施文された土器も確認できる。

**4. 口縁部** 髭釜遺跡も複合口縁で、縄文と無文がある。口縁部下端は、指頭による刻みを典型とする。

**5. 頸部の区画文** 「H-3」の指摘の通り、髭釜遺跡では、篋描沈線文の充填に、篋描沈線文ではなく櫛歯文の縦区画文(第29図3, 第30図1・7)が採用されている。但し、全てではなく、篋描沈線文による縦区画文(第30図4)もある。

**6. 頸部の文様** 髭釜遺跡はほとんどが、篋描沈線文、櫛歯文のいずれか、あるいは組み合わせで構成される。平行沈線文は1点のみで、縄文原体圧痕文は認められない。

**7. 文様の形象** 髭釜遺跡の篋描沈線文には格子状文(第29図3, 第30図1・7)と、中間に無文帯を挟んだ斜線文(第30図4・7)がある。平行沈線文は、波状文が1点のみ(第29図1)。櫛歯文は、3～5本櫛歯の櫛歯文に連弧文(第29図12・19, 第30図36～38)・山形文(第29図8, 第30図28・30～33, 第31図4・11)・波状文(第29図8～11・20, 第30図26～28, 第31図1・9・12)と、格子状文(第30図34)・斜線文(第31図3)・菱形文(第29図18, 第30図29)、多条櫛歯の櫛歯文に波状文(第30図5・6・21～25)・連続山形文(第29図14～17)が対応する。連弧文は下向きが主体であり、縦位の波状文は認められない。大型の壺形は、文様帯Ⅱaが波状文、文様帯Ⅱbが山形文という構成を典型とする(第29図8, 第30図26)。これが「H-4」の指摘に関係する。

**8. 横位区画文** 頸部と胴部の境界の区画文は、3本櫛歯の櫛歯文(第30図30～33)のみでなく、多条櫛歯の櫛歯文(第29図15～17, 第30図24・25)や篋描沈線文(第29図3, 第30図7)にも認められ、横位区画文は全て櫛歯文である。3本櫛歯の櫛歯文には、直状文の他に波状文の横位区画が見られる(第30図31・32)。

**9. 縄文** 縄文は、附加条第1種付加2条が典型であり、付加条第1種付加1条と単節斜縄文が伴う。付加条第1種付加1条には、「東中根式」に特徴的な1段3条を軸縄とした原体によるもの(第30図8, 第31図7)、条が密に絡げられて撚糸文のような印象のもの(第29図22, 第30図40・41, 第31図14)も含まれている。単節縄文は、直前段の撚りが緩い原体によると思われる(第30図42・43)。斜行縄文が典型であるが、羽状縄文が極わずかに含まれている。「H-6」の指摘は、同一の縄文原体の回転方向を変えた施文であり、他には異なる縄文原体で交互施文された胴部の破片がある。結節文が施文された破片(第30図29・38)も見られる。

**10. 底面痕跡** 全ての底面痕跡が図示されているわけではないが、木葉痕が典型であることは確実に見られる。

以上、多くの項目で属性を共有しながらも、特に頸部の文様の相異から、「鷹ノ巣式」と「髭釜式」は分別される。表徴の1つは、「髭釜式」における櫛歯区画文の成立であり、これは、縦区画文とともに、胴部との横位区画文が全ての充填文について採用されるようになる。充填文の相異は、「鷹ノ巣式」から「髭釜式」への変遷におい

て、消失、派生、置換により生成されたものと理解されよう。平行沈線文、縄文原体圧痕文は消失に向い、菱形文は山形文から、格子状文・斜線文は篋描から櫛描が派生し、上向き連弧文の多くは波状文に置換されることになった。指洪遺跡(第32図)、柳沢遺跡(第33図)、館出遺跡第2次調査区第11号住居跡(佐々木編2017)の土器群を「向井原式」(色川2006)の一部と捉えることにより、「鷹ノ巣式」は、「向井原式」に後続し、「髭釜式」に先行する土器群として位置付けられる。

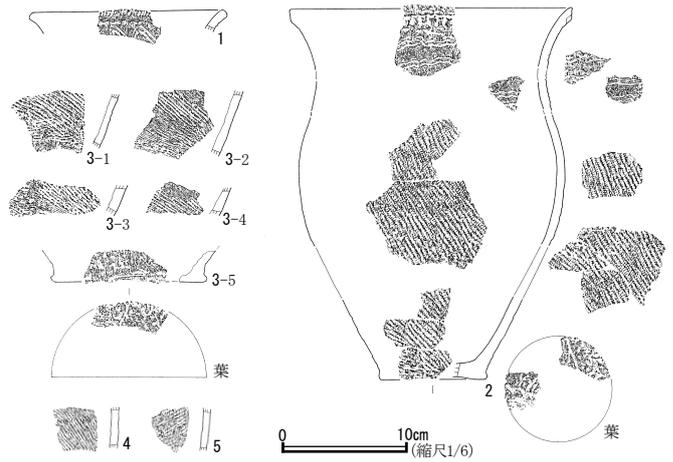
### 11 おわりに

「鷹ノ巣式」が「向井原式」から単一の系統で変遷したとは考え難い。胎土Aとして抽出された44～49%の土器は、在地で製作されたものではなく、「十王台式」の胎土の観察を援用するならば、久慈川流域以北、特に多賀山地の太平洋岸の地域に特徴的な胎土である。平行沈線文による上向きの連弧文、山形文という文様から「伊勢林前式」(馬目編1972)の系統の南下を推定しておきたい。一方、胎土Bとして抽出された土器は、筑波山周辺の地域に特徴的な胎土である。土浦市下郷遺跡(平石2000、関口他2001)には、これに共通する属性が多分に認められ、「原出口式」(海老澤2013)の系統の北上を推定しておきたい。「向井原式」「伊勢林前式」「原出口式」が複合することにより、「鷹ノ巣式」は成立した。鷹ノ巣遺跡から出土したアメリカ式石鏃(鈴木2013)やメノウ石器石材は北から、ガラス玉や石英石器製作(鈴木・窪田2013)は南からもたらされることになったものと考えられよう。

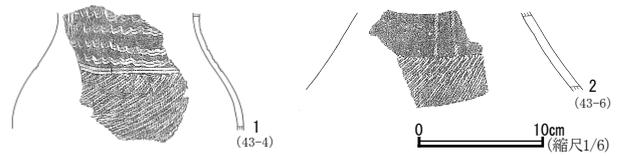
**註1** 第2次調査出土土器の属性については、原報告(色川2008)と観察の所見を異にする部分がある。

**註2** 胎土Aについて、金雲母と骨針の内訳を記しておく。破片全部では、金雲母と骨針の両方の含有が94点、金雲母のみの含有が20点、骨針のみの含有が84点である。底部では、金雲母と骨針の両方の含有が16点、金雲母のみの含有が8点、骨針のみの含有が19点である。

**註3** 福島県伊勢林前遺跡(馬目編1972)第4号住居址図版25-1、東海村岡遺跡(早川・井上1972)第16図3は、実測図を見る限り、口縁部成形技法Ⅲと思われるが、実見していない。



第32図 指洪遺跡出土土器(鈴木2016より引用)



\*括弧内は原報告(藤本1983)の挿図番号

第33図 柳沢遺跡出土土器

### 参考文献

- 井上義安編 1980 『髭釜 一鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報一』大洗地区遺跡発掘調査会
- 色川順子 2006 「那珂川下流域における弥生時代後期初頭の土器群一「向井原式土器」の設定一」『茨城県考古学協会誌』第18号 61-80頁
- 色川順子 2008 「弥生～古墳時代前期の遺構と遺物」『鷹ノ巣 一第2次調査の成果一』(第37集)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 9-62頁
- 色川順子 2013 「弥生時代の遺物」『鷹ノ巣Ⅱ 一第2・3次調査の成果一』(第41集)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 23-27頁
- 海老澤稔 2013 「茨城県南部における弥生時代後期前半の土器様相一新治台地における原出口1式・2式、松延1式・2式の設定一」『茨城県史研究』第97号 1-30頁
- 佐々木義則編 2017 『平成28年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会
- 鈴木正博 1982 「『髭釜』研究抄」『婆良岐考古』第4号 15-26頁
- 鈴木素行 2001 「武田西塙遺跡における十王台式土器の分析一「小祝式土器」と「武田式土器」の誕生一」『武田西塙遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編』(第21集)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 406-433頁
- 鈴木素行 2013 「鷹ノ巣遺跡のアメリカ式石鏃 一茨城県域の資料から窺う威信財としての変化一」『ひたちなか埋文だより』第39号 11-14頁
- 鈴木素行 2016 「旧石器・縄文・弥生時代の遺物」『十五郎穴横穴墓群 一東日本最大級の横穴墓群の調査一』(第42集)ひたちなか市教育委員会 93-96頁
- 鈴木素行 2017 「天か地か 一茨城県域における弥生時代の土製蓋一」『茨城県考古学協会誌』第29号 37-58頁
- 鈴木素行・窪田恵一 2013 「鷹ノ巣遺跡第47号住居跡における石英を素材とした石器について」『鷹ノ巣Ⅱ 一第2・3次調査の成果一』(第41集)ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社 28-40頁
- 関口 満他 2001 『下郷遺跡・下郷古墳群 佐々木建設株式会社土砂採取工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』土浦市教育委員会
- 早川章次・井上義安 1972 「磐船山式土器の新資料」『那珂川の先史遺跡』第1集(改訂増補版) 28-30頁
- 平石尚和 2000 『一般国道354号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書 下郷古墳群』(第167集) 茨城県教育財団
- 藤本弥城 1983 『常陸那珂川下流の弥生土器Ⅲ』(私家版)
- 馬目順一編 1972 『伊勢林前遺跡 一古代集落址の調査一』(市第1冊) いわき市教育委員会

## IV 古墳時代の遺構と遺物

### 1 調査の概要

鷹ノ巣遺跡では、第1～4次調査で古墳時代前期の住居跡22基、中期の住居跡4基、後期の住居跡30基を検出した。

**住居跡の分布** 古墳時代前期の住居跡は第2次調査区の中央から西側に、後期の住居跡は第1～4次調査区全体に分布する。後期で一辺が7m以上の住居跡は、第2～4次調査区の住居が密集しない台地平坦部に位置する。前期の住居跡同士および後期の住居跡同士の重複はみられない。

**住居跡の規模** 住居跡を長軸長で比較すると、最大が前期は第52号住居跡の7.98mで、後期は第28号住居跡の8.00m、最小が前期は第12号住居跡の2.9mで、後期は第23号住居跡の3.2mである。

長軸長の数値で分類すると、前期は5m未満の住居跡が6基、5.5～5.80mの住居跡が7基、6.00～6.55mの住居跡が6基、7.51～7.98mの規模の住居跡が2基となり、5.5～6.55mの住居跡が半数以上を占める。中期はすべて6m台の住居跡である。後期は5m未満の住居跡が7基、5.09～5.86mの住居跡が4基、6.08～6.89mの住居跡が13基、7.00～7.54mの住居跡が4基、7.82～8.00mの住居跡が2基となり、6m台の住居跡が半数以上を占める。

**住居跡の形態** ほとんどの住居跡が正方形に近い方形を呈する。第28・34B・50・69・71・73・77・83・85号住居跡は、南壁中央部の出入り口と思われる部分が住居壁外へ突出する。

**住居跡の主軸** 前期の主軸は、N-4°～51°-Wが12基、N-3°～67°-Eが7基、真北のものが2基ある。主軸の集中する方向は、N-20°-W～N-14°-Eで、主軸は北からやや西を向いたものが多い。

後期的主軸は、N-1°～105°-Wが21基、N-1°～61°-Eが7基、真北のものが2基ある。主軸の集中する方向は、N-17°-W～N-6°-Eで、主軸はほぼ北を向いたものが多い。

**竈** 竈は、ほとんどの住居跡が北壁に構築されている。第31B号住居跡は壁の手前に構築された初期竈である。第49号住居跡は東壁の中央よりやや南に寄った場所にあり、すぐ近くには貯蔵穴と出入り口ピットがあるため、古い形態の竈の構築状況を呈する。

竈の構築材には、灰白色や黄白色の粘土が使用されている。竈の構造では、住居構築の際にローム土を土手状に残し袖部とするものが主体的にみられた。

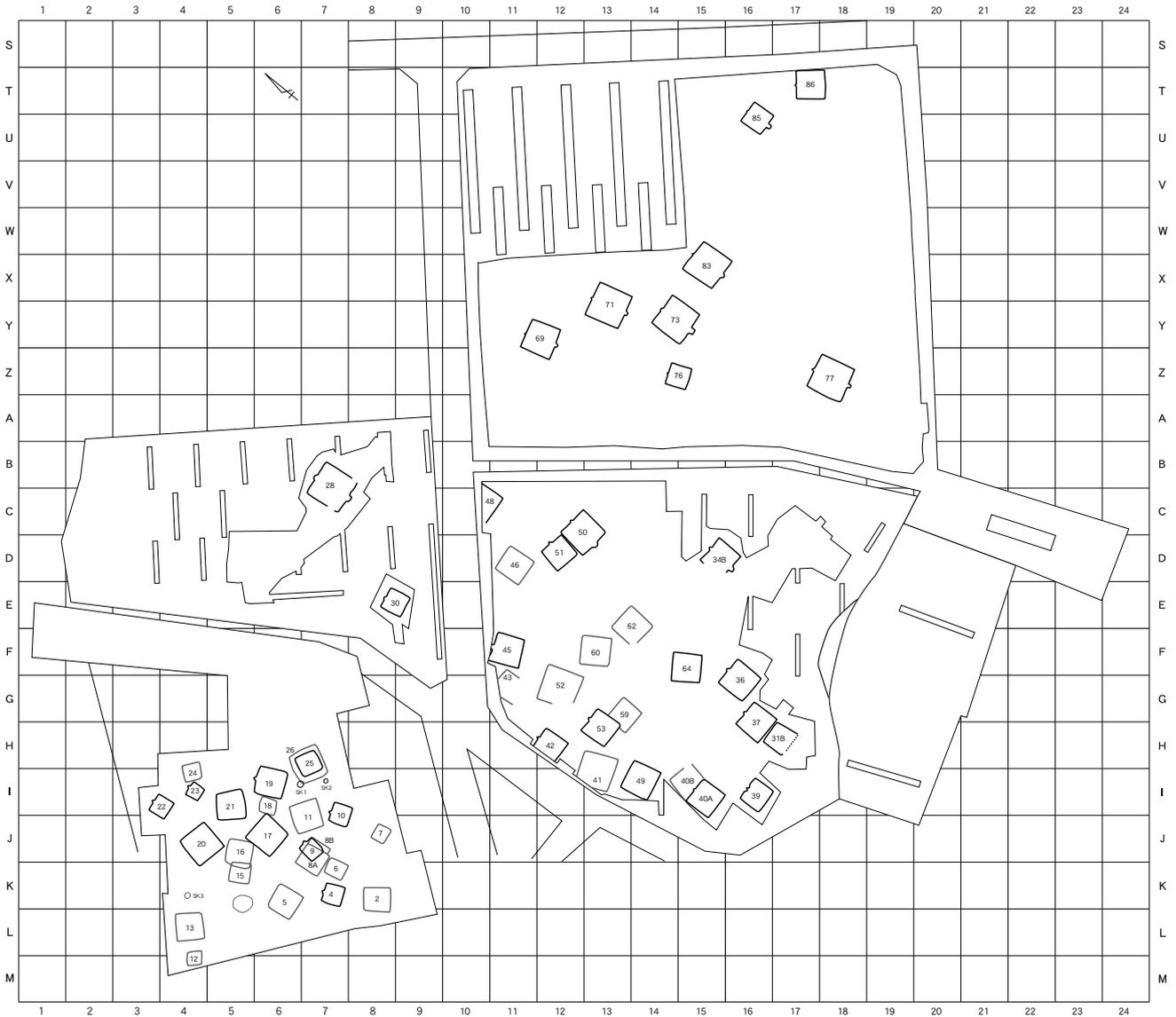
**貯蔵穴** 「貯蔵穴」と思われるピットを有する住居跡は、第4・5・10・11・13・16・17・21・22・24・26・28・34B・36・37・42・48・49・50・51・64・69・71・73・77・83・85・86号住居跡の28基である。

竈のある住居跡の「貯蔵穴」と思われるピットの位置をみると、竈の造られた壁に対面する壁側に掘られたもので壁の中央より左側(第4・51号住居跡)、右側(第22号住居跡)、中央(第36・37・48・64号住居跡)、中央で外側に突出(第28・34B・50・69・71・73・77・83・85号住居跡)、竈の造られた壁側に掘られたもので竈の右側(第10・42号住居跡)、左側(第49・86号住居跡)の6つに分類できる。



大型住居跡(第77号住居跡)

IV 古墳時代の遺構と遺物



第 34 図 鷹ノ巣遺跡古墳時代住居跡分布図(グリッドは1辺10m, 薄線:前期, 濃線:中・後期)



鷹ノ巣遺跡第2・3次調査区

第3表 鷹ノ巣遺跡古墳時代住居跡一覧表

## 前期

住居跡番号	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	主軸	備考
2	K・L-8	5.5	(5.3)	N-67°-E	第1次調査
5	K・L-6	5.7	5.4	N-10°-W	第1次調査
6	J・K-6	3.8	3.7	N-7°-W	第1次調査
7	J-8	3.7	3.2	N-10°-W	第1次調査
8A	J・K-6・7	5.5	5.45	N-3°-E	第1次調査
8B	J-7	-	-	-	第1次調査
11	I・J-6・7	6.2	6.2	N-51°-W	第1次調査
12	L・M-4	2.9	2.9	N-27°-W	第1次調査
13	L-4	5.8	5.65	N-33°-E	第1次調査
15	K-5	4.4 ~ 3.9	4.3	N-22°-W	第1次調査
16	J・K-5	5.5	5.5	N-15°-W	第1次調査
18	I-6	3.7	3.65	N-14°-W	第1次調査
24	H・I-4	4.05	3.9	N-46°-W	第1次調査
26	H・I-6・7	6.55	6.5	N-31°-E	第1次調査
40B	H・I-14・15	6.00	5.76	N-14°-E	第2次調査
41	H・I-12・13	7.51	7.44	N-20°-W	第2次調査
43	F・G-11	5.80	(5.70以上)	N	第2次調査
46	D・E-11	6.30	6.15	N-4°-W	第2次調査
52	F・G-12	7.98	7.73	N-20°-W	第2次調査
59	G・H-13・14	5.72	5.22	N	第2次調査
60	F-12・13	6.25	6.19	N-57°-E	第2次調査
62	E・F-13・14	6.37	6.37	N-4°-E	第2次調査

## 中期

住居跡番号	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	主軸	備考
17	J-5・6	6.6 ~ 6.3	6.3	N-7°-E	第1次調査
20	J・K-4・5	6.55	6.5	N-12°-E	第1次調査
21	I・J-5	6.85	6.1	N-23°-W	第1次調査
25	I・J-5	6.5	6.45	N-31°-E	第1次調査

## 後期

住居跡番号	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	主軸	備考
4	K-7	4.2	4.0	N-13°-W	第1次調査
9	J-6・7	4.1	3.8	N-12°-E	第1次調査
10	I・J-7・8	4.7	4.2	N-14°-W	第1次調査
19	H・I-6	6.15	5.95	N-15°-W	第1次調査
22	I・J-3・4	4.05	3.9	N-1°-W	第1次調査
23	I-4	3.2	3.1	N	第1次調査
28	B・C-7・8	8.00	7.97	N-8°-W	第3次調査
30	E-8・9	4.83	4.74	N-10°-W	第3次調査
31B	H-16・17	(6.89)	5.67	N-9°-W	第2次調査
34B	D-15・16	6.30	6.15	N-1°-E	第2次調査
36	F・G-15・16	6.64	6.30	N	第2次調査
37	G・H-16・17	6.43 ~ 6.26	6.22	N-2°-E	第2次調査
39	I-16・17	5.45 ~ 5.25	(5.00)	N-1°-W	第2次調査
40A	I-15	6.08	5.99	N-4°-W	第2次調査
42	H-11・12	5.86	(4.90以上)	N-3°-W	第2次調査
45	F-11	6.30	6.16	N-24°-W	第2次調査
48	B・C-10・11	(6.45)	(5.34)	N-4°-W	第2次調査
49	H・I-13・14	6.50	6.33	N-105°-W	第2次調査
50	C・D-12・13	7.00	6.90	N-6°-E	第2次調査
51	D-12	5.65	5.56	N-10°-E	第2次調査
53	G・H-12・13	6.20	6.17	N-1°-W	第2次調査
64	F・G-14・15	6.20	6.08	N-61°-E	第2次調査
69	Y・Z-11・12	6.54	6.50	N-17°-W	第4次調査
71	X・Y-13	7.54	7.52	N-16°-W	第4次調査
73	X・Y-14・15	7.52	7.38	N-1°-E	第4次調査
76	Z-14・15	4.57	4.55	N-20°-W	第4次調査
77	Z・A-17・18	7.82	7.72	N-8°-W	第4次調査
83	W・X-15・16	7.50	7.22	N-8°-W	第4次調査
85	T・U-16	5.09	5.05	N-3°-W	第4次調査
86	T-17・18	6.09	6.02	N-39°-W	第4次調査

## 2 住居跡の調査

### 第 69 号住居跡

**遺 構** Y・Z-11・12区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けているが、床面までは掘り込まれていない。平面形は、方形を呈するが、南壁が約44cm張り出す。竪穴部の規模は6.50×6.54m。壁高は東壁と西壁35cm、南壁52cm、北壁31cm。主軸方向はN-17°-Wを指す。壁周溝は確認できない。床面は、東壁周辺と西壁南側周辺、ピット5周辺以外に硬化面がみられる。

竪穴部覆土は、壁側にローム土を主体とした褐色土、中央部に黒色土が堆積する。

竈は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部は比較的良好に残っている。燃焼部には、土製の支脚が残存していた。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竪穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に灰白色粘土を貼って袖部としている。火床面は竈断面の第4・5層部分で、焼土が約10cmの厚さで堆積していた。煙道部は一部が残存しており、直径は約10cmを測る。

ピットは6基検出された。ピット1～4は支柱穴、ピット5は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット1と2が76cm、ピット3が82cm、ピット4が59cm、ピット5が35cm、ピット6が6cmである。支柱穴は、床面の確認状況から張床する前に柱を立てており、住居廃絶時にピットから引き抜いていない状況が確認できた。

**遺物の出土状況** 遺物は破片化したものが多い。完形品で出土したものは第38図6の甕形土器のみである。平面分布では竈周辺とピット5周辺から出土した。竈周辺で出土した土器片は、接合関係を持つものが多い。垂直分布では、床面直上もしくは覆土下層に位置する。18の石製品は床面直上から出土している。

**遺 物** 甕形土器は胴部が球胴状ではなく、胴長の形を呈する。9は大型の高杯形土器の杯部で、内外面とも赤彩されている。杯形土器は、口縁部が体部との境に稜をもって長く直立するものや短く直立するもの、外反するものがみられる。12・13の体部内面の調整には、放射状のヘラミガキがみられる。また、10・11・14・15に

は赤彩、12には黒色処理がされている。16はやや大型の杯形土器で、内面が赤彩されている。18は石炭に孔がみられるものである。19には両面に敲打痕がみられ、20には研磨痕がみられる。

甕形土器6内の土を水洗したが、検出物はなかった。

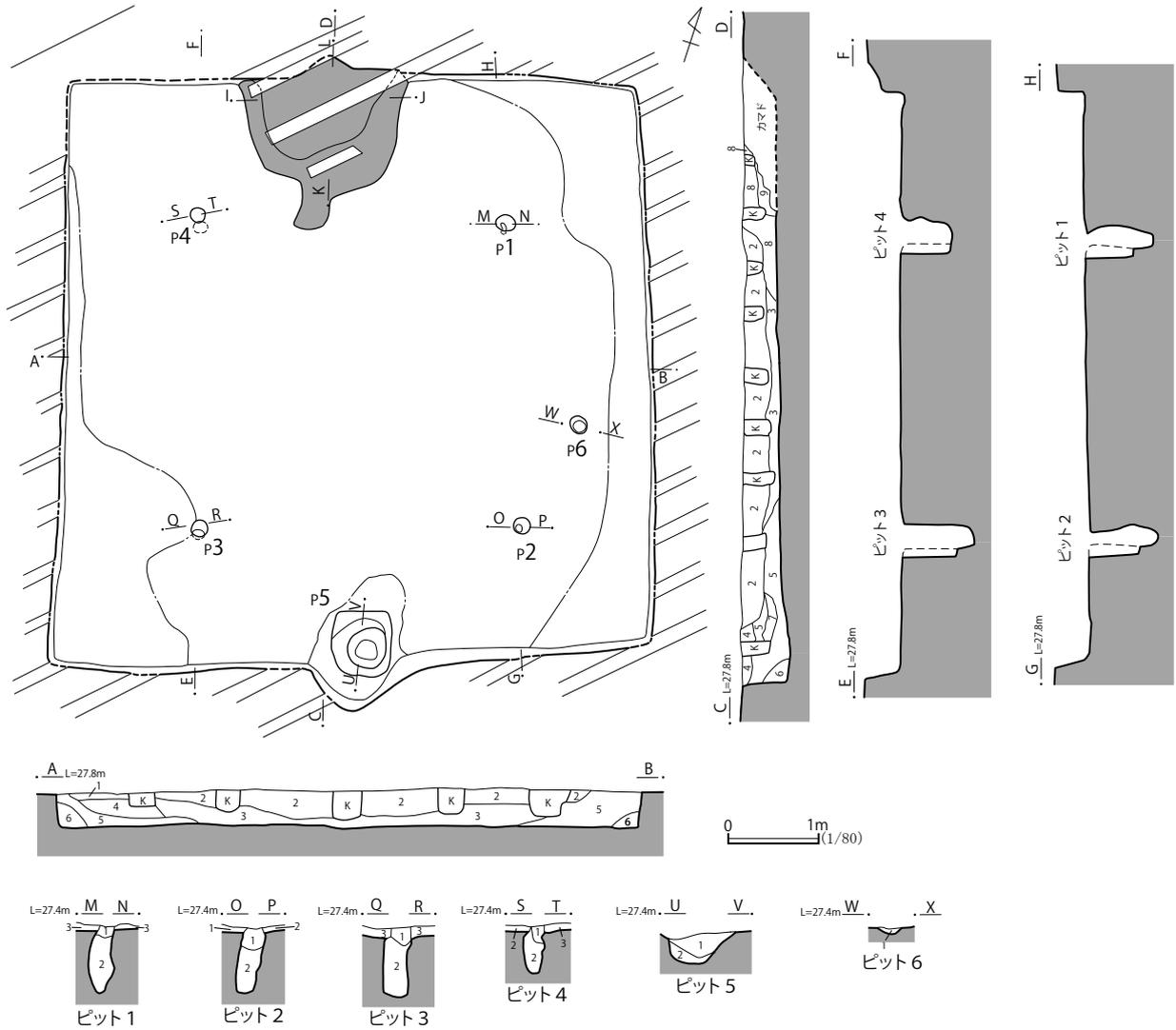
### 第 71 号住居跡

**遺 構** X・Y-13区に位置する。北東隅は、第1号溝状遺構に掘り込まれており、ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けているが、いずれも床面までは掘り込まれていない。平面形は、方形を呈するが、南壁が約50cm張り出す。竪穴部の規模は7.52×7.54m。壁高は東壁39cm、西壁42cm、南壁47cm、北壁35cm。主軸方向はN-16°-Wを指す。壁周溝は確認できないが、東壁及び西壁では竪穴部中央に向かって間仕切り状の溝が3条存在する。床面からの深さは1～4cmを測る。床面は、竈前から南壁中央部にかけて帯状に硬化している。

炭化材は、131点を図化し、サンプルとして一部分のみ取り上げを行った。炭化材の検出状況は、住居跡中央に「コ」の字状に大型の部材があり、そこから壁際に向かって放射状に部材がみられる。この検出状況は、上屋構造における配置を表すものと思われる。炭化材は、形状の観察から丸材が多い。材の上にはカヤ状の屋根材が被った状態で出土した例もみられた。炭化材で形状の残りのよいもの10点を樹種同定した結果、コナラ属コナラ垂属クヌギ節(4点)とアカメガシワ(6点)と同定された[パリノ報告]。ちなみに、クヌギ節と同定された部材は、「コ」の字状の大型の部材3点と北東隅から中央部に延びる放射状の部材1点である。焼土は、炭化材の周囲にみられる。

竪穴部覆土は、壁側にローム土を主体とした褐色土、中央部に直径3～5cmほどのロームブロックを含む黒褐色土が堆積する。床面には、焼土や炭化物がみられる。覆土の観察と炭化材との関係から、当住居跡は燃焼中もしくは鎮火後に人為的に埋め戻されたと考えられる。

竈は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は一部が残存し、両袖部と燃焼部が比較的良好に残っている。燃焼部からは、土製の支脚と粘土製

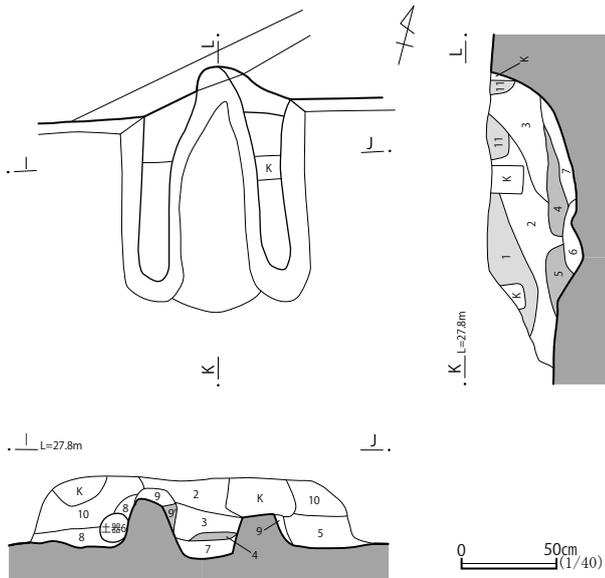


- 第69号住居跡堆積覆土**
- 第1層 表土(縮まり無し)
  - 第2層 黒色土層(ローム粒少量含む 縮まり有り)
  - 第3層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック少量含む 縮まりやや有り)
  - 第4層 褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック少量含む 縮まりやや有り)
  - 第5層 褐色土層(ローム土主体 ローム粒多量含む 縮まりやや有り)
  - 第6層 黒褐色土層(径1~3cmロームブロック・ローム粒多量含む 縮まりやや有り)
  - 第7層 褐色土層(径1~3cmロームブロック・ローム粒多量含む 縮まりやや有り)

- 第8層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 炭化粒・粘土粒少量含む 縮まり有り)
  - 第9層 褐色土層(ローム粒・粘土粒多量含む 縮まり有り)
- 第69号住居跡ピット1~4・6堆積覆土**
- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 縮まり無し)
  - 第2層 明褐色土層(ローム粒主体 縮まり無し)
  - 第3層 明褐色土層(張床部分 縮まり強く有り)
- 第69号住居跡ピット5堆積覆土**
- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 縮まりやや有り)
  - 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 縮まり有り)



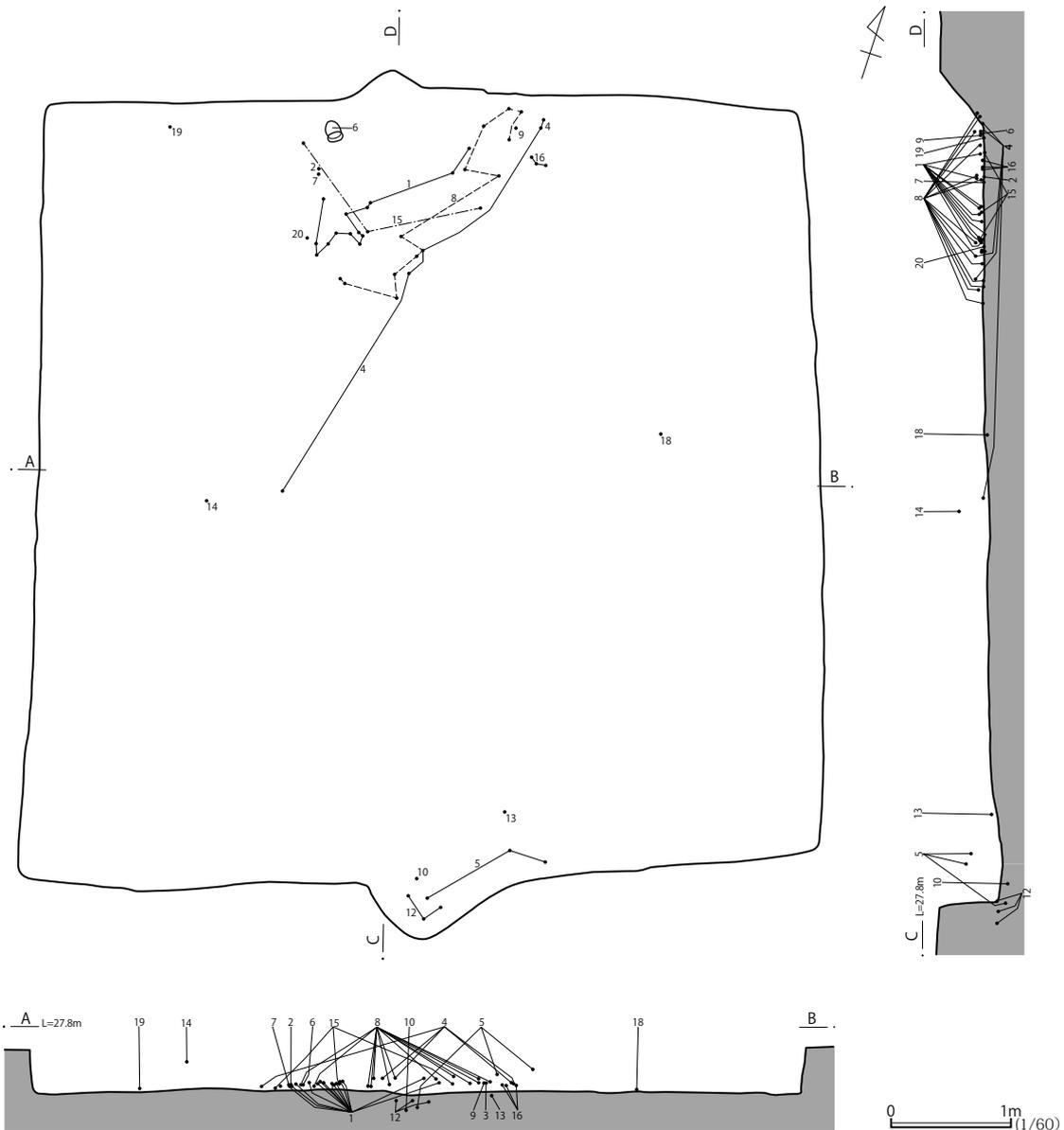
第35図 第69号住居跡(淡網:粘土)



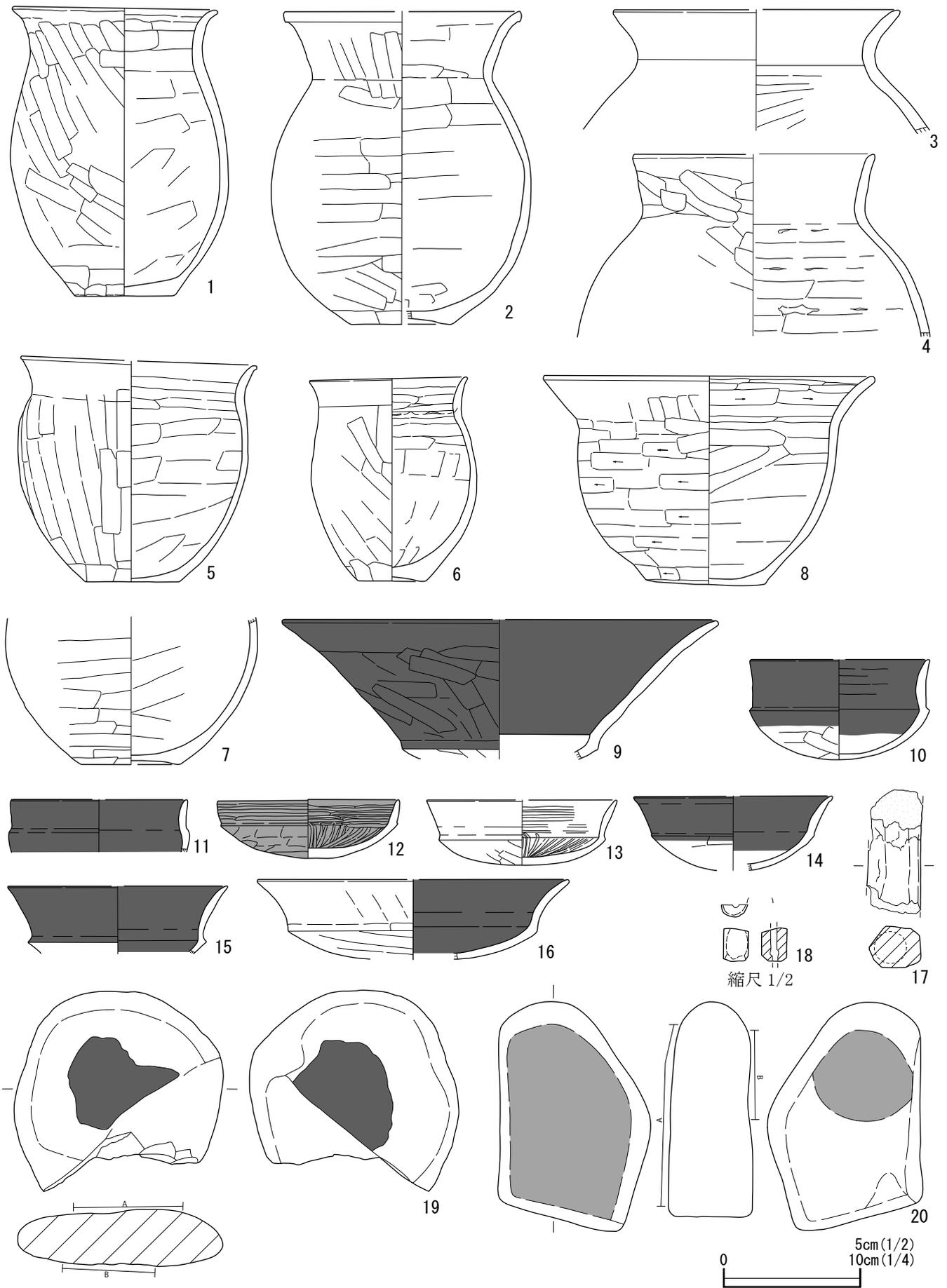
第69号住居跡電堆積覆土

- 第1層 暗褐色土層(白色粘土多量含む 焼土粒微量含む 締まりやや有り)
- 第2層 暗褐色土層(焼土粒多量含む 白色粘土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第3層 灰褐色土層(白色粘土・焼土粒・灰多量含む 炭化粒微量含む 径3cm礫若干含む 締まりやや有り)
- 第4層 赤褐色土層(火床面 焼土粒多量含む 白色粘土粒少量含む 径1cm焼土ブロック微量含む 締まりやや無し)
- 第5層 赤褐色土層(火床面 焼土粒多量含む 径1cm焼土ブロック微量含む 締まりやや無し)
- 第6層 黒色土層(掘形 焼土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第7層 黒褐色土層(掘形 焼土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第8層 暗褐色土層(白色粘土少量含む 炭化粒微量含む 締まりやや有り)
- 第9層 灰白色粘土層(袖部に張った粘土 締まり有り)
- 第9'層 赤色粘土層(被熱した第9層の粘土 締まり有り)
- 第10層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第11層 灰白色粘土層(天井部粘土 締まり有り)

第36図 第69号住居跡電

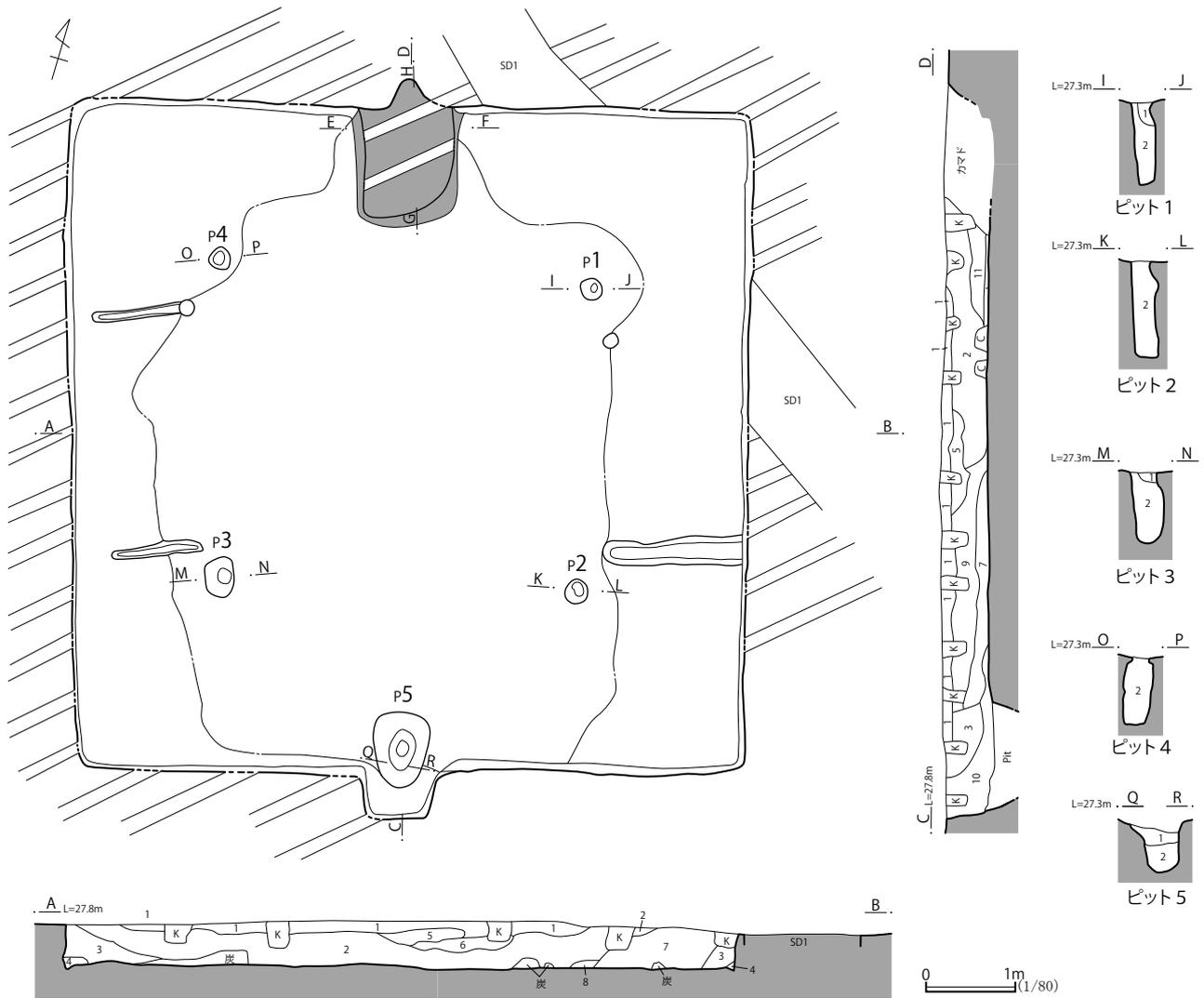


第37図 第69号住居跡遺物出土状況



第 38 図 第 69 号住居跡出土遺物(土器:濃網・赤彩, 淡網・黒色処理 / 石器:濃網・敲打による凹み, 淡網・砥面)

IV 古墳時代の遺構と遺物



第71号住居跡堆積覆土

- 第1層 黒色土層(ローム粒微量含む 締まり有り)
- 第2層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 径3~5cmロームブロック・炭化粒少量含む 締まり有り)
- 第3層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック・炭化粒少量含む 締まり有り)
- 第4層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第5層 黒色土とロームブロックの混合層(締まり有り)
- 第6層 黒色土層(ローム粒少量含む 径1cmロームブロック微量含む 締まり有り)
- 第7層 褐色土層(ローム土主体 締まり有り)
- 第8層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第9層 褐色土層(ローム粒多量含む 炭化粒少量含む 炭化粒少量含む 締まり有り)

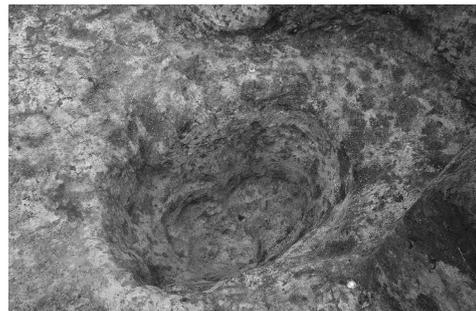
- 第10層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック・焼土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第11層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック・炭化粒・白褐色土粒・焼土粒少量含む 締まり有り)
- 第12層 黒色土層(炭化粒多量含む ローム粒少量含む 締まりやや有り)

第71号住居跡ピット1~4堆積覆土

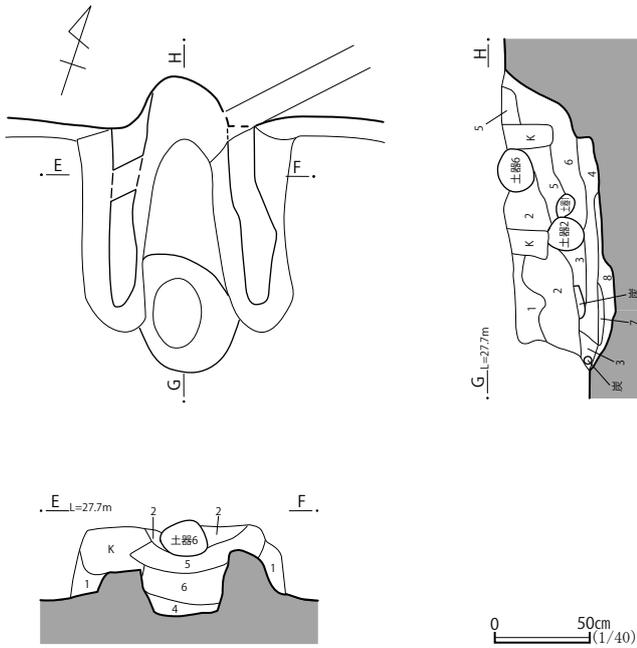
- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒微量含む 締まりやや有り)
- 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まり無し)

第71号住居跡ピット5堆積覆土

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第2層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒少量含む 締まりやや有り)



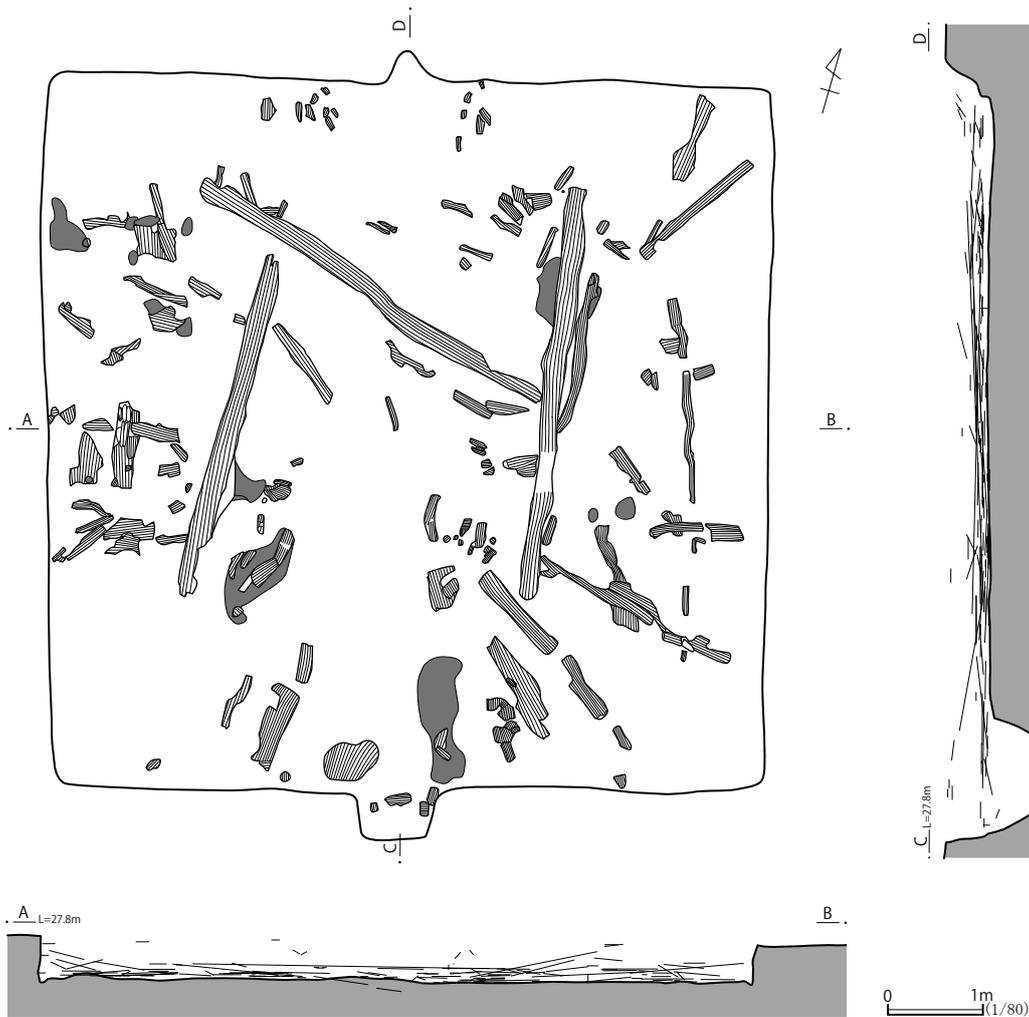
第39図 第71号住居跡(淡網:粘土)



第71号住居跡堆積覆土

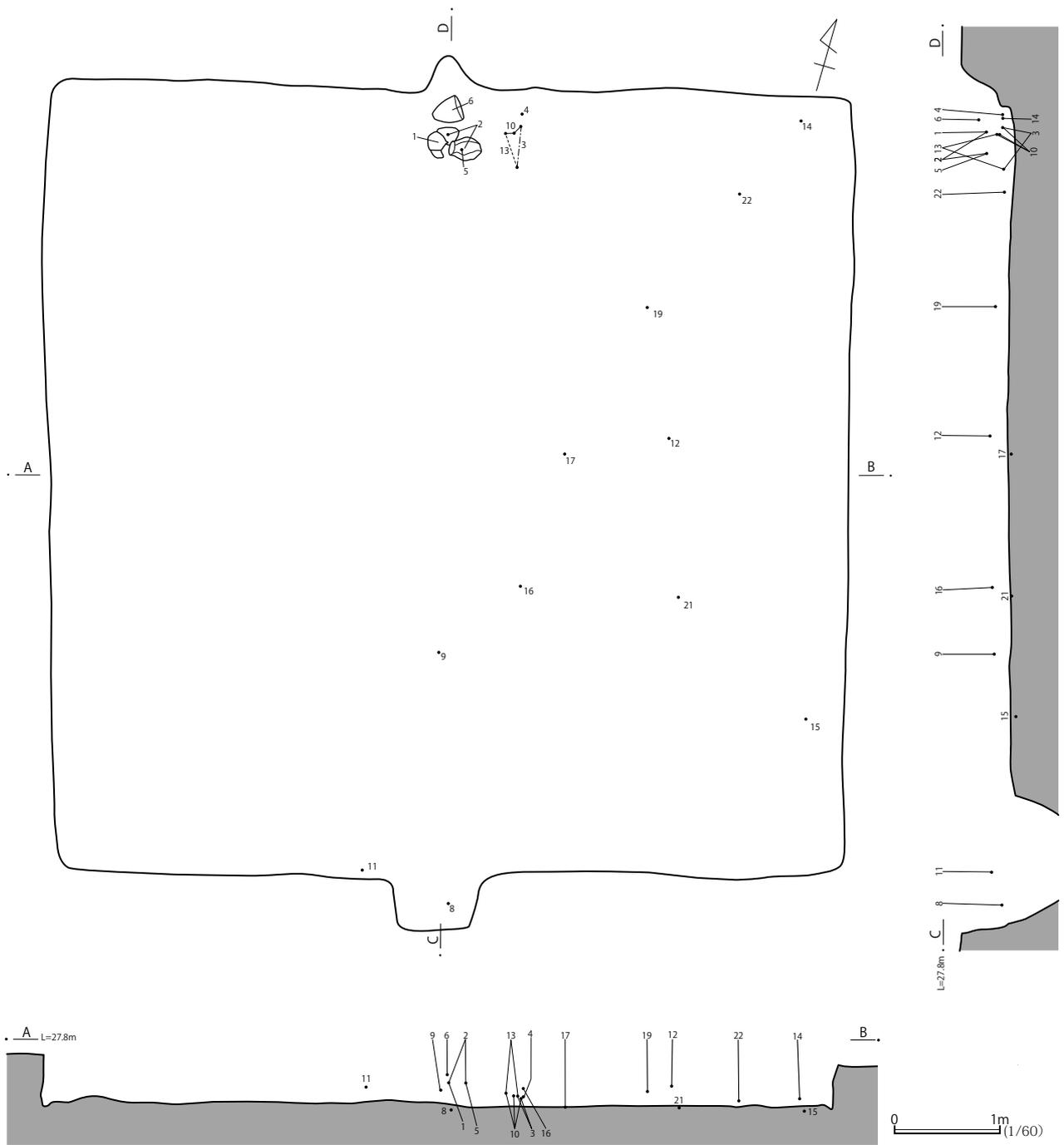
- 第1層 暗褐色土層(ローム粒・白色粘土ブロック多量含む 締まりやや有り)
- 第2層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒・粘土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第3層 暗褐色土層(焼土粒多量含む 炭化材含む 締まりやや有り)
- 第4層 暗褐色土層(焼土粒多量含む 締まりやや有り)
- 第5層 白色粘土層(締まりやや有り)
- 第6層 暗褐色土層(ローム粒・焼土粒・粘土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第7層 橙色土層(火床面 締まりやや無し)
- 第8層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや無し)

第40図 第71号住居跡竈

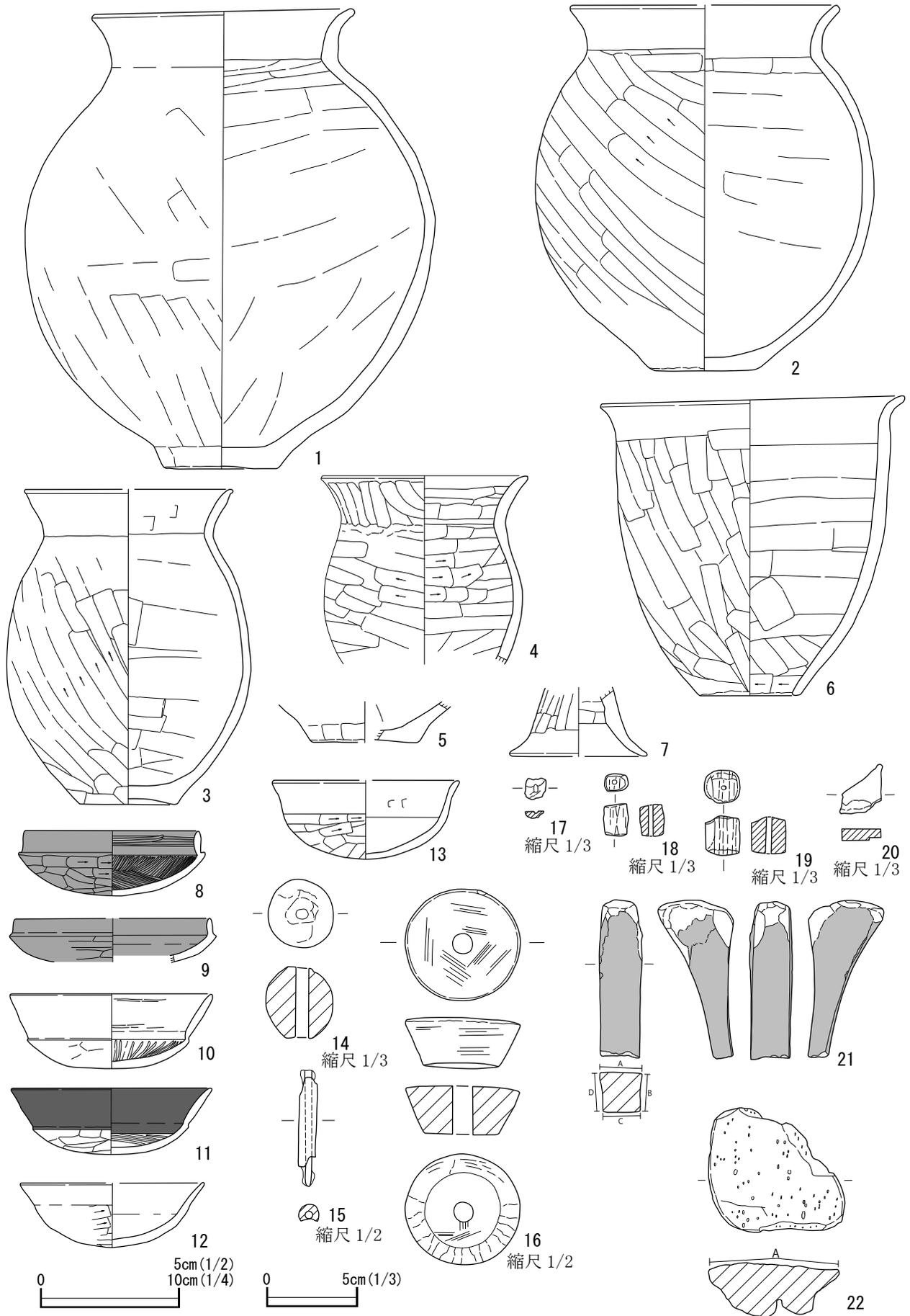


第41図 第71号住居跡炭化材出土状況(濃網:焼土範囲)

IV 古墳時代の遺構と遺物



第 42 図 第 71 号住居跡遺物出土状況



第 43 図 第 71 号住居跡出土遺物(土器:濃網・赤彩, 淡網・黒色処理 / 石器:淡網・砥面)

の支脚が使用時の位置に残存していた。土製の支脚の下部は白色粘土で固定されている。2つの支脚の上には、甕形土器がそれぞれ置かれており、さらに天井部の上からは甕形土器1点が出土した。土製の支脚は、正位の状態の甕形土器を貫いていた。支脚や甕形土器の出土状態から、当竈は甕形土器を2つ掛けた竈と思われる。袖部は粘土等を芯として構築したのではなく、竪穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に白色粘土を貼って袖部としている。火床面は竈断面の第7層部分で、焼土が約4cmの厚さで堆積していた。

ピットは5基検出された。ピット1～4は主柱穴、ピット5は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット1が100cm、ピット2が110cm、ピット3が80cm、ピット4が76cm、ピット5が60cmである。主柱穴は、床面の確認状況から張床する前に柱を立てており、住居廃絶時にピットから引き抜いていない状況が確認できた。

**遺物の出土状況** 遺物は少ない。平面分布では土器が竈内とその周辺、及び南壁の出入り口で出土し、鉄製品や石製品は竪穴部中央から東側で出土した。垂直分布では、第43図3・4・10・14・15・17・21が床面直上、1・2・6が竈内で、図化した杯形土器は覆土中～下層で出土したものが多く、1と2の甕形土器と6の甕形土器は竈で使用されたもので、1は正位、2・6は倒位の状態出土した。3の甕形土器は、床面直上で口縁部から胴部中位は倒位、胴部下位から底部は逆位の状態出土した。4の甕形土器は床面直上で逆位の状態出土し、底部は攪乱により欠失している。杯形土器は8が正位、11が倒位、10・13が逆位で出土した。10と13は、10の上に13が重なる状態で出土した。16の石製紡錘車は覆土中層で倒位の状態出土していることから、軸が装着された状態で置かれたものと推測される。

**遺物** 甕形土器の胴部は、第43図1の大型品が球胴状で、2～4の中・小型品が胴長の形を呈する。6の甕形土器はほぼ完形品で、内面にミガキ調整はみられない。杯形土器は、口縁部が体部との境に稜をもって短く直立するものと外反するものがみられる。8・10の体部内面の調整には、放射状のヘラミガキがみられる。また、8・9には黒色処理、11には赤彩が施されている。15は鉄鍬の茎部か。16は滑石製の紡錘車である。17は

琥珀の玉、18・19は石炭の玉と思われる。21の砥石には4面に研磨痕がみられる。22も砥石と思われる。

甕形土器1・2・4・6内の土を水洗し、1・2より炭化種子が検出されたが、同定の結果は混入の可能性が指摘されている[パリノ報告]。

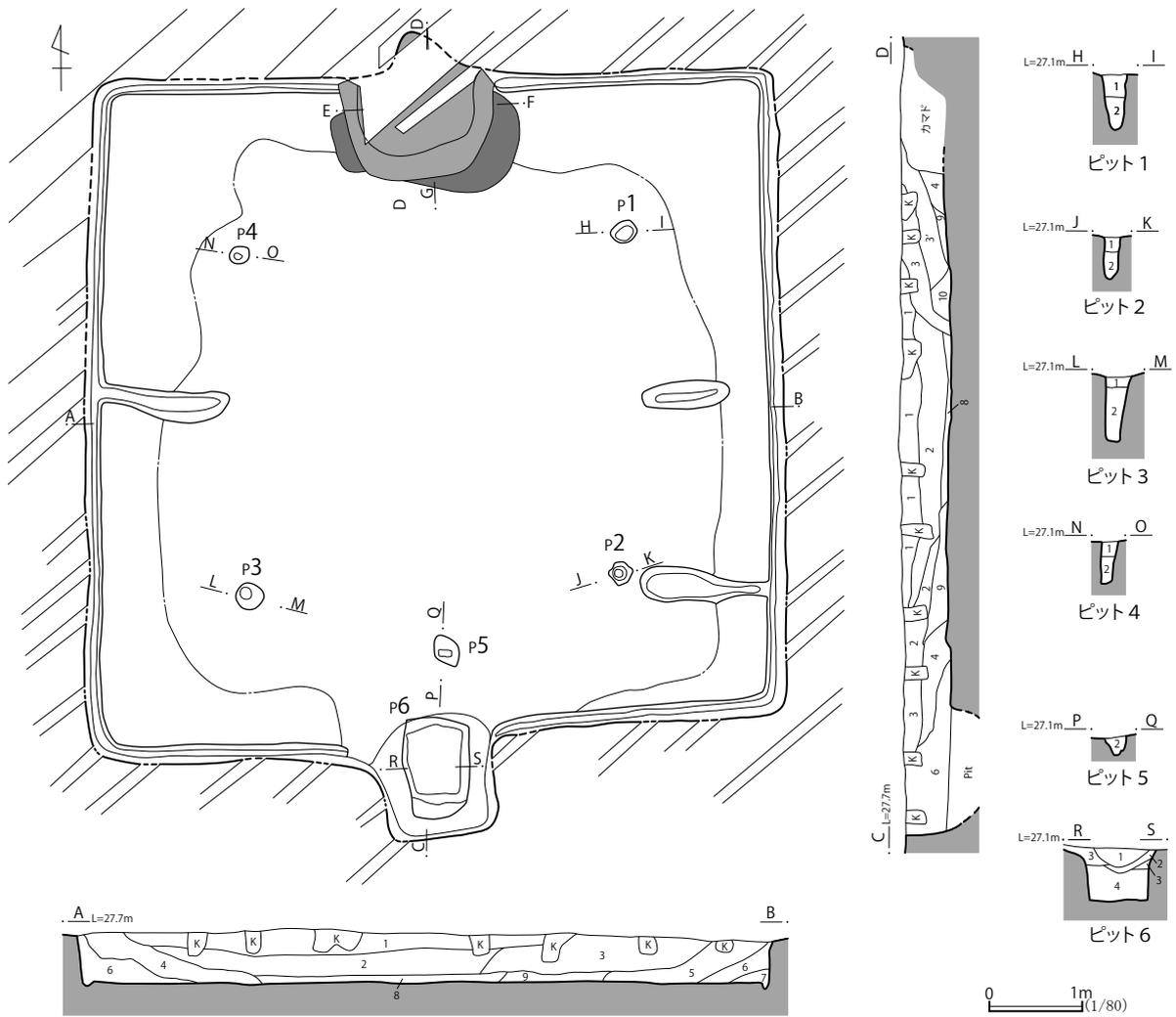
### 第73号住居跡

**遺構** X・Y-14・15区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けているが、床面までは掘り込まれていない。平面形は、方形を呈するが、南壁が約110cm張り出す。竪穴部の規模は7.38×7.52m。壁高は東壁53cm、西壁56cm、南壁52cm、北壁65cm。主軸方向はN-1°-Eを指す。壁周溝は、竈と南壁の張り出し部以外にみられる。幅約10cm、床面からの深さ2～7cmを測る。また、東壁及び西壁では竪穴部中央に向かって間仕切り状の溝が3条存在する。床面からの深さは約4cmを測る。床面は、壁周辺以外は硬化している。

炭化材は、68点を図化し、サンプルとして一部分のみ取り上げを行った。炭化材の検出状況は、住居跡中央から東側に部材がみられる。この検出状況からは、上屋構造における配置は判らない。炭化材は、形状の観察から丸材が多い。炭化材で大型のもの、もしくは形状の残りのよいもの3点を樹種同定した結果、コナラ属アカガシ垂属と同定された[パリノ報告]。炭化材の周囲に焼土はあまりみられない。

竪穴部覆土は、壁側にローム土を主体とした褐色土、中央部に直径1～5cmほどのロームブロックを含む黒褐色土が堆積し、これらは人為的に埋め戻されたものと考えられる。床面には、焼土や炭化物がみられる。覆土の観察と炭化材との関係から、当住居跡は燃焼中もしくは鎮火後に人為的に埋め戻されたと考えられる。西壁の南側には、竪穴部外側から竪穴部中央に向かってスロープ状に表面が硬化した覆土が確認された。このスロープがある竪穴部西側では炭化材が出土していないことから、部材などの運び出しなどに利用されたスロープとも考えられる(第46図)。

竈は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部と西側の袖部が攪乱を受けているが、東側の袖部と燃焼部は比較的よく残っている。燃焼部から土製の支脚が出土したが、使用時の位置ではない。袖部



**第73号住居跡堆積覆土**

- 第1層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第2層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 径1~5cmロームブロック微量含む 締まりやや有り)
- 第3層 暗褐色土層(径1~5cmロームブロック・ローム粒・ハードロームブロック多量含む 締まり有り)
- 第3'層 暗褐色土層(第3層に焼土を多量に含む土層 締まり有り)
- 第4層 褐色土層(径1~5cmロームブロック・ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第5層 明褐色土層(ローム土主体 締まりやや有り)
- 第6層 褐色土層(ローム土主体 締まりやや有り)
- 第7層 褐色土層(ローム粒多量含む 第6層よりやや暗い色調 締まりやや有り)

- 第8層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 炭化粒微量含む 締まり強く有り)
- 第9層 暗褐色土層(ローム粒・炭化粒多量含む 径1~3cmロームブロック少量含む 締まり有り)
- 第10層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)

**第73号住居跡ピット1~5堆積覆土**

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まり無し 粘性やや有り)

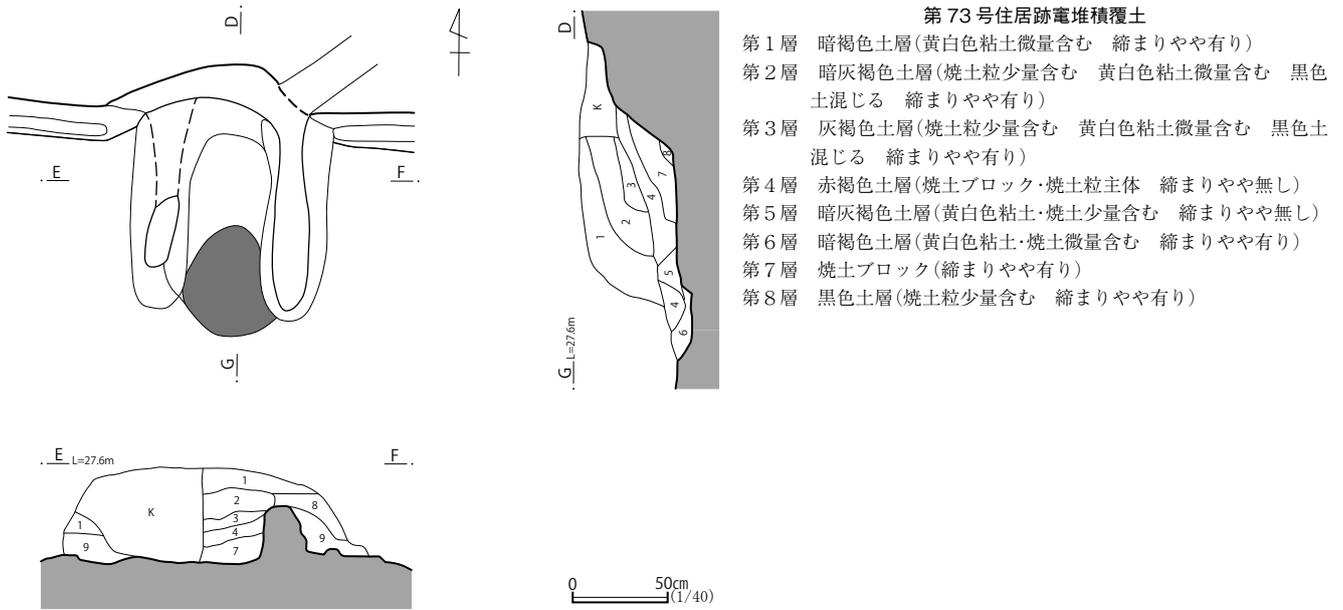
**第73号住居跡ピット6堆積覆土**

- 第1層 褐色土層(径1~3cmロームブロック多量含む 締まり有り)
- 第2層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第3層 黒色土層(ローム粒少量含む 締まり無し)
- 第4層 褐色土層(ローム土主体 締まり有り)

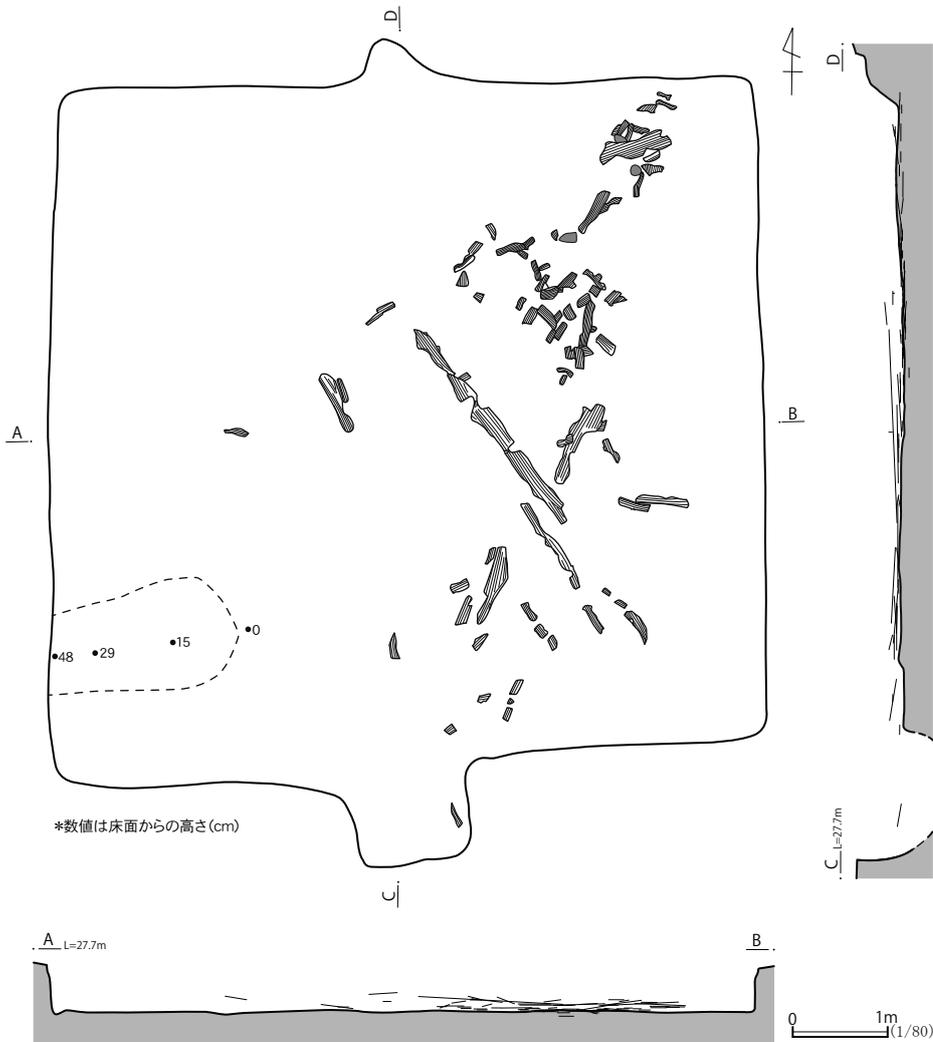


第44図 第73号住居跡(濃網:焼土・淡網:粘土)

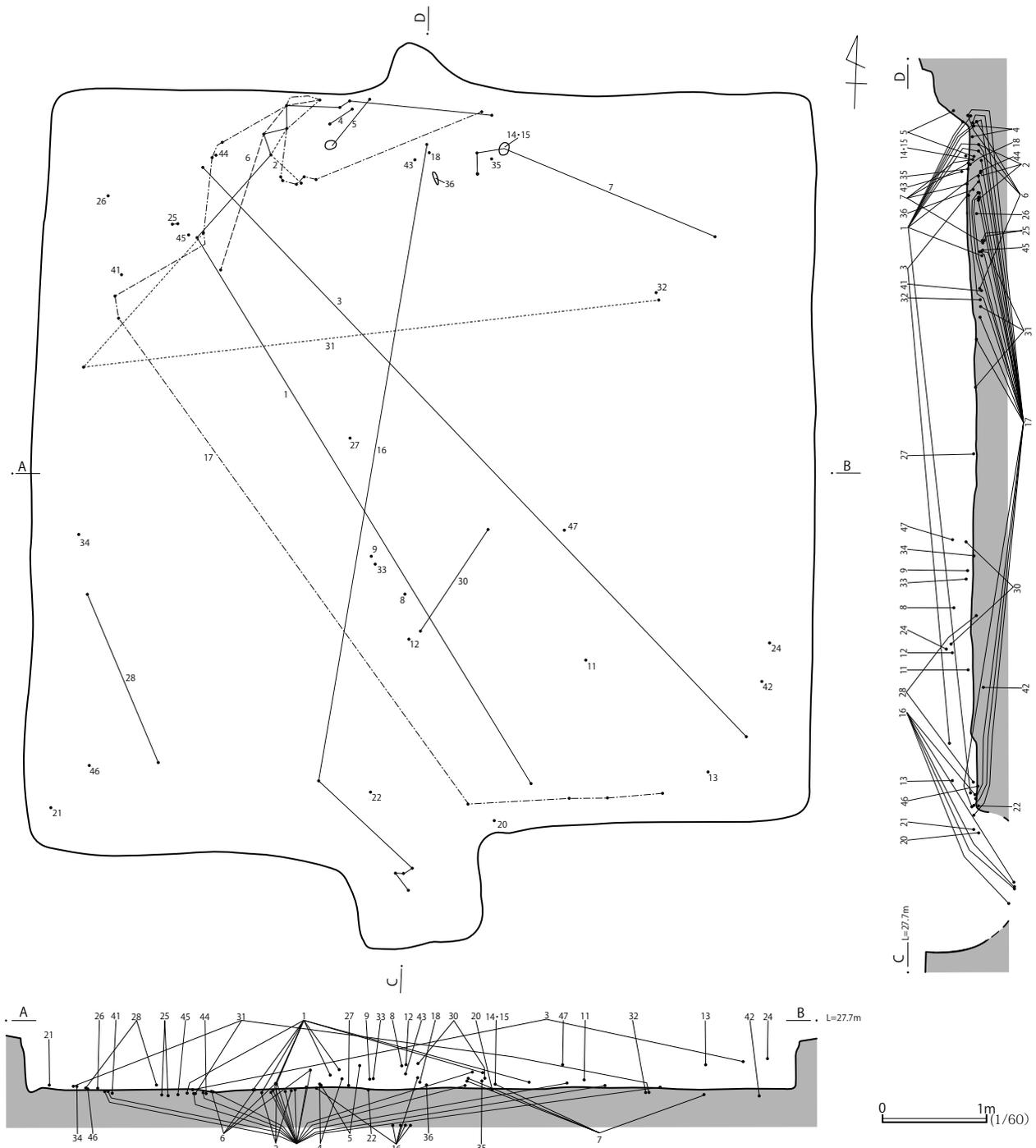
IV 古墳時代の遺構と遺物



第45図 第73号住居跡竈(濃網:焼土範囲)



第46図 第73号住居跡炭化材出土状況



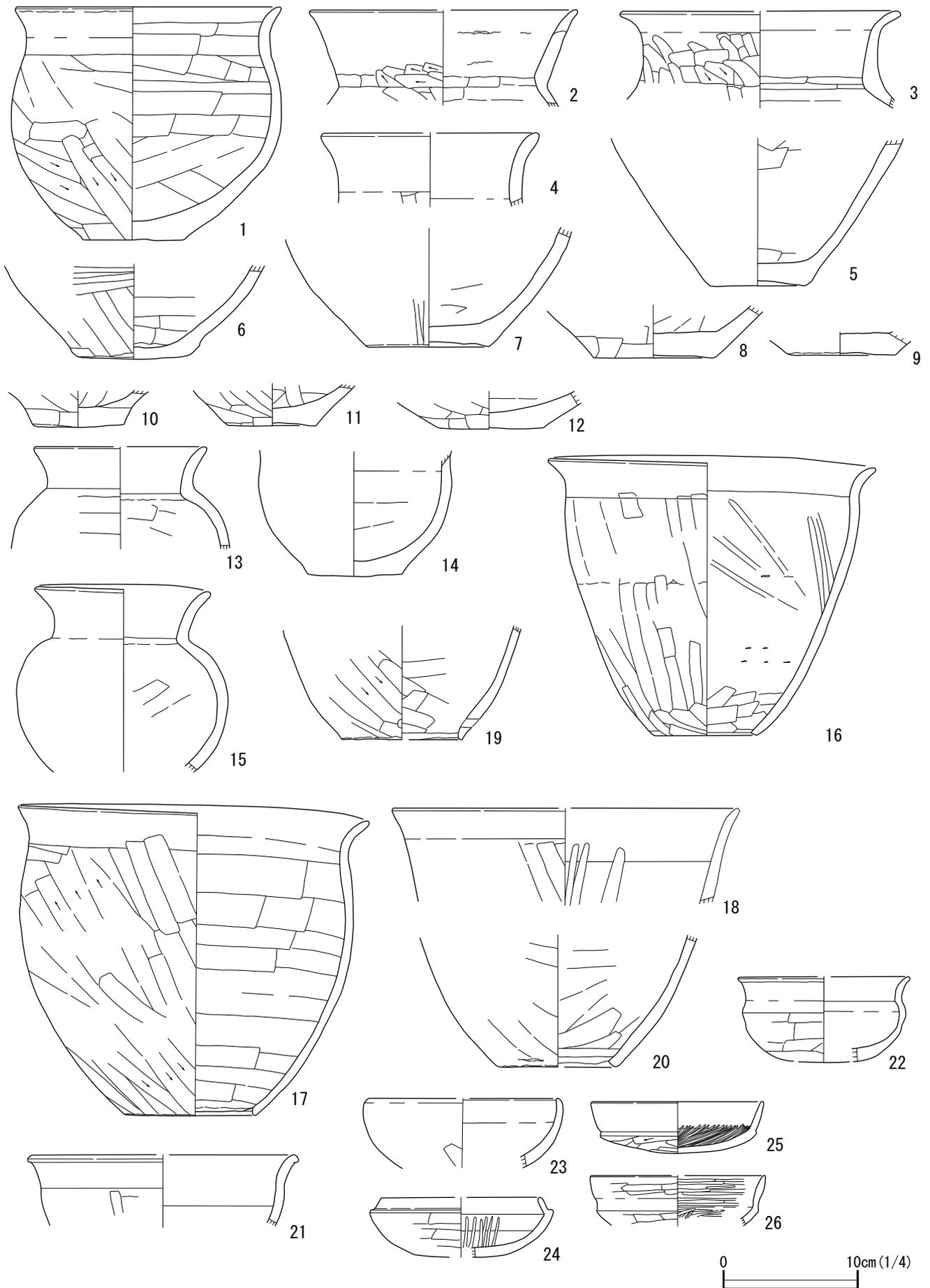
第 47 図 第 73 号住居跡遺物出土状況

は粘土等を芯として構築したものではなく、竪穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に黄白色粘土を貼って袖部としている。袖部の燃焼部側は被熱し赤化している。火床面は竈断面の第 4 層部分で、焼土が約 10 cm の厚さで堆積していた。

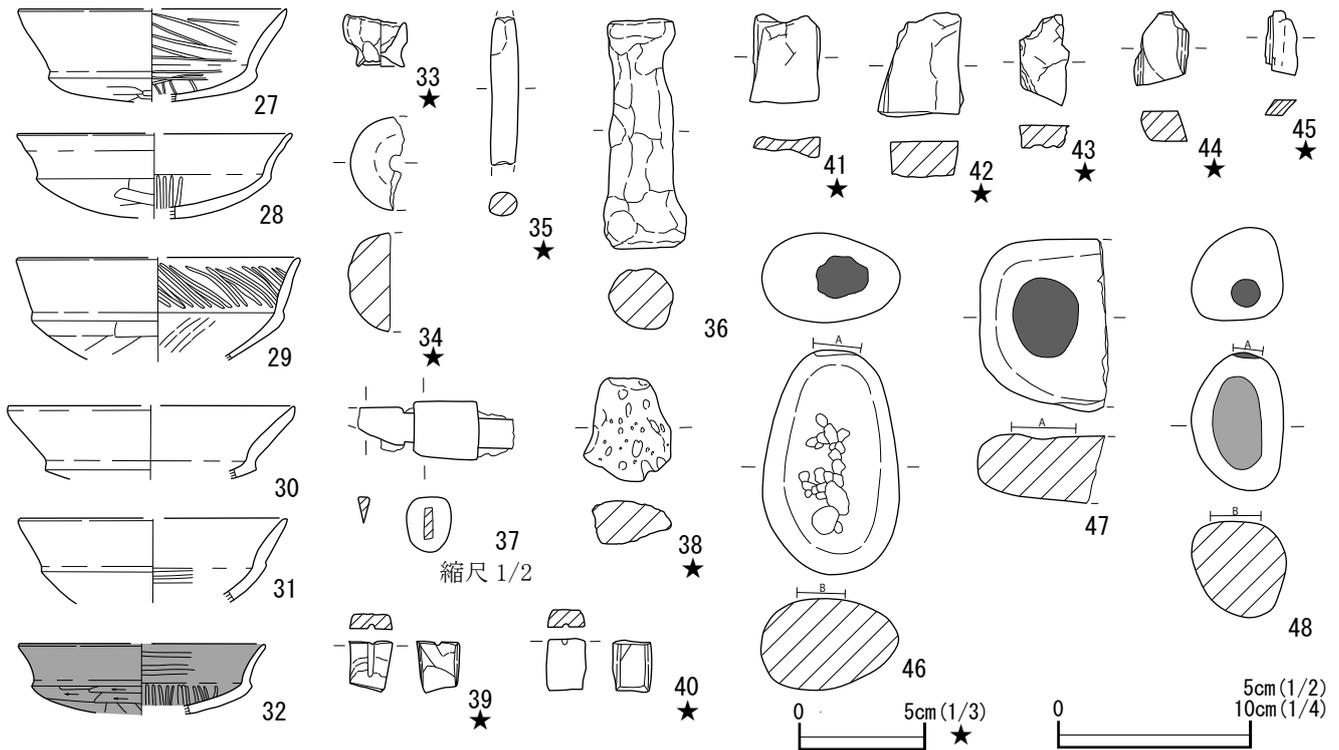
ピットは 6 基検出された。ピット 1～4 は支柱穴、ピット 5 は出入り口施設に伴うもの、ピット 6 は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット 1 が 61 cm、ピット 2 が 46 cm、ピット 3 が 72 cm、ピット 4 が 46 cm、ピット

5 が 14 cm、ピット 6 が 56 cm である。支柱穴は、床面の確認状況から張床する前に柱を立てており、住居廃絶時にピットから引き抜いていない状況が確認できた。

**遺物の出土状況** 遺物は破片化したものが多く、土器で完形品の状態で出土したものはない。平面分布では、竪穴部全体から出土しているが、特に竈とピット 6 周辺から多くみられる。第 48 図 1 や 3、17 は、広範囲で接合関係がみられる。垂直分布では、覆土上層から中層のものと同様に床面直上もしくは覆土下層に位置するものが



第 48 図 第 73 号住居跡出土遺物 1



第49図 第73号住居跡出土遺物2(土器:淡網・黒色処理/石器:濃網・敲打による凹み, 淡網・砥面)

あり、1や3のように覆土上層と床面直上のものとの接合もみられる。当住居跡は覆土が人為的に埋め戻されたと考えられるため、遺物もその際に遺棄されたものと思われる。16の甑形土器はピット6内から出土した。第49図35と36の支脚、43の石製品は竈内から出土した。石製品の41・42・44・45は床面直上から出土した。

**遺物** 遺物に完形品は少なく、破損品が多い。甑形土器は、底部片から4個体存在し、19にはブリッジ用の孔が2ヶ所みられる。杯形土器は、口縁部が内湾するもの、体部との境に稜をもって短く内湾するものと外反するものがみられる。32には黒色処理が施されている。37は刀子の関部周辺。39・40は石炭製の玉と思われる。41～45は石炭片で、この他に図化していないものが約90g出土している。

### 第76号住居跡

**遺構** Z-14・15区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けており、その一部は床面まで掘り込んでいる。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は、4.57×4.55m。壁高は東壁38cm、西壁32cm、南壁30cm、北壁37cm。主軸方向はN-20°-Wを指す。壁周溝は確認できない。床面は、竈前から南壁中央部にかけて帯

状に硬化している。ピット5の周囲には、床面から約2cmの土手状の高まりがある。

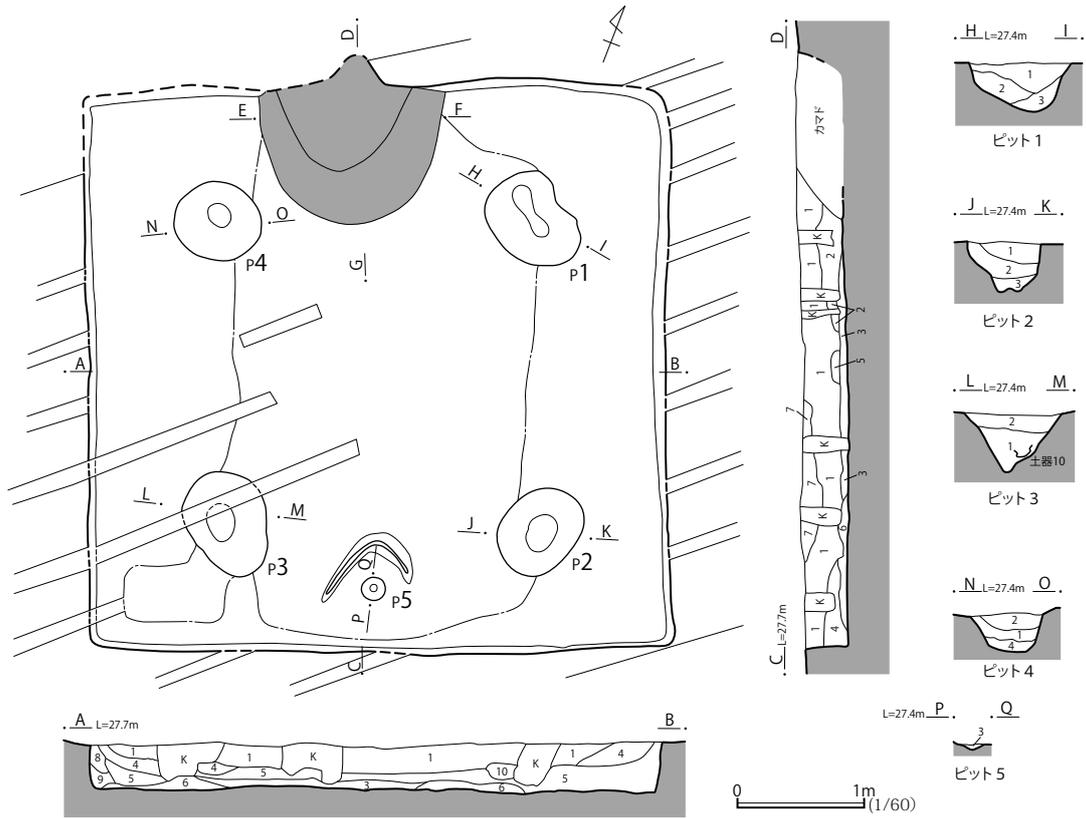
竪穴部覆土は、黒褐色土と暗褐色土が主体である。自然堆積と思われる。

竈は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部は比較的よく残っている。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竪穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残し、その上に黄色粘土を貼って袖部としている。袖部の燃焼部側は被熱し赤化している。小型の壺形土器が逆位で燃焼部から出土しているが、土器の器面が被熱していないことから支脚として使用されたものではなく、竈廃絶時に置いたものだろう。

ピットは5基検出された。ピット1～4は主柱穴、ピット5は出入り口施設に伴うものと思われる。床面からの深さは、ピット1が35cm、ピット2が41cm、ピット3が48cm、ピット4が42cm、ピット5が4cmである。主柱穴は、平面形状と層位から住居廃絶時にピットから引き抜いていると推定される。

**遺物の出土状況** 出土した遺物は少ないが、完形で床面直上から出土した遺物が多い。平面分布では、竈周辺と南側壁近くから出土している。第53図5は竈内で

IV 古墳時代の遺構と遺物



第76号住居跡堆積覆土

- 第1層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まり有り)
- 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック・焼土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第3層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒微量含む 締まりやや有り)
- 第4層 褐色土層(ローム粒多量含む 径1~2cmロームブロック少量含む 締まりやや有り)
- 第5層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第6層 褐色土層(ローム土主体 堅穴部下層に堆積しているローム土 締まり有り)
- 第7層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1~5cmロームブロック少量含む 締まりやや有り)

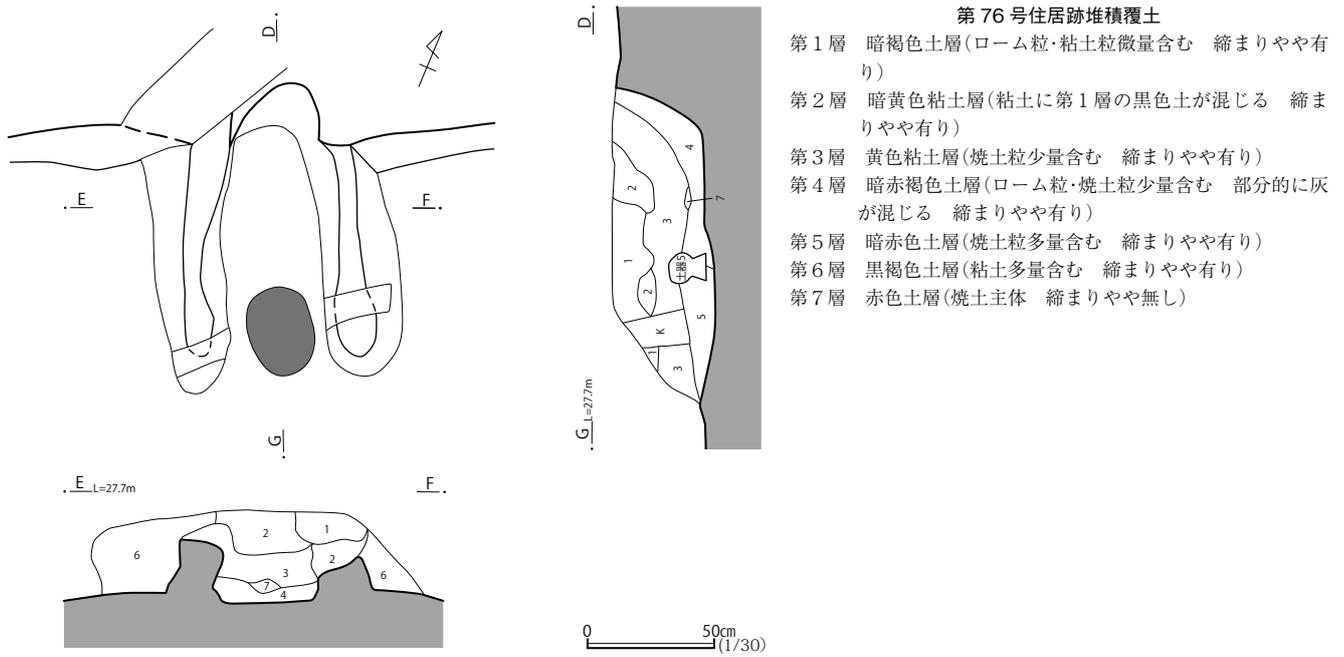
- 第8層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第9層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック微量含む 締まりやや有り)

第68号住居跡ピット1~5堆積覆土

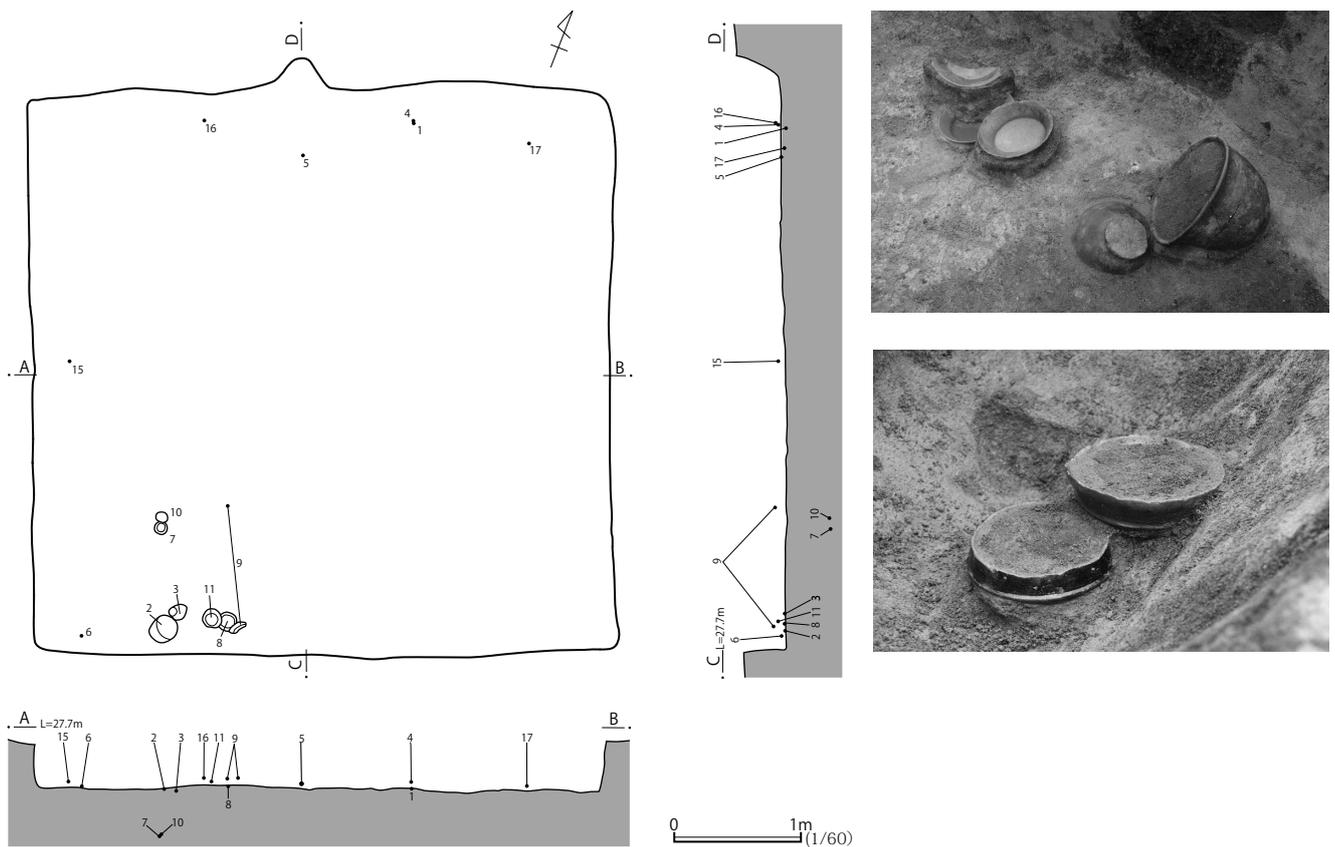
- 第1層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第2層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1~3cmロームブロック少量含む 締まりやや有り)
- 第3層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第4層 暗褐色土層(ローム粒多量含む(第1層より明るい) 締まりやや有り)



第50図 第76号住居跡(淡網:粘土)



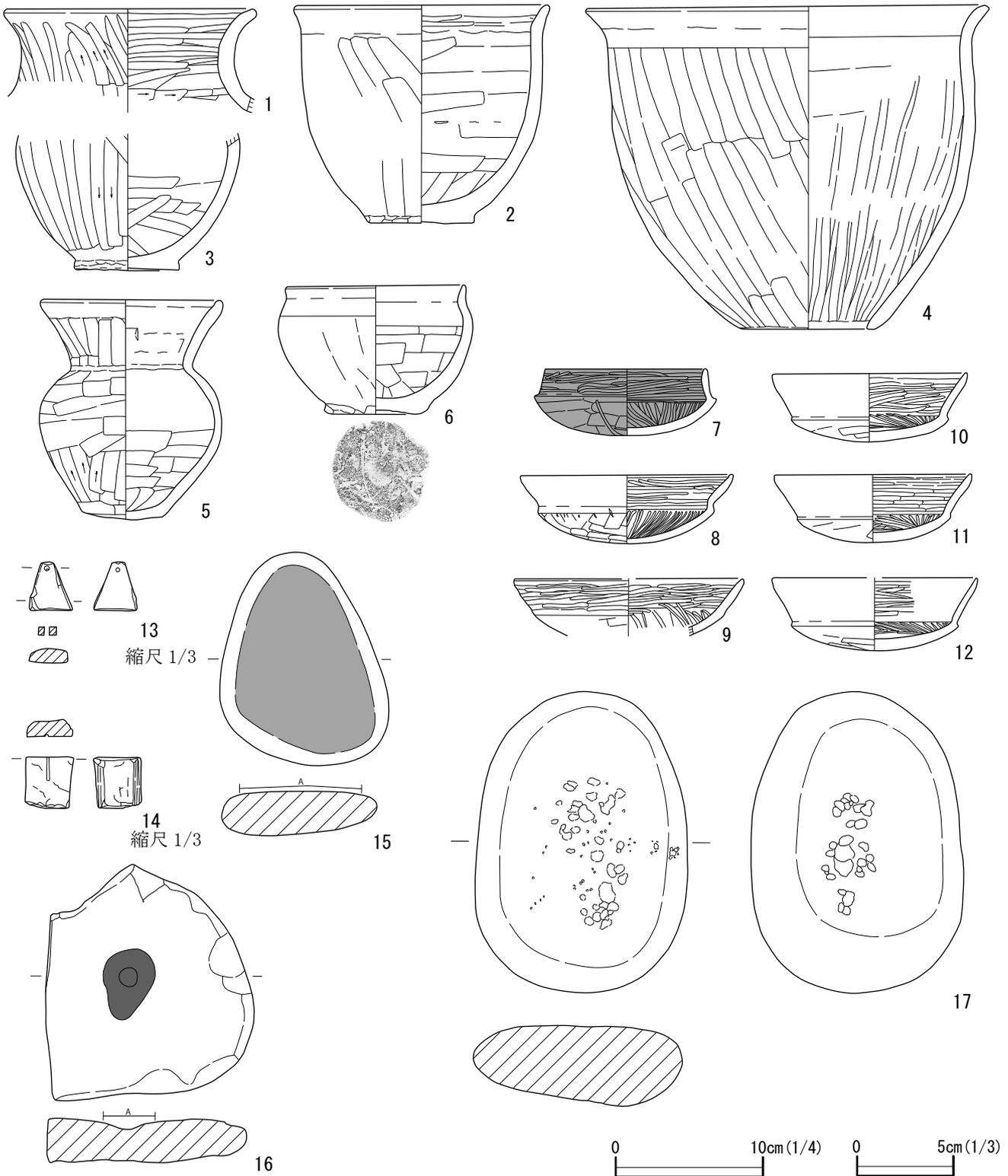
第51図 第76号住居跡竈(濃網:焼土範囲)



第52図 第76号住居跡遺物出土状況

逆位の状態で出土した。1は床面直上で正位の状態、その上に4が正位で重なった状態だった。2・3・6・8・11は、南側壁に沿って並んだ状態で出土した。2・6・8・11は正位の状態、3は逆位の状態で出土した。7・10は、ピット3の底面に正位の状態出土した。

**遺物** 甕形土器は、大型品が口縁部のみで、中型のもの(第53図2・3)が出土している。4の甕形土器は、内面にミガキ調整がみられる。杯形土器は、口縁部が体部との境に稜をもって短く内湾するものと外反するものがみられる。10～12の杯形土器の体部内面の調整には、



第53図 第76号住居跡出土遺物(土器:淡網・黒色処理/石器:濃網・敲打による凹み, 淡網・砥面)

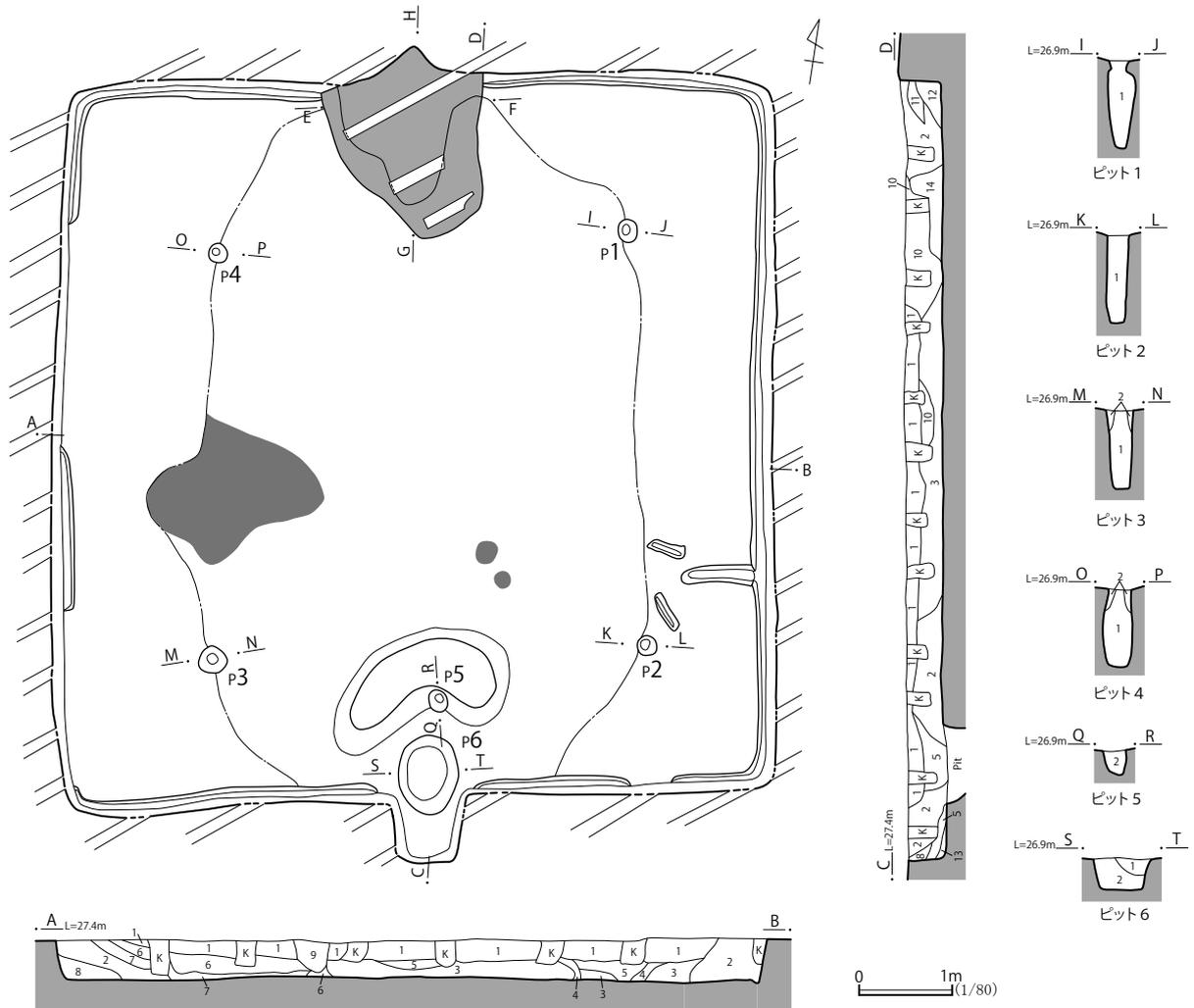
渦巻き状のヘラミガキがみられ、中央部はヘラミガキがない。この3点の杯形土器は法量や調整、色調が非常に似ている。7には黒色処理が施されている。13・14は石炭製の玉と思われる。

甕形土器2・3、甌形土器4、壺形土器5、鉢形土器6、杯形土器7・8・10・11内の土を水洗した結果、6の土器

内から炭化種子1点が検出され、同定の結果「モモ」の種子と判明した[パリノ報告]。

#### 第77号住居跡

**遺構** Z・A-17・18区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けているが、床面までは掘り込ま



第77号住居跡堆積覆土

- 第1層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まり有り)
- 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第3層 褐色土層(黒色土が斑状に混じる ローム粒多量含む 炭含む 焼土粒少量含む 締まり有り)
- 第4層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒主体 締まり有り)
- 第5層 黒色土層(径1cmロームブロック少量含む 締まり有り)
- 第6層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第7層 暗褐色土層(焼土粒主体 ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第8層 褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック少量含む 締まり有り)
- 第9層 黒褐色土層(ローム粒微量含む 別のピットか 締まり有り)

- 第10層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 白色粘土少量含む 締まり有り)
- 第11層 暗褐色土層(焼土主体 白色粘土少量含む 締まり有り)
- 第12層 暗褐色土層(ローム粒・炭粒少量含む 締まり有り)
- 第13層 明褐色土層(ローム主体 締まり強く有り)
- 第14層 白色粘土ブロック土層

第77号住居跡ピット1～5堆積覆土

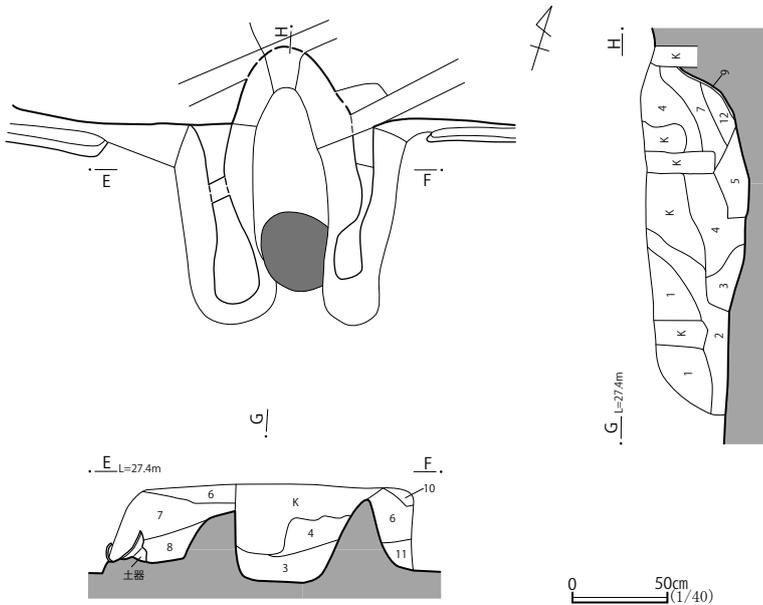
- 1 褐色土層(ローム粒多量含む 締まり無し)
- 2 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)

第77号住居跡ピット6堆積覆土

- 1 黒褐色土層(径1～3cmロームブロック・ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 2 黒褐色土層(ローム粒多量含む 炭化粒少量含む 締まりやや有り)



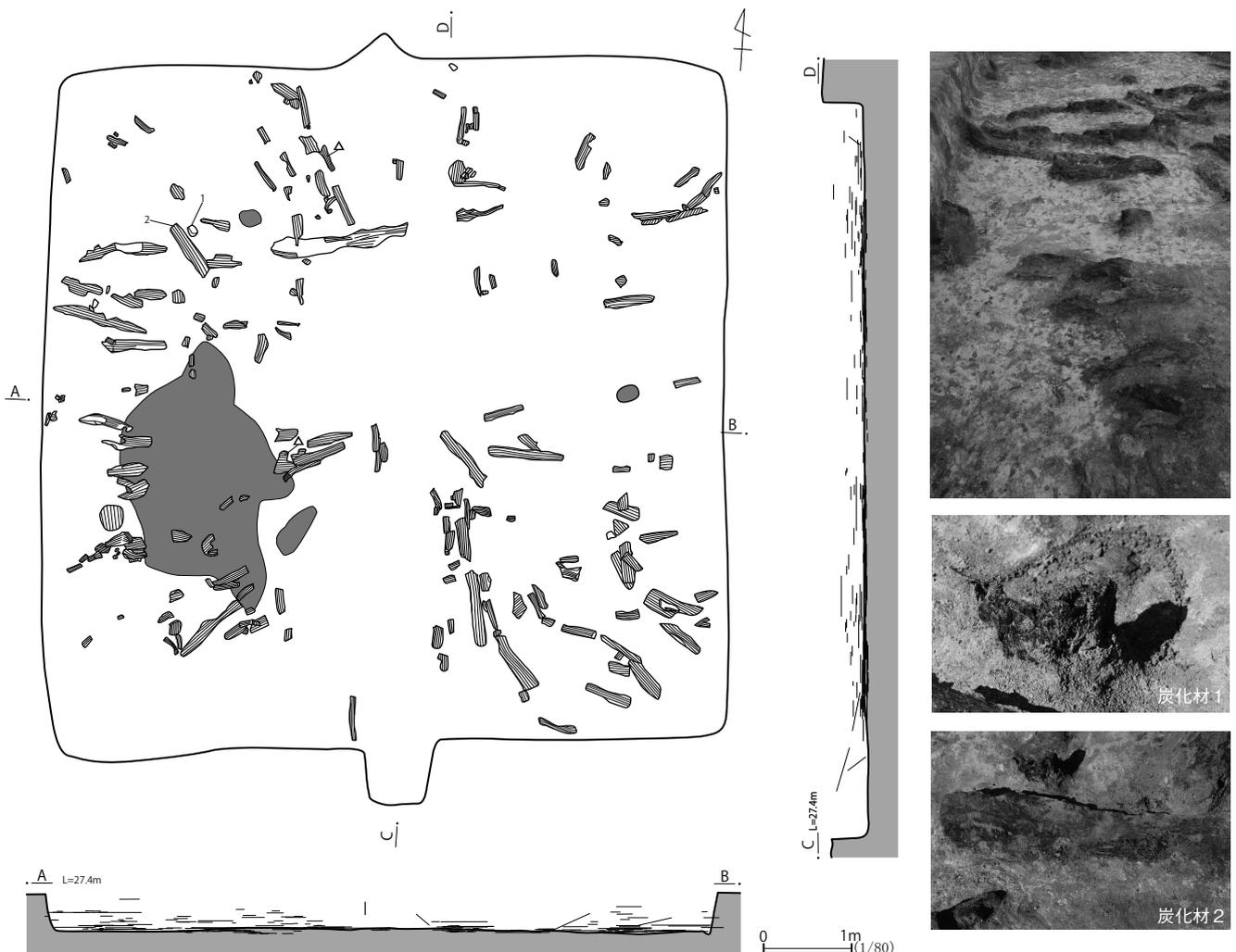
第54図 第77号住居跡(濃網:焼土範囲・淡網:粘土)



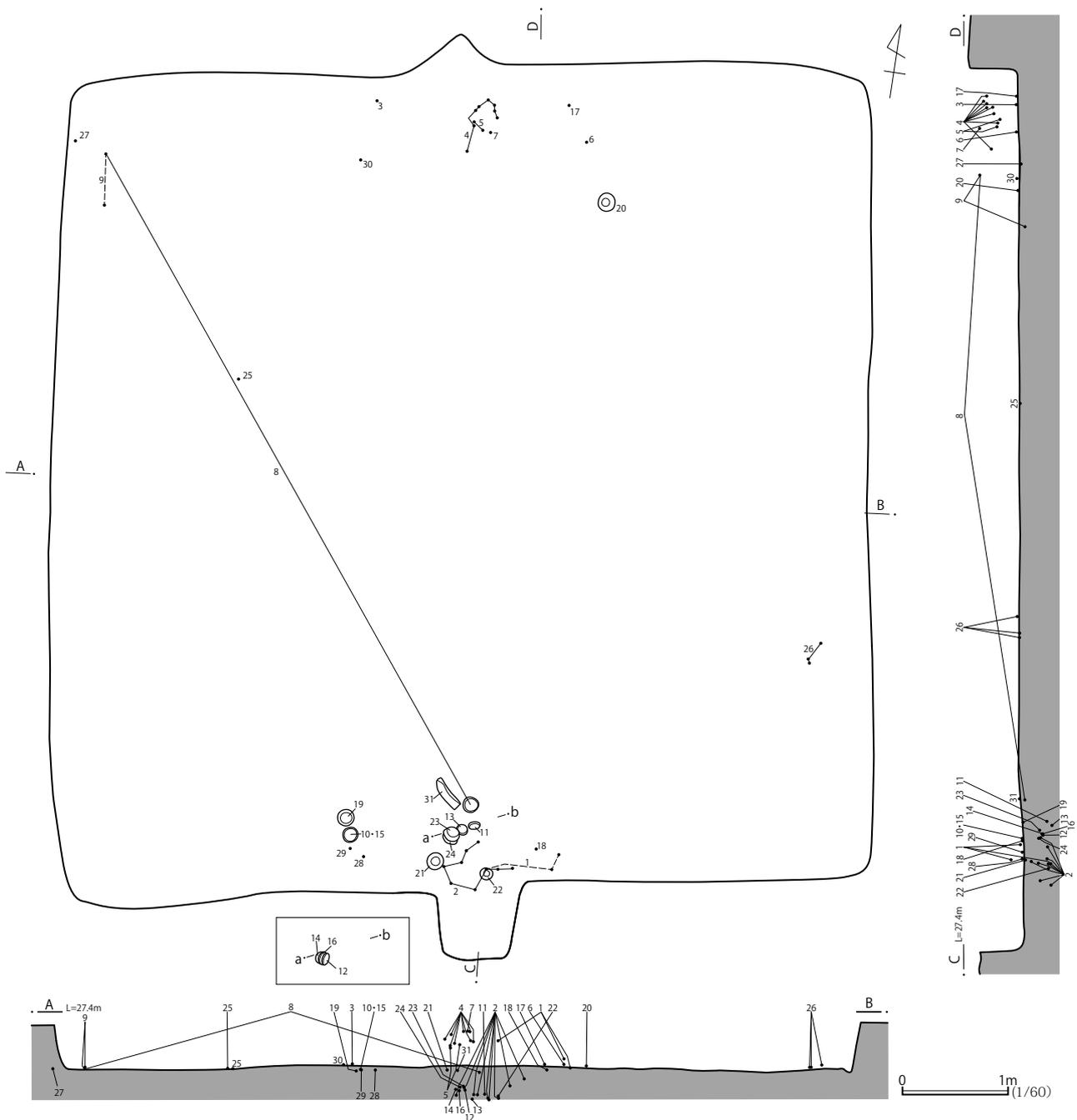
第77号住居跡竈堆積覆土

- 第1層 暗褐色土層(白色粘土ブロック多量含む 黒色土が斑状に混じる 締まりややあり)
- 第2層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒少量含む 締まり有り)
- 第3層 橙色土層(火床面 焼土主体 締まり無し)
- 第4層 暗褐色土層(ローム粒・焼土粒多量含む 締まりやや有り)
- 第5層 橙色土層(白色粘土少量含む 締まりやや無し)
- 第6層 橙色土層(焼土主体 炭化物少量含む 締まりやや有り)
- 第7層 明褐色土層(ローム土主体 住居跡覆土 締まりやや有り)
- 第8層 黒色土層(ローム粒多量含む 住居跡覆土 締まりやや有り)
- 第9層 白色粘土層(締まり有り)
- 第10層 褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第11層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒・炭化粒少量含む 締まりやや有り)
- 第12層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒少量含む 締まりやや有り)

第55図 第77号住居跡竈(濃網:焼土範囲)



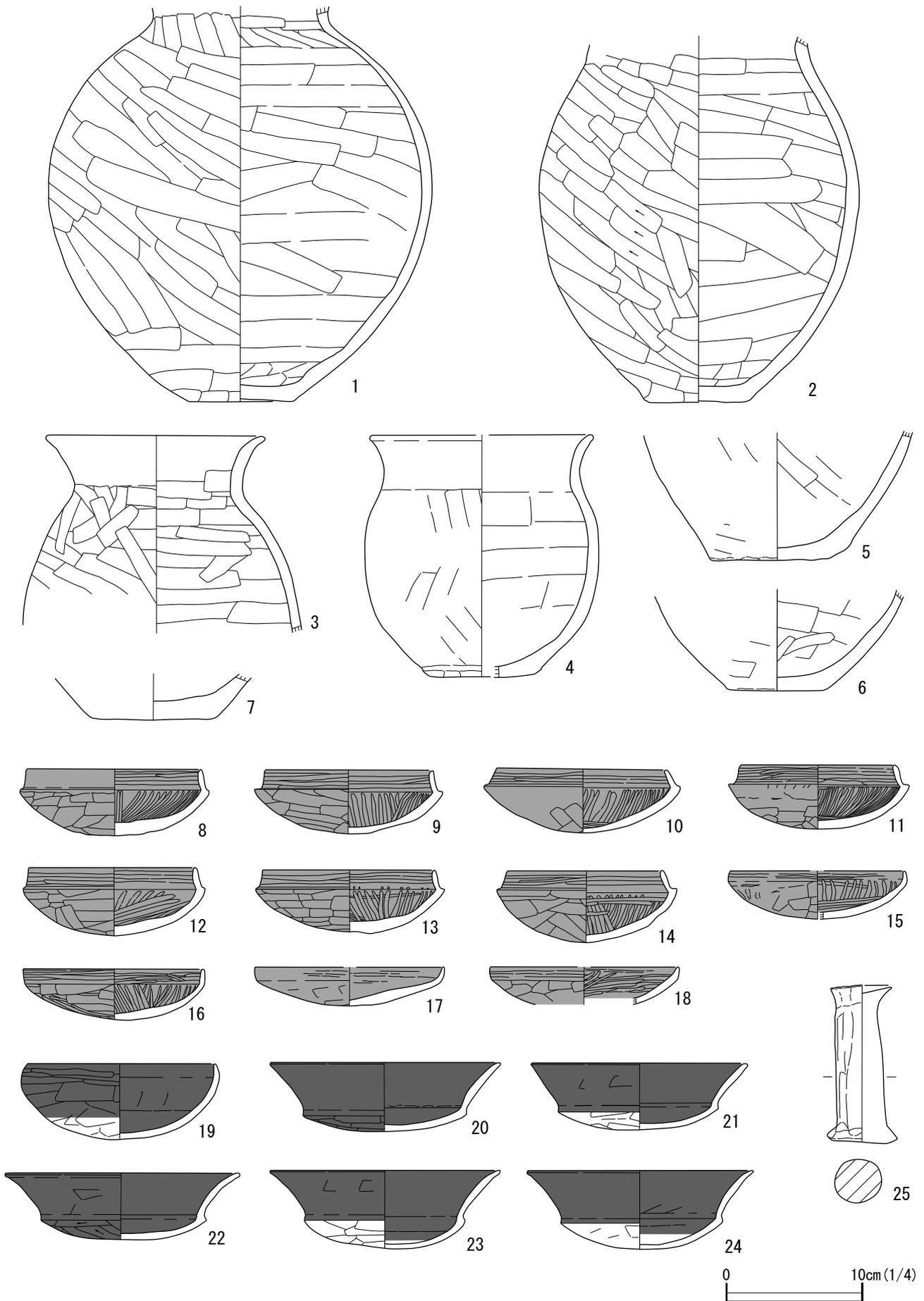
第56図 第77号住居跡炭化材出土状況(濃網:焼土範囲)



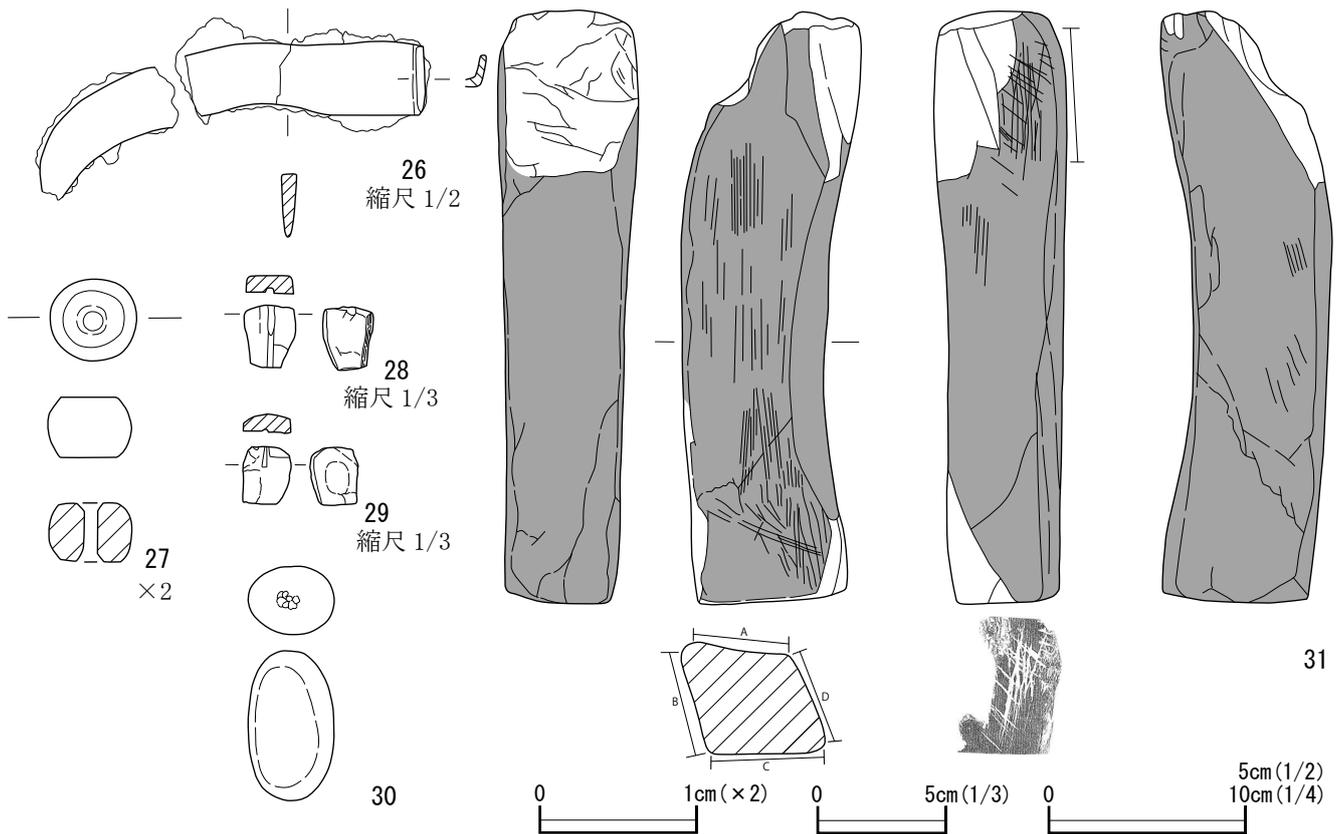
第57図 第77号住居跡遺物出土状況

れていない。平面形は、方形を呈するが、南壁が約64cm張り出す。竪穴部の規模は7.82×7.72m。壁高は東壁45cm、西壁41cm、南壁35cm、北壁42cm。主軸方向はN-8°-Wを指す。壁周溝は、竈と南壁の張り出し部、西壁の一部以外にみられる。幅約10cm、床面からの深さ2~5cmを測る。また、東壁では竪穴部中央に向かって間仕切り状の溝が1条存在する。床面からの深さは約3cmを測る。床面は、竈前から南壁中央部にかけて帯状に硬化している。ピット5の周囲には、床面から約3cmの土手状の高まりがある。

炭化材は、202点を図化し、サンプルとして一部分のみ取り上げを行った。炭化材の検出状況は、住居跡中央から外側に向かって放射状に部材がみられる。この検出状況は、上屋構造における配置を表すものと思われる。また、第56図の炭化材1は、主柱穴のピット4に木目の状態から立った状態で出土しており、床面近くで切られた主柱の可能性もある。炭化材は、形状の観察から丸材が多いが、炭化材2は幅15cm、長さ60cmの板状を呈していた。材の上にはカヤ状の屋根材が被った状態で出土した例もみられた。炭化材で形状の残りのよいもの



第 58 図 第 77 号住居跡出土遺物 1 (濃網:赤彩, 淡網:黒色処理)



第59図 第77号住居跡出土遺物2 (淡網:砥面)

20点を樹種同定した結果、コナラ属コナラ亜属クスギ節(12点)とコナラ属コナラ亜属コナラ節(8点)と同定された[パリノ報告]。焼土は、炭化材の周囲にみられる。また、住居跡西側では、床面が被熱し赤化しているところがある。

竈穴部覆土は、壁側にローム土を主体とした褐色土、中央部に黒褐色土が堆積する。床面には、焼土や炭化物がみられる。覆土の観察と炭化材との関係から、当住居跡は燃焼中もしくは鎮火後に人為的に埋め戻されたと考えられる。

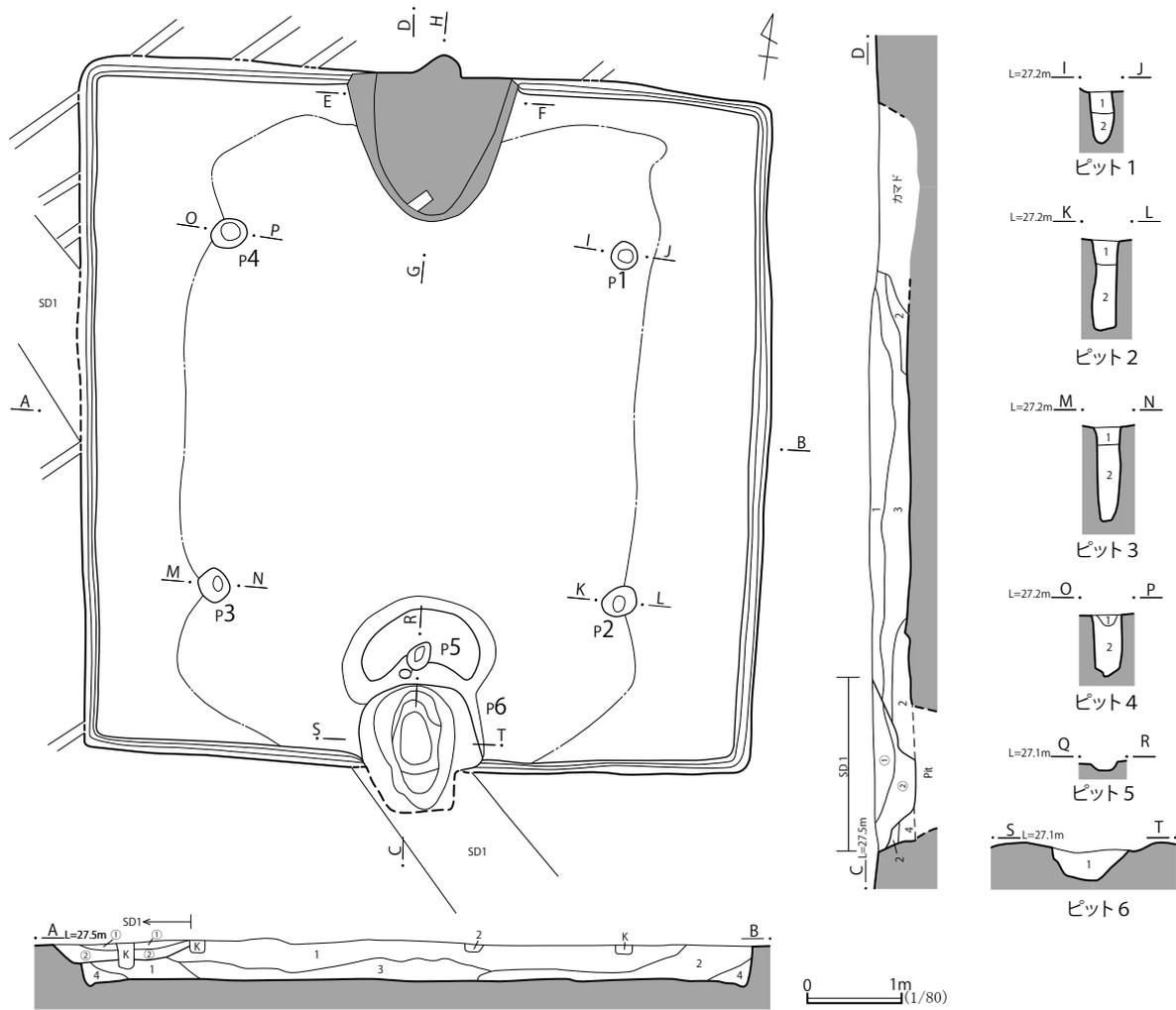
竈は、竈穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部は比較的よく残っている。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竈穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に白色粘土を貼って袖部としている。

ピットは6基検出された。ピット1～4は支柱穴、ピット5は出入り口施設に伴うもの、ピット6は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット1が105cm、ピット2が95cm、ピット3と4が85cm、ピット5が25cm、

ピット6が34cmである。支柱穴は、床面の確認状況から張床する前に柱を立てており、住居廃絶時にピットから引き抜いていない状況が確認できた。

**遺物の出土状況** 出土した遺物は、完形で床面直上から出土した遺物が多い。平面分布では、竈周辺と南側壁のピット6近くから出土している。第58図1・2の甕形土器は、ピット6東側で壊れた状態で出土し、接合関係ではピット6内の破片と接合している。杯形土器は完形品が多く、床面直上またはピット6内から出土した。8～10・15・19～22は正位の状態で、11～14・16は倒位の状態で、23・24は逆位の状態で出土した。12・14・16・23・24はまとめて出土し、12・14・16が倒位の状態で重なり、その上に23・24が逆位の状態で載せてあった。第59図26の鉄製品は、住居跡東壁側の床面直上から出土した。27のガラス小玉は住居跡北西隅の壁周溝内から出土した。28～31の石製品はすべて床面直上より出土し、31の砥石はピット6の土器が集中する場所から出土している。

**遺物** 甕形土器には大型品が2点あり、第58図1は球胴で、2は長胴を呈する。甌形土器はない。杯形



**第83号住居跡堆積覆土**

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第2層 褐色土層(人為的埋土 ローム土主体 締まりやや有り)
- 第3層 褐色土層(径1~3cmロームブロック・ローム粒多量含む 炭化材含む 締まりやや有り)
- 第4層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 壁際の三角堆積 締まりやや有り)
- 第①層 暗褐色土層(SD1 覆土 黒ボク多量含む ローム粒少量含む

締まりやや有り)

- 第②層 暗褐色土層(SD1 覆土 ローム粒少量含む 締まりやや有り)

**第83号住居跡ピット1~4堆積覆土**

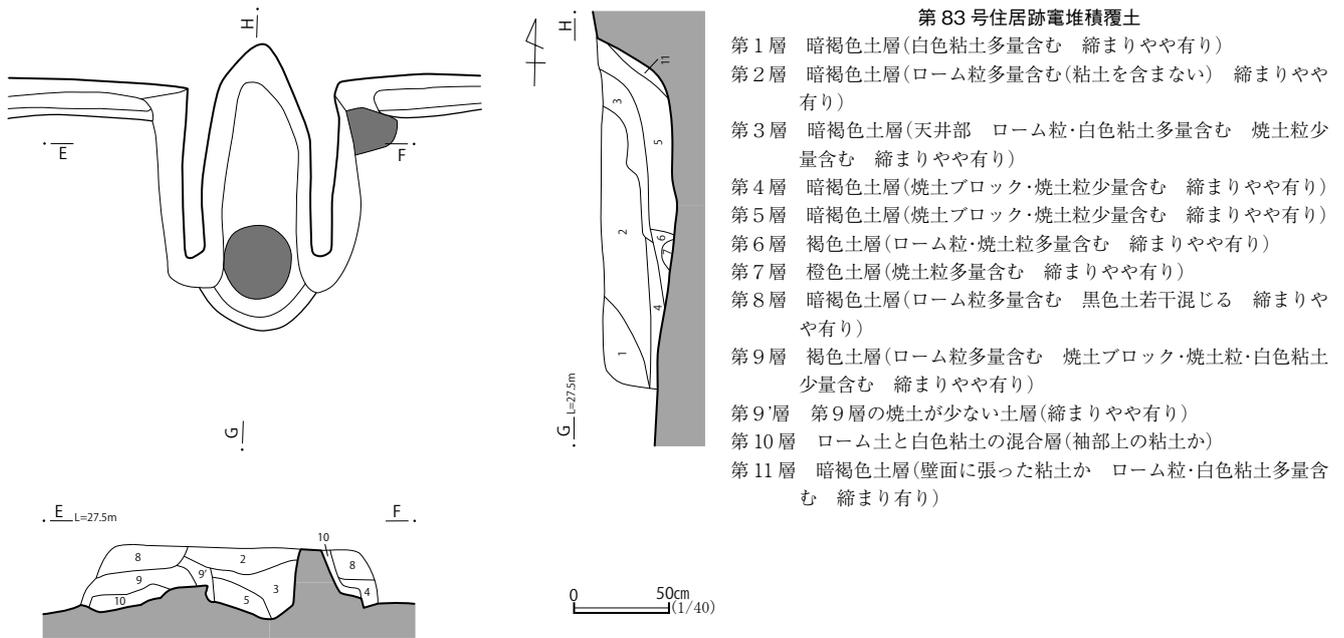
- 第1層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや無し 粘性有り)

**第83号住居跡ピット6堆積覆土**

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)



第60図 第83号住居跡(淡網:粘土)



## 第 83 号住居跡竈堆積覆土

- 第 1 層 暗褐色土層(白色粘土多量含む 締まりやや有り)
- 第 2 層 暗褐色土層(ローム粒多量含む(粘土を含まない) 締まりやや有り)
- 第 3 層 暗褐色土層(天井部 ローム粒・白色粘土多量含む 焼土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第 4 層 暗褐色土層(焼土ブロック・焼土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第 5 層 暗褐色土層(焼土ブロック・焼土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第 6 層 褐色土層(ローム粒・焼土粒多量含む 締まりやや有り)
- 第 7 層 橙色土層(焼土粒多量含む 締まりやや有り)
- 第 8 層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 黒色土若干混じる 締まりやや有り)
- 第 9 層 褐色土層(ローム粒多量含む 焼土ブロック・焼土粒・白色粘土少量含む 締まりやや有り)
- 第 9 層 第 9 層の焼土が少ない土層(締まりやや有り)
- 第 10 層 ローム土と白色粘土の混合層(袖部上の粘土か)
- 第 11 層 暗褐色土層(壁面に張った粘土か ローム粒・白色粘土多量含む 締まり有り)

第 61 図 第 83 号住居跡竈(濃網:焼土範囲)

土器は、口縁部が体部との境に稜をもって短く内傾するものと直立するもの、大きく外反するもの、口縁部と体部との境に稜をもたずに短く直立するものがみられる。8・10の体部内面の調整には、放射状のヘラミガキがみられる。また、8～18には黒色処理、19～24には赤彩が施されている。23と24では、内面体部中央部は円形に赤彩が塗られない部分がみられる。第59図26は鉄製の鎌で刃先が欠失している。27はガラス小玉で色はコバルト色である。孔周辺には平坦面をもつ。28・29は石炭の玉片と思われる。28の孔は両側穿孔で、29の孔は貫通していない。31の砥石は大型品で、4面に研磨痕と刃を研いだと思われる細い溝が数条確認できた。

杯形土器8・10～14・16・19～21・24内の土を水洗したところ21の土器内から炭化種子13点が検出され、同定の結果「オナモミ属」と同定された[バリノ報告]。

## 第 83 号住居跡

## 遺 構

W・X-15・16区に位置する。西壁中央から南壁中央にかけて第1号溝状遺構に掘り込まれており、ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けているが、いずれも床面までは掘り込まれていない。平面形は、方形を呈するが、南壁が約50cm張り出す。竪穴部の規模は7.50×7.22m。壁高は東壁50cm、西壁40cm、南壁44cm、北壁50cm。主軸方向はN-8°-Wを指す。壁周溝は、

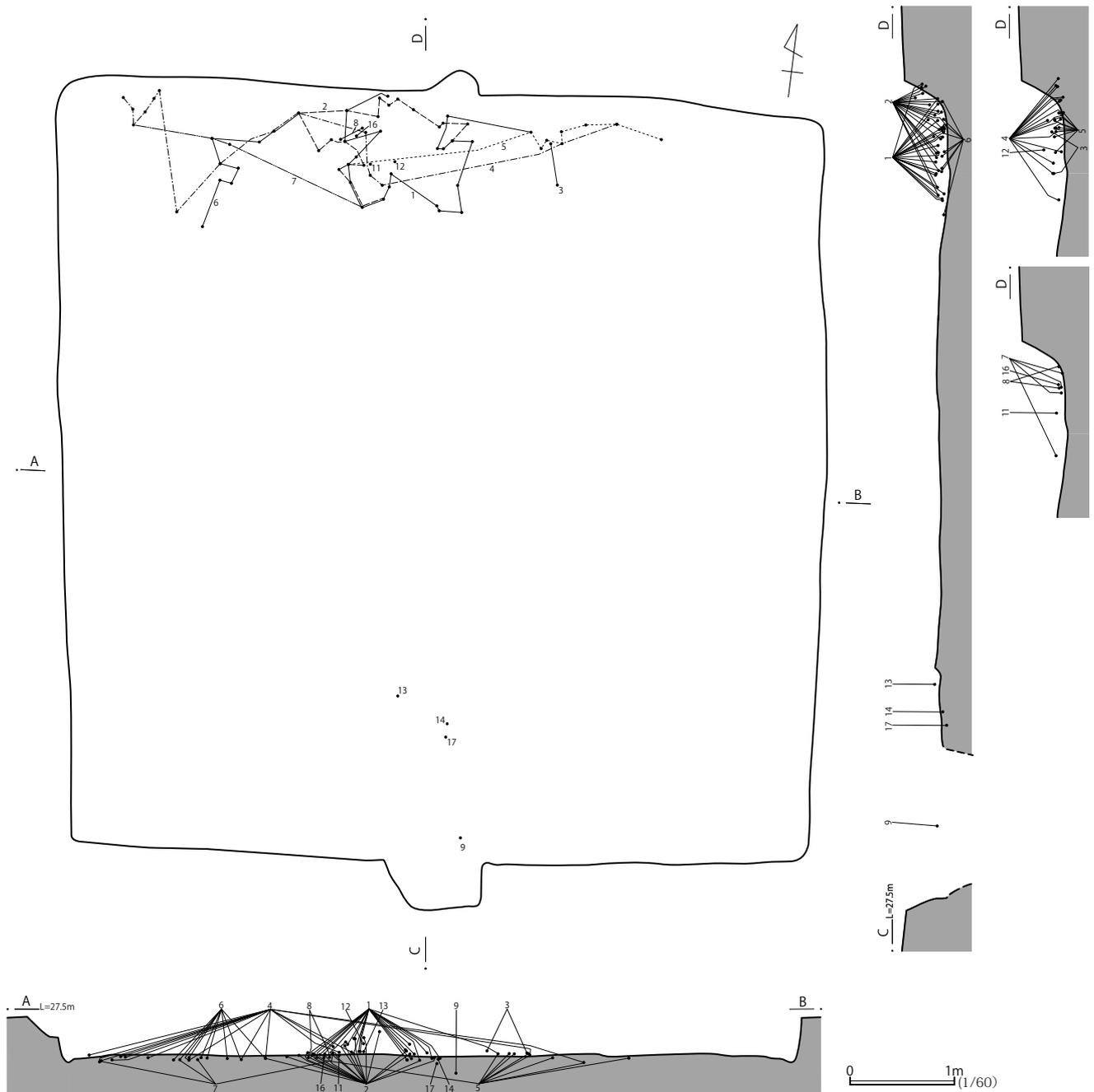
竈と南壁の張り出し部以外にみられる。幅約10cm、床面からの深さ2～4cmを測る。床面は、竈前から南壁中央部にかけて帯状に硬化している。ピット5の周囲には、床面から約3cmの土手状の高まりがある。

竪穴部覆土は、下層にローム土を主体とした褐色土、上層に直径1～3cmほどのロームブロックを含む暗褐色土が堆積する。床面には、若干の焼土や炭化物がみられる。下層は人為的に埋め戻された土層と思われる。

竈は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部が崩れているが、袖部と燃焼部は比較的良好に残っている。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竪穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に白色粘土を貼って袖部としている。袖部の燃焼部側は被熱し赤化している。

ピットは6基検出された。ピット1～4は主柱穴、ピット5は出入り口施設に伴うもの、ピット6は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット1が55cm、ピット2が97cm、ピット3が105cm、ピット4が65cm、ピット5が11cm、ピット6が28cmである。主柱穴は、床面の確認状況から張床する前に柱を立てており、住居廃絶時にピットから引き抜いていない状況が確認できた。

遺物の出土状況 遺物は破片化したものが多く、土器で完形品の状態で出土したものはない。図化出来た遺物の平面分布は、その大半が竈周辺から出土しており、



第 62 図 第 83 号住居跡遺物出土状況

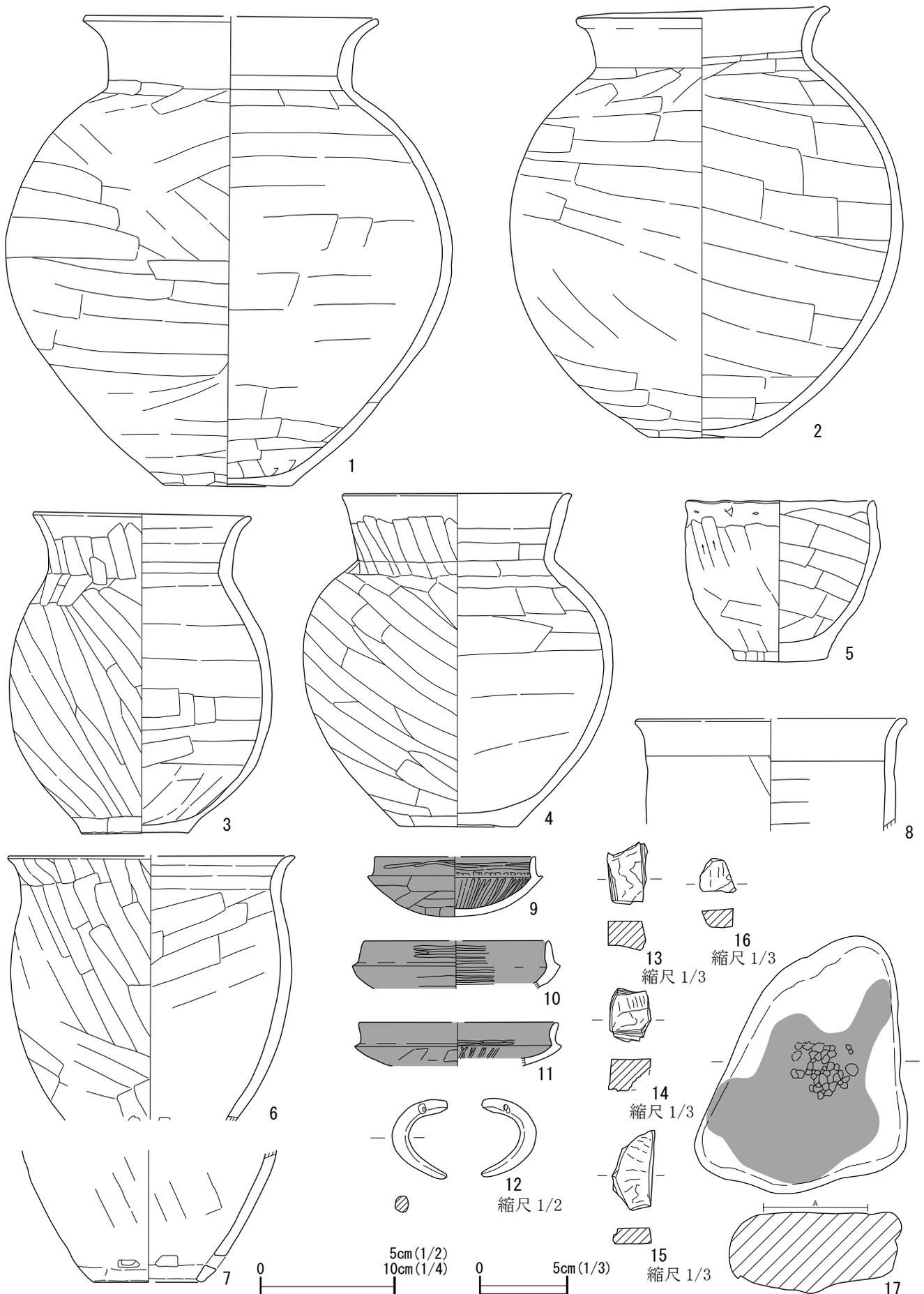
第 63 図 9 の杯形土器はピット 6 の覆土中から出土した。1～7 の甕形土器や甑形土器は、竈周辺で複雑な接合関係がみられる。垂直分布では、床面直上に位置するものが多い。12 の土製品は竈袖部西側の覆土下層から出土した。

**遺物** 甕形土器は、大型品 2 点と中型品 2 点がある。第 63 図 1 の甕形土器には、接合の際の鋸歯状の断面がみられる。6・7 の甑形土器は同一のものと思われ、底部近くに焼成前穿孔の孔が対角線上に 4 つみられる。杯形土器は 3 点で全て破片資料である。10 の杯形土器

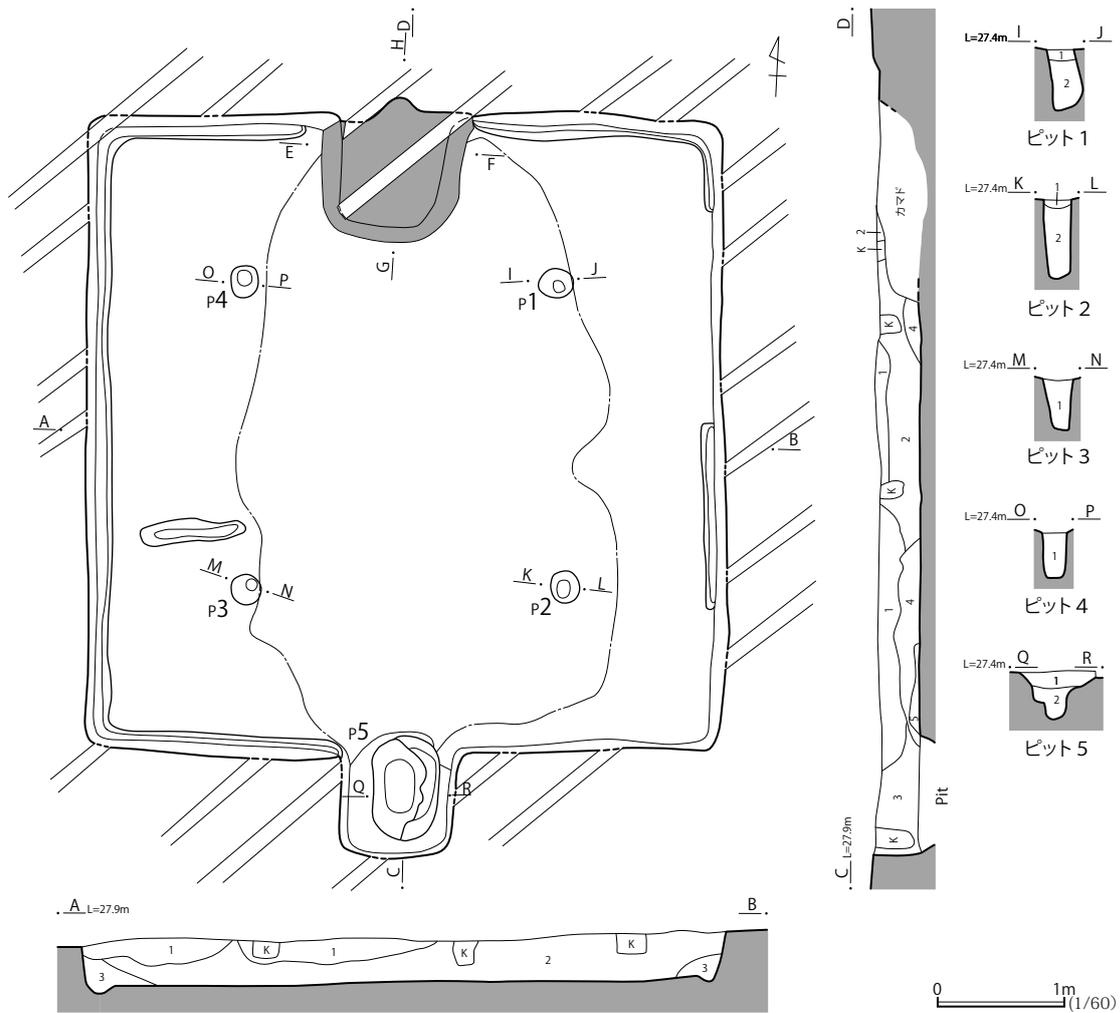
は西隣に位置する第 73 号住居跡から出土した遺物と接合した。12 は土製の勾玉と思われる。13～16 は石炭片で、



第 83 号住居跡第 63 図 1 にみられる接合痕



第 63 図 第 83 号住居跡出土遺物(土器:淡網・黒色処理/石器:淡網・砥面)



第85号住居跡堆積覆土

- 第1層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック少量含む 縮まりやや有り)
- 第2層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック・灰少量含む 縮まりやや有り)
- 第3層 褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック少量含む 縮まりやや有り)
- 第4層 暗褐色土層(焼土粒・炭粒多量含む ローム粒多量含む 縮まりやや有り)
- 第5層 焼土と炭の混合層(縮まり無し)

第85号住居跡ピット1～4堆積覆土

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 縮まりやや有り)
- 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 縮まりやや有り)

第85号住居跡ピット5堆積覆土

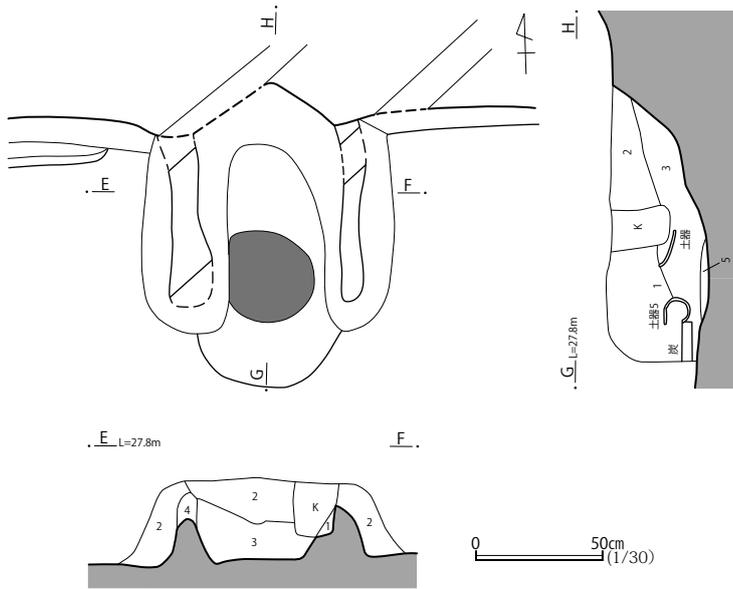
- 第1層 暗褐色土層(径3cmロームブロック少量含む 縮まりやや有り)
- 第2層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 縮まりやや有り)



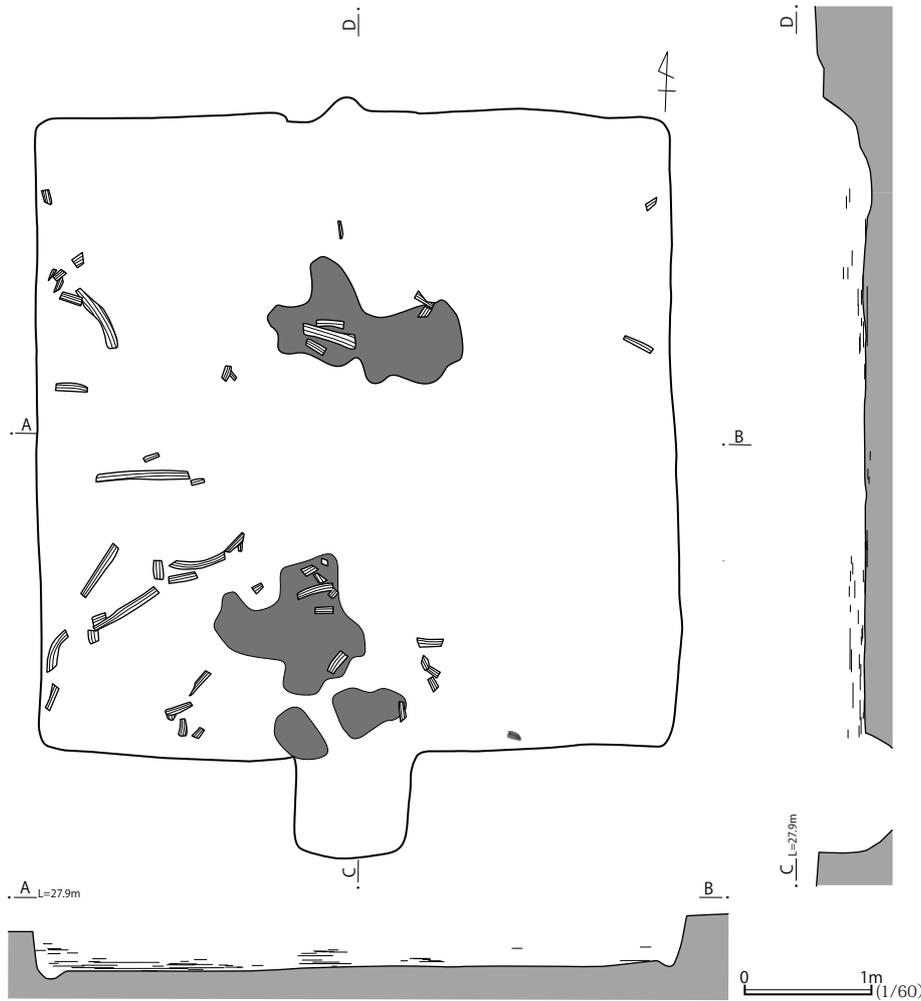
第64図 第85号住居跡(淡網:粘土)

第 85 号住居跡竈堆積土

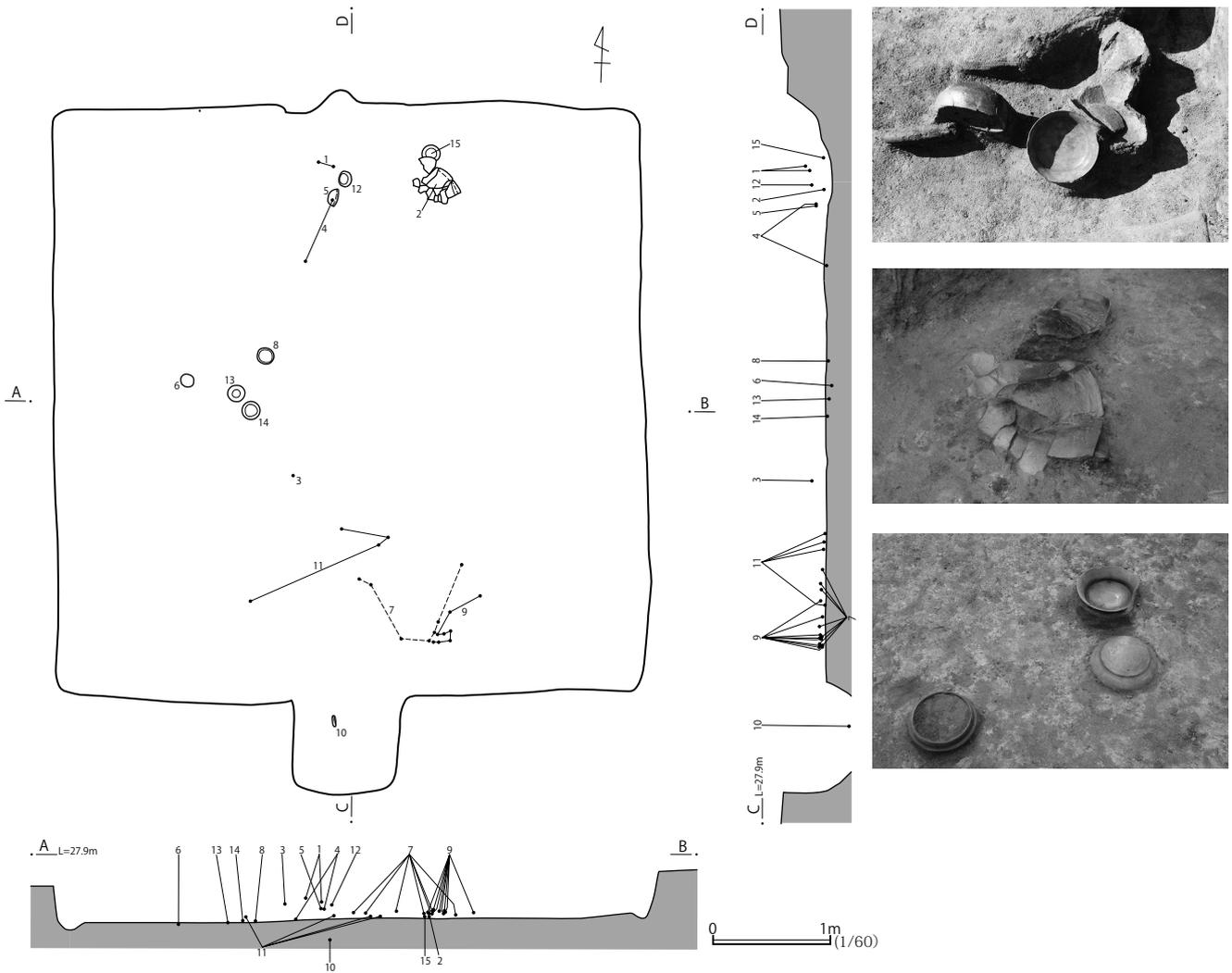
- 第 1 層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 白色粘土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第 2 層 暗褐色土層(粘土粒多量含む 締まりやや有り)
- 第 3 層 褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第 4 層 褐色土層(ローム土が主体で暗褐色が若干混じる 締まりやや有り)
- 第 5 層 橙色土層(火床面 焼土主体 締まりやや無し)



第 65 図 第 85 号住居跡竈(濃網:焼土範囲)



第 66 図 第 85 号住居跡炭化材出土状況(濃網:焼土範囲)



第 67 図 第 85 号住居跡遺物出土状況

この他に図化していないものが約 34 g 出土している。

甕形土器 3・4 の土器内の土を水洗したが、検出物はなかった。

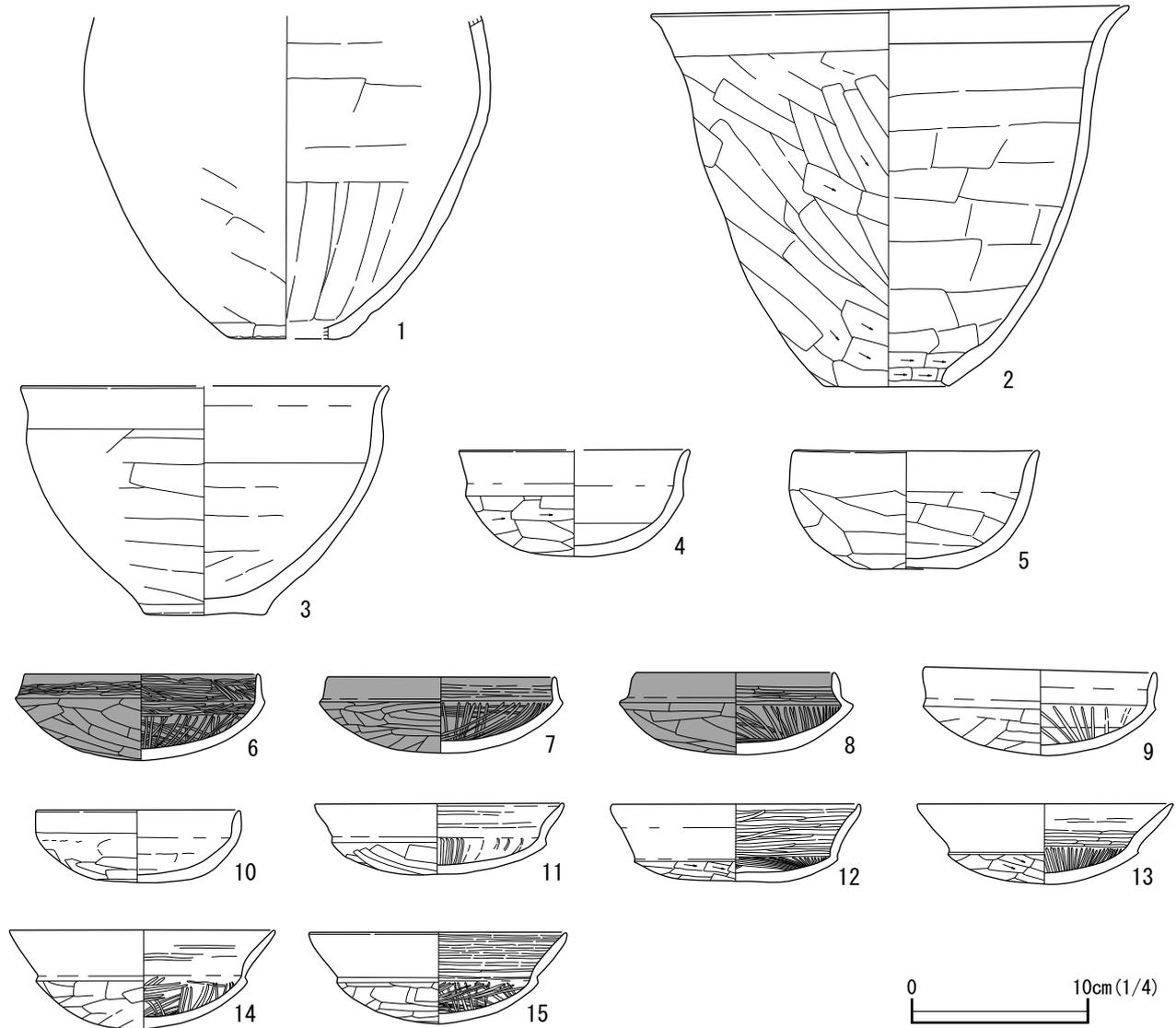
### 第 85 号住居跡

**遺構** T・U-16 区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けているが、床面までは掘り込まれていない。平面形は、方形を呈するが、南壁が約 82 cm 張り出す。竪穴部の規模は 5.09 × 5.05 m。壁高は東壁 42 cm、西壁 35 cm、南壁 32 cm、北壁 35 cm。主軸方向は N-3°-W を指す。壁周溝は竈から西壁沿いに南壁中央までと北壁東側、東壁の一部にみられる。幅約 5 ~ 10 cm、床面からの深さ約 4 cm を測る。また、西壁では竪穴部中央に向かって間仕切り状の溝が 1 条存在する。床面からの深さは 3 ~ 5 cm を測る。床面は、竈前から南壁中央部にかけて帯状に硬化している。

炭化材は、90 点を図化し、サンプルとして一部分のみ取り上げを行った。炭化材の検出状況は、住居跡西壁付近から南壁中央にかけて部材がみられる。比較的大きな部材は住居跡中央から外側に向かって放射状に出土している。炭化材は、形状の観察から丸材が多い。炭化材で形状の残りのよいもの 2 点を樹種同定した結果、コナラ属コナラ亜属クヌギ節とコナラ属コナラ亜属コナラ節と同定された[パリノ報告]。焼土は、住居跡中央から南壁中央にかけて多くみられる。

竪穴部覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積する。床面には、焼土や炭化物がみられる。

竈は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部は比較的好く残っている。袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竪穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に白色粘土を貼って袖



第68図 第85号住居跡出土遺物(淡網:黒色処理)

部としている。火床面は竈断面の第5層部分で、焼土が約4cmの厚さで堆積していた。

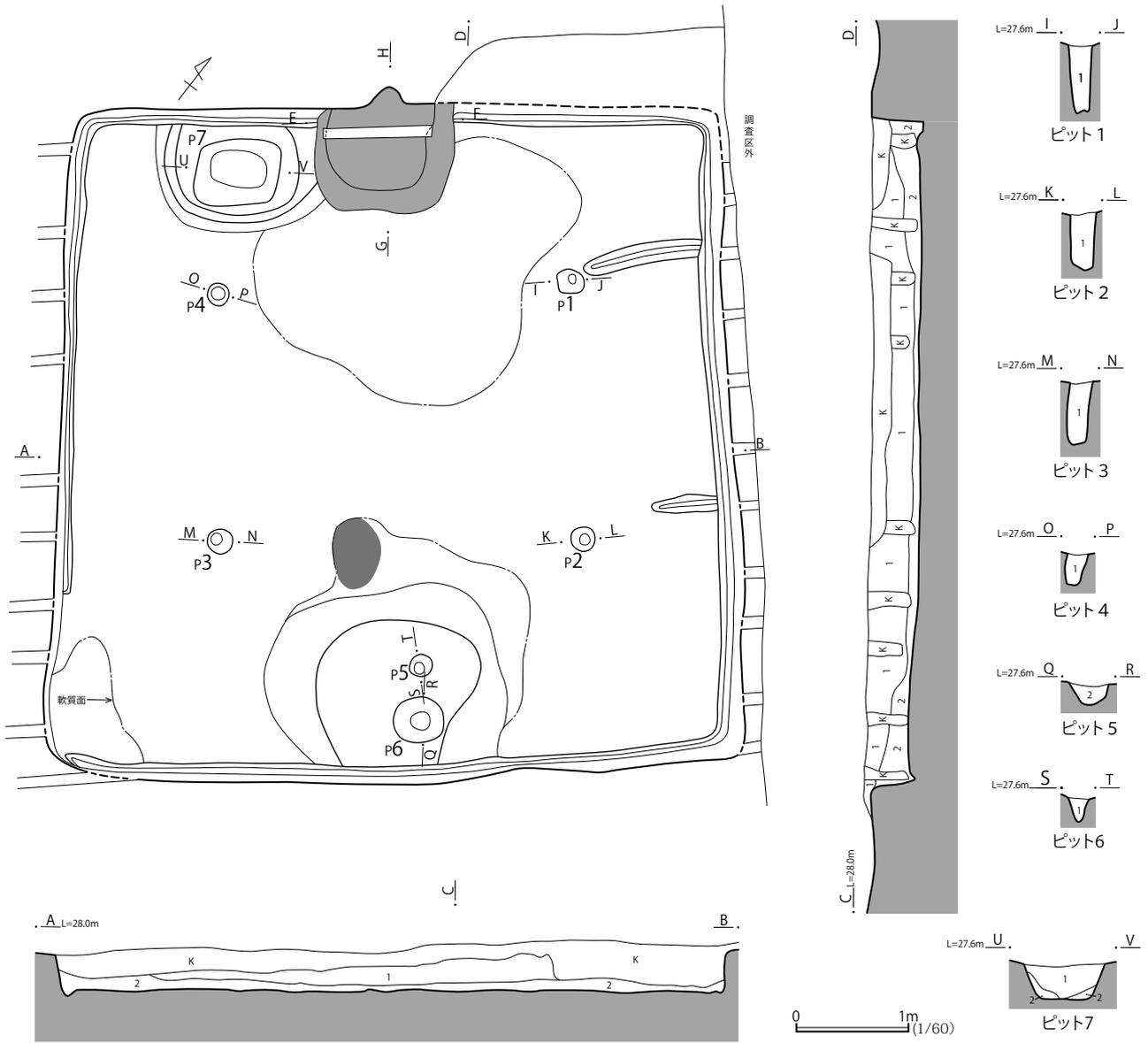
ピットは5基検出された。ピット1～4は支柱穴、ピット5は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット1が48cm、ピット2が63cm、ピット3が50cm、ピット4が37cm、ピット5が35cmである。支柱穴は、床面の確認状況から張床する前に柱を立てており、住居廃絶時にピットから引き抜いていない状況が確認できた。

**遺物の出土状況** 遺物は少ないが、完形品が多い。平面分布では竈周辺から南壁の出入り口付近にかけて帯状に出土している。垂直分布では、竈穴部中央から竈周辺で出土した遺物は床面直上で、南壁中央付近は覆土下層に位置する。第68図2の甑形土器は竈東側でつぶれ

た状態で床面から出土した。5の椀形土器は竈内で倒位の状態であった。完形の杯形土器は6・8・13・14・15が床面直上で、10がピット5内、12が竈内から出土した。出土した状態は、8・12・14が正位、6・13が逆位、10が倒位である。

**遺物** 甕形土器は、破片しかない(第68図1)。甑形土器は1点あり、ほぼ完形品である。4・5は椀形土器で、5は平底である。杯形土器は、口縁部が体部との境に稜をもって短く内傾するものと直立するもの、大きく外反するものがみられる。10以外の体部内面の調整には、ヘラミガキがみられる。また、6～8には黒色処理が施されている。

椀形土器5と杯形土器6・8・10・13・15内の土を水洗



第86号住居跡堆積覆土

- 第1層 黒色土層(ローム粒少量含む 縮まりやや有り)
- 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒・炭化粒少量含む 縮まりやや有り)

第86号住居跡ピット1～6堆積覆土

- 第1層 褐色土層(ローム粒多量含む 縮まりやや有り)

- 第2層 明褐色土層(ローム粒多量含む 縮まりやや有り)

第86号住居跡ピット7堆積覆土

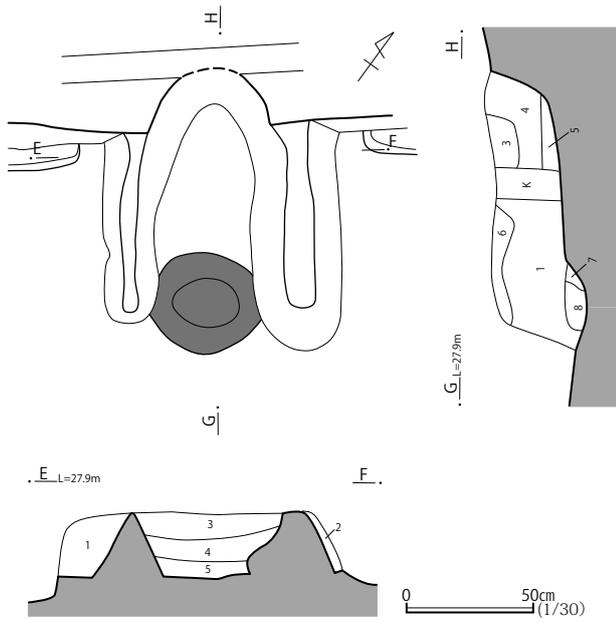
- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 縮まりやや有り)
- 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 縮まりやや有り)



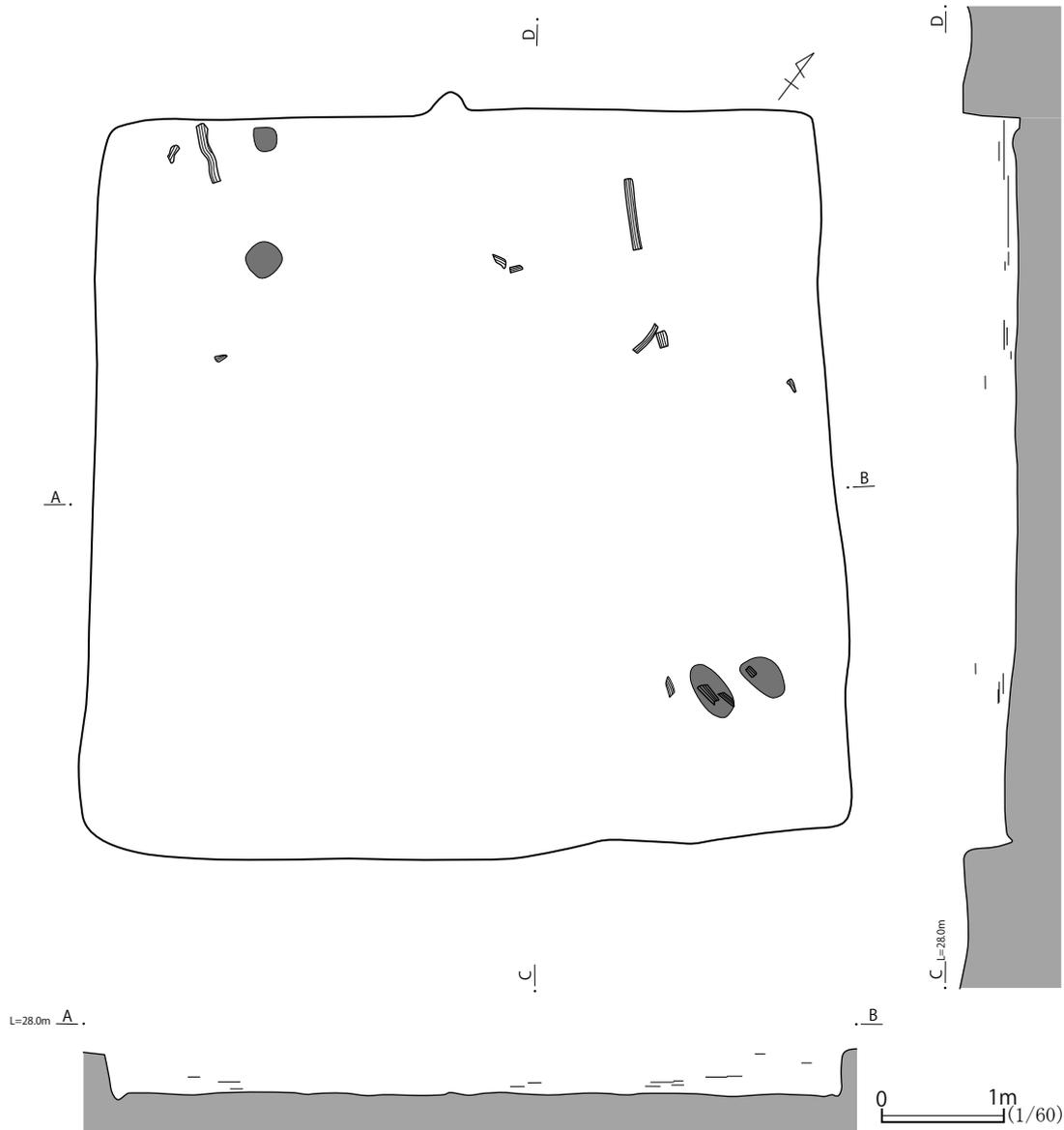
第69図 第86号住居跡(濃網:焼土範囲, 淡網:粘土)

第86号住居跡電堆積覆土

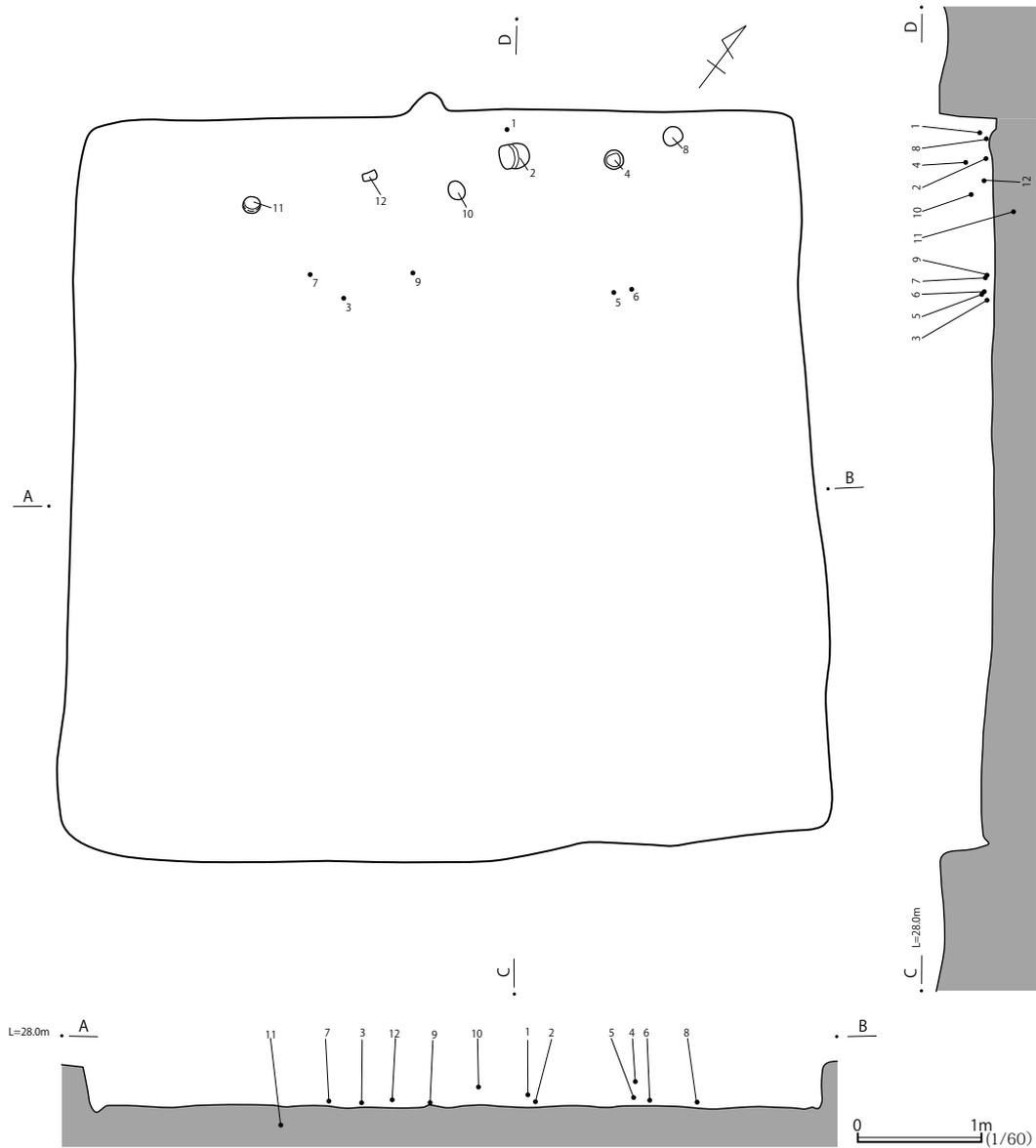
- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第2層 白色砂質粘土層(袖部に張った粘土 締まり有り)
- 第3層 暗褐色土層(黄白色粘土少量含む しなり やや有り)
- 第4層 黄白色粘土層(焼土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第5層 暗褐色土層(黄白色粘土多量含む 焼土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第6層 黒色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第7層 褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒微量含む 締まりやや有り)
- 第8層 橙色土層(火床面 焼土主体 締まりやや無し)



第70図 第86号住居跡竈(濃網:焼土範囲)



第71図 第86号住居跡炭化材出土状況(濃網:焼土範囲)



第 72 図 第 86 号住居跡遺物出土状況

したところ5の土器内から炭化種子1数点が検出されたが、同定できなかった。[パリノ報告]。

### 第 86 号住居跡

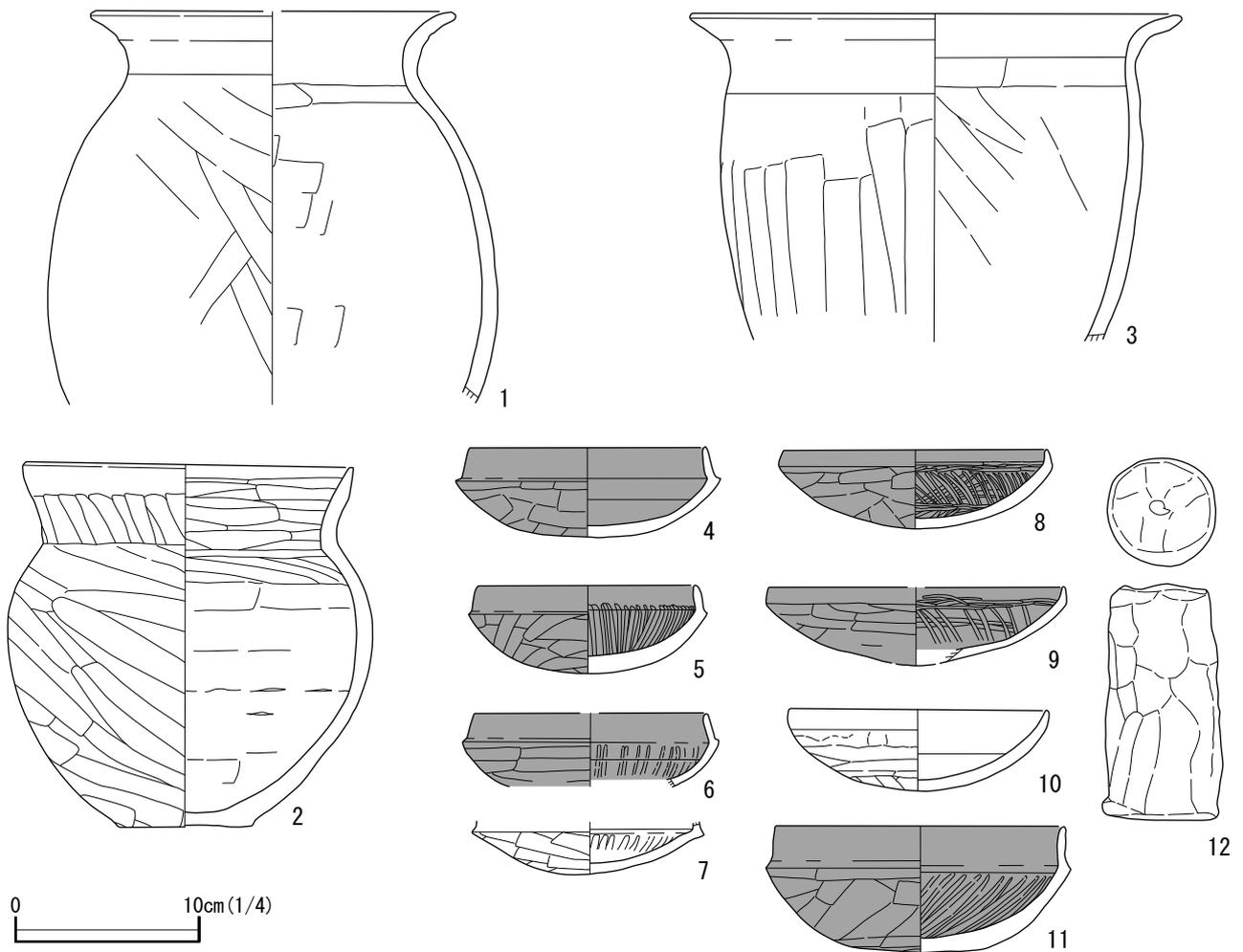
**遺 構** T-17・18区に位置する。耕作による土坑状の攪乱とそれ以前のゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けているが、床面までは掘り込まれていない。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は6.09×6.02m。壁高は東壁41cm、西壁32cm、南壁42cm、北壁44cm。主軸方向はN-39°-Wを指す。壁周溝は竈周辺と南隅以外にみられる。また、東壁では竪穴部中央に向かって間仕切り状の溝が2条存在する。床面からの深さは2~5cmを測る。床面は、竈周辺と出入り口周辺のみ硬化面がみら

れる。また、竪穴部南隅は張床がなく軟質である。ピット5・6の周囲には床面から約2~5cmの、ピット7の周囲には1~4cmの土手状の高まりがある。

炭化材は、13点を図化し、サンプルとして一部分のみ取り上げを行った。炭化材の検出状況は、住居跡内に点在し、残りもよくない。炭化材は、形状の観察から丸材である。焼土は、炭化材の周辺にみられ、また、ピット6の東側の床面は被熱し赤化している。

竪穴部覆土は、主体が黒色土で、床面近くに褐色土が堆積する。

竈は、竪穴部北壁のほぼ中央に構築されている。残存状況は、天井部は崩れているが、両袖部と燃焼部は比較的よく残っている。袖部は粘土等を芯として構築したも



第73図 第86号住居跡出土遺物(淡網:黒色処理)

のではなく、竈穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に白色砂質粘土を貼って袖部としている。火床面は竈断面の第8層部分で、焼土が約8cmの厚さで堆積していた。

ピットは7基検出された。ピット1～4は支柱穴、ピット5・6は出入り口施設に伴うもの、ピット7は「貯蔵穴」と思われる。床面からの深さは、ピット1が68cm、2が49cm、ピット3が63cm、ピット4が30cm、ピット5が20cm、ピット6が21cm、ピット7が35cmである。

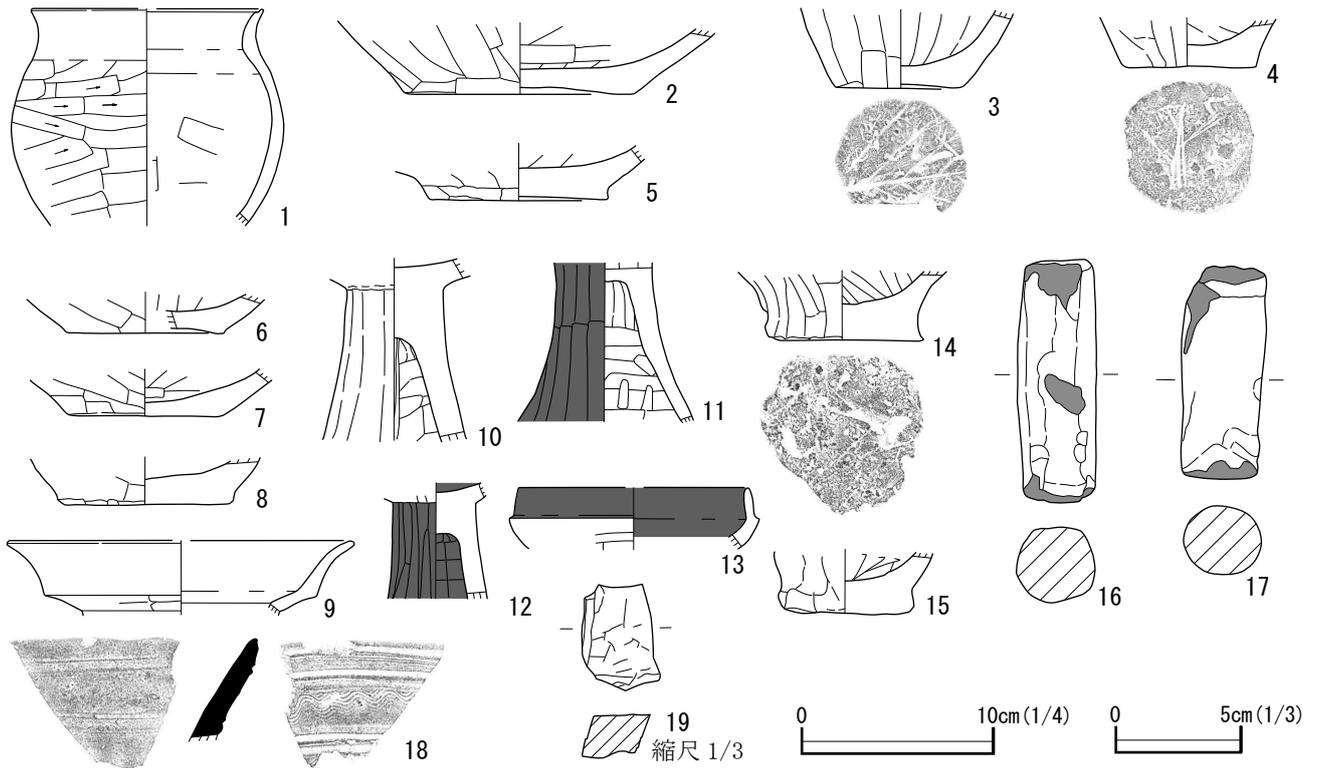
**遺物の出土状況** 遺物は少ないが、完形品が多い。平面分布では竈周辺の北壁の付近に多い。垂直分布では、第73図1～3・5～9・12が床面直上、10が竈内、11がピット7上層、4が覆土中層から出土した。1と2の甕形土器は正位で竈東側袖部に寄りかかる状態で出土し、1は攪乱により破壊されている。杯形土器は4・8・11が正位、5・6・10が逆位で出土した。

**遺物** 甕形土器には、大型品と中型品がある(第

73図1・2)。甕形土器にとおもわれるものは1点あるが、破片資料である。杯形土器は、口縁部が体部との境に稜をもって短く内傾するものと、口縁部と体部との境に稜をもたずに短く直立するものがみられる。内面の調整には、ヘラミガキがあるものとなないものがある。また、4～6・8・9・11には黒色処理が施されている。11は大型品である。12は土製の支脚で、孔がある。

甕形土器2と杯形土器4・8・10・11内の土を水洗したが、検出物はなかった。

3 遺構に伴わない古墳時代の遺物



第74図 遺構に伴わない古墳時代の遺物(第3号溝状遺構／濃網:赤彩・淡網:欠損)

遺構に伴わない古墳時代の遺物は、奈良時代の遺構と推定される第3号溝状遺構より出土している。

図化できたのは、甕形土器片8点、高杯形土器片4点、杯形土器1点、手づくね土器片2点、土製支脚2点、須恵器1点、石炭片1点である。いずれも古墳時代後期と推定される遺物である。石炭片は、溝状遺構周辺の住居跡から多数出土しており、土器の時期からもこれらの住居跡に伴う遺物と考えられる。

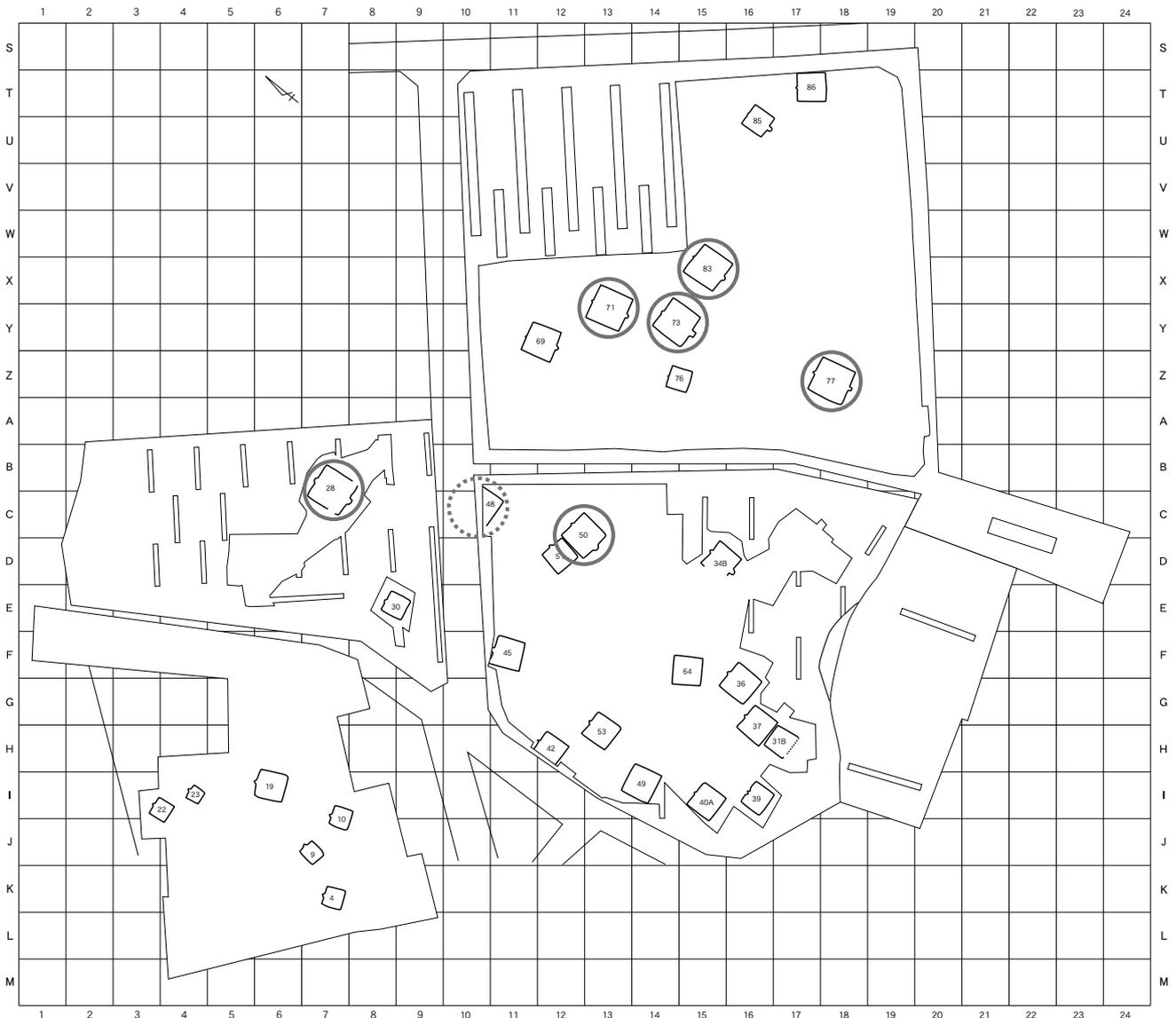
## 4 古墳時代後期の大型住居跡について

**鷹ノ巣遺跡及び近隣遺跡の大型住居跡** 鷹ノ巣遺跡では、古墳時代後期の住居跡 30 基を検出した。これらの住居跡を長軸長の数値で分類すると、5 m 未満の住居跡が 7 基、5.09 ~ 5.86 m の住居跡が 4 基、6.08 ~ 6.89 m の住居跡が 13 基、7.00 ~ 8.00 m の住居跡が 6 基となり、6 m 台の住居跡が半数以上を占める。住居跡の分布では、第 1 ~ 4 次調査区全体に分布しているが、長軸長が 7 m 以上の大型住居跡は、台地中央部の住居跡が密集していない台地平坦部に位置する傾向がみられる(第 75 図)。

ここで、長軸長が 7 m 以上の大型住居跡について注目すると、住居構造で 1 つの共通点が見られる。それは縦

穴部南壁にピットが張り出すいわゆる「張り出し貯蔵穴」を付設していることである。鷹ノ巣遺跡で「張り出し貯蔵穴」を付設する住居跡は 9 基あり、すべて古墳時代後期前半の時期に比定される。9 基中 6 基が大型住居跡で、その他は長軸長 5.09 m (85 住) と 6.30 m (34B 住)、6.54 m (69 住) の規模の住居跡である(第 77 図)。分布では、7 m 未満の 3 基についても、大型住居跡同様に台地中央部に位置する。

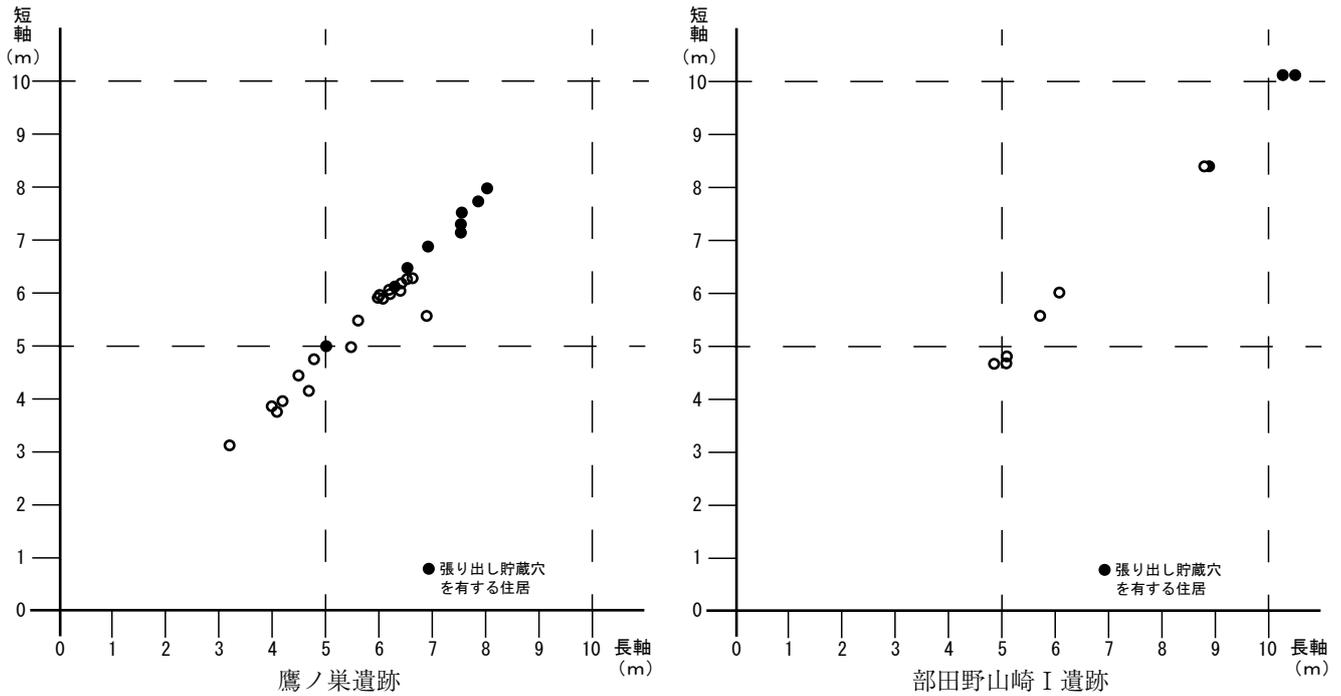
次に、鷹ノ巣遺跡の近隣遺跡の大型住居跡を確認する。近隣遺跡で調査例がある遺跡には、当遺跡北側に部田野山崎 I 遺跡、東側に宮後遺跡がある(第 76 図)。



第 75 図 古墳時代後期住居跡分布図(○:大型住居跡)



第 76 図 鷹ノ巣遺跡と近隣遺跡の大型住居跡(住居跡の縮尺は 1/400)



第 77 図 鷹ノ巣遺跡と部田野山崎 I 遺跡の古墳時代後期住居跡規模比較

第 4 表 部田野山崎 I 遺跡と宮後遺跡の古墳時代後期住居跡一覧

遺跡名	住居跡番号	長軸 (m)	短軸 (m)	主軸	時期	張り出し貯蔵穴
部田野山崎 I 遺跡	2次第 33 号住居跡	10.4	10.1	N-21°-W	後期前半	あり
	2次第 27 号住居跡	10.2	10.1	N	後期前半	あり
	1次第 33 号住居跡	8.7	8.4	N-40°-E	後期前半	—
	2次第 18 号住居跡	8.7	8.4	N-18°-W	後期前半	あり
	2次第 3 号住居跡	6.0	6.0	N	後期前半	—
	1次第 27 号住居跡	5.6	5.6	N-45°-E	後期前半	—
	1次第 7 号住居跡	5.0	4.7	N-5°-E	後期前半	—
	2次第 35 号住居跡	5.0	4.8	N-52°-W	後期前半	—
	2次第 7 号住居跡	4.8	4.7	N-14°-W	後期前半	—
宮後遺跡	第 18 号住居跡	8.4	—	N-13°-W	後期後葉	なし
	第 2 号住居跡	8.2	—	N-5°-E	後期後葉	不明
	第 20 号住居跡	7.08	—	N-20°-W	後期後葉	不明
	第 3 号住居跡	6.61	—	N-14°-W	後期後葉	—
	第 19A 号住居跡	6.47	—	N-16°-W	後期後葉	—
	第 10 号住居跡	—	—	—	後期後葉	—

第 5 表 三反田下高井遺跡の古墳時代後期大型住居跡と「張り出し貯蔵穴」を付設する住居跡

住居跡番号	長軸 (m)	短軸 (m)	主軸	時期	張り出し貯蔵穴
第 26 号住居跡	9.0	8.2	N-46°-W	後期前半	あり
第 136A 号住居跡	8.5	8.2	N-5°-W	後期前半	あり
第 173 号住居跡	8.4	8.1	N-25°-W	後期前半	あり
第 118A 号住居跡	7.7	7.7	N-36°-W	後期前半	あり
第 79 号住居跡	7.6	7.6	N-53°-E	後期前半	あり
第 132A 号住居跡	7.3	6.8	N-51°-W	後期前半	—
第 120B 号住居跡	7.1	6.8	N-16°-W	後期前半	あり
第 131 号住居跡	5.1	5.1	N-5°-W	後期前半	あり

部田野山崎 I 遺跡では、古墳時代後期の住居跡が 9 基確認されている[井上 1990][宮崎 1995](第 4 表)。うち 4 基が長軸長 8 m を越える大型住居跡で、2 次調査の第 33 号住居跡は 10.4 m, 同第 27 号住居跡は 10.2 m を測る。時期は古墳時代後期前半と推定される。住居跡構造では、9 基中大型住居跡の 3 基に「張り出し貯蔵穴」が付設される。

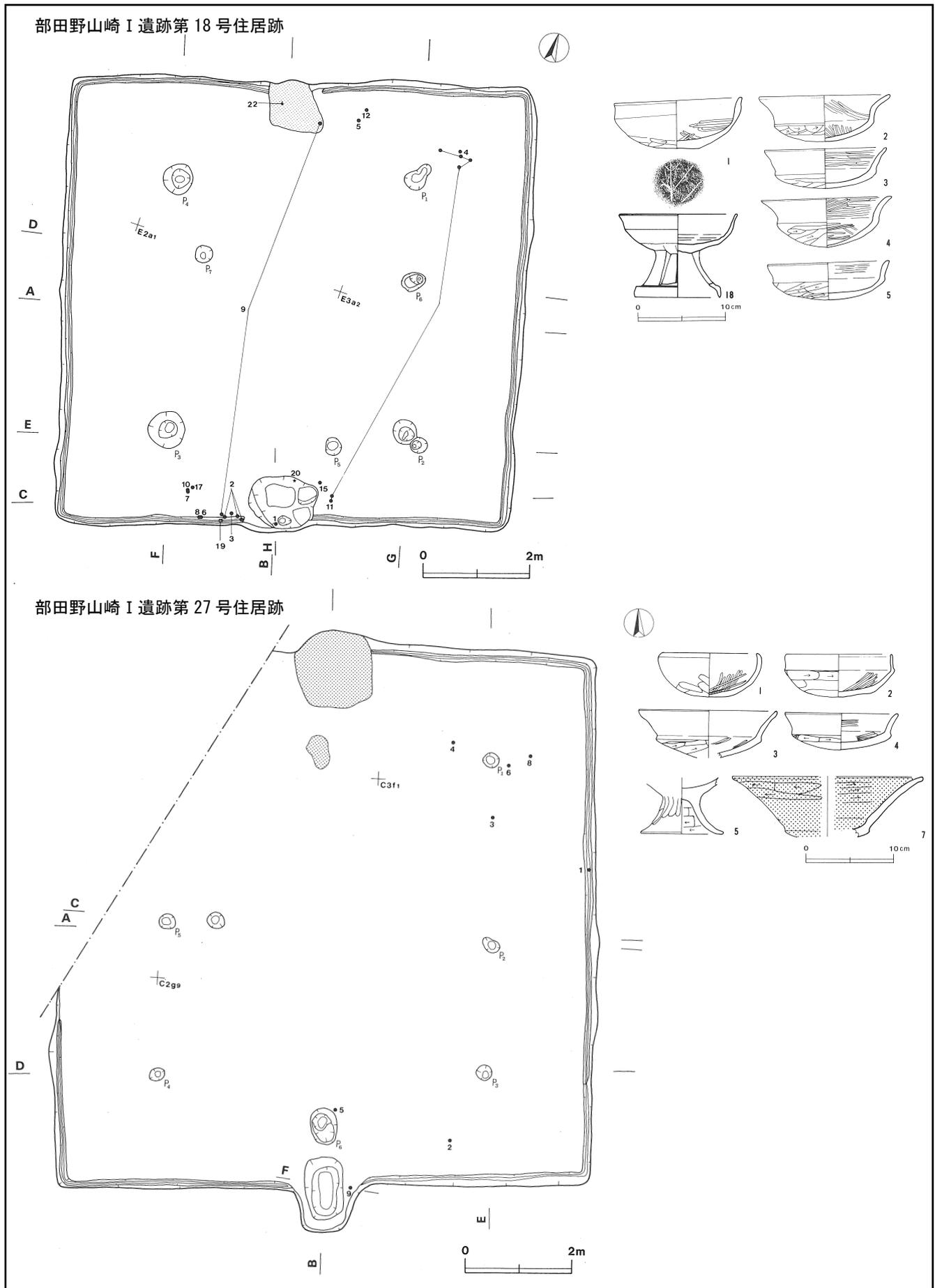
鷹ノ巣遺跡よりも規模が大きな住居跡であることがわかる。また、鷹ノ巣遺跡とほぼ同時期の古墳時代後期前半の部田野山崎 I 遺跡の大型住居跡には「張り出し貯蔵穴」が付設され、後期後葉の宮後遺跡では付設されないといった違いがみられる。

「張り出し貯蔵穴」の住居跡 「張り出し貯蔵穴」の住居跡については、鶴間正昭が集成と検討を行っている[鶴

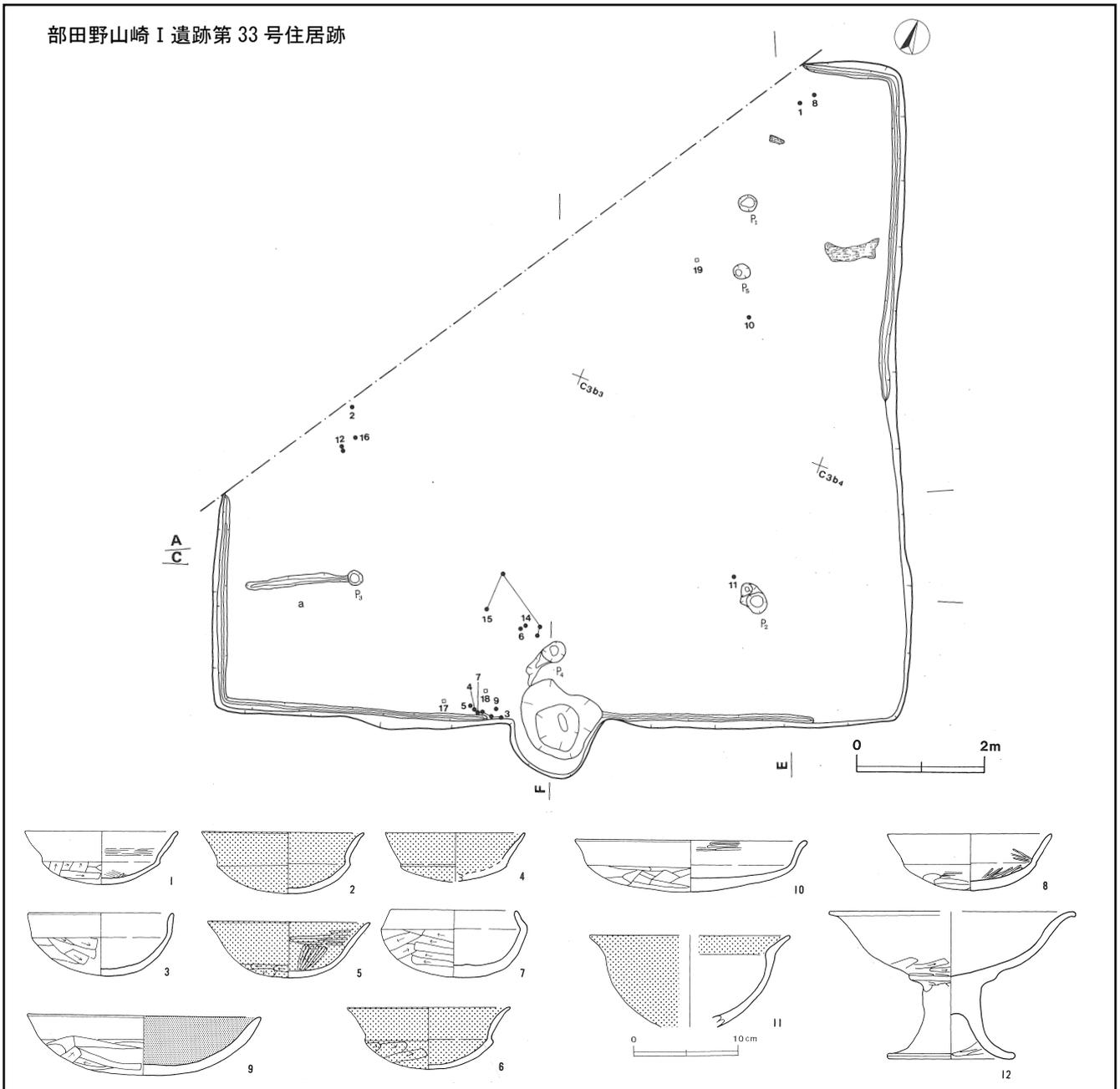
宮後遺跡では、古墳時代後期の住居跡が 6 基確認されている[大久保 2012][根本 2017](第 4 表)。うち 3 基が長軸長 7 m 以上の大型住居跡で、第 2 号住居跡は 8.2 m, 第 18 号住居跡は 8.4 m を測る。時期は古墳時代後期後葉と推定される。住居構造では、3 基の

住居跡とも「張り出し貯蔵穴」は確認されていないが、調査区の関係から竪穴部の一部しか調査が実施されていないため、南壁中央部が調査されていない第 20 号住居跡では存在の有無を判断できない。

以上のように、鷹ノ巣遺跡の近隣の集落でも大型住居跡が存在しており、2 遺跡とも鷹ノ巣



第 78 図 部田野山崎 I 遺跡の大型住居跡と主な出土遺物 1 (住居跡の縮尺は 1/100, 土器は 1/6)



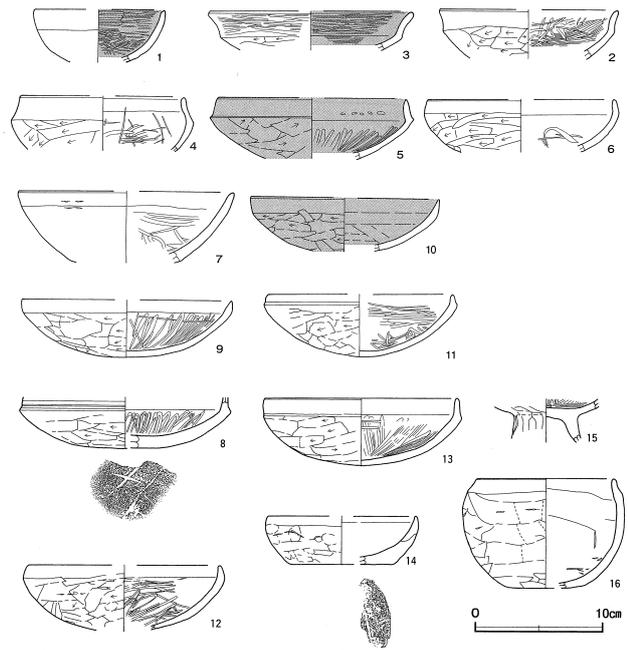
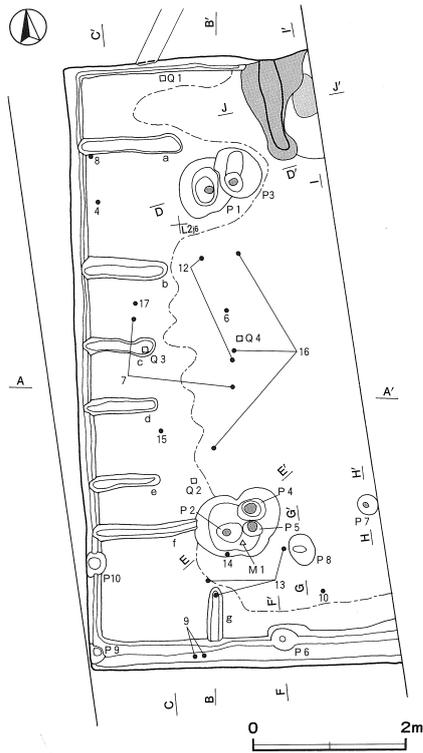
第 79 図 部田野山崎 I 遺跡の大型住居跡と主な出土遺物 2 (住居跡の縮尺は 1/100, 土器は 1/6)

間 2011]。それによると、大型の竪穴住居跡に付設される傾向が強いが、中型の竪穴住居跡にも認められること、6世紀代の竪穴住居跡に構築され、7世紀前半以降は検出例が減少すること、「集落内での張り出し貯蔵穴を持つ竪穴住居の出現や分布の特徴には、一時期に集中して構築されることはなく、各時期に1～数軒が、他の竪穴住居と併存するあり方が一般的であること、近接する竪穴住居は主軸方向を揃えることも多く、集落の中心的地域に構築されるケースが目立つこと、そして、集落の初現段階や集落の大規模化が図られる段階に顕在化すること、他を凌駕する規模の張り出し貯蔵穴を伴う竪穴住居

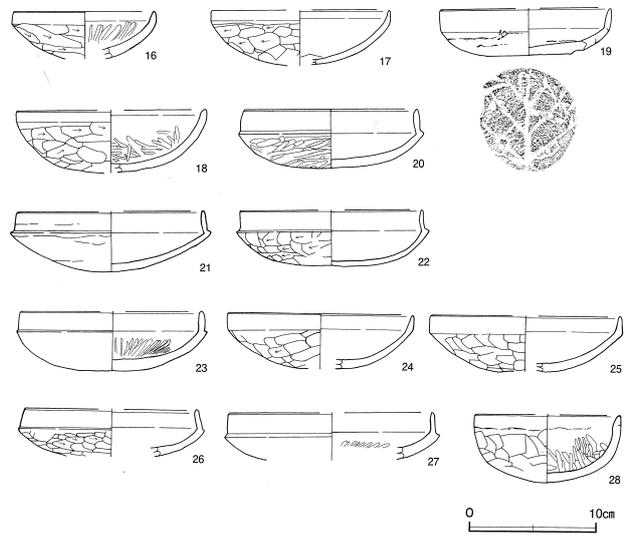
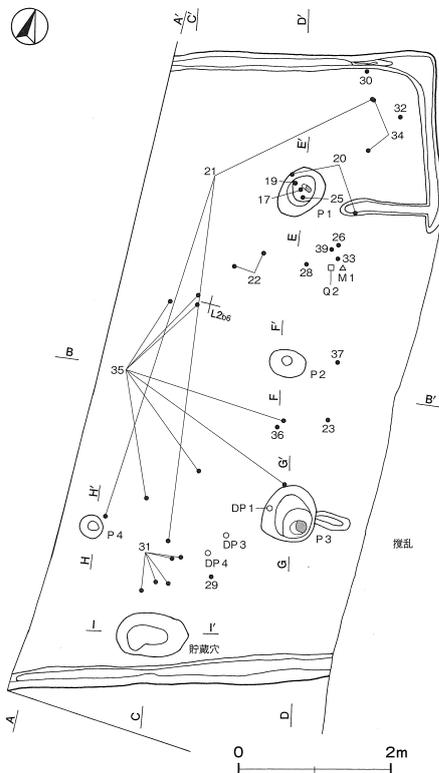
が、集落の中で1軒だけ検出される例が各地に認められることなど」を挙げている。

また、「張り出し部を伴う独特の形態や集落内の分布状況などからすれば、張り出し貯蔵穴を有する竪穴住居は、集落の有力者層の居住施設の可能性は高く、少なくとも集落内で中心的役割を担った集団の居住施設であったことは確実視される。また、中心的な分布地域を有し、特徴的な住居構造を共有することからすれば、集落の中で強い絆で結ばれた集団の居住施設で、集団を象徴する居住施設であった可能性も考慮される。そして、その構造的特徴や集落内の特定の竪穴住居への付設などから

宮後遺跡第2号住居跡

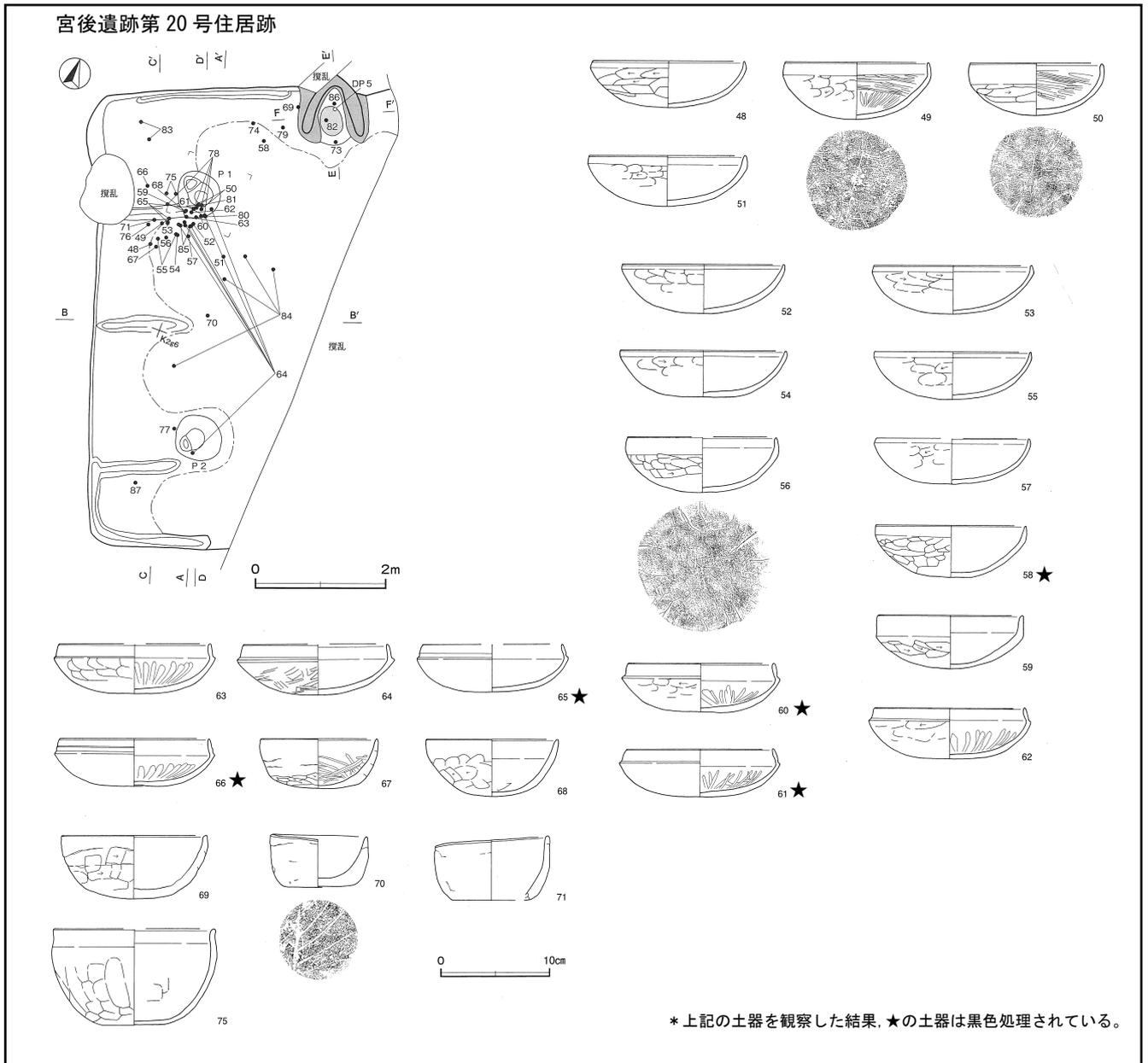


宮後遺跡第18号住居跡



\* 上記の土器を観察した結果、すべての土器が黒色処理されている。

第80図 宮後遺跡の大型住居跡と主な出土遺物1 (住居跡の縮尺は1/100, 土器は1/6)



第 81 図 宮後遺跡の大型住居跡と主な出土遺物 2 (住居跡の縮尺は 1/100, 土器は 1/6)

推量して、張り出し貯蔵穴を有する竪穴住居は、出自や系統を共有する強固な韌帯で結ばれた集団を象徴するような居住施設との見解も成り立ち得るのかもしれない。その前提に立てば、規模の違う竪穴住居に付設されることもスムーズに理解できる」としている。

さらに、「張り出し貯蔵穴を有する竪穴住居は、集落内で中心的役割を担った集団の居住施設であった蓋然性は高いが、一部の有力階層のみに許された住居形態と問題意識を先鋭化すれば無理も生じよう。張り出し貯蔵穴ではなく違うタイプの貯蔵穴を持つ竪穴住居にも、規模や構造にバラエティーが認められ、そこに集団の出自や系統を辿れるとすれば、多様な集団による集落構成が推

測される古墳時代後期集落の構造解明の一視点にはなり得る。張り出し貯蔵穴を有する超大型の竪穴住居は、有力者層の居住形態の可能性は想像に難くない。しかし、総体としてみれば、一部の有力階層に限定される居住施設というより、同種の施設を共用した密接な関係を持った集団の居住施設で、他の竪穴住居の集団とも共存する形で、古墳時代後期の集落が構成されていたと理解する方が実態に近いのでなからうか」と指摘する。

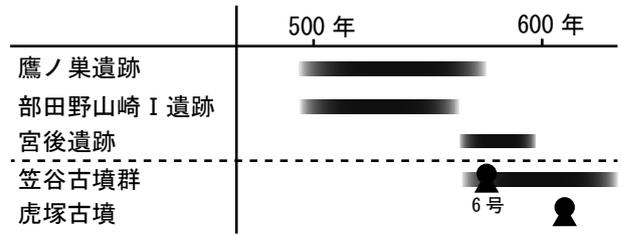
これらの指摘された項目は、当然ながら鷹ノ巣遺跡にも当てはまるものが多い。鷹ノ巣遺跡や部田野山崎 I 遺跡の古墳時代の集落をみると、前期から中期前葉にかけて住居跡が存在するが、一端断絶して後期になって新た

に集落が構成されている。この点については、「集落の初現段階や集落の大規模化が図られる段階に顕在化すること」に合致する。

また、「張り出し貯蔵穴」を付設する住居跡に大型住居跡と中型住居跡があり、そのことについて「出自や系統を共有する強固な鞆帯で結ばれた集団を象徴するような居住施設」とすれば「規模の違う堅穴住居に付設されることもスムーズに理解できる」としているが、鷹ノ巣遺跡でも大型住居跡と中型住居跡があり、それらの主軸方位を見ると、大型と中型ではほぼ同じ方位をとることは鶴間の説を裏付けるものと言えよう。これと同じようなことが鷹ノ巣遺跡の南側の台地上に位置する三反田下高井遺跡<sup>註1</sup>でも確認できた(第5表)。

さらに、部田野山崎 I 遺跡では、同時期に大型住居跡で「張り出し貯蔵穴」を付設しないものもあるが、このことについては、付設するものと主軸方位も違うことから、「他の堅穴住居の集団とも共存する形」を示しているとも考えられる。同じように宮後遺跡についても大型住居跡に付設しないことから、「他の堅穴住居の集団」の存在が考えられる。宮後遺跡については大型住居跡の時期が6世紀後葉となることから、この時期に新たな集団が出現したとも推測される。そうすると、鷹ノ巣遺跡で唯一古墳時代後期後葉の時期に比定できる第86号住居跡の主軸方位だけが、他の住居跡と違う理由も理解できる。

**古墳との関係** 最後に、集落と古墳との関係について触れると、鷹ノ巣遺跡から西に約500mの場所に虎塚古墳、約800mの場所に笠谷古墳群が存在する(第2図)。虎塚古墳は全長約56mの前方後円墳で時期は7世紀前葉、笠谷古墳群は6世紀後葉から7世紀前半にかけて築造されたと考えられる古墳群で、前方後円墳の第6号墳<sup>註2</sup>は全長43mで時期は6世紀後葉とされる。2015・2016年度の試掘調査[佐々木<sup>他</sup>2017]では、虎塚古墳周辺で古墳時代後期と考えられる住居跡が2基、笠谷古墳群周辺では全く確認できないことから、古墳周辺には集落が存在せず、この地域が墓域だったことが確認された。よって、これらの古墳に最も近い集落として鷹ノ巣遺跡や宮後遺跡、部田野山崎 I 遺跡が該当することになる。時期的には、鷹ノ巣遺跡と部田野山崎 I 遺跡は、笠谷古墳群築造直前の時期に集落が終わり、宮後遺跡はほぼ同時期となる。そして、虎塚古墳築造直前に宮後遺跡も終わり



第82図 鷹ノ巣遺跡周辺の集落と古墳の時期

を告げる。このことについて、先述の住居形態による集団の違いを重ね合わせると、鷹ノ巣遺跡や部田野山崎 I 遺跡とは違う集団が新たに宮後遺跡を形成する時期に、笠谷古墳群が出現することになる。さらに宮後遺跡の集落が終わると入れ替わるように、笠谷古墳群とは別の新たな場所に装飾古墳という他地域との関係が深い虎塚古墳が出現する(第82図)。このように、笠谷古墳群出現期の鷹ノ巣遺跡周辺の集落変遷と、虎塚古墳出現期に近隣の集落が消滅していることは、これらの古墳の出現を考える上で興味深い事象といえよう。

**註1** 三反田下高井遺跡では、古墳時代後期と思われる住居跡が68基確認されている。うち長軸長が7m以上の大型住居跡は7基ある(ただし鍛冶遺構は除く)。7基の時期は古墳時代後期前半と推定され、「張り出し貯蔵穴」は6基に付設される。また、「張り出し貯蔵穴」を付設する住居跡は大型住居跡の他に5m台の第131号住居跡があり、主軸方位が大型住居跡の第136A号住居跡と一致する。

**註2** 2016年度の調査については2018年3月に刊行予定。

#### 引用文献

- 井上義安 1990 『那珂湊市部田野山崎遺跡 山崎工業団地土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘記録』那珂湊市山崎遺跡群発掘調査会  
 大久保隆史 2012 『宮後遺跡 部田野西原遺跡 一般国道245号道路拡幅事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第354集 財団法人茨城県教育財団  
 佐々木義則<sup>他</sup> 2017 『平成28年度ひたちなか市内遺跡発掘調査報告書』ひたちなか市教育委員会・公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社  
 鶴間正昭 2011 『堅穴住居にみられる張り出し貯蔵穴』『東京考古』29 東京考古談話会 83-133頁  
 根本康弘 2017 『宮後遺跡2 一般国道245号道路改築事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第422集 公益財団法人茨城県教育財団  
 宮崎修士 1995 『常陸那珂有料道路事業地内埋蔵文化財調査報告書 山崎遺跡』茨城県教育財団文化財調査報告第105集 財団法人茨城県教育財団

## 5 古墳時代遺物観察表

凡例:法量に記載した部位の計測値の単位は「cm」である。括弧内の数値は、復元された口径や底径、最大径、または残存高を示す。

## 第69号住居跡

1 台帳:P34～39・52・55・57・63～65・70・71, No.4・7・9～12 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部90%, 胴部～底部50% 法量:口径14.8, 胴径16.1, 器高21.6, 底径7.3 色調:外面黄橙～黄灰～暗褐色。内面浅黄橙色 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ 使用痕:— 備考:外面胴部器面にスス状物附着。

2 台帳:P66, No.9 材質:土師器 器種:甕 残存:40% 法量:口径(17.3), 胴径(19.1), 器高(22.9), 底径(7.4) 色調:外面明赤褐～橙～黒色。胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後, 胴部ヘラナデ。胴部下位～底部ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

3 台帳:No.3・7・10 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20%, 胴部上位10% 法量:口径(21.0), 器高(9.0) 色調:内外面とも橙～黒色。胎土:砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:内外面とも口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

4 台帳:P11・25～29, No.4・5・7・10・11・14 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁～胴部中位20% 法量:口径(17.6), 器高(13.5) 色調:内外面とも橙～暗褐色 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラ削り, 胴部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

5 台帳:P4・8・9, No.3・7 材質:土師器 器種:甕 残存:70% 法量:口径17.4, 胴径16.9, 器高16.7, 底径6.8 色調:外面橙～黒褐色。内面橙～にぶい橙色 胎土:砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り後ヘラナデ, 底部ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

6 台帳:P68 材質:土師器 器種:甕 残存:ほぼ100% 法量:口径11.5, 胴径12.2, 器高15.1, 底径5.0 色調:内外面橙～褐～黒褐～黒色 胎土:砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り後ヘラナデ, 底部ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

7 台帳:P66 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部中位～底部20% 法量:(11.0), 底径(7.2) 色調:外面赤褐～橙～黒色。内面橙色 胎土:砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:内面器面の一部が剥離している。 備考:—

8 台帳:P21・23・24・27・30・33・43・46・49・50・51・58・62, No.5・6・8～12 材質:土師器 器種:鉢 残存:口縁～胴部80%, 底径100% 法量:口径24.2, 器高15.5, 底径8.7 色調:外面橙～浅黄橙色。内面にぶい橙～灰～暗褐色。胎土:小石(白微), 礫(白少), 砂(白多, 透多, 黒微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラナデ, 胴部横方向ヘラ削り, 底部ヘラ削り。内面口縁部ヘラ削り, 胴部ヘラナデ。 使用痕:内外面とも器面が摩滅している。 備考:—

9 台帳:P22 材質:土師器 器種:高杯 残存:杯部30% 法量:口径(32.4), 器高(10.3) 色調:外面赤～橙～暗褐色。内面赤～にぶい橙～黒褐色。胎土:礫(白微, 灰微), 砂(白多, 透多, 黒少, 赤少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部上位ヨコナデ, 中位～体部ヘラ削り。内面ヘラナデ。内外面口縁部に赤彩。 使用痕:— 備考:—

10 台帳:P3 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(13.2), 器高7.5 色調:内外面とも赤～橙色 胎土:砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁～体部上位ヨコナデ, 中～下位ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ。体部ヘラナデ。外面口縁～体部上位と内面口縁～体部中位に赤彩。 使用痕:— 備考:—

11 台帳:No.4・14 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(12.8), 器高(3.9) 色調:内外面とも赤～橙色 胎土:砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面に口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内面ヨコナデ。内外面とも赤彩。 使用痕:— 備考:外面器面がやや摩滅している。

12 台帳:P2・5・44 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径13.3, 器高4.4 色調:内外面とも黄灰～黒色 胎土:砂(白少, 透少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部横方向ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:口縁端部が摩滅している。 備考:—

13 台帳:P7, No.7 材質:土師器 器種:杯 残存:20% 法量:口径(14.0), 器高4.9 色調:内外面とも橙色。胎土:砂(白少, 透少, 黒微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。 使用痕:— 備考:—

14 台帳:P10, No.2 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(14.6), 器高(5.5) 色調:外面赤～橙色。内面赤～にぶい橙色。胎土:砂(白多, 透多, 黒微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。外面口縁～体部上位と内面口縁～体部中位に赤彩。 使用痕:— 備考:外面体部器面が摩滅している。

15 台帳:P60・67・69 材質:土師器 器種:杯 残存:口縁部40% 法量:口径(16.2), 器高(5.1) 色調:内外面とも赤色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部?。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ?。外面口縁部と内面に赤彩。 使用痕:— 備考:外面体部器面が摩滅している。

16 台帳:P14～17, No.1・4・6・7 材質:土師器 器種:杯 残存:20% 法量:口径(23.0), 器高(6.0) 色調:内外面とも赤～暗赤褐色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内面全体に赤彩。 使用痕:— 備考:外面体部の一部にスス状物附着。

17 台帳:No.15 材質:土師質 種類:支脚 残存:— 法量:長(9.2), 幅3.9, 厚3.0 色調:橙色 胎土:砂(白多, 透多, 黒少) 技法等:ヘラナデ。円柱状の粘土棒に粘土を貼り付け, 面を作りだしている。 使用痕:二次焼成をうけている。 備考:—

18 台帳:S4 材質:石炭 種類:玉? 法量:長1.3, 幅1.0, 厚0.5, 重量0.59g 備考:孔は両側から穿孔。

19 台帳:S3 材質:砂岩 種類:敲石 法量:長15.0, 幅15.5, 厚4.2, 重量1304.19g 備考:敲打による凹みA・Bの2カ所。

20 台帳:S2 材質:砂岩 種類:台石 法量:長17.0, 幅11.1, 厚6.3, 重量1931.55g 備考:砥面A・Bの二面。

## 第71号住居跡

1 台帳:P18 材質:土師器 器種:甕 残存:90% 法量:口径18.6, 胴径29.7, 器高33.7, 底径8.2 色調:外面橙～にぶい橙～赤褐～暗褐～黒褐。内面赤褐～暗褐色 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ?, 胴部ヘラ削り後丁寧なヘラナデ, 底部ヘラ削り?。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。 使用痕:外面胴部下位～底部と内面口縁部の器面が摩滅している(カマドでの使用痕)。 備考:—

2 台帳:P17・18, No.14 材質:土師器 器種:甕 残存:70% 法量:口径(19.3), 器高26.9, 底径7.3 色調:外面橙～黄橙～暗褐色～黒色。内面橙～暗褐色。胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ・ナデ。 使用痕:口縁端部は90%欠失。内外面とも胴部下位が摩滅している。 備考:器形のゆがみ大きい。

#### IV 古墳時代の遺構と遺物

- 3 台帳:P10・14, №12 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁~胴部20%, 底部100% 法量:口径(14.8), 器高23.1, 底径7.0 色調:外面橙~黒褐色。内面黒褐色。胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴~底部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕:— 備考:内面器面の一部が剥離している。
- 4 台帳:P12, №12・13・14 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁~胴部中位80% 法量:口径14.8, 器高(13.8) 色調:内外面とも橙~にぶい橙~暗褐~黒褐色 胎土:小石(白微, 灰微), 礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, その他ヘラナデ。使用痕:— 備考:器面調整が荒い土器。
- 5 台帳:P17 材質:土師器 器種:甕 残存:底部20% 法量:器高(3.0), 底径(7.6) 色調:内外面とも赤~暗褐色 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。使用痕:— 備考:—
- 6 台帳:P16 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部70%, 他100% 法量:口径21.8, 器高22.0, 孔径6.0 色調:内外面とも橙色 胎土:小石(白微), 礫(白微, 灰微, 赤微), 砂(白多, 透多, 黒少, 赤微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部上~中位ヘラナデ, 下位ヘラナデ。使用痕:あまり見られない。備考:—
- 7 台帳:№11 材質:土師器 器種:高杯 残存:脚部10% 法量:器高(5.0), 裾径(10.0) 色調:外面黄橙~暗褐色。内面黄橙色 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面上位ヘラナデ, 下位ヨコナデ。内面上位ヘラナデ, 下位ヨコナデ。使用痕:— 備考:—
- 8 台帳:P1 材質:土師器 器種:杯 残存:80% 法量:口径12.6, 器高4.8 色調:内外面とも黒褐色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ, 中央のみ一方向にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。使用痕:口縁部全体が摩滅して。備考:—
- 9 台帳:P5 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(14.2), 器高(3.2) 色調:内外面とも黒褐色 胎土:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内面口縁~体部上位ヨコナデ, 中位~下位ヘラナデ。内外面とも黒色処理。使用痕:— 備考:—
- 10 台帳:P11・13・14 材質:土師器 器種:杯 残存:ほぼ100% 法量:口径14.6, 器高5.6 色調:外面橙~黄橙~褐~暗褐色~黒色。内面黄橙~褐~黒褐色。胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ後, ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。使用痕:— 備考:二次焼成を受けて, 器面の一部が剥離している。内外面とも器面が荒れている。
- 11 台帳:P3 材質:土師器 器種:杯 残存:90% 法量:口径14.4, 器高4.9 色調:内外面とも黒赤~褐~黒褐色。胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内面口縁~体部上位ヨコナデ, 中~下位ヘラナデ後若干のヘラミガキ。外面口縁部と内面口縁~体部上位に赤彩。使用痕:— 備考:—
- 12 台帳:P7, №3・4・9 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(13.3), 器高4.8 色調:内外面ともぶい褐~暗褐色 胎土:砂(白少, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。使用痕:— 備考:内面体部器面の一部が剥離している。
- 13 台帳:P10・11 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(13.4), 器高5.8 色調:内外面とも暗赤褐~暗褐色 胎土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内面ヨコナデ。使用痕:口縁部が摩滅している。内面体部の器面の一部が剥離している。備考:—
- 14 台帳:P9 材質:土師質 種類:土錘 法量:長3.9, 最大径3.5, 孔径0.7, 重量52.38g 備考:—
- 15 台帳:I1 材質:鉄 種類:鉄鏃? 法量:長4.3, 幅0.7 備考:木質あり。茎部か。
- 16 台帳:S1 材質:滑石 種類:紡錘車 法量:上径4.2, 下径2.7, 孔径

- 0.7, 厚1.8 重量45.45g 色調:暗青灰色 備考:—
- 17 台帳:S9 材質:コハク 種類:玉? 法量:長1.3, 幅1.1, 厚0.4, 重量0.32g 備考:孔があるが貫通はしていない。
- 18 台帳:№3 材質:石炭 種類:玉? 法量:長1.8, 幅1.3, 厚1.0, 孔径0.2, 重量1.80g 備考:—
- 19 台帳:S8 材質:石炭 種類:玉? 法量:長2.2, 幅1.9, 厚1.8, 孔径0.2 重量5.29g 備考:—
- 20 台帳:№3 材質:石炭 種類:— 法量:長2.6, 幅2.1, 厚0.6, 重量2.358g 備考:—
- 21 台帳:S2 材質:珪質片岩 種類:砥石 法量:長11.6, 幅3.0, 厚5.5, 重量213.44g 備考:砥面A・B・C・Dの四面。
- 22 台帳:S7 材質:軽石 種類:砥石? 法量:長9.1, 幅10.0, 厚4.0, 重量77.87g 備考:砥面Aの一面か?

#### 第73号住居跡

- 1 台帳:P 34・49 ~ 52・66・83・84・102, №6・13・15・18・26 ~ 28・30 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁~胴部上位20%, 中~下位80% 法量:口径(19.5), 器高17.6, 底径7.5 色調:外面橙~にぶい黄橙~暗褐色。内面にぶい黄橙~暗褐色。胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部上位ヘラナデ後ヘラナデ, 下位~底面ヘラナデ。内面ヘラナデ。使用痕:外面胴部器面が摩滅し, 二次焼成をうけている。備考:器形が歪んでいる。
- 2 台帳:P 47・49・51, №26 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部30% 法量:口径(20.0), 器高(7.3) 色調:内外面ともにぶい黄橙色 胎土:小石(白微), 礫(白少), 砂(白多, 透多, 灰少) 焼成:良好 技法等:外面に口縁部ヨコナデ, 下位のみヨコナデ後ヘラナデ, 胴部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕:— 備考:—
- 3 台帳:P 2・42, №3・27 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(21.0), 器高(7.4) 色調:内外面赤褐色 胎土:砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部上位ヨコナデ, 下位ヨコナデ後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕:内面口縁部器面が摩滅している。備考:—
- 4 台帳:P 54・85 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(16.4), 器高(5.6) 色調:内外面橙~灰褐~暗褐色 胎土:小石(白微, 灰微), 礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕:— 備考:二次焼成をうけている。
- 5 台帳:P 79・92, №30 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部10%, 底部100% 法量:器高(11.2), 底径7.0 色調:外面橙~にぶい赤褐色。内面橙色 胎土:礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面不明。内面ヘラナデ。使用痕:外面器面が非常に摩滅している。備考:—
- 6 台帳:P 40・50・52・53, №13・15・26・30 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部10%, 底部100% 法量:器高(7.1), 底径8.6 ~ 9.2 色調:外面橙~暗褐色。内面暗褐色 胎土:小石(白微), 礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面胴部ヘラナデ後ヘラナデ, 底部ヘラナデ。内面ヘラナデ。外面底部に棒状のものがめり込んだ痕がみられる。使用痕:外面が二次焼成をうけている。備考:—
- 7 台帳:P 65・97・98・100, №10 材質:土師器 器種:甕 残存:底部100% 法量:器高(9.0), 底径9.0 色調:外面橙~にぶい橙色。内面黄橙~灰褐色。胎土:小石(灰微), 礫(白少), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面ヘラナデ。内面ヘラナデ 使用痕:外面器面が非常に摩滅している。備考:—
- 8 台帳:P 10, №19 材質:土師器 器種:甕 残存:底部100% 法量:器高(3.9), 底径(9.0) 色調:外面黒褐色。内面橙色 胎土:礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。使用痕:外面が二次焼成をうけている。備考:—
- 9 台帳:P 15, №4 材質:土師器 器種:甕 残存:底部60% 法量:器

高(1.8),底径7.8 色調:外面赤褐色。内面橙色 胎土:礫(白少),砂(白多,透多,赤微) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:内外面とも器面が摩滅している。 備考:—

10 台帳:No.3・4 材質:土師器 器種:甕 残存:底部60% 法量:器高(2.8),底径6.8 色調:外面暗赤褐～黒色。内面暗赤褐色 胎土:砂(白少,透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

11 台帳:P 67, No.9 材質:土師器 器種:甕 残存:底部100% 法量:器高(3.2),底径6.5 色調:内外面暗褐色 胎土:礫(白微),砂(白微,透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

12 台帳:P 6 材質:土師器 器種:甕 残存:底部60% 法量:器高(2.8),底径7.8 色調:外面橙～黒色。内面赤褐色 胎土:小石(白微),礫(白微,灰微),砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

13 台帳:P 3, No.1・3 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(12.5),器高(7.7) 色調:内外面暗褐～黒褐色 胎土:砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,胴部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ,胴部ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

14 台帳:P 100, No.30 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部20%,底部100% 法量:器高(9.4),底径7.0 色調:外面橙～にぶい黄橙～暗褐～黒色。内面にぶい黄橙～黒色。 胎土:礫(白少),砂(白多,透多,黒少) 焼成:良好 技法等:外面不明。内面ヘラナデ。 使用痕:外面器面が非常に摩滅している。 備考:—

15 台帳:P 100, No.3・6・15・30 材質:土師器 器種:壺 残存:口縁部90%,胴部上～中位60% 法量:口径12.6,器高(14.1) 色調:内外面橙～暗褐色 胎土:礫(白少),砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,胴部不明。内面口縁部ヨコナデ,胴部ヘラナデ。 使用痕:内外面とも器面が非常に摩滅している。 備考:二次焼成をうけている。

16 台帳:P 25・94・106・107・108・109, No.10・21・28・32 材質:土師器 器種:甕 残存:上位70%,下位100% 法量:口径24.5,器高21.0,孔径7.5 色調:外面橙～黒色。内面橙色 胎土:砂(白少,透多,黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,胴部上～中位ヘラナデ,下位ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ,胴部上～中位ヘラナデ・ヘラミガキ,下位ヘラ削り。 使用痕:内面胴部器面がマダラ状に剥離している。 備考:—

17 台帳:P 17～19・32・33・41・43・44・46・48・49・51～53・59～61・76・103, No.3・6・8～10・13・17・18・24～26・28・30・32 材質:土師器 器種:甕 残存:70% 法量:口径26.2,器高22.7～23.3,孔径9.5 色調:外面赤褐～橙～黄橙～黒色。内面橙色。 胎土:礫(白少,灰少),砂(白多,透多,灰少,赤少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ,胴部ヘラナデ。 使用痕:内面胴部器面がマダラ状に剥離している。 備考:—

18 台帳:P 96 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部10% 法量:口径(26.0),器高(7.3) 色調:内外面橙～暗褐色 胎土:砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,胴部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ,胴部ヘラナデ後ヘラミガキ。 使用痕:— 備考:—

19 台帳:No.4・10・20 材質:土師器 器種:甕 残存:底部20% 法量:器高(8.6),孔径(9.0) 色調:外面にぶい黄橙色 胎土:小石(白微),砂(白少,灰微),砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。直径6mmのブリッチ用の孔が2カ所ある。 使用痕:— 備考:—

20 台帳:P77, No.13・28 材質:土師器 器種:甕 残存:10% 法量:器高(10.0),穴径(8.5) 色調:内外面橙色 胎土:礫(白微),砂(白多,透多,赤少) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ・ヘラミガキ。 使用痕:— 備考:—

21 台帳:P26 材質:土師器 器種:鉢? 残存:口縁部10% 法量:口径(20.2),器高(5.4) 色調:外面橙色。内面にぶい黄橙～黒色 胎土:砂(白

多,透多) 焼成:良好 技法等:内外面ともに口縁部ヨコナデ,胴部ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

22 台帳:P24, No.6・21・25・28・31 材質:土師器 器種:鉢 残存:40% 法量:口径(12.6),器高6.5 色調:内外面にぶい黄橙～黒色 胎土:砂(白多,透多,黒少) 技法等:外面口縁部ヨコナデ,体部ヘラ削り。内面口縁部～体部上位ヨコナデ,中～下位ヘラナデ。 使用痕:— 備考:—

23 台帳:No.5 材質:土師器 器種:杯 残存:20% 法量:口径(14.0),器高(5.2) 色調:内外面橙色 胎土:砂(白多,透多,黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ?,体部ヘラ削り?。内面口縁部ヨコナデ,対部ヘラミガキ? 使用痕:内外面とも器面が摩滅している。 備考:—

24 台帳:P1, No.1・3・5 材質:土師器 器種:杯 残存:20% 法量:口径(11.8),器高4.5 色調:内外面橙～にぶい黄橙色 胎土:礫(白微),砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,体部ヘラ削り。内面口縁部～体部上位ヨコナデ,体部放射状にヘラミガキ。 使用痕:— 備考:—

25 台帳:P37・38, No.13 材質:土師器 器種:杯 残存:口縁部60%,体部100% 法量:口径12.6,器高3.9 色調:内外面橙色 胎土:小石(白微),礫(白微),砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ,体部ヘラミガキ。 使用痕:外面体部が摩滅している。 備考:—

26 台帳:P35 材質:土師器 器種:杯 残存:20% 法量:口径(12.9),器高(3.8) 色調:内外面赤褐色 胎土:砂(白少,透少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラ削り,体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ,体部ヘラミガキ。 使用痕:— 備考:—

27 台帳:P71 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(14.0),器高(4.9) 色調:内外面橙色 胎土:礫(白微,赤微),砂(白少,透多,黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後若干のヘラミガキ,体部ヘラミガキ。 使用痕:— 備考:—

28 台帳:P28・29, No.10・13 材質:土師器 器種:杯 残存:40% 法量:口径(14.2),器高4.5 色調:内外面橙色 胎土:砂(白少,透多,黒少,赤微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ,体部ヘラミガキ。 使用痕:— 備考:内外面とも器面の一部が剥離している。

29 台帳:No.32 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(14.7),器高(5.5) 色調:内外面黄橙～黒褐色 胎土:砂(白少,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ,体部ヘラミガキ。 使用痕:二次焼成をうけている。 備考:—

30 台帳:P7・12 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(14.8),器高(4.0) 色調:内外面橙色 胎土:砂(白少,透多,黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,体部ヘラ削り?。内面口縁部ヨコナデ,体部ヘラナデ? 使用痕:内外面とも器面が摩滅している。 備考:—

31 台帳:P31・41・69 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(14.0),器高(4.5) 色調:内外面浅黄色 胎土:砂(白少,透多,黒少,赤少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,体部不明。内面口縁部ヨコナデ?,体部ヘラミガキ。 使用痕:内外面とも器面が摩滅している。 備考:—

32 台帳:P70, No.3・4・6・9 材質:土師器 器種:杯 残存:20% 法量:口径(12.7),器高(3.7) 色調:外面灰褐色,内面にぶい黄橙～灰褐色 胎土:砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ,体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:— 備考:—

33 台帳:P14 材質:土師質 器種:手づくね土器 残存:100% 法量:口径2.2,高1.7～2.1,底径2.0 色調:内外面にぶい黄橙色 胎土:砂(白少,透少) 技法等:内外面ともユビナデ。 使用痕:— 備考:—

34 台帳:P30 材質:土師質 種類:土錘 法量:長3.9,最大径(3.7),孔径0.7,重量25.95 g 備考:残存50%

35 台帳:P 99 材質:土師質 種類:— 法量:長5.9,径1.1 備考:—

#### IV 古墳時代の遺構と遺物

- 36 台帳:P 93 材質:土師質 種類:支脚 法量:長120, 幅42, 厚47 色調:橙～にぶい黄橙色 胎土:砂(白多, 透多) 技法等:ユビナデ 使用痕:二次焼成をうけている。備考:—
- 37 台帳:No 15 材質:鉄 種類:刀子 法量:長4.1, 刃部幅1.0, 刃部厚0.3 備考:柄部の木質が残存している。
- 38 台帳:No 20 材質:軽石 種類:砥石? 法量:長4.1, 幅3.4, 厚1.7, 重量5.41 g 備考:被熱している。
- 39 台帳:No 15 材質:石炭 種類:玉? 法量:長1.9, 幅1.6, 厚0.6, 孔径0.2, 重量1.86 g 備考:孔は貫通していない。
- 40 台帳:No 32 材質:石炭 種類:玉? 法量:長2.0, 幅1.5, 厚0.7, 孔径0.2, 重量2.02 g 備考:孔は貫通していない。
- 41 台帳:S 9 材質:石炭 種類:— 法量:長3.5, 幅2.7, 厚0.9, 重量5.67 g 備考:—
- 42 台帳:S 6 材質:石炭 種類:— 法量:長4.0, 幅3.3, 厚1.8, 重量13.81 g 備考:—
- 43 台帳:S 8 材質:石炭 種類:— 法量:長3.6, 幅1.8, 厚0.9, 重量4.36 g 備考:—
- 44 台帳:S 5 材質:石炭 種類:— 法量:長2.9, 幅2.0, 厚1.3, 重量6.24 g 備考:—
- 45 台帳:S 7 材質:石炭 種類:— 法量:長2.5, 幅1.2, 厚0.6, 重量1.25 g 備考:—
- 46 台帳:S 4 材質:砂岩 種類:敲石 法量:長11.8, 幅7.2, 厚4.8, 重量523.88 g 備考:敲打による凹みA・Bの二カ所。
- 47 台帳:S 1 材質:砂岩 種類:敲石 法量:長9.1, 幅6.5, 厚3.4, 重量342.24 g 備考:敲打による凹みAの1カ所。被熱している。
- 48 台帳:No 32 材質:砂岩 種類:敲石・台石 法量:長7.2, 幅4.8, 厚5.0, 重量222.83 g 備考:敲打による凹みAの1カ所と砥面Bの一面。砥面には鉄サビが付着する。

#### 第76号住居跡

- 1 台帳:P 10 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部90% 法量:口径16.8, 器高(7.2) 色調:内外面橙色 胎土:小石(白微, 灰微), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面ヨコナデ後ヘラ削り。内面ヨコナデ後ヘラミガキ, 下位ヘラ削り。使用痕:— 備考:—
- 2 台帳:P 2 材質:土師器 器種:甕 残存:100% 法量:口径17.0～19.0, 器高15.0, 底径7.2 色調:外面赤～橙～にぶい橙～暗褐～黒褐色。内面橙～にぶい橙～黒褐色 胎土:小石(白微), 礫(白微), 砂(白多, 透多, 灰少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 胴部ヘラナデ。使用痕:外面胴部の器面が摩滅し, 二次焼成をうけている。備考:器形が歪んでいる。
- 3 台帳:P 3 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部中位～底部100% 法量:器高(9.4), 底径7.0 色調:内外面にぶい黄橙～暗褐～黒褐色 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕:内外面とも二次焼成をうけている。備考:—
- 4 台帳:P9, No 4 材質:土師器 器種:甕 残存:50% (底部のみ90%) 法量:口径27.0, 器高21.8～22.3, 孔径8.0 色調:外面橙～黒色。内面橙色。胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ, ヘラミガキ。使用痕:外面胴部器面がやや摩滅している。備考:—
- 5 台帳:P13 材質:土師器 器種:壺 残存:100% 法量:口径12.0, 器高15.0～15.3, 底径5.5 色調:外面赤橙～暗褐～黒褐色。内面赤橙色 胎土:礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部上位ヨコナデ, 中～下位ヘラ削り, 胴部上～中位ヘラ削り後ヘラナデ, 下位～底面のヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕:— 備考:—
- 6 台帳:P1 材質:土師器 器種:鉢 残存:口縁～胴部上位70%, 中位～底部100% 法量:口径11.8, 器高8.8, 底径7.0 色調:内外面橙～黒

- 褐色 胎土:小石(白微, 灰微), 礫(白少), 砂(白多, 透多, 黒少) 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ・ナデ, 底面木葉痕。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕:外面胴部下位が被熱している。備考:—
- 7 台帳:P15 材質:土師器 器種:杯 残存:90% 法量:口径10.8, 器高4.6 色調:内外面橙～黒褐色 胎土:礫(灰微), 砂(白多, 透微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ・ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。使用痕:口縁部が非常に摩滅している。備考:—
- 8 台帳:P6 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径14.4, 器高4.8 色調:内外面赤橙色 胎土:砂(白少, 透多, 赤微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。使用痕:— 備考:—
- 9 台帳:P5・7, No 4 材質:土師器 器種:杯 残存:口縁部60%, 体部20% 法量:口径15.4, 器高(4.0) 色調:内外面赤橙～黒褐色 胎土:小石(赤微), 砂(白少, 透多, 赤微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ナデ。内面ヘラミガキ。使用痕:— 備考:—
- 10 台帳:P14 材質:土師器 器種:杯 残存:90% 法量:口径13.2, 器高4.8 色調:内外面赤橙～黒褐色 胎土:礫(白微), 砂(白少, 透多, 赤微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部うず巻き状にヘラミガキ・中心にヘラミガキなし。使用痕:内外面とも器面が摩滅しており, 口縁部が欠損している。備考:11と非常に似た土器。
- 11 台帳:P4 材質:土師器 器種:杯 残存:90% 法量:口径13.2, 器高4.8 色調:内外面橙～黒褐色 胎土:砂(白少, 透多, 赤微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り?。内面口縁部ヘラミガキ, 体部うず巻き状にヘラミガキ・中心はヘラミガキなし。使用痕:内外面とも器面が摩滅していて, 口縁部が欠損している。備考:10と非常に似た土器。
- 12 台帳:No 2・7 材質:土師器 器種:杯 残存:20% 法量:口径13.8, 器高5.0 色調:内外面橙色 胎土:砂(白少, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヘラミガキ, 体部うず巻き状にヘラミガキ・中央はヘラミガキなし。使用痕:内外面とも器面が摩滅している。備考:—
- 13 台帳:No 1 材質:石炭 種類:? 法量:長2.5, 幅2.2, 厚0.7, 孔径0.3, 重量2.69 g 備考:完形品。孔は両側から穿孔している。
- 14 台帳:No 2 材質:石炭 種類:玉? 法量:長2.6, 幅2.3, 厚0.9, 孔径0.1, 重量5.06 g 備考:孔は貫通していない。
- 15 台帳:S1 材質:砂岩 種類:砥石 法量:長14.7, 幅11.5, 厚3.0, 重量722.88 g 備考:砥面Aの一面。
- 16 台帳:S3 材質:砂岩 種類:凹石 法量:長15.7, 幅14.2, 厚3.0, 重量1148.20 g 備考:敲打による凹みAの1カ所。
- 17 台帳:S2 材質:砂岩 種類:台石 法量:長20.7, 幅14.4, 厚5.4, 重量2682.85 g 備考:敲打痕が二面にみられる。

#### 第77号住居跡

- 1 P14・15・37, No 6 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部40%, 器高(29.5), 底径7.7 色調:内外面にぶい黄橙～暗褐色～黒色 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕:外面胴部下位の器面が摩滅し, スス状物が付着している。
- 2 台帳:P20・28～30・32～36, No 11 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部50%, 底部100% 法量:胴径(23.6), 器高(27.4)底径7.5 色調:外面暗褐～黒褐色。内面黄橙～暗褐色 胎土:小石(白微), 礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕:外面器面が二次焼成をうけ, スス状物が付着している。備考:—
- 3 台帳:P75, No 12 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁～胴部上位90% 法量:口径16.0, 器高(14.8) 色調:内外面赤橙～橙～にぶい橙～暗

褐色 胎土:礫(白微)、砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ,胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ,胴部ヘラナデ。 使用痕:内外面とも二次焼成をうけている 備考:—

4 台帳:P38・41・45・48 ~ 51・53・56, No.13 材質:土師器 器種:甕 残存:40% 法量:口径(16.2), 器高18.0, 底径(8.0) 色調:内外面橙~暗褐色 胎土:礫(白少)、砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。 使用痕:内外面とも器面が摩滅している。 備考:—

5 台帳:P54・55 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部下位~底部60% 法量:器高(9.5), 底径9.2 色調:内外面橙~にぶい橙色 胎土:小石(白微), 礫(白多,灰少), 砂(白多,透多) 焼成:良 技法等:外面ヘラ削り?。内面ヘラナデ。 使用痕:外面器面が非常に摩滅しており,一部剥離している。 備考:—

6 台帳:P4 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部下位~底部100% 法量:器高(7.5), 底径7.0 色調:内外面橙~にぶい橙~暗褐色 胎土:礫(白微), 砂(白多,透多,黒少) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り?内面ヘラナデ。 使用痕:外面器面が摩滅し,二次焼成をうけている。 備考:—

7 台帳:P47, No.13 材質:土師器 器種:甕 残存:底部60% 法量:器高(3.4), 底径9.0 色調:内外面にぶい橙色 胎土:礫(白多,灰少), 砂(白多,透多) 焼成:良 技法等:外面胴部不明, 底部木葉痕か。内面不明。 使用痕:内外面とも器面が非常に摩滅している。 備考:—

8 台帳:P17 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径12.8, 器高5.0 色調:内外面にぶい黄橙~黒褐~黒色 胎土:砂(白少,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:— 備考:—

9 台帳:P7・8 材質:土師器 器種:杯 残存:90% 法量:口径12.2, 器高4.8 色調:内外面にぶい黄橙~暗褐~黒褐色 胎土:砂(白多,透多,灰多,白雲母多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り。見口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:口縁端部が摩滅している。 備考:—

10 台帳:P12 材質:土師器 器種:杯 残存:90% 法量:口径12.4, 器高4.8 色調:内外面赤~橙~にぶい黄橙~暗褐~黒色 胎土:砂(白少,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:口縁端部が摩滅している。 備考:内外面とも器面が摩滅している。

11 台帳:P21 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:後期絵11.2, 器高4.8 色調:外面にぶい黄橙~黒褐色。内面黒褐色 胎土:砂(白少,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部上位ヘラナデ, 下位へらけずり。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:口縁端部が摩滅している。 備考:—

12 台帳:P24 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径12.2, 器高5.0 色調:内外面黒色処理 胎土:礫(白微), 砂(白少,透多) 焼成:良好 技法等:口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:— 備考:—

13 台帳:P27 材質:土師器 器種:津久井 残存:100% 法量:口径12.6, 器高4.6 色調:内外面暗褐~黒褐色 胎土:砂(白少,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:— 備考:—

14 台帳:P26 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径11.3, 器高5.4 色調:内外面暗褐~黒褐色 胎土:砂(白少,透多) 焼成:良好 技法等:外口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:

— 備考:—

15 台帳:P12 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(12.8), 器高3.6 色調:外面にぶい黄橙~黒褐色。内面暗褐~黒褐色 胎土:砂(白少,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部一部にヘラ削り。内面ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:— 備考:—

16 台帳:P25 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径13.2, 器高3.8 色調:外面暗褐~黒褐色。内面黒褐色。 胎土:砂(白少,透多) 焼成:良奥 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り後ヘラミガキ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部うず巻き状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:— 備考:—

17 台帳:P3, No.9 材質:土師器 器種:杯 残存:20% 法量:口径(13.8), 器高2.9 色調:内外面橙~暗褐~黒褐色 胎土:砂(白少,透多) 焼成:良好 技法等:外面ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ後若干のヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:口縁端部が摩滅している。 備考:—

18 台帳:P19, No.6・9・11 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(13.8), 器高(2.8) 色調:内外面暗褐~黒褐色 胎土:砂(白少,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り。内面ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。 使用痕:口縁端部が摩滅している。 備考:—

19 台帳:P11 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径13.8, 器高5.6 色調:外面赤~橙~暗褐~黒色。内面赤~暗褐色。 胎土:砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁~体部中位ヨコナデ, 下位ヘラナデ。外面口縁部~体部中位と内面に赤彩。 使用痕:口縁端部が摩滅している。 備考:—

20 台帳:P5 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径16.4, 器高5.2 色調:内外面赤~暗赤褐~にぶい橙~黒色。 胎土:礫(白微), 砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内外面とも赤彩。 使用痕:— 備考:内外面ともやや器面が荒れている。

21 台帳:P18 材質:土師器 器種:杯 残存:90% 法量:口径15.7, 器高5.0 色調:外面赤~橙~黒色。内面赤~黒褐色 胎土:礫(白微), 砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヘラ削り後ヨコナデ, 体部上位ヘラ削り後ヘラナデ, 下位ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。外面口縁部と内面に赤彩。 使用痕:口縁端部が摩滅し, 所々が欠けている。 備考:—

22 台帳:P31 材質:土師器 器種:杯 残存:90% 法量:口径17.2, 器高5.0 色調:内外面赤~黒褐色 胎土:砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ・一部ヘラ削り, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。内外面とも赤彩。 使用痕:— 備考:二次焼成を受けている。

23 台帳:P22 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径16.8, 器高5.8 色調:外面赤~橙~にぶい橙~黒色。内面赤~にぶい橙色。 胎土:砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面口部ヘラ削り後ヘラナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部~体部上位ヨコナデ, 中~下位ヘラナデ。外面口縁部と内面口縁部~体部中位に赤彩。 使用痕:— 備考:—

24 台帳:P23 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径16.5, 器高5.9 色調:外面赤~にぶい橙~黒色。内面赤~にぶい橙色。 胎土:礫(白微), 砂(白多,透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部~体部中位に赤彩。 使用痕:— 備考:—

25 台帳:P10 材質:土師器 種類:支脚 残存:90% 法量:長11.8, 幅5.2, 厚5.2 色調:にぶい黄橙~黒色 胎土:砂(白多,透多) 技法等:ヘラナデ・ナデ 使用痕:— 備考:—

26 台帳:II ~ 3 材質:鉄 種類:鎌 法量:長9.7, 最大幅1.8, 最大厚0.3, 重量21.12 g 備考:—

#### IV 古墳時代の遺構と遺物

- 27 台帳:玉 材質:ガラス 種類:小玉 法量:最大径0.6, 最大厚0.4, 孔径0.1, 重量0.23 g 色調:紺 備考:—
- 28 台帳:S5 材質:石炭 種類:玉? 法量:長2.4, 幅1.8, 厚0.6, 孔径0.2, 重量2.78g 備考:孔は両側穿孔。
- 29 台帳:S4 材質:石炭 種類:玉? 法量:長2.2, 幅1.8, 厚0.7, 孔径0.1, 重量2.48 g 備考:孔は貫通していない。
- 30 台帳:S 3 材質:砂岩 種類:敲石 法量:長7.7, 幅4.4, 厚3.5, 重量172.13 g 備考:敲打による凹み1カ所。
- 31 台帳:S1 材質:珪質片岩 種類:砥石 法量:長30.2, 幅8.0, 厚6.0, 重量2685.35 g 備考:明緑灰色。砥面はA～Dの四面。刃物を砥いだ溝がみられる。

#### 第83号住居跡

- 1 台帳:P 49・62・63・66・68・70・72・75・83・87・91～99・102・104・107, No.4・9・10・13・14 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁～胴部上位70%, 胴部中位50%, 下位～底部100% 法量:口径(21.8), 器高35.5, 底径9.5 色調:内外面とも赤褐～橙～にぶい橙～暗褐～黒褐色。胎土:小石(白微), 礫(白少), 砂(白多, 透多, 灰少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。輪組みの接合面が鋸歯状になっている。使用痕:外面胴部が二次焼成をうけており, 器面が荒れている。備考:—
- 2 台帳:P 29・62・66～69・72・74～76・84～86・88・89・101・106・109, No.4・9・10・13 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部80%, 胴部上～中位60%, 下位～底部100% 法量:口径18.7, 器高32.7, 底径8.5 色調:外面赤橙～橙～黒色。内面橙色。胎土:小石(白微), 礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕:外面胴部中～下位・底部の器面が摩滅している。備考:—
- 3 台帳:P 41・44・56・58～60, No.9 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁～胴部中位・底部100%, 胴部下位70% 法量:口径16.2, 器高24.3, 底径8.0 色調:外面橙～黒色。内面にぶい橙色。胎土:礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕:— 備考:—
- 4 台帳:P 10・15・16・18～21・29・30・34・45・61・64・65・71, No.2・3・10 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁～胴部上位・底部100%, 胴部中～下位60% 法量:口径16.8, 器高25.2, 底径9.0 色調:外面赤～赤褐～橙～暗褐～黒色。内面橙～にぶい橙色。胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部上位ヨコナデ・下位～胴部上位ヘラ削り後ヘラナデ, 中位～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕:外面器面が二次焼成を受けている。備考:—
- 5 台帳:P42・45～50・61, No.1・2・9・13 材質:土師器 器種:甕 残存:80% 法量:口径13.8, 器高12.2, 底径7.0 色調:内外面とも橙～にぶい橙色 胎土:礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。丁寧ではない調整。使用痕:— 備考:—
- 6 台帳:P9・27～31・33・34・36・37・54, No.4・9 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁～胴部中位50% 法量:口径(21.3), 器高(20.0) 色調:外面にぶい橙～黒色。内面にぶい橙色。胎土:礫(白少), 砂(白多, 透多, 黒少) 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕:— 備考:1カ所小孔あり。7と同一か。
- 7 台帳:P35・54・55・62, No.9 材質:土師器 器種:甕 残存:底部30% 法量:器高(10.0), 孔径(8.0) 色調:内外面ともぶい橙色。胎土:礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕:内外面とも器面が減している。備考:小孔が2つあり, その位置から直交して4方向に孔があると考えられる。6と同一か。
- 8 台帳:P77・82 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁～胴部上位10% 法量:口径(20.0), 器高(8.5) 色調:内外面とも橙色。胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り。

- 内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕:内外面とも器面が摩滅している。備考:—
- 9 台帳:P110, No.2・14 材質:土師器 器種:杯 残存:30% 法量:口径(12.0), 器高4.5 色調:内外面ともぶい褐～暗褐色。胎土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。使用痕:口縁部が摩滅している。備考:—
- 10 台帳:No.2, 73住No.9 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(14.0), 器高(3.6) 色調:外面浅黄～黒色。内面黒色 胎土:砂(白少, 透少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部上位ナデ, 中位ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。使用痕:— 備考:73住出土の土器片と接合した。
- 11 台帳:P80 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(15.0), 器高(3.3) 色調:内外面とも橙～黒褐色。胎土:礫(白少), 砂(白少, 透多), 骨針多 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。使用痕:— 備考:—
- 12 台帳:P90 材質:土師質 種類:勾玉 法量:長3.0, 幅0.6, 厚0.6, 孔径0.1～0.3, 重量1.73 g 色調:橙～にぶい橙色。備考:孔は片側穿孔。
- 13 台帳:S3 材質:石炭 種類:不明 法量:長3.5, 幅2.2, 厚1.7, 重量10.44 g 備考:—
- 14 台帳:S5 材質:石炭 種類:不明 法量:長3.0, 幅2.4, 厚1.8, 重量7.18 g 備考:—
- 15 台帳:No.3 材質:石炭 種類:不明 法量:長4.5, 幅2.2, 厚0.9, 重量7.47 g 備考:—
- 16 台帳:S4 材質:石炭 種類:不明 法量:長2.0, 幅2.0, 厚1.1, 重量2.81 g 備考:—
- 17 台帳:S1 材質:砂岩 種類:台石 法量:長19.5, 幅15.4, 厚6.0, 重量2414.22 g 備考:多数の敲打痕と砥面Aの一面。

#### 第85号住居跡

- 1 台帳:P45・46, No.6・9 材質:土師器 器種:甕 残存:胴部中位～底部20% 法量:胴径(23.2), 器高(18.6), 底径(6.4) 色調:外面暗褐～黒褐色。内面にぶい黄橙色。胎土:小石(白少), 礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。技法等:外面器面は被熱し, 器面の一部が剥離している。備考:—
- 2 台帳:P13, No.6 材質:土師器 器種:甕 残存:80% 法量:口径27.0, 器高22.0, 孔径7.0 色調:外面赤褐～暗褐～黒褐色。内面赤褐～黒褐色。胎土:小石(灰微), 礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ, 孔周辺のみヘラ削り。使用痕:— 備考:—
- 3 台帳:P11, No.2～5 材質:土師器 器種:鉢 残存:20% 法量:口径(20.7), 器高13.2, 底径(6.8) 色調:外面赤褐色。内面黒褐色。胎土:小石(白微), 礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴～底部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕:— 備考:—
- 4 台帳:P12・44, No.6・9 材質:土師器 器種:椀 残存:40% 法量:口径(13.0), 器高6.1 色調:内外面ともぶい黄橙～黒褐色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁～体部中位ヨコナデ, 下位ヘラナデ。使用痕:— 備考:—
- 5 台帳:P44 材質:土師器 器種:椀 残存:90% 法量:口径12.0～13.7, 器高6.8 色調:内外面ともぶい黄橙～暗褐～黒色。胎土:小石(白微), 礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。使用痕:内面口縁部にスス状物付着。備考:器形は口縁部を上から見ると楕円形。
- 6 台帳:P1 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径13.2, 器高5.0 色調:外面にぶい褐色。内面黒色。胎土:礫(白微), 砂(白少,

透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。使用痕:口縁端部が部分的に欠失している。備考:—

7 台帳:P19・20・26・28・35・42・43, No.3・6・9 材質:土師器 器種:杯 残存:70% 法量:口径12.9, 器高4.4 色調:内外面ともにぶい褐~暗褐色。胎土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。使用痕:口縁端部が部分的に欠失している。備考:—

8 台帳:P4 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径11.2, 器高4.7 色調:内外面とも赤褐~にぶい赤褐色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。使用痕:— 備考:—

9 台帳:P25・27・29~31・41~43 材質:土師器 器種:杯 残存:60% 法量:口径13.2, 器高5.0 色調:外面赤橙~橙~黒褐色。内面にぶい黄橙色。胎土:礫(灰微), 砂(白多, 透多, 黒微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部上位ヨコナデ後ヘラミガキ, 下位ヘラミガキ。使用痕:口縁端部が摩滅している。備考:—

10 台帳:P48 材質:土師器 器種:杯 残存:80% 法量:口径11.4, 器高4.2 色調:外面にぶい黄橙~黒色。内面橙色 胎土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部上位ナデ, 下位ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。使用痕:内外面とも器面がやや摩滅している。備考:—

11 台帳:P15~17・39, No.4・5・7 材質:土師器 器種:杯 残存:70% 法量:口径14.0, 器高4.0 色調:内外面とも赤橙色。胎土:砂(白少, 透多, 赤微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。使用痕:内面体部器面の一部が剥離している。備考:—

12 台帳:P47 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径14.0, 器高4.4 色調:内外面とも橙~にぶい橙色 胎土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヘラミガキ, 体部うず巻状にヘラミガキ, 中央部はヘラミガキなし。使用痕:口縁端部が部分的に欠失している。備考:—

13 台帳:P2 材質:土師器 器種:杯 残存:90% 法量:口径14.5, 器高4.6 色調:内外面とも橙色。胎土:砂(白多, 透多, 黒少, 赤微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部放射状にヘラミガキ。使用痕:口縁端部が部分的に欠失している。備考:—

14 台帳:P3 材質:土師器 器種:杯 残存:口縁部80%, 体部100% 法量:口径15.0, 器高5.5 色調:外面赤橙~橙~にぶい褐色。内面黄橙~にぶい褐色。胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒少, 赤微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。使用痕:— 備考:—

15 台帳:P38 材質:土師器 器種:杯 残存:80% 法量:口径14.5, 器高5.3 色調:外面橙~黒色。内面橙~暗褐色。胎土:礫(灰微), 砂(白多, 透多, 黒少, 赤少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 体部ヘラミガキ。使用痕:口縁端部が部分的に欠失している。備考:—

## 第86号住居跡

1 台帳:P7, No.1・9 材質:土師器 器種:甕 残存:30%, 底部なし 法量:口径(20.0), 器高(21.7) 色調:外面赤~赤褐~暗褐~黒褐色。内面黄褐~暗褐色。胎土:小石(白微, 灰微), 礫(白少), 砂(白多, 透多, 灰少, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕:— 備考:—

2 台帳:P6 材質:土師器 器種:甕 残存:100% 法量:口径17.8, 器

高20.1, 底径7.4 色調:外面橙~黄褐~暗褐~黒色。内面にぶい橙~黄橙色。胎土:小石(白微), 礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部上位ヨコナデ, 下位~底部ヘラ削り。内面ヘラナデ。

使用痕:外面が二次焼成をうけている。備考:—

3 台帳:P2, No.4 材質:土師器 器種:甕? 残存:口縁~胴部中位60% 法量:口径26.8, 器高(18.1) 色調:外面にぶい黄橙~暗褐~黒褐色。内面橙~黄褐色。胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。使用痕:外面が二次焼成をうけている。備考:—

4 台帳:P8, No.9 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径12.8, 器高4.9 色調:内外面とも赤褐~にぶい赤褐~黒褐色。胎土:砂(白少, 透少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁~体部上位ヨコナデ, 中~下位ナデ。内外面とも黒色処理。使用痕:— 備考:—

5 台帳:P4 材質:土師器 器種:杯 残存:60% 法量:口径12.0, 器高4.9 色調:内外面とも暗褐~黒褐色 胎土:砂(白少, 透多, 赤少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部放射状にヘラミガキ。内外面とも黒色処理。使用痕:— 備考:—

6 台帳:P5 材質:土師器 器種:杯 残存:20% 法量:口径(12.7), 器高(4.2) 色調:内外面とも暗褐~黒褐色 胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部上位ヨコナデ・下位ナデ後若干のヘラミガキ。内外面とも黒色処理。使用痕:— 備考:—

7 台帳:P1 材質:土師器 器種:杯 残存:口縁部欠失, 体部80% 法量:器高(2.9) 色調:外面橙~にぶい黄橙~暗褐色。内面浅黄橙~暗褐色。胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ。使用痕:内面器面が非常に摩滅している。備考:—

8 台帳:P9 材質:土師器 器種:杯 残存:90% 法量:口径14.4, 器高4.4 色調:内外面とも黄褐~黒色。胎土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。使用痕:— 備考:—

9 台帳:P3 材質:土師器 器種:杯 残存:40% 法量:口径(16.0), 器高(4.2) 色調:内外面とも黒褐色。胎土:砂(白少, 透少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り後ヘラナデ。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理。使用痕:— 備考:—

10 台帳:P12 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径14.0, 器高4.5 色調:外面橙~にぶい黄橙~暗褐色。内面にぶい黄橙~暗褐色。胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部上~中位ヘラナデ, 下位ヘラ削り。内面口縁~体部上位ヨコナデ, 中~下位ナデ。使用痕:口縁端部が摩滅している。備考:—

11 台帳:P13 材質:土師器 器種:杯 残存:100% 法量:口径15.8, 器高7.0 色調:外面橙~にぶい橙~黒褐色。内面黄橙~黒褐色。胎土:砂(白多, 透多, 灰微, 黒微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ。内外面とも黒色処理か? 使用痕:内面器面が摩滅している。備考:外面が二次焼成をうけている。

12 台帳:P11 材質:土師質 種類:支脚 残存:100% 法量:長13.0, 径6.0, 孔径0.8 色調:黄褐~暗褐~黒褐色。技法等:ナデ。中心に孔あり。使用痕:二次焼成をうけている。備考:—

## 遺構に伴わない古墳時代の遺物(SD3)

1 台帳:P45・49・50, No.20 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁~胴部30% 法量:口径(12.1), 器高(11.5) 色調:外面橙~黒色。内面橙色。胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 胴部ヘラナデ。内面口縁端部に沈線がめぐる。使用痕:— 備考:—

2 台帳:P62 材質:土師器 器種:甕 残存:底部100% 法量:器高

#### IV 古墳時代の遺構と遺物

(38), 底径 12.0 色調:外面にぶい赤褐色。内面橙色 胎土:礫(白少), 砂(白多, 透多, 赤少) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕:— 備考:—

3 台帳:P26 材質:土師器 器種:甕 残存:底部70% 法量:器高(4.2), 底径 6.6 色調:外面黄橙~黒褐色。内面黄橙色。胎土:砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り, 底面木葉痕。内面ヘラナデ。使用痕:— 備考:—

4 台帳:P44 材質:土師器 器種:甕 残存:底部100% 法量:器高(2.5), 底径 6.8 色調:外面にぶい橙~黒褐色。内面にぶい橙色。胎土:礫(白微), 砂(白少, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラナデ, 底面木葉痕。内面ヘラナデ。使用痕:— 備考:—

5 台帳:P70 材質:土師器 器種:甕 残存:底部100% 法量:器高(3.0), 底径 9.3 色調:外面橙~黒褐色。内面黒褐色。胎土:小石(白微), 礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り?。内面ヘラナデ。使用痕:外面器面が摩滅している。備考:—

6 台帳:P40 材質:土師器 器種:甕 残存:底部20% 法量:器高(2.2), 底径(8.2) 色調:外面にぶい黄橙色。内面黒褐色。胎土:砂(白少, 透多, 赤微) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕:— 備考:—

7 台帳:P33 材質:土師器 器種:甕 残存:底部100% 法量:器高(2.5), 底径 8.0 色調:外面橙色。内面浅黄~灰色。胎土:小石(灰微), 砂(白多, 透多, 黒少, 赤少) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕:— 備考:—

8 台帳:P63 材質:土師器 器種:甕 残存:底部40% 法量:器高(2.5), 底径(8.6) 色調:外面黄橙色。内面にぶい橙色。胎土:礫(白微), 砂(白少, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕:— 備考:—

9 台帳:P39, №18 材質:土師器 器種:高杯 残存:杯部20% 法量:口径(18.0), 器高(4.0) 色調:内外面とも橙色 胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 灰少) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面ヘラナデ。使用痕:— 備考:—

10 台帳:P34 材質:土師器 器種:高杯 残存:脚部50% 法量:器高(9.7) 色調:内外面とも浅黄色。胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り?。内面ヘラナデ。使用痕:— 備考:外面器面が摩滅している。

11 台帳:P56, №20 材質:土師器 器種:高杯 残存:脚部70% 法量:器高(8.5) 色調:外面赤~橙色。内面橙色。胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。外面が赤彩されている。使用痕:— 備考:外面器面が摩滅している。

12 台帳:P41 材質:土師器 器種:高杯 残存:脚部50% 法量:器高(6.2) 色調:外面赤~浅黄色。内面赤色。胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。内外面とも赤彩されている。使用痕:— 備考:—

13 台帳:№18 材質:土師器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(12.0), 器高(3.3) 色調:内外面とも赤~橙色。胎土:砂(白少, 透少, 黒微) 焼成:良好 技法等:外面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラ削り。内面口縁部ヨコナデ, 体部ヘラナデ。外面口縁部と内面に赤彩されている。使用痕:— 備考:—

14 台帳:№21 材質:土師器 器種:手づくね土器 残存:底部100% 法量:器高(3.8), 底径 7.7~8.2 色調:外面浅黄橙色。内面橙色。胎土:礫(白微), 砂(白多, 透多, 黒少) 焼成:良好 技法等:外面ヘラ削り, 底面木葉痕。内面ヘラ削り。使用痕:— 備考:—

15 台帳:P23 材質:土師器 器種:手づくね土器 残存:底部100% 法量:器高(3.3), 底 5.2~6.5 色調:内外面とも浅黄橙~黒色。胎土:砂(白多, 透多) 焼成:良好 技法等:外面ヘラナデ, ナデ。内面ヘラナデ。使用痕:— 備考:—

16 台帳:P60 材質:土師質 器種:支脚? 残存:— 法量:長 12.7, 幅 4.1, 厚 3.9 色調:橙~にぶい橙色。技法等:ナデ 使用痕:— 備考:—

—

17 台帳:P47 材質:土師質 器種:支脚? 残存:— 法量:長 11.2, 径 4.1 色調:橙~にぶい橙色。技法等:ナデ 使用痕:二次焼成をうけている。備考:—

18 台帳:№16 材質:須恵器 器種:甕 残存:— 法量:— 色調:内外面とも青灰色。胎土:礫(白少), 砂(白多, 透多) 焼成:硬質 技法等:沈線2条, 波状文。使用痕:— 備考:—

19 台帳:№23 材質:石炭 種類:不明 法量:長 4.1, 幅 2.8, 厚 1.7, 重量 14.13 g 備考:—

## V 奈良・平安時代の遺構と遺物

### 1 調査の概要

鷹ノ巣遺跡では、奈良・平安時代の遺構として、住居跡を27基、土坑1基、溝状遺構1条を検出した。

**住居跡の時期** 出土した遺物から推定すると、以下のようになる。

- ・ 8世紀第1四半期(3基): 第29・38・44号住居跡
- ・ 8世紀第2四半期(5基): 第3・14・32・34 A・84号住居跡
- ・ 8世紀第3四半期(4基): 第33・63・65・67号住居跡
- ・ 8世紀第4四半期(5基): 第1・61・78・80・81号住居跡
- ・ 8世紀前半(1基): 第70号住居跡
- ・ 8世紀後半?(2基): 第31A・72号住居跡
- ・ 9世紀第2四半期(1基): 第57号住居跡
- ・ 9世紀前半(1基): 第82号住居跡
- ・ 9世紀中葉(2基): 第58・66号住居跡
- ・ 9世紀第3四半期(3基): 第27・54・56号住居跡

**住居跡の分布** 8世紀第2～4四半期の住居跡は調査区北側の台地の比較的平坦な位置に分布するのに対して、8世紀第1四半期と9世紀の住居跡は、調査区南側

のやや傾斜地に分布する。

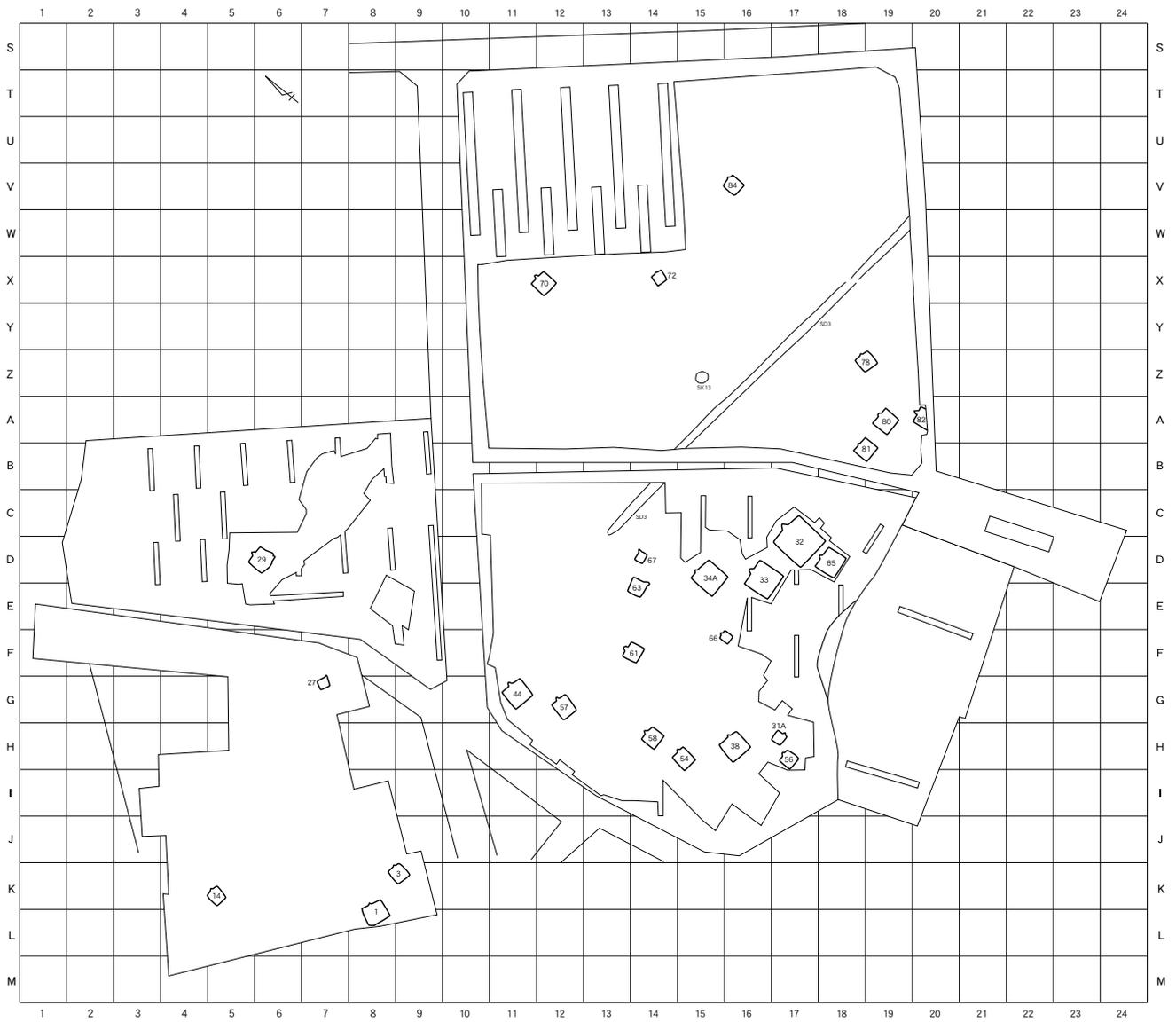
**住居跡の規模** 主軸長で比較すると、最大が第32号住居跡の8.61mで、最小が第27号住居跡の2.2mである。8mを超える大型住居跡と2m強の小型住居跡の存在が、鷹ノ巣遺跡の特徴の一つである。

**竈** 設置される壁の位置は、大半が北壁で、第31A号住居跡が東壁、第27号住居跡が東隅、第63号住居跡が南東隅、第67号住居跡が北東隅となる。

第6表 奈良・平安時代住居跡一覧表

住居跡番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	主軸	備考
1	K・L-8	4.6	4.25	N-25°-E	第1次調査
3	K-8・9	3.9	3.5	N-4°-E	第1次調査
14	K-5	3.0	3.0	N-19°-E	第1次調査
27	G-7	2.2	2.2	N-36°-E	第1次調査
29	D-5・6	4.27	3.86	N-7°-E	第3次調査
31A	H-17	2.40	2.38	N-83°-E	第2次調査
32	C・D-17・18	8.61	8.15	N	第2次調査
33	D・E-16・17	6.26	6.19	N-8°-W	第2次調査
34A	D・E-15・16	6.08～5.76	5.67	N-3°-E	第2次調査
38	H-15・16	4.96	4.87	N-12°-E	第2次調査
44	G-11	5.02	4.80	N-12°-E	第2次調査
54	H・I-14・15	3.82	3.44	N-5°-E	第2次調査
56	H-17	3.08	3.04	N-3°-E	第2次調査
57	G-12	4.26	3.88	N-14°-E	第2次調査
58	H-14	3.62	3.52	N-3°-W	第2次調査
61	F-13・14	3.52～3.22	3.52	N-20°-W	第2次調査
63	D・E-13・14	3.36	3.33	N-75°-E	第2次調査
65	D-17・18	5.26	4.79	N-11°-W	第2次調査
66	F-15・16	2.28～2.14	1.96	N-3°-E	第2次調査
67	D-14	2.26	1.86	N-6°-W	第2次調査
70	X-11・12	3.90	3.82	N-1°-W	第4次調査
72	X-14	2.45	(2.45)	N-13°-E	第4次調査
78	Z-18・19	3.52	3.49	N-10°-E	第4次調査
80	A-19	4.24	3.94	N-2°-W	第4次調査
81	A・B-18・19	3.81	3.68	N-1°-W	第4次調査
82	A-20	3.76	(3.40)	N-12°-W	第4次調査
84	V-16	3.45	3.26	N-2°-E	第4次調査

V 奈良・平安時代の遺構と遺物



第 83 図 奈良・平安時代遺構分布図(グリッドは 1 辺 10 m)



第 2 次調査区第 32 号住居跡周辺

## 2 住居跡の調査

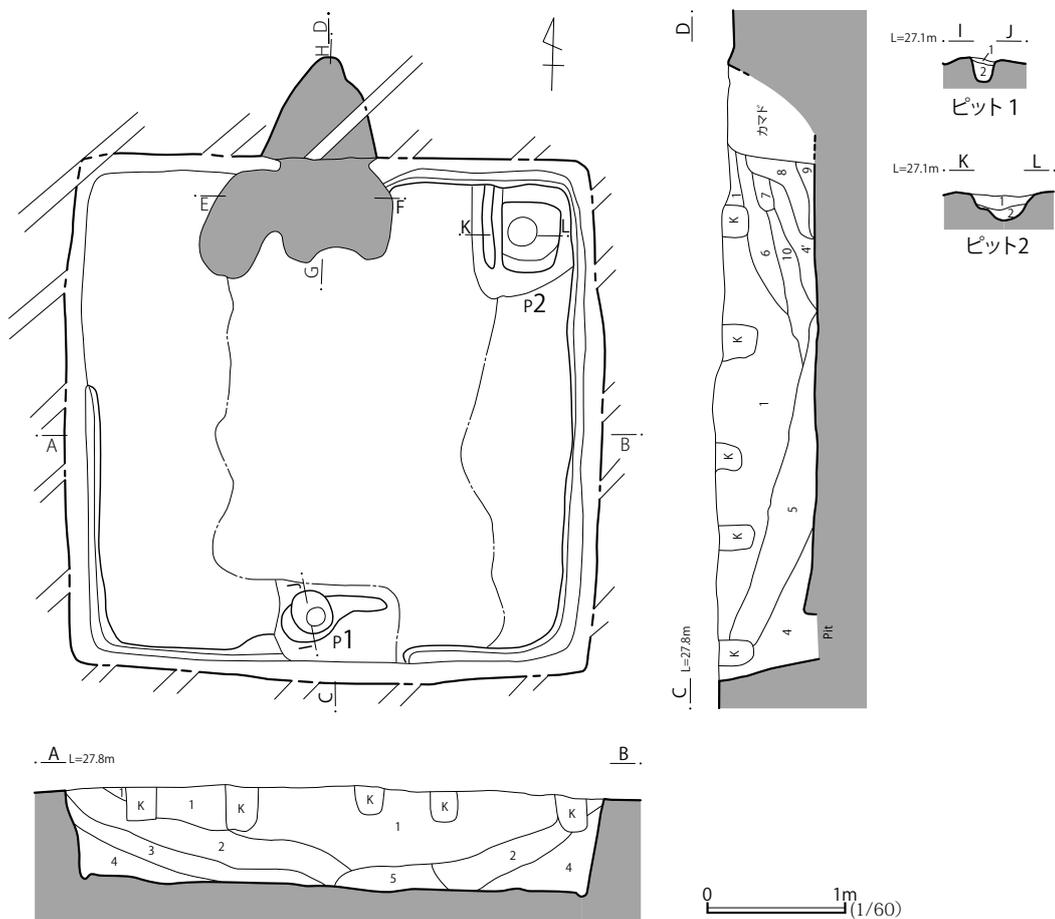
## 第70号住居跡

**遺構** X-11・12区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けているが、床面までは掘り込まれていない。平面形は、ほぼ方形を呈する。竪穴部の規模は3.82×3.90m。壁高は東壁75cm、西壁67cm、南壁68cm、北壁60cm。主軸方向はN-1°-Wを指す。壁周溝は、竈周辺と出入り口部分、竪穴部北西隅を除いてみられ、幅6～10cm、床面からの深さ3～6cmを測る。床面は、竈前から南壁にかけて帯状に硬化している。ピット1と

2には、床面から約3cmの土手状の高まりがある。

竪穴部覆土は、下層に人為的に埋め戻されたと思われるロームブロックを含む褐色土が堆積し、その上に自然堆積と思われる第1層の黒色土がみられる。黒色土とロームブロックの混合層である第5層は、堆積状況から住居跡南側から投入されたと考えられる。

竈は北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は燃焼部から焚口にかけては悪いが、煙道部の一部が残っていた。竈の構築材として黄白色粘土が使用されている。壁面へ



## 第70号住居跡堆積覆土

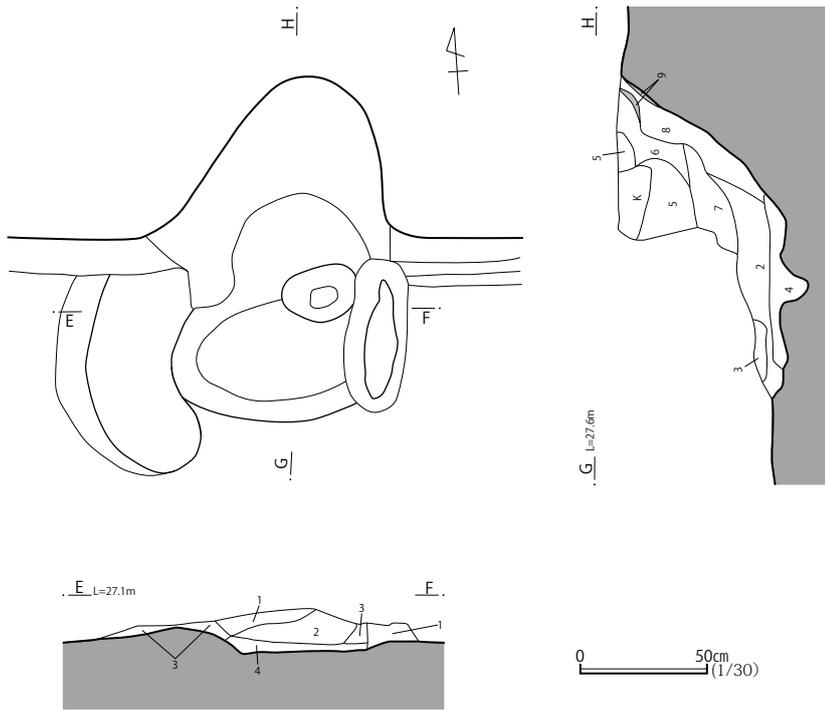
- 第1層 黒色土層(ローム粒少量含む 炭化粒微量含む 締まり強く有り)
- 第2層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック少量含む 人為的埋土 締まり強く有り)
- 第3層 褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック多量含む 人為的埋土 締まり強く有り)
- 第4層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック少量含む 人為的埋土 締まり強く有り)
- 第4層 第4層に粘土粒が少量混じる層
- 第5層 黒色土とロームブロックの混合層(径1～3cmロームブロック多量含む 人為的埋土ローム粒少量含む 締まり強く有り)

- 第6層 黒色土層(ローム粒少量含む 白色粘土少量含む 炭化粒微量含む 締まり有り)
- 第7層 白色粘土ブロック (人為的埋土 締まり有り)
- 第8層 褐色土層(ローム粒・粘土粒多量含む 人為的埋土 締まりやや無し)
- 第9層 白色粘土と焼土層 (人為的埋土 締まり有り)
- 第10層 黒色土とロームブロックと粘土ブロックの混合層 (人為的埋土 締まり有り)

## 第70号住居跡ピット1・2堆積覆土

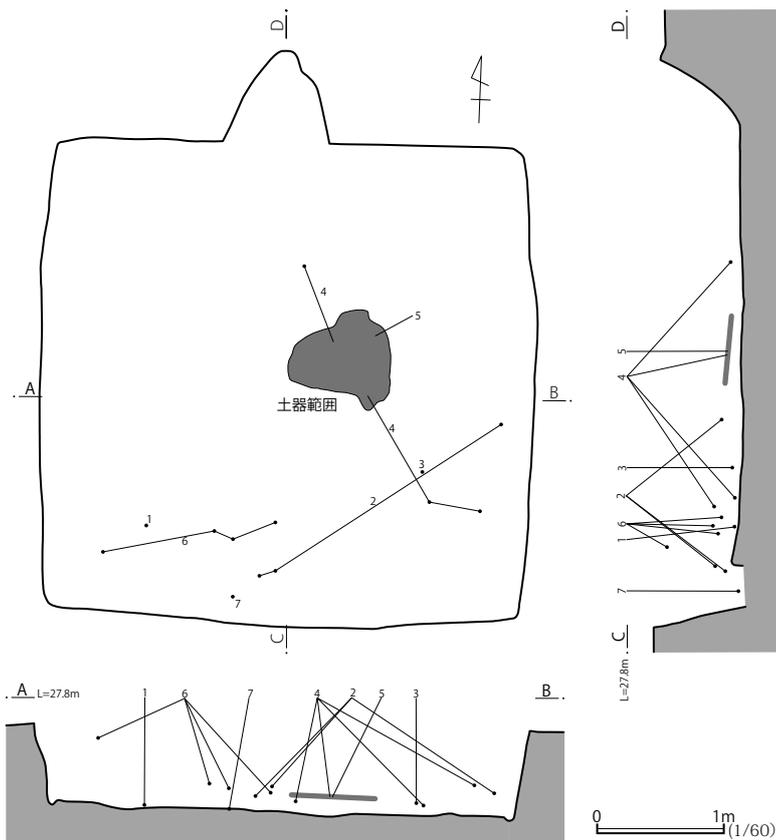
- 第1層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第2層 明褐色土層(ローム土主体 締まり有り)

第84図 第70号住居跡・遺物出土(淡網:粘土)



- 第70号住居跡竈堆積覆土**
- 第1層 黄白色粘土層(締まり有り)
  - 第2層 暗褐色土層(粘土粒・焼土粒多量含む 締まりやや有り)
  - 第3層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
  - 第4層 黒色土層(焼土粒少量含む 締まりやや有り)
  - 第5層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 粘土粒少量含む 締まりやや有り)
  - 第6層 黄白色粘土と暗褐色土の混合層(焼土粒少量含む 締まりやや有り)
  - 第7層 黄白色粘土層(天井部? 締まりやや有り)
  - 第8層 暗褐色土層(煙道部? ローム粒・焼土粒多量含む 締まりやや有り)
  - 第9層 被熱して赤化した粘土層(締まりやや有り)

第85図 第70号住居跡竈



第86図 第70号住居跡遺物出土状況

その粘土が被熱していた(第9層)。

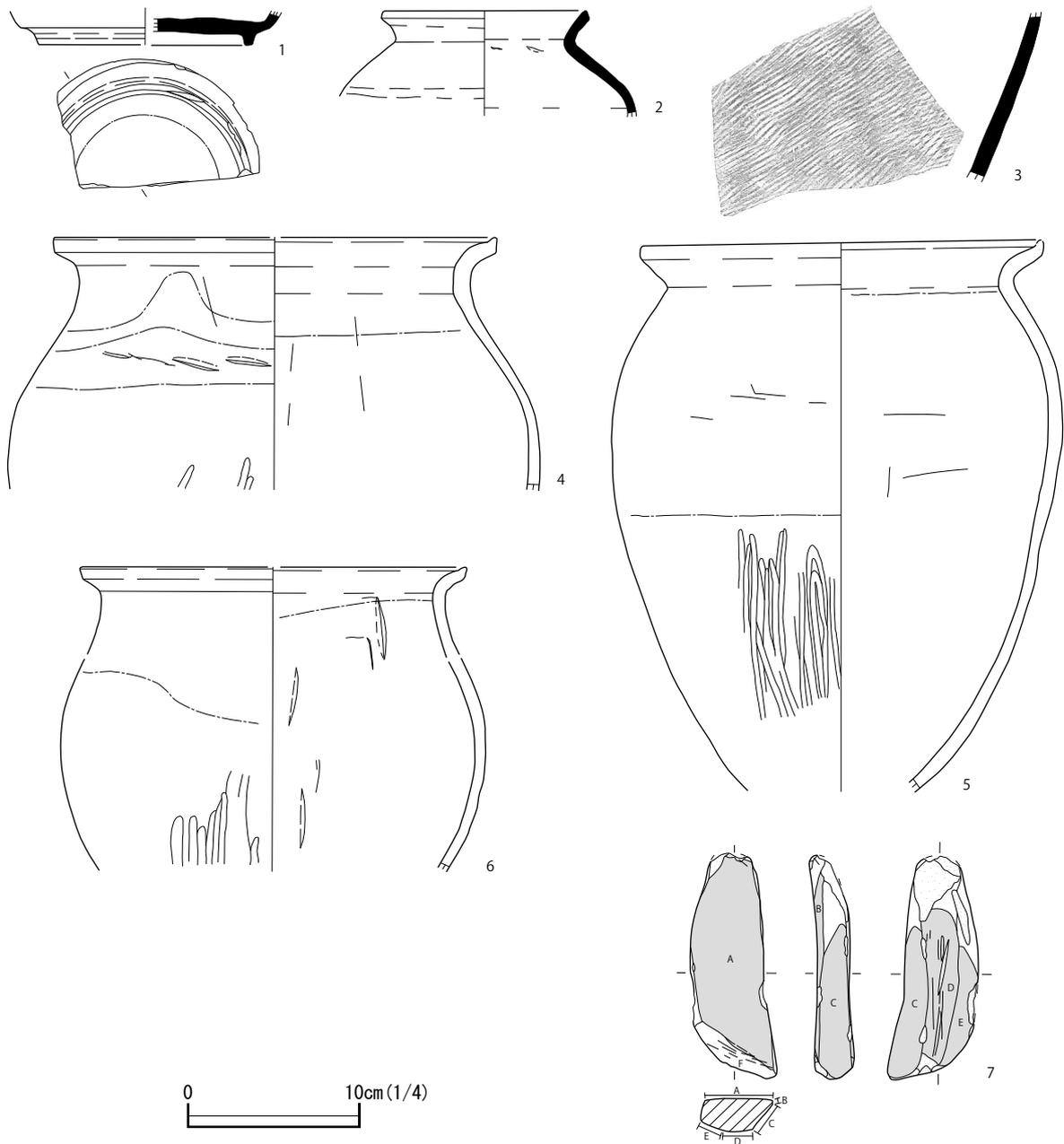
ピットは2基検出された。ピット1は出入口口施設に伴うもの、ピット2は「貯蔵穴」と思われる。主柱穴は確認されない。床面からの深さは、ピット1が20cm、ピット2が18cmである。

**遺物の出土状況** 出土した遺物は少なく完形品はない。平面分布では住居跡中央から南側に多く、接合関係がみられる。垂直分布は、壁際では覆土上層から、中央部では覆土下層から出土していることから、住居跡が埋没していく段階に投棄された遺物と考えられる。

**遺物** 第87図1の須恵器有台杯は胎土から木葉下窯産と思われる。高台が低い古手の形状を持つので8世紀前半頃と思われるが、木葉下窯跡群では当該期の有台杯の生産様相はいまだ不明瞭である。なお底部外面が研磨されているので、転用硯として用いられたものであろう。2は胎土から木葉下窯産と思われる須恵器小型甕である。同様の甕は木葉下窯ではTA4段階からTB2段階にみられるので、8世紀第1四半期頃に位置付けられる。4～6は外面胴部下半にヘラ

の掘り込みは、63cm程突出する。両袖部先端は竪穴部の壁近くにあると思われ、竪穴内部への竈の張り出しは大きくはない。煙道部は、壁面に粘土を張って煙突とし、

その粘土が被熱していた(第9層)。



第 87 図 第 70 号住居跡出土遺物(淡網:砥面)

磨きを持つ常陸型甕である。胎土中に白雲母を含んでおり新治窯付近産である。7は珪質片岩製の砥石である。石質からみて日立産と思われる。

遺物群の時期は、8世紀前半頃に位置付けられる。

### 第 72 号住居跡

**遺 構** X-14区に位置する。南側を第1号溝状遺構が掘り込んでおり、また耕作による攪乱も受けているため、残存状況はわるい。平面形は方形を呈する。竪穴部の規模は2.45×2.45(推定)m。壁高は26～28cmと浅い。主軸方向はN-13°-Eを指す。壁周溝は確

認できない。床面は、全体的に軟質である。

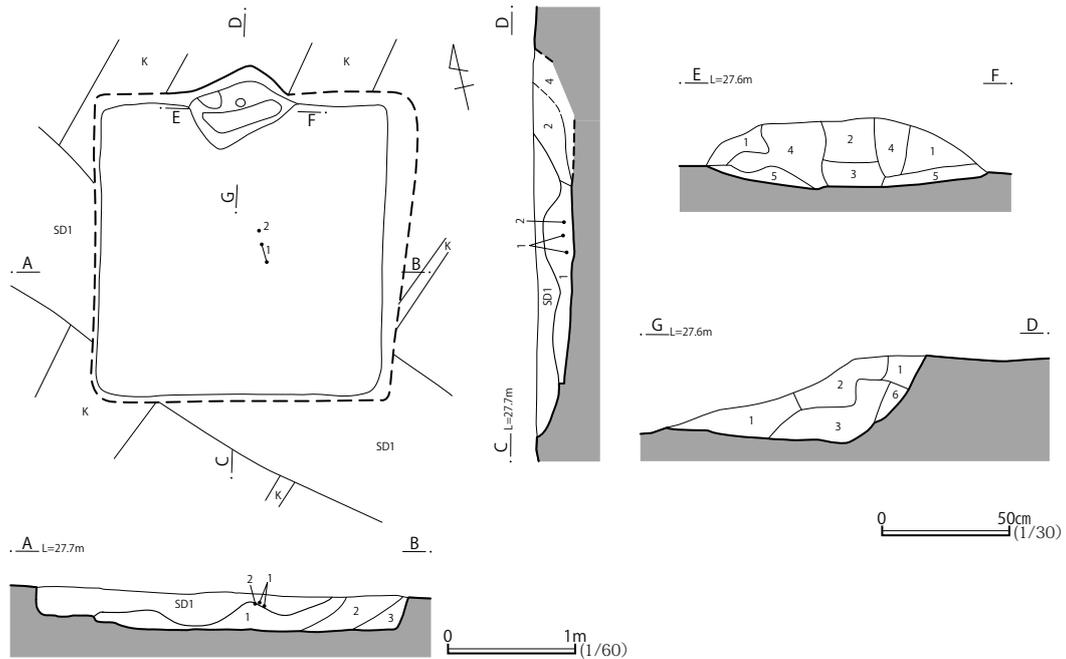
竪穴部覆土は、黒褐色土と黒色土が主体に堆積する。

竈は北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は非常にわるく、灰白色粘土がみられるだけで、竈の構造はよくわからない。

ピットは、確認できない。

**遺物の出土状況** 遺物は非常に少ない。図化できた遺物は覆土中から出土している。

**遺 物** 第89図1は二次底部面を若干残す回転ヘラ切り未調整の杯である。底部外面にヘラ記号を持つ。2は両面糸切り痕を残す瓦片である。遺物群の時期は8



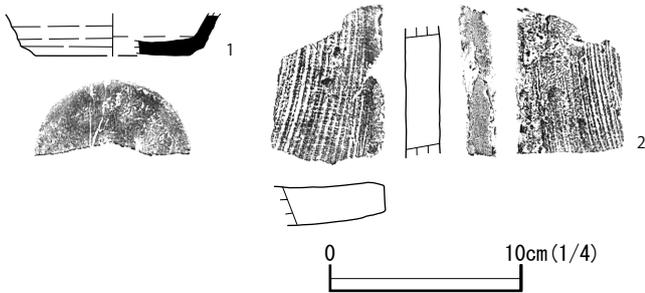
第 72 号住居跡堆積覆土

- 第 1 層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第 2 層 黒色土層(ローム粒少量含む 締まり有り)
- 第 3 層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第 4 層 灰白色粘土層(焼土粒少量含む 締まり有り)

第 72 号住居跡竈堆積覆土

- 第 1 層 黒色土層(白色粘土ブロック・白色粘土粒・焼土少量含む 締まりやや有り)
- 第 2 層 黒色土層(黒色土のみ 締まりやや有り)
- 第 3 層 灰白色粘土層(焼土ブロック少量含む 締まりやや有り)
- 第 4 層 暗褐色土層(ローム粒・白色粘土粒多量含む 締まりやや有り)
- 第 5 層 黒色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第 6 層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)

第 88 図 第 72 号住居跡・遺物出土状況



第 89 図 第 72 号住居跡出土遺物

世紀に位置付けられる。

第 78 号住居跡

**遺 構** Z-18・19 区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けており、一部は床面まで掘り込んでいる。また、住居跡に伴わないピットにも掘り込まれている。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は 3.49×3.52m。壁高は東壁 31cm、西壁 24 cm、南壁 23cm、北壁 29cm。主軸方向は N-10° - E を指す。壁周溝は確

認できない。床面は、竈前から南壁にかけて帯状に硬化しているが、それ以外の場所の床面は、非常に軟質である。

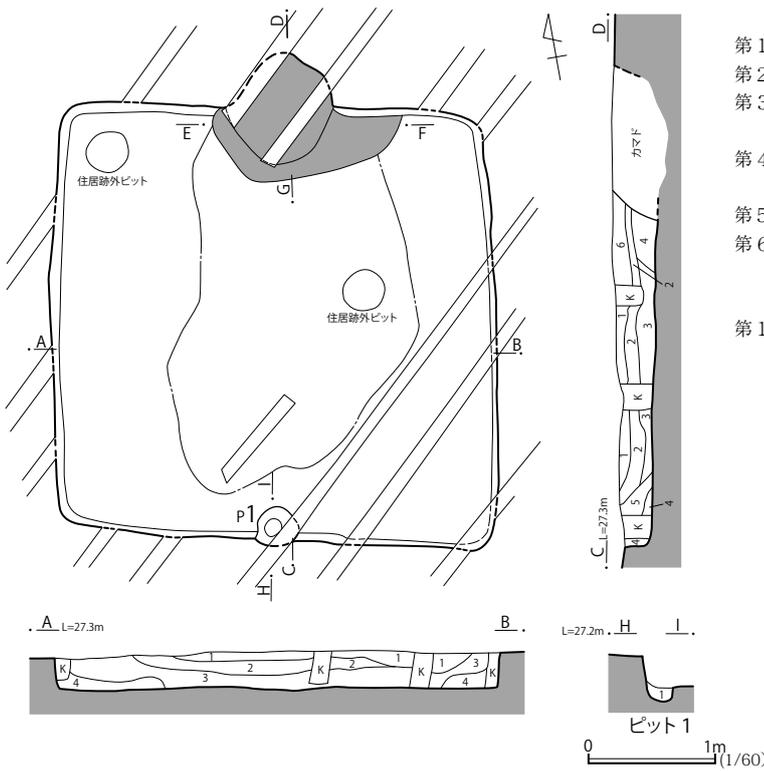
竪穴部覆土は、暗褐色土と黒褐色土が堆積する。

竈は北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は、天井部が崩れているが、両袖部と燃焼部は比較的良好に残っている。竈の構築材として白色粘土が使用されている。壁面への掘り込みは、40 cm程突出する。両袖部先端は竪穴部の壁からやや張り出す。

ピットは 1 基検出され、出入口口施設に伴うものと思われる。床面からの深さは 10cm である。

**遺物の出土状況** 遺物は、出土量が少なくすべて破損品である。図化できた遺物は覆土上層から中層で出土しているものが多い。遺物の出土位置による時期差はほとんどみられないため、短期間で住居が埋没していると思われる。第 93 図 2 の杯形土器は、壊された状態でまとめて置かれていた。

**遺 物** 1 の杯は底部のみであるが、回転ヘラ切り



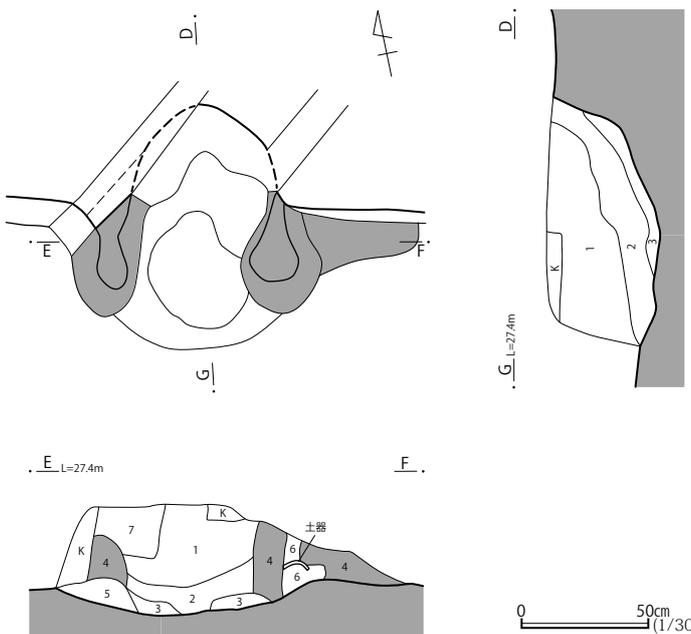
第90図 第78号住居跡(淡網:粘土)

第78号住居跡堆積覆土

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第2層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第3層 暗褐色土層(第1層より明るい 径1cmロームブロック少量含む ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第4層 褐色土層(ローム粒多量含む 径1~3cmロームブロック少量含む 締まり有り)
- 第5層 黒色土層(ローム粒少量含む 締まり有り)
- 第6層 暗褐色土層(カマドの粘土含む ローム粒多量含む 白色粘土少量含む 締まり有り)

第78号住居跡ピット1堆積覆土

- 第1層 黒色土層(ローム粒少量含む 締まり有り)



第91図 第78号住居跡竈(淡網:粘土)

第78号住居跡竈堆積覆土

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒微量含む 締まり有り)
- 第2層 暗褐色土層(焼土粒多量含む 白色粘土含む 締まり有り)
- 第3層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第4層 白色粘土層(締まり強く有り)
- 第5層 褐色土層(ローム土主体 締まり有り)
- 第6層 黒色土層(ローム粒・粘土粒微量含む 締まり有り)
- 第7層 暗褐色土層(ローム粒・粘土粒少量含む 締まり有り)

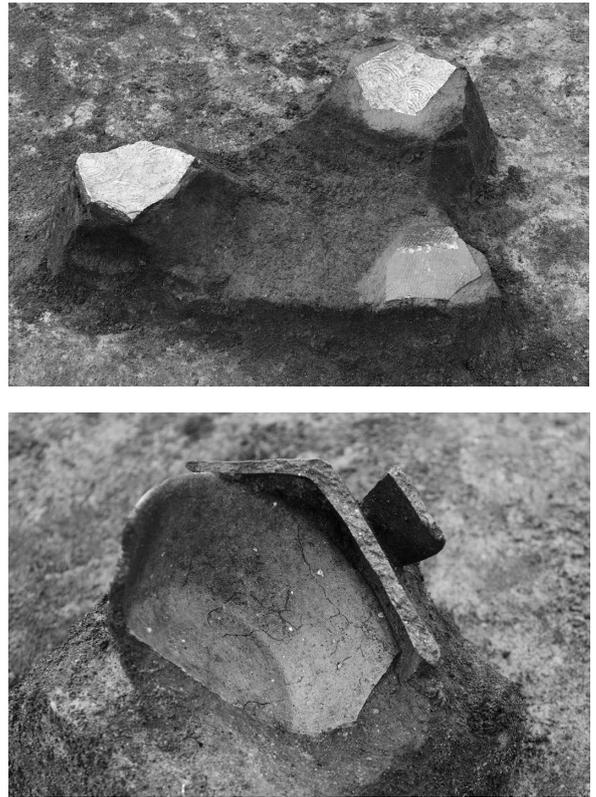
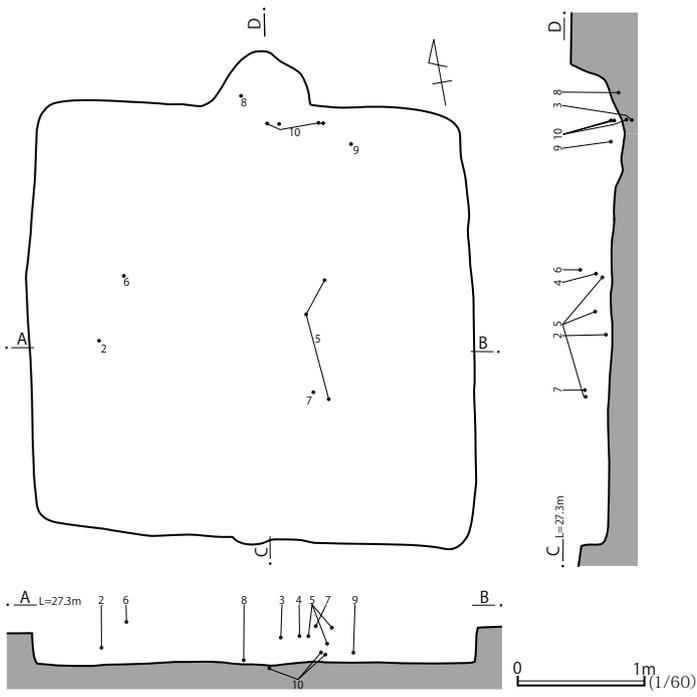
未調整であることや、二次底部面を若干残すことなどからみて、8世紀第4四半期頃に位置付けられる。2の小型杯は底部外面回転ヘラ削りであり、形状からみて8世紀第4四半期頃に位置付けられる。3は新治窯産の杯もしくは有台杯の体部片である。4~7は須恵器甕の胴部片である。同一個体の可能性があろう。8~10は常陸型甕ではない点が注意される。10の小型甕は全体的に

火を受けている。

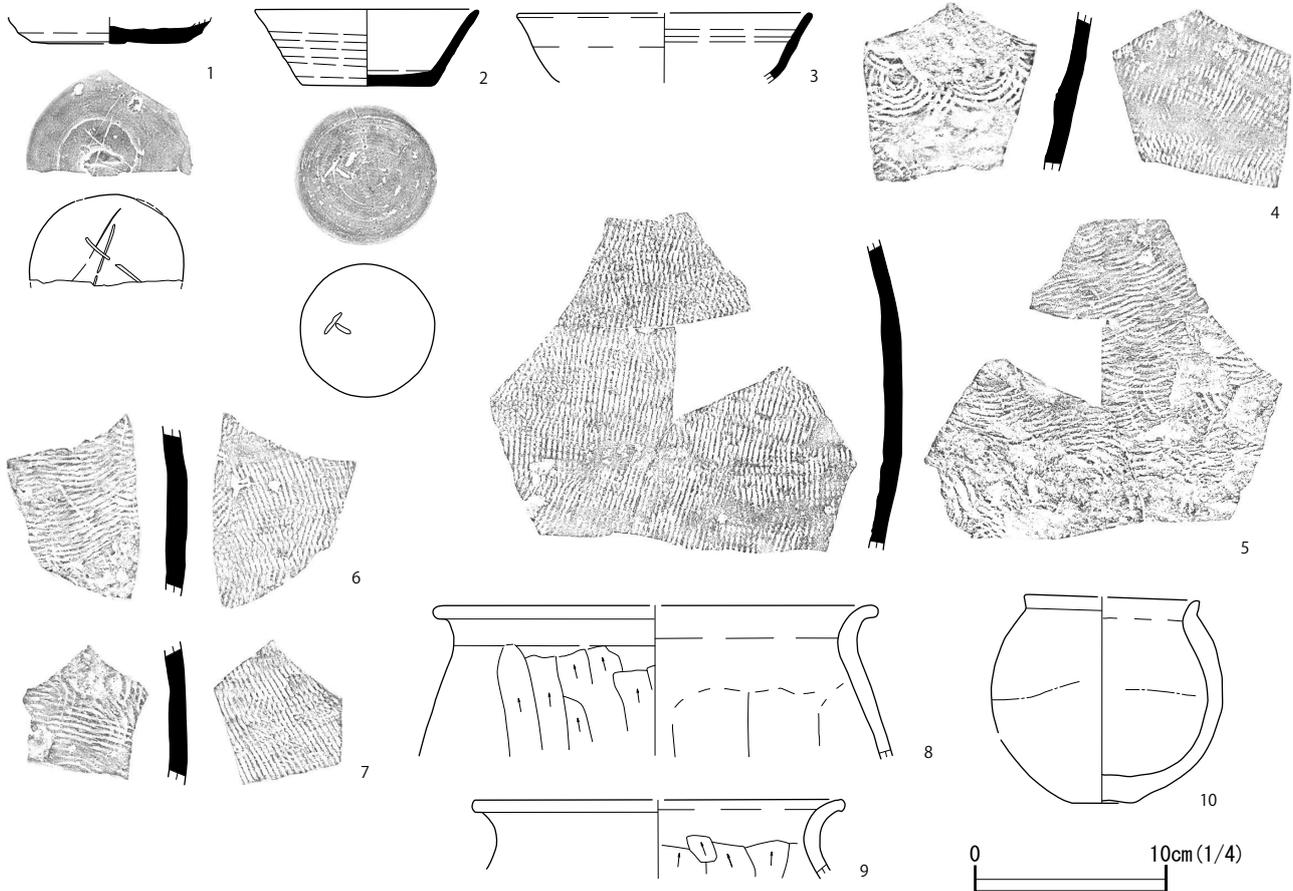
遺物群の時期は須恵器杯からみて8世紀第4四半期頃に位置付けられるのであろう。

第80号住居跡

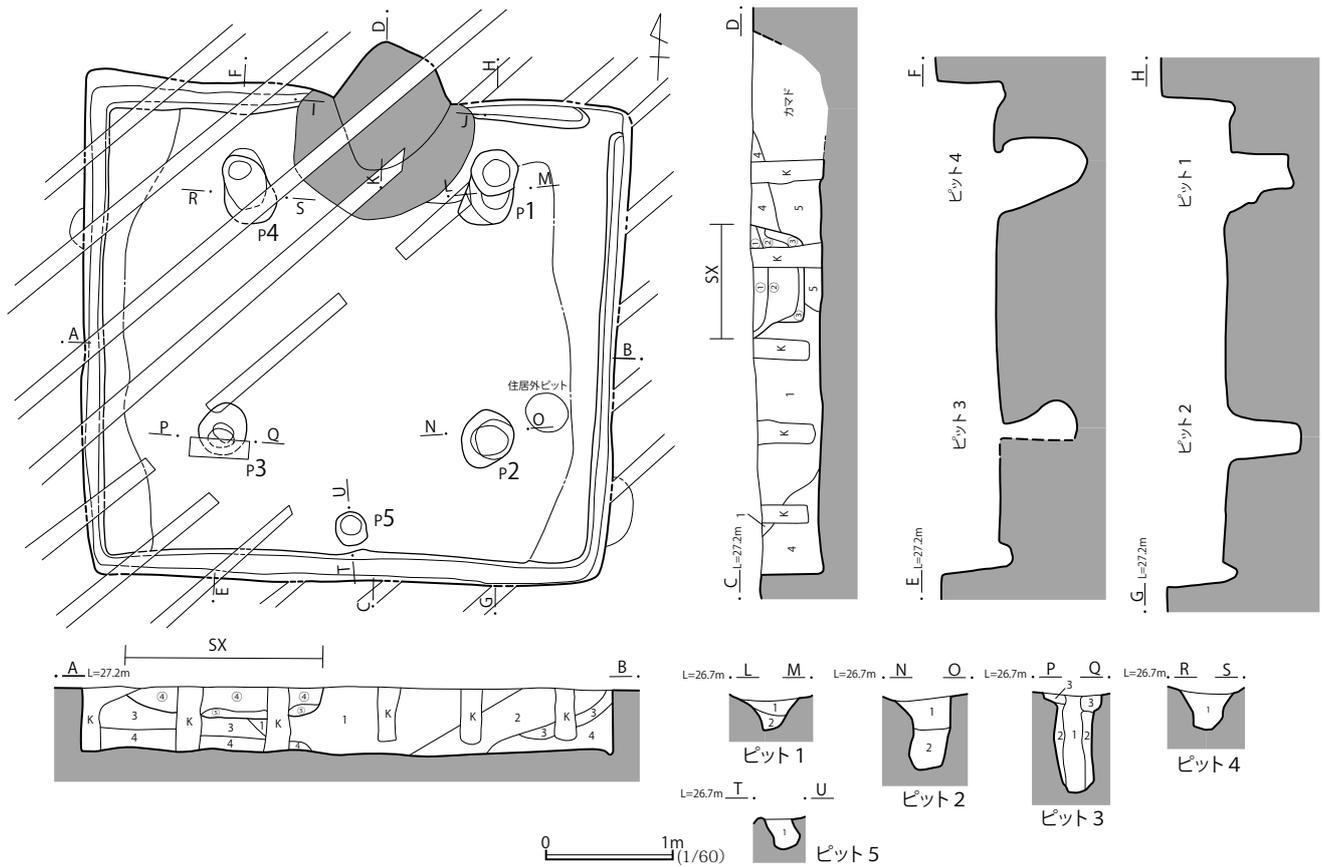
遺構 A-19区に位置する。ゴボウ耕作による



第92図 第78号住居跡遺物出土状況



第93図 第78号住居跡出土遺物



**第80号住居跡堆積覆土**

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第2層 褐色土層(径1~5cmロームブロック・ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第3層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まり有り)
- 第4層 暗褐色土層(第1・3層より明るい色調 ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第5層 暗褐色土層(ローム粒・白色粘土少量含む カマド材含む 締まり有り)
- 第①層 黄色粘土層(SX 覆土 締まり強く有り)
- 第②層 灰色粘土層(SX 覆土 締まり強く有り)
- 第③層 白色粘土層(SX 覆土 締まり強く有り)
- 第④層 黒褐色(SX 覆土 ローム粒微量含む 締まり有り)
- 第⑤層 黄色粘土層(SX 覆土 締まり有り)

**第80号住居跡ピット1 堆積覆土**

- 第1層 黒色(白色粘土ブロック多量含む 締まり有り)
- 第2層 褐色(ローム粒多量含む 締まりやや有り)

**第80号住居跡ピット2 堆積覆土**

- 第1層 黒色土層(ローム粒少量含む 締まり有り)
- 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)

**第80号住居跡ピット3 堆積覆土**

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや無し)
- 第2層 褐色土層(掘形 ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第3層 褐色土層(床面 ローム粒多量含む 締まり有り)

**第80号住居跡ピット4 堆積覆土**

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや無し)

**第80号住居跡ピット5 堆積覆土**

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒微量含む 締まりやや有り)

第94図 第80号住居跡(淡網:粘土)

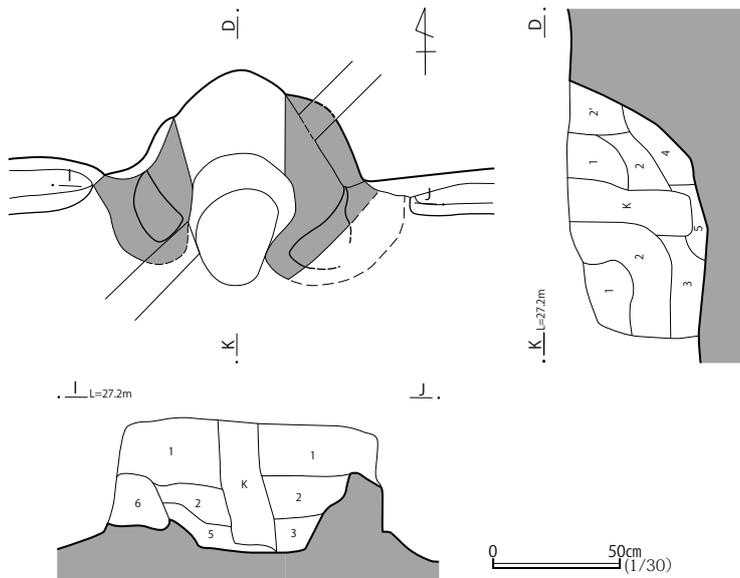
溝状の攪乱を受けており、一部は床面まで掘り込まれている。また、住居跡に伴わないピットや土坑にも掘り込まれている。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は3.94 × 4.24m。壁高は東壁51cm、西壁と南壁54cm、北壁51cm。主軸方向はN - 2° - Wを指す。壁周溝はほぼ全周する。幅10~15cm、床面からの深さ4~6cmを測る。床面は東西の壁沿いを除いて硬化しており、凸凹している。

竪穴部覆土は、暗褐色土を主体に堆積する。第2層はロームブロックを多く含む褐色土で、人為的に埋め戻さ

れたものと思われる。

竈は北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は、天井部が崩れているが、両袖部と燃焼部は比較的よく残っている。竈の構築材として白色粘土が使用されている。壁面への掘り込みは、45cm程突出する。東側の袖部は粘土等を芯として構築したものではなく、竪穴部構築時に竈の設置場所を決め、地山のローム土を掘り残して、その上に白色粘土を貼って袖部としている。

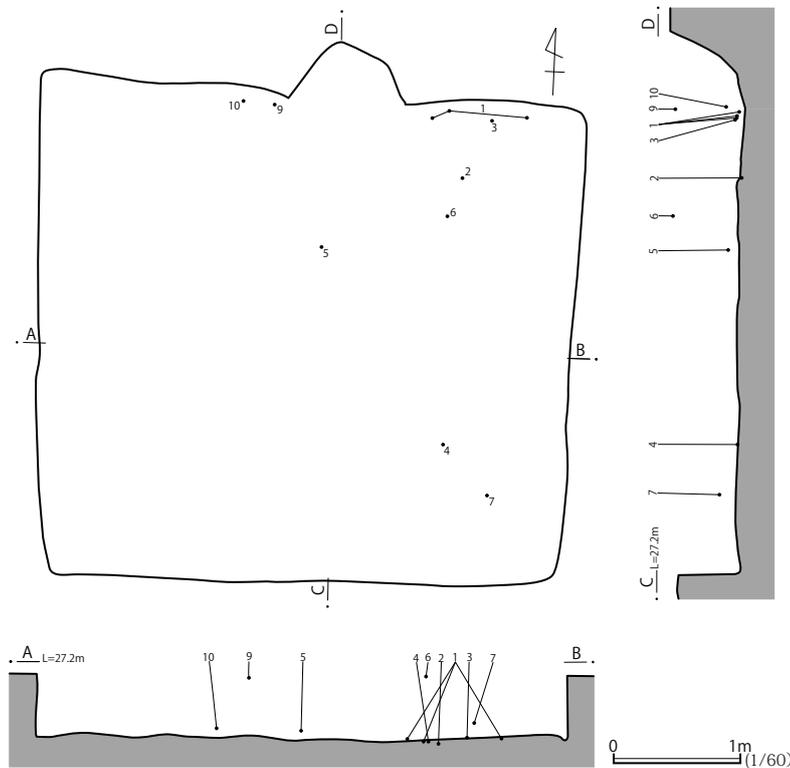
ピットは5基検出された。ピット1~4は支柱穴、ピット5は出入り口施設に伴うものと思われる。床面からの



第80号住居跡竈堆積覆土

- 第1層 黒褐色土層(粘土粒少量含む 締まり有り)
- 第2層 黒色土と白色粘土の混合層(天井部 締まり有り)
- 第2'層 第2層よりも粘土の多い土層(被熱した粘土を多量に含む 締まり有り)
- 第3層 黒色土層(粘土粒・ローム粒多量含む 焼土粒少量含む 締まり有り)
- 第4層 黒褐色土層(焼土粒少量含む 締まり有り)
- 第5層 褐色土層(焼土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第6層 灰白色粘土層(締まり有り)

第95図 第80号住居跡竈(淡網:粘土)



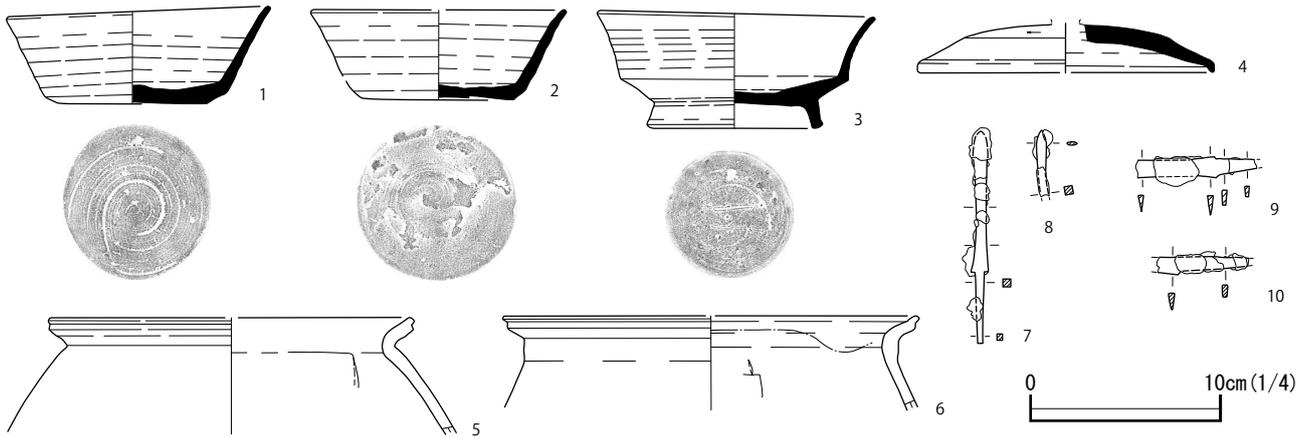
第96図 第80号住居跡遺物出土状況

深さは、ピット1が55cm、ピット2・3が58cm、ピット4が70cm、ピット5が27cmである。支柱穴のピット3・4は、覆土の堆積状況から住居の床面を張る前に柱を立てていることが分かる。また、ピット3のみ住居廃絶時に柱を引き抜いていない状況が確認できた。

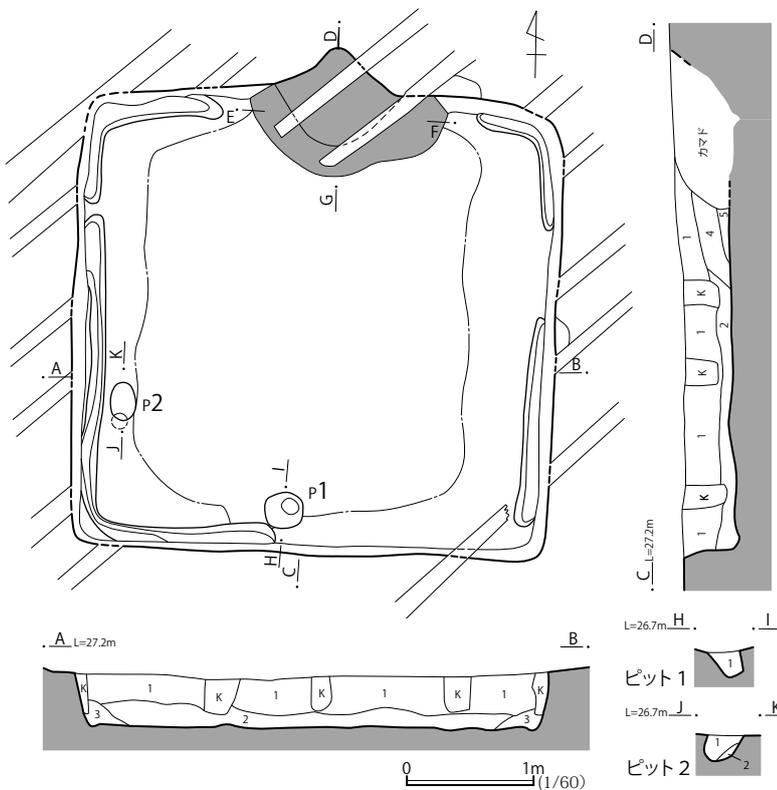
**遺物の出土状況** 出土した遺物は少ない。平面分布では、竪穴部中央から東寄りに分布する。須恵器杯形土器は、第97図1・2・3は正位の状態で床面直上から出

土した。土師器甕形土器は5が覆土下層、6が覆土上層から出土した。鉄製品は、7と10が覆土下層、9が覆土上層から出土した。

**遺物** 須恵器は胎土からみて全て木葉下窯産と思われる。1・2の杯は、底部周縁に若干二次底部面を残すことや形状からみて8世紀第4四半期頃に位置付けられる。3の有台杯は、体部が開き底部外周が大きく立ち上がる形状であり、8世紀第4四半期から9世紀第2四



第97図 第80号住居跡出土遺物



第98図 第81号住居跡(淡網:粘土)

第81号住居跡堆積覆土

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第2層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径1cmロームブロック少量含む 締まりやや有り)
- 第3層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第4層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 白色粘土少量含む 締まりやや有り)
- 第5層 暗褐色土層(ローム粒微量含む 締まりやや有り)

第81号住居跡ピット1堆積覆土

- 第1層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)

第81号住居跡ピット2堆積覆土

- 第1層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第2層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)

半期頃に位置付けられる。4の蓋は鈕径からみて有台杯蓋と思われる。3の有台杯に伴うものであろうか。5・6はいずれも小破片であるが、胎土中に白雲母を含むことから新治窯付近産である。おそらく常陸型甕になるのであろう。7は鑿箭式鉄鏃の完形品である。

遺物群の時期は8世紀第4四半期頃に位置付けられる。

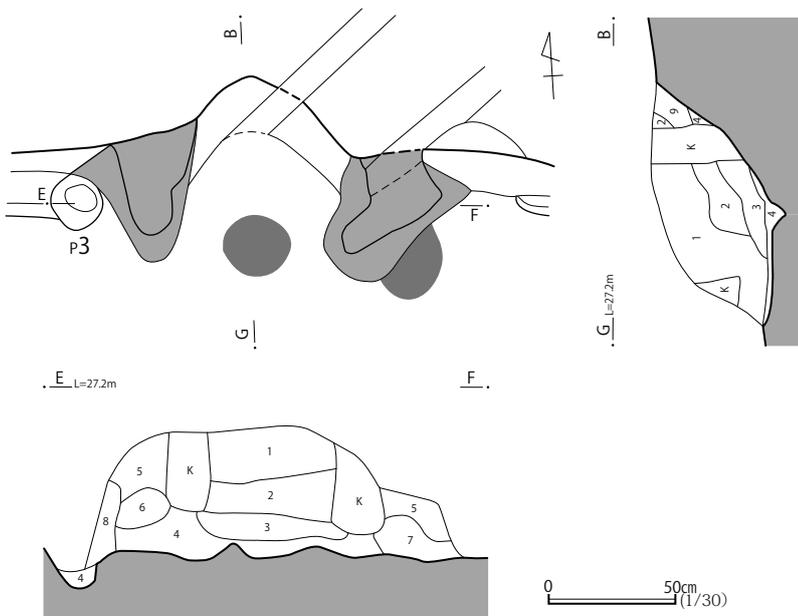
第81号住居跡

**遺構** A・B - 18・19区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けており、一部は床面まで掘り込

んでいる。平面形は、方形を呈する。竪穴部の規模は3.68 × 3.81m。壁高は東壁49cm、西壁54cm、南壁39cm、北壁50cm。主軸方向はN - 1° - Wを指す。壁周溝は所々にみられる。幅10 ~ 15cm、床面からの深さ2 ~ 8cmを測る。床面は東西の壁沿いを除いて硬化しており、凸凹している。

竪穴部覆土は、暗褐色土を主体に堆積する。

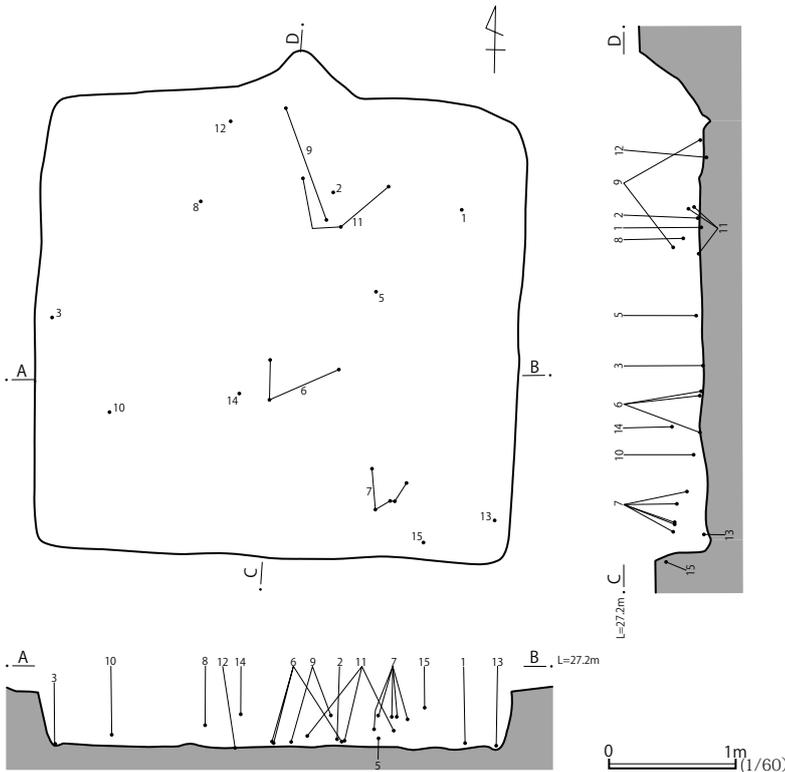
竈は北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は、耕作による攪乱を受け残りはよくないが、両袖部の先端と火床面は残っている。竈の構築材として白色粘土が使用され



第99図 第81号住居跡竈(濃網:焼土・淡網:粘土)

第81号住居跡竈堆積覆土

- 第1層 黒褐色土層(ローム粒・白色粘土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第2層 暗褐色土層(ローム粒・白色粘土粒多量含む 締まりやや有り)
- 第3層 灰色土層(焼土粒少量含む 締まり無し)
- 第4層 褐色土層(径1cmロームブロック・ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第5層 白色粘土層(粘土主体だが、一部黒色土が混じる 締まり有り)
- 第6層 褐色ローム土(ローム土主体 締まり有り)
- 第7層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第8層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 粘土粒少量含む 締まりやや有り)
- 第9層 褐色土層(ローム粒・粘土粒・焼土粒少量含む 締まりやや有り)



第100図 第81号住居跡遺物出土状況

ている。壁面への掘り込みは、32cm程突出する。火床面には2cm程の厚さの焼土が堆積していた。袖部東側の下面で、1cm程堆積した焼土の広がりを確認した。この焼土の北側壁では掘り込まれた痕跡がないことから、竈の造り替えとは考えにくい。第82号住居跡でも同じような例がみられる。

ピットは3基検出された。ピット1は出入り口施設に

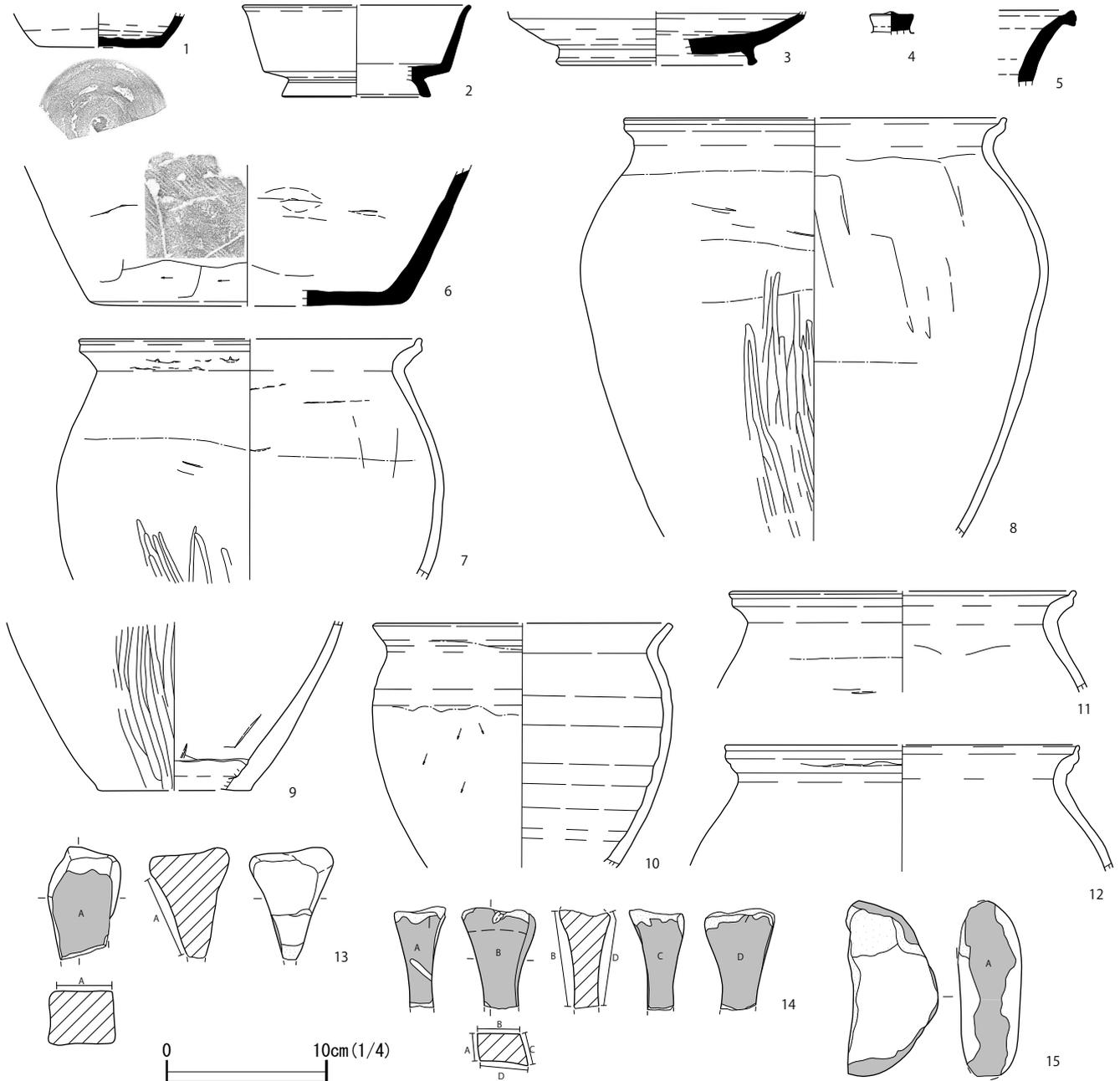
伴うものと思われる。床面からの深さは、ピット1が21cm、ピット2が25cm、ピット3が19cmである。

**遺物の出土状況** 完形で出土した遺物はない。平面分布では、竪穴部全体から出土している。垂直分布では、壁側の遺物が覆土中層で、竪穴部中央部が覆土下層から出土しており、住居が埋没していく段階で投棄された様相を呈する。

**遺物** 第101図1の杯は形状から9世紀第1四半期頃であろうか。2の有台杯は底部周辺が立ち上がらず水平であることからみて8世紀第3四半期頃と思われる。3の有台盤も小さな高台などからみて有台杯と同じ頃かもしれない。6は新治窯産の胴部斜位平行線文叩きをもつ平底甕である。8世紀後半から9世紀前半のころに位置付けられる遺物である。7～9は新治窯付近産の常陸型甕である。

10・12の土師器甕は胎土からみて新治窯付近産ではない。13・14は白色流紋岩製砥石である。ふたつとも中央部が薄くなり折れて廃棄されたものだろう。15は扁平な円礫の側面に敲打痕がめぐる、砂岩製の敲石である。

遺物群の時期は、8世紀第3四半期から9世紀第1四半期頃と、幅をもつ年代推定となった。遺物からみると住居跡の廃絶年代は8世紀第4四半期頃になるだろう



第 101 図 第 81 号住居跡出土遺物(淡網:砥面)

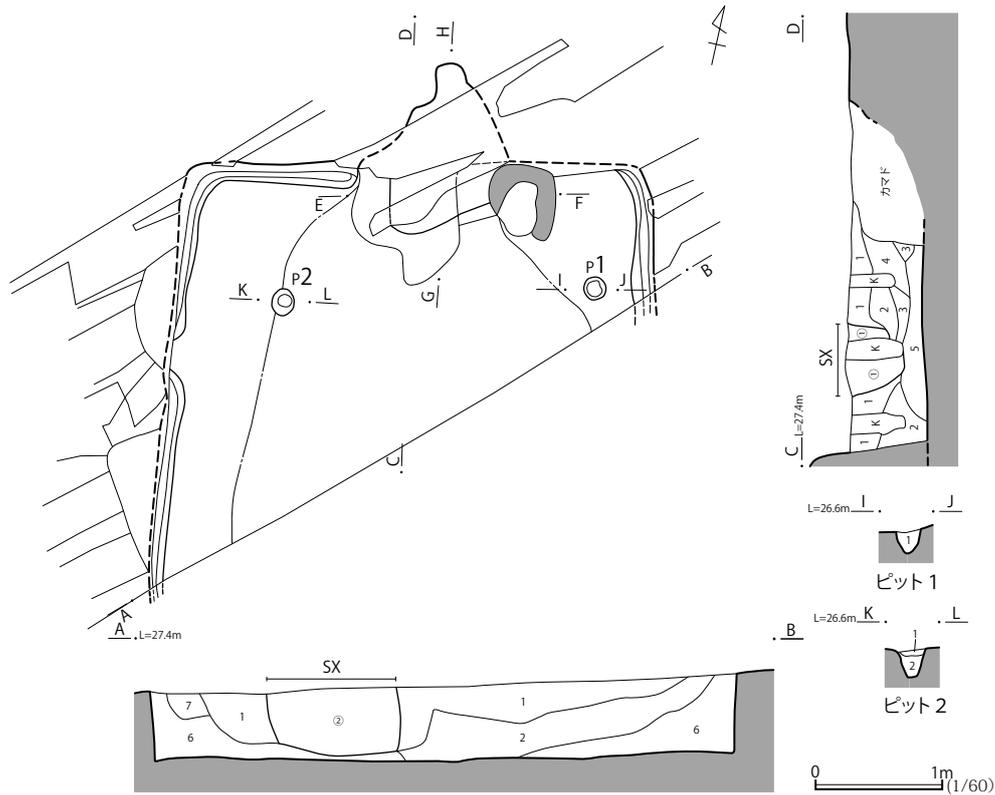
か。

### 第 82 号住居跡

**遺構** A-20 区に位置する。住居跡南側が調査区外のため、全体の調査は実施できない。ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けているが、床面までは掘り込まれてはいない。また、中世と思われる土坑にも掘り込まれている。平面形は、方形を呈すと思われる。竪穴部の規模は(3.40)×3.76m。壁高は東壁 68 cm, 西壁と北壁が 59 cm。主軸方向は N-12°-W を指す。壁周溝は、調査した範囲ではほぼみられる。幅約 10cm, 床面からの

深さ 1~5 cm を測る。床面は東西の壁沿いを除いて硬化しており、凸凹している。

竪穴部覆土は、黒褐色土と暗褐色土が主体に堆積する。竈は北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は、耕作による攪乱を受け残りはよくないが、両袖部の先端と火床面は残っている。竈の構築材として白色粘土が使用されている。壁面への掘り込みは、76 cm 程突出する。竈の東側に、袖を共有して、小型の竈を確認した。白色粘土で袖部を構築し、燃焼部の床面は被熱していた。壁面への掘り込みはみられないことから、竈の造り替えとは考えられず、併用して使用していた可能性が考えられる。



**第 82 号住居跡堆積覆土**

- 第 1 層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第 2 層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径 1 cm ロームブロック少量含む 締まりやや有り)
- 第 3 層 黒色土層(ローム粒多量含む 白色粘土少量含む 締まりやや有り)
- 第 4 層 暗褐色土と白色粘土の混合層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第 5 層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒少量含む 締まりやや有り)

- 第 6 層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 径 1 cm ロームブロック微量含む 締まりやや有り)
- 第 7 層 暗褐色土層(ロームブロック・ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第①層 暗褐色土層(SX 覆土 ローム粒微量含む 締まりやや有り)
- 第②層 黒色土層(SX 覆土 ローム粒微量含む 締まりやや有り)

**第 82 号住居跡ピット 1・2 堆積覆土**

- 第 1 層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第 2 層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)

第 102 図 第 82 号住居跡(淡網・粘土)

同じような例が鷹ノ巣遺跡のすぐ東側に位置する宮後遺跡第 16 号住居跡でも確認されている[大久保 2012]。

ピットは 2 基検出された。ピット 1・2 とも支柱穴と思われる。床面からの深さは、ピット 1 が 20cm, ピット 2 が 22cm である。

**遺物の出土状況** 完形で出土した遺物はない。平面分布では、竪穴部全体から出土している。垂直分布では、覆土中層から床面直上から出土している。第 106 図 10 の甕形土器は、床面直上で広範囲に接合関係がみられる。

**遺物** 須恵器杯は形状から 1・2 が 9 世紀第 1 四半期, 3 が 9 世紀第 2 四半期に位置付けられる。6 は有台杯蓋であろう。7 の須恵器有台盤は底部外面中央に墨痕が残り、その一部に墨痕と重複して朱墨痕も認められるので、硯として利用されたことがわかるが、研磨は施

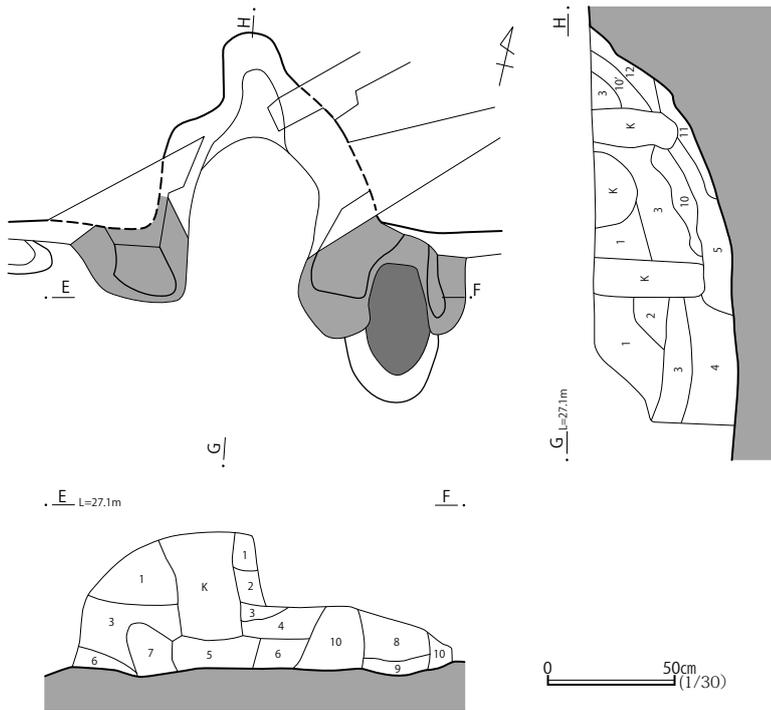
されていない。土師器甕は 15 の小型甕を除き、すべて新治窯付近産の常陸型甕になるものと思われる。

遺物群の時期は、9 世紀前半頃に位置付けられる。

**第 84 号住居跡**

**遺構** V-16 区に位置する。ゴボウ耕作による溝状の攪乱を受けているが、床面までは掘り込まれていない。平面形は、ほぼ方形を呈する。竪穴部の規模は 3.45 × 3.26m。壁高は東壁 51cm, 西壁 48cm, 南壁 53 cm, 北壁 52cm。主軸方向は N-2° - E を指す。壁周溝はみられない。床面は、南壁中央から竪穴部中央にかけて帯状に硬化している。

竪穴部覆土は、壁際に褐色土と黒褐色土、中央部に褐色土と黒色土の混合層が堆積する。褐色土と黒色土の混



- 第 82 号住居跡竈堆積覆土**
- 第 1 層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 締まり有り)
  - 第 2 層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 白色粘土少量含む 締まり有り)
  - 第 3 層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 白色粘土粒斑状に混じる 締まり有り)
  - 第 4 層 暗褐色土層(ローム粒多量含む 焼土粒微量含む 締まり有り)
  - 第 5 層 暗褐色土層(ローム粒・焼土粒多量含む 締まりやや有り)
  - 第 6 層 暗褐色土層(ローム粒・焼土粒少量含む 黒色土混じる 締まり有り)
  - 第 7 層 白色粘土と暗褐色土の混合層(焼土粒少量含む 締まりやや有り)
  - 第 8 層 暗褐色土層(ローム粒・焼土粒少量含む 締まりやや有り)
  - 第 9 層 暗褐色土層(焼土粒多量含む 締まりやや有り)
  - 第 10 層 黄白色粘土層
  - 第 10'層 天井部粘土
  - 第 11 層 褐色土層(ローム粒微量含む 締まりやや有り)
  - 第 12 層 暗褐色土層(ローム粒微量含む 締まりやや有り)

第 103 図 第 82 号住居跡竈(濃網:焼土・淡網:粘土)

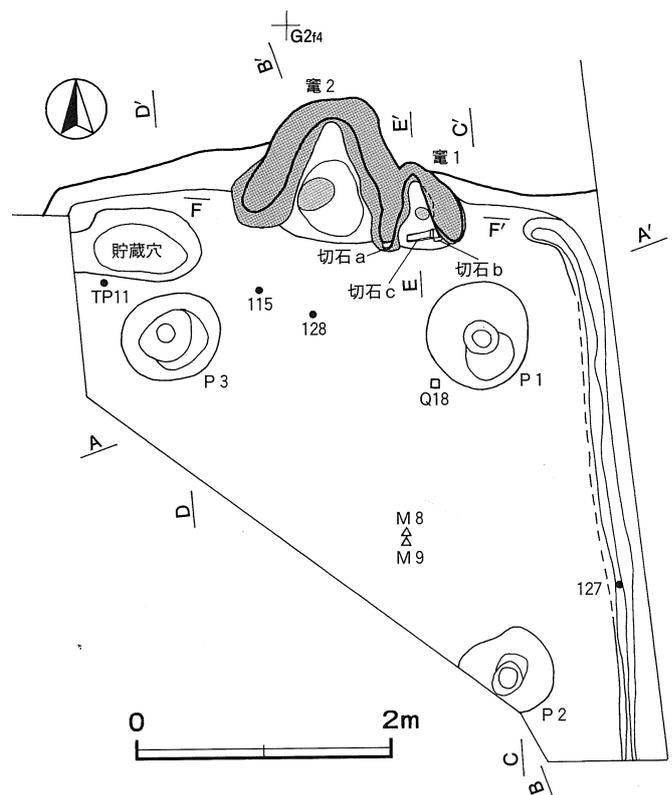


第 82 号住居跡竈

合層である第 1 層は、人為的に埋め戻された土層と考えられる。

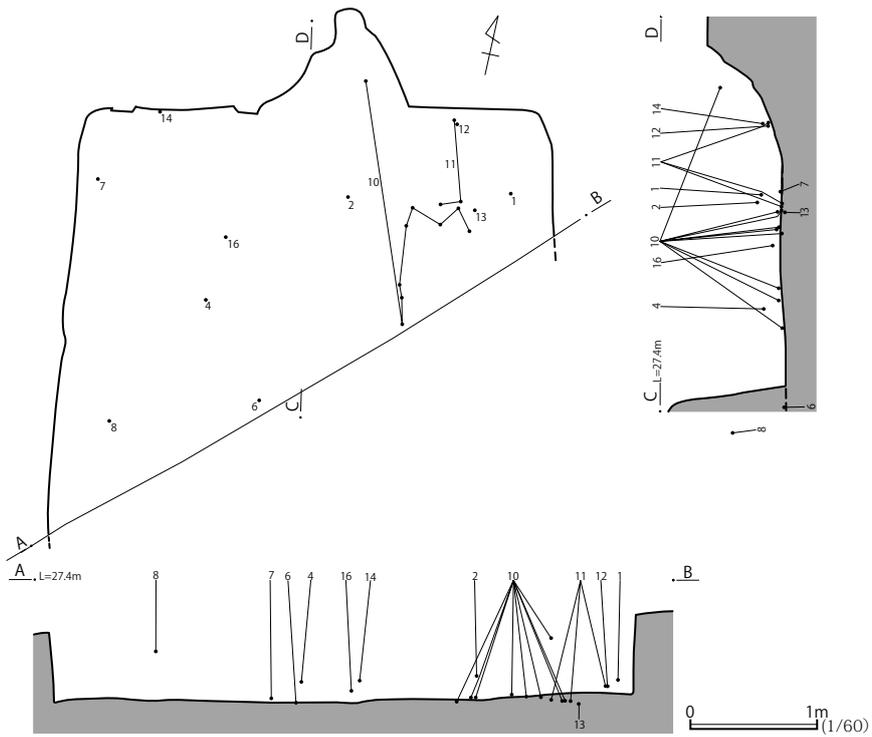
竈は北壁の中央よりやや東側に位置する。残存状況は、天井部は崩れているが、燃焼部から焚口にかけては比較的よく残っている。竈の構築材として白色粘土が使用されている。壁面への掘り込みは、50 cm程突出する。煙道部は住居跡確認面で確認でき、その直径は 20 cmを測る。竈掘形は、壁を横断面で見ると階段状に掘り込みそこに粘土を張って構築している。

ピットは 2 基検出され、出入り口施設に伴うものと思われる。支柱穴は確認されない。床面からの深さは、ピット 1 が 9 cm、ピット 2 が 22 cm である。

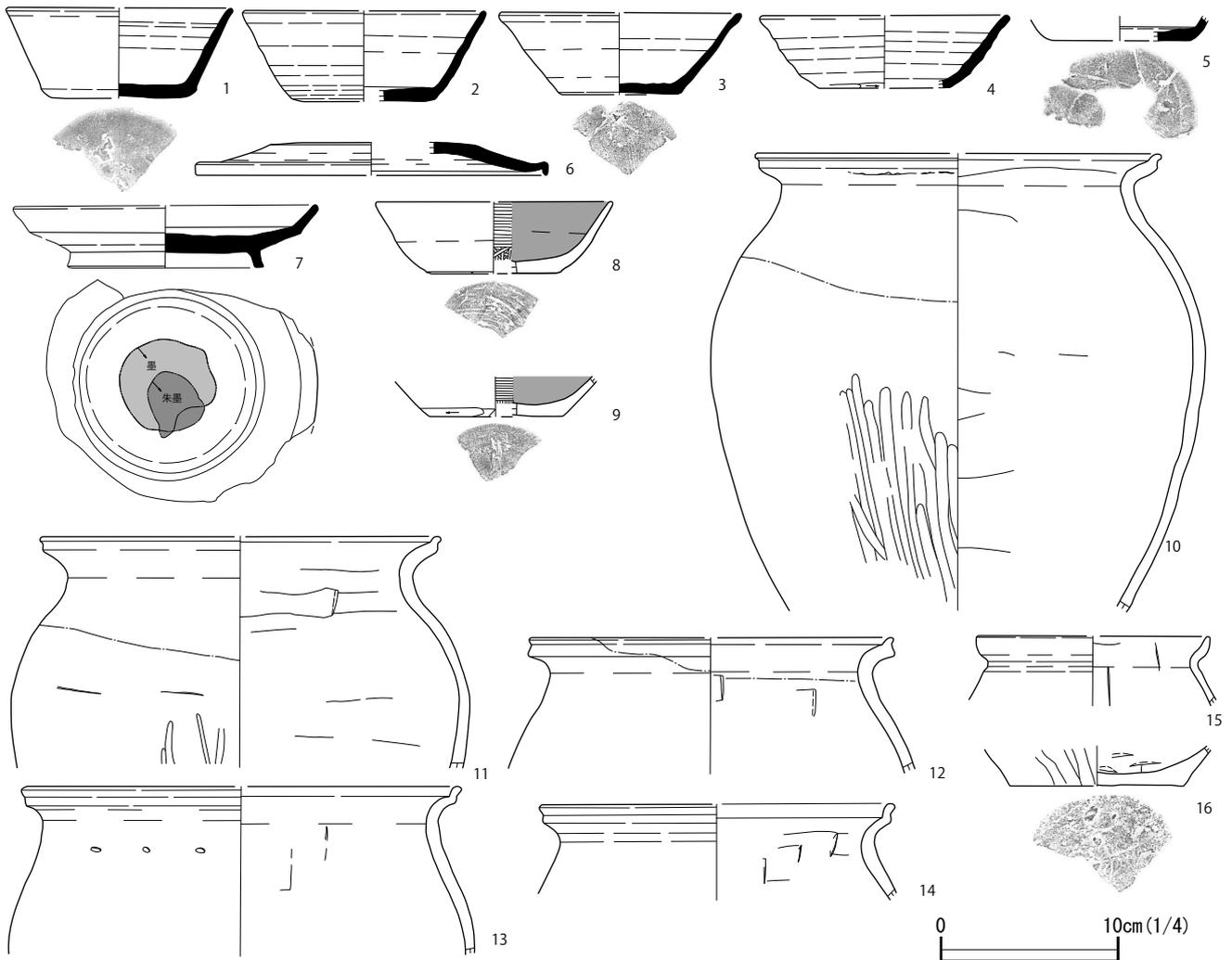


第 104 図 竈 2 基併存例: ひたちなか市宮後遺跡第 16 号住居跡([大久保 2012]より転載)

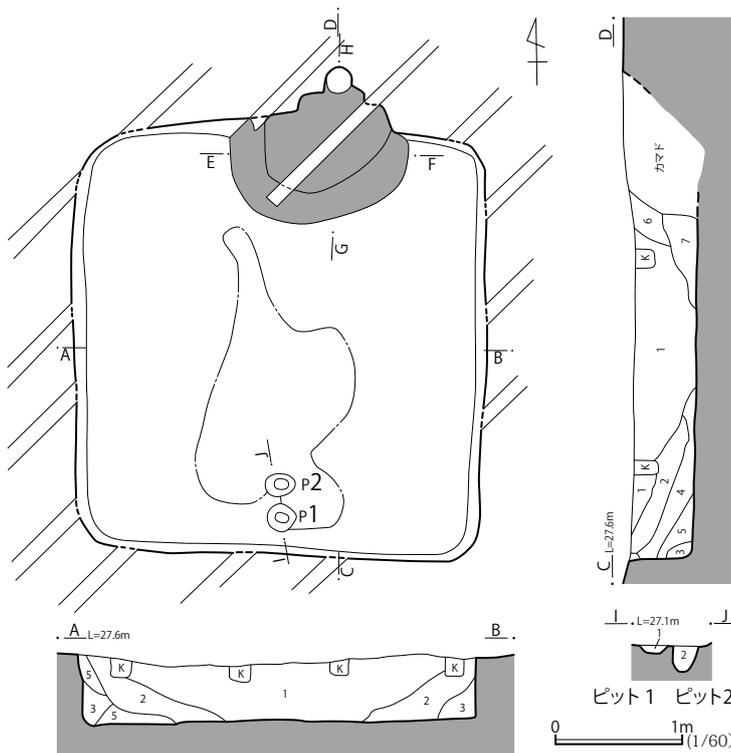
**遺物の出土状況** 出土した遺物は少ない。平面分布では、竈穴部全体に分布する。垂直分布では、覆土下層から床面直上で出土した。須恵器杯形土器の第 110 図 3



第105図 第82号住居跡遺物出土状況



第106図 第82号住居跡甗(淡網:黒色処理)



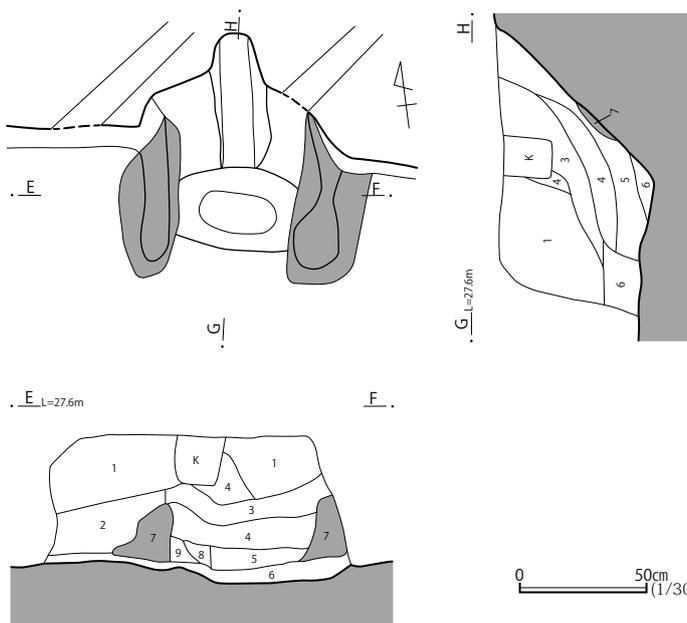
第84号住居跡堆積覆土

- 第1層 褐色土と黒色土の混合層(径1~3cmロームブロック・ローム粒多量含む 締まり有り)
- 第2層 黒褐色土層(ローム粒多量含む 径1~3cmロームブロック微量含む 締まり有り)
- 第3層 褐色土層(径1~3cmロームブロック・ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第4層 褐色土層(ローム粒多量含む 締まりやや有り)
- 第5層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第6層 褐色土層(ローム粒多量含む 粘土少量含む 締まりやや有り)
- 第7層 褐色土層(第1層にカマドの粘土が混じった土層 締まりやや有り)

第84号住居跡ピット1・2堆積覆土

- 第1層 黒褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)
- 第2層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 締まりやや有り)

第107図 第84号住居跡・出土遺物(淡網:粘土)



第84号住居跡電堆積覆土

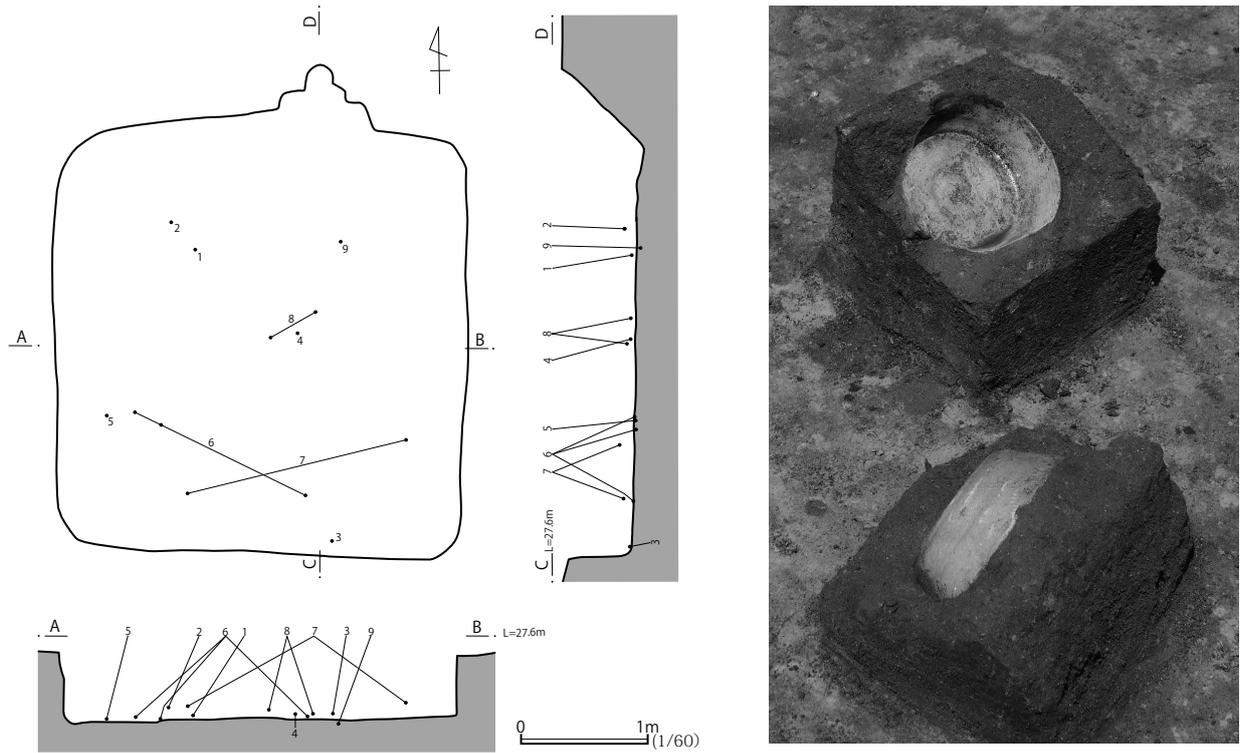
- 第1層 暗褐色土層(ローム粒・粘土粒少量含む 黒色土混じる)
- 第2層 暗褐色土層(ローム粒少量含む)
- 第3層 暗褐色土層(ローム粒少量含む 焼土粒微量含む)
- 第4層 白色粘土層(被熱した粘土 焼土粒多量含む)
- 第5層 灰白色粘土層(焼土粒少量含む)
- 第6層 黒色土層(掘形 ローム粒多量含む)
- 第7層 白色粘土層(裾部)
- 第8層 褐色土層(ローム土含む 締まり有り)
- 第9層 暗褐色土層(ローム粒・焼土粒・粘土粒少量含む 締まりやや無し)

第108図 第84号住居跡電(淡網:粘土)

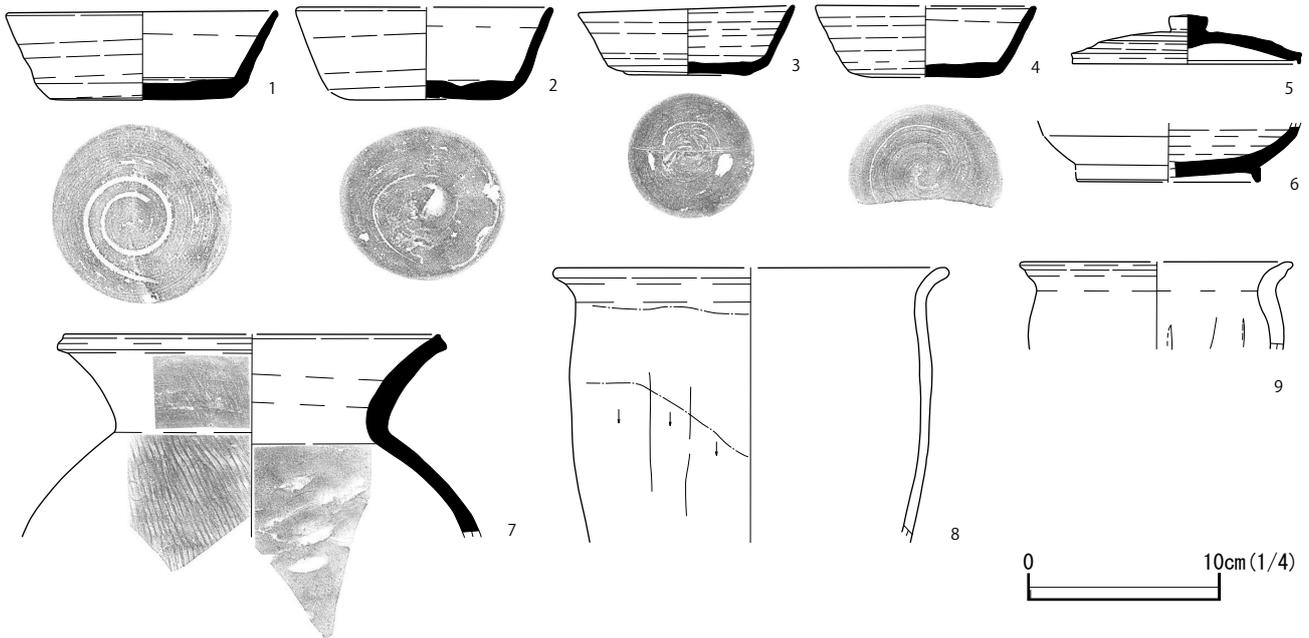
は床面直上で南側壁に立て掛けるように出土した。1・2・4は覆土下層で、2が正位、1が倒位の状態出土した。蓋形土器の5は、床面直上で、逆位の状態出土した。

**遺物** 1~4の木葉下窯産須恵器杯は大型品(1・2)と小型品(3・4)がある。いずれも底部回転ヘラ削りであり、形状から8世紀中葉頃に位置付けられよう。6

は木葉下窯産の稜椀形の有台杯であり、8世紀第2四半期後葉頃の生産年代が与えられる。5は木葉下窯産の有台杯蓋であるが、口径からみて小型品の蓋になろう。7は木葉下窯産と思われる須恵器甕である。肩部の形状から丸底になるものと思われ、8世紀第3四半期頃までの生産年代となるだろう。8は口唇部の形状が丸く、胴部に外面縦方向ヘラ削りを加えるという、古墳時代後期以



第109図 第84号住居跡遺物出土状況



第110図 第84号住居跡出土遺物

来の伝統を引く土師器甕である。9は新治窯産の小型甕であり、おそらく常陸型甕の小型品なのであろう。

遺物群の時期は、8世紀第2四半期後葉ぐらいとみてよいと思われる。

#### 引用文献

大久保隆史 2012 『宮後遺跡 部田野西原遺跡 一般国道245号道路拡幅事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団文化財調査報告第354集 財団法人茨城県教育財団

### 3 土坑・溝状遺構の調査

#### 第13号土坑

Z-15区に位置する。平面形は円形を呈し、底面には円形の掘り込みがある。直径は280cm、確認面からの深さ170cmを測る。底面の掘り込みは直径45cm、深さ20cmを測る。底面は鹿沼軽石堆積層の下に構築している。壁面には、5つのピット状の掘り込みがみられる。覆土は上層に暗褐色土、下層に黒色土が堆積する。

遺物は須恵器の瓶片1点が図化出来た。この他には、底面近くから奈良・平安時代に推定できる甕形土器片が出土している。よって、当土坑の時期も奈良・平安時代と思われる。

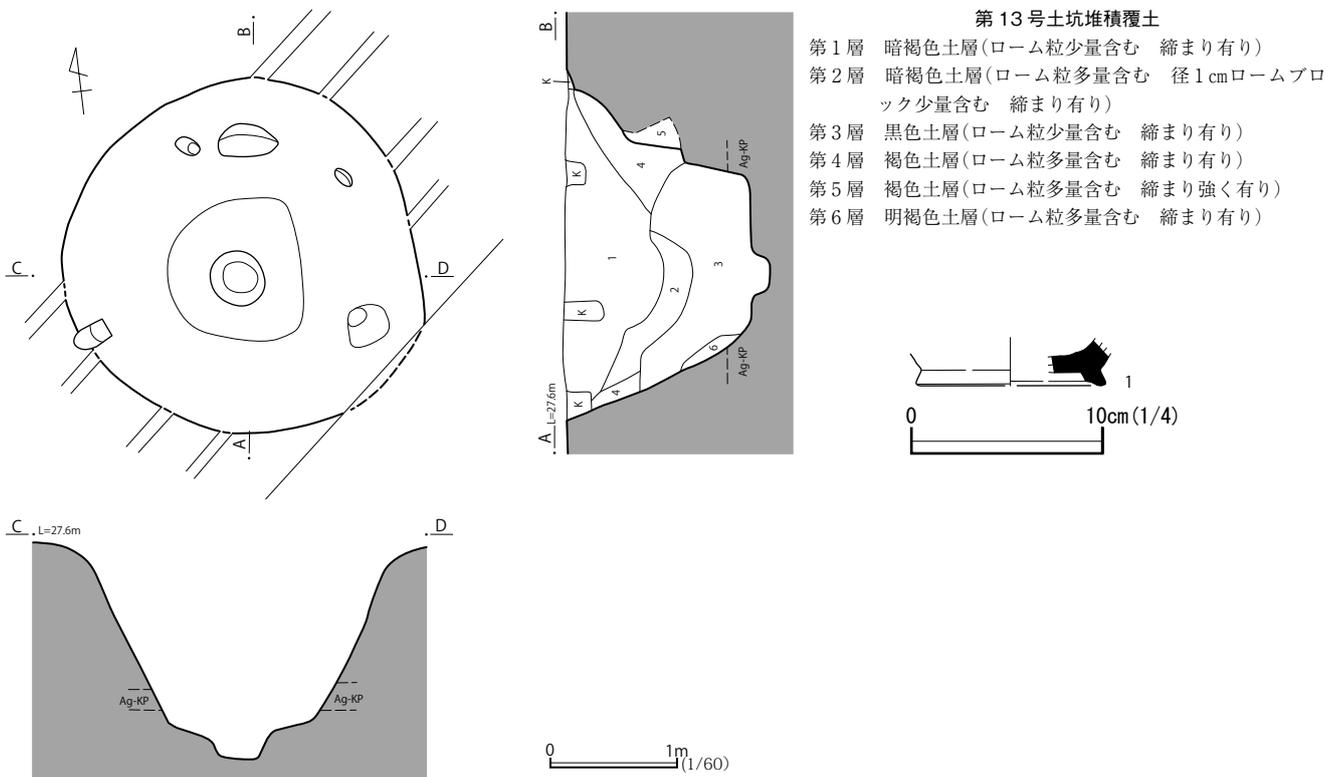
#### 第3号溝状遺構

**遺構** W~B-15~19区に位置する。第1号溝状遺構に掘り込まれている。溝はほぼ東西を軸に延びており、第2次調査区から続いている。この軸は、第70・80・81・84号住居跡とほぼ直交する。確認できた長さ約69m、最大幅約2.2m、深さA-B断面で90cmである。溝の断面はY字状を呈する。覆土は、上層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積する。

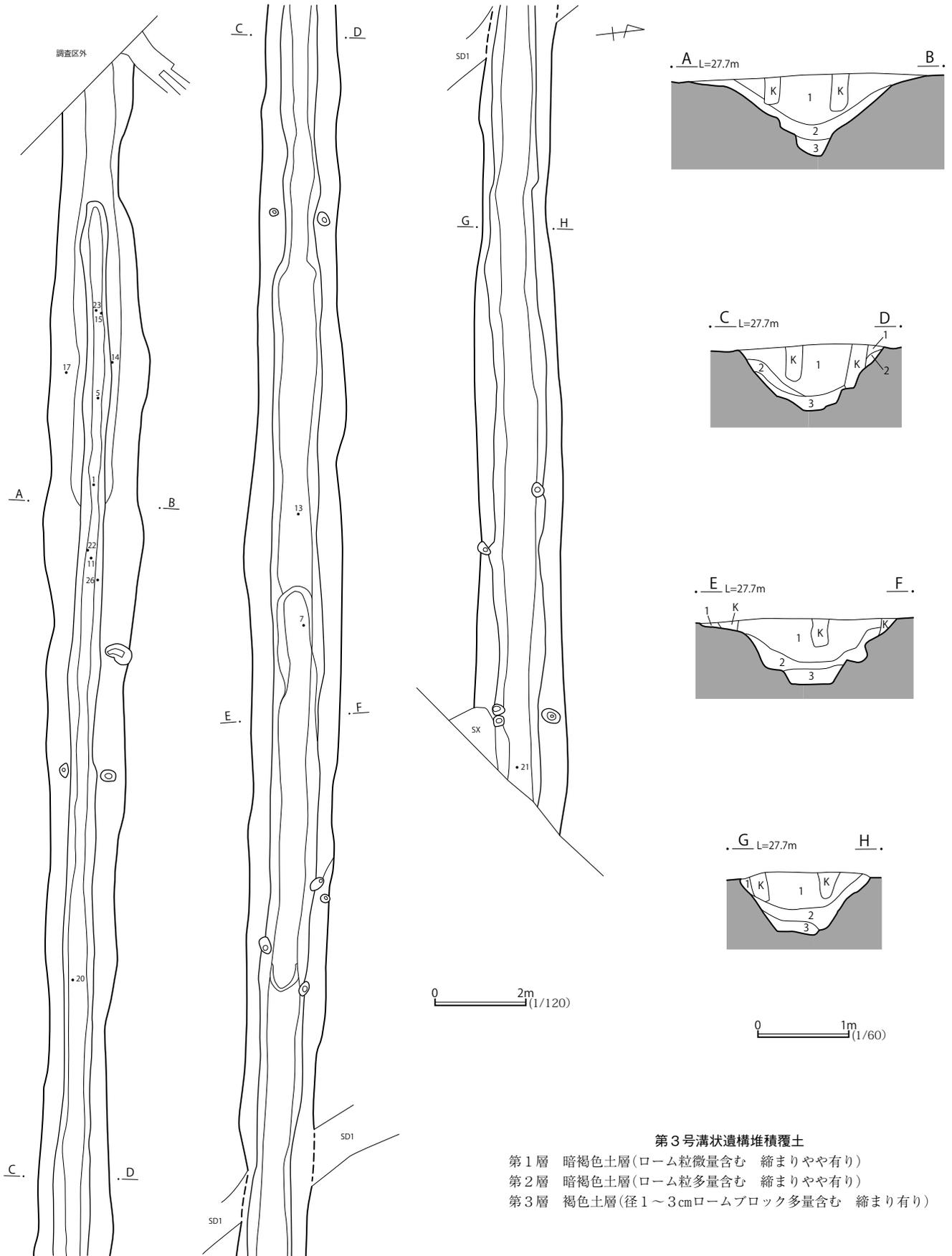
**遺物の出土状況** 図化できた遺物は少ない。すべて覆土上層から出土しているため、すべて廃棄品と思われる。

**遺物** 原の寺瓦窯産と思われる瓦類が出土する点が目されるが、8世紀前半の須恵器杯第113図1・2や蓋10も、胎土や焼成の特徴からみて原の寺瓦窯周辺産の可能性もある。原の寺瓦窯と当遺跡のつながりを示す資料といえる。8世紀前半は須恵器有台杯の転用硯14も認められ、瓦類と合わせて注目される。9世紀に入ると、須恵器杯4・7・8や蓋13など、新治窯産の資料が目立つ点も指摘できる。このほか、27は焼けた穿孔貝巢穴痕跡軟質泥岩と思われる。なぜ海岸にある石が遺跡にもたらされたのであろうか。焼けている理由と合わせて今後の課題である。

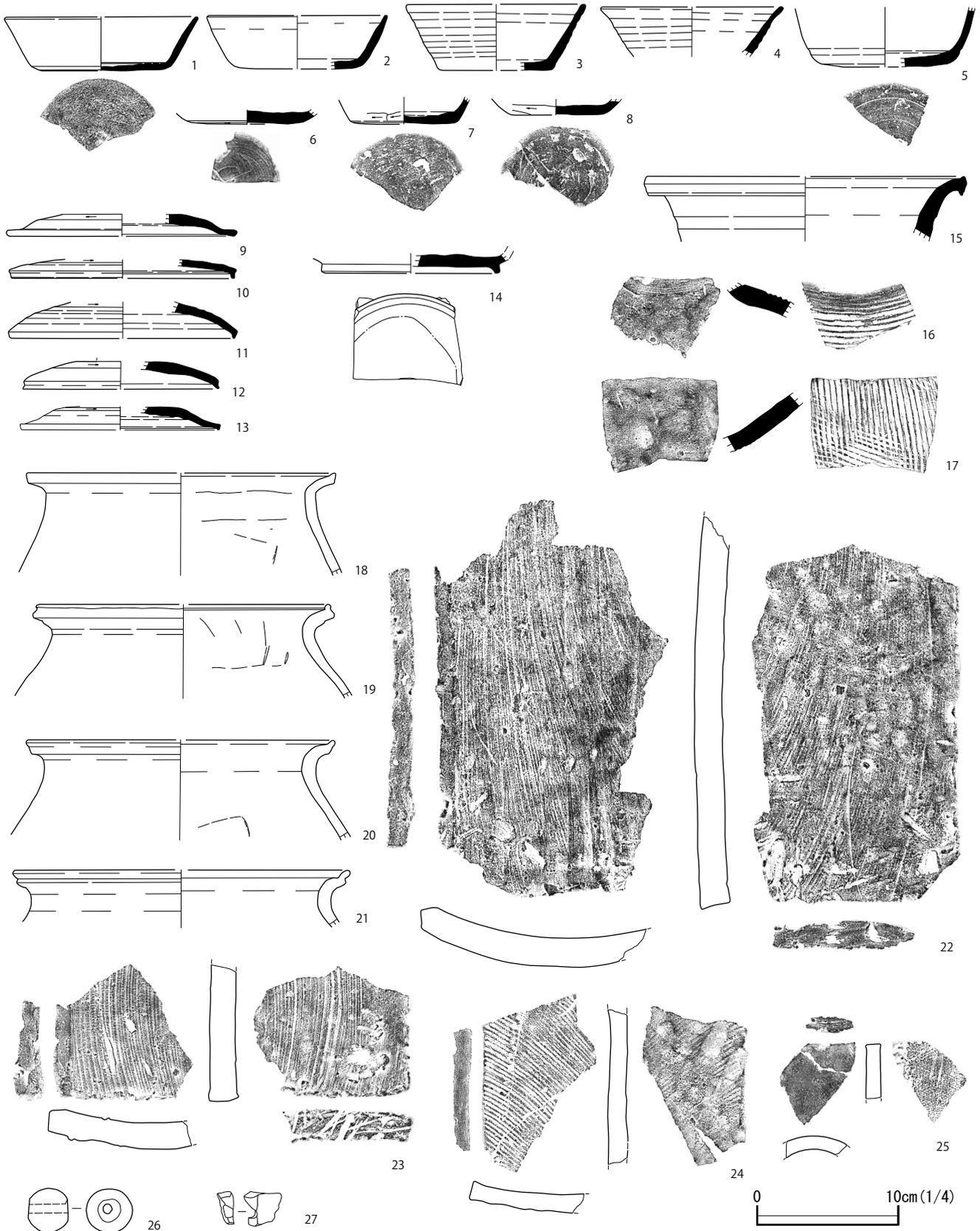
遺物群の時期は、8世紀前半から9世紀後半までと幅を有している。遺物からみて、8世紀前半頃に掘削された溝は、9世紀後半ごろにほとんど埋没していたのであろう。



第111図 第13号土坑・出土遺物



第112図 第3号溝状遺構・遺物出土状況



第 113 図 第 3 号溝状遺構出土遺物

## 4 奈良・平安時代遺物観察表

凡例:法量に記載した部位の計測値の単位は「cm」である。括弧内の数値は、復元された口径や底径、最大径、または残存高を示す。

## 第70号住居跡

1 台帳:P20 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:底部40% 法量:高台径(12.4) 色調:暗灰色 胎土:礫(白, 灰少), 骨針 特徴:焼成硬質。底部外面回転ヘラ削り。底部外面中央が研磨されているので転用硯とみられる。底部内面中央が磨減する。硯として使われた際の痕跡か。備考:木葉下窯産か

2 台帳:P5・10・15 材質:須恵器 器種:甕 残存:上半部(口縁部30%欠失) 法量:口径11.8 色調:灰色 胎土:礫(白, 灰少), 骨針 特徴:ロクロ成形。外面肩部以下浅く回転ヘラ削り。備考:木葉下窯産か

3 台帳:P6 材質:須恵器 器種:甕 残存:胴部片 法量:一 色調:灰色。外面暗灰色釉が薄くかかる。胎土:礫(白), 砂(白, 白透) 特徴:外面平行線文叩き。内面無文。焼成硬質。

4 台帳:P1・4・7・8, No.2・3・5 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部70% 法量:口径(25.8) 色調:橙褐色。肩部外面が煤けて黒色化。胴部内面汚染され暗褐色。胎土:礫(白, 白透), 白雲母多 特徴:肩部外面に縦方向ヘラナデ。外面胴部下半縦方向ヘラミガキ若干残る。胴部内面横方向ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。備考:新治窯付近産

5 台帳:P4・No.2・3 材質:土師器 器種:甕 残存:底部欠失。全体的に小破片が接合するが部分的に欠失。法量:口径23.2 色調:褐色。外面胴部下半やや煤ける。内面頸部以下は汚染により暗色化する。口縁部は部分的に煤ける。胎土:礫(白多, 白透多), 白雲母 特徴:胴部外面ナデの後, 下半部縦方向ヘラミガキ。外面肩部にヘラ圧痕みられる。胴部内面横方向ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。備考:新治窯付近産

6 台帳:P9・16・17・19, No.1・2・5 材質:土師器 器種:甕 残存:上半部30% 法量:口径(22.4) 色調:橙褐色。胴部外面やや煤ける。胴部内面暗色化。胎土:礫(白透多, 白), 白雲母多 特徴:胴部外面ナデの後, 下半部縦方向ヘラミガキ。胴部内面横方向ヘラナデ。口縁部ヨコナデ。備考:新治窯付近産

7 台帳:S2 材質:石(珪質片岩) 器種:砥石 残存:部分的に欠失 法量:残存長13.2, 幅4.3, 厚さ1.9, 重量198.1g 色調:明褐色 特徴:使用面5面(A~E面)。D・F面に刻線多くみられる。

## 第72号住居跡

1 台帳:P1・2 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部50% 法量:底径(8.0) 色調:灰色 胎土:礫(灰少), 砂(白), 骨針微量 特徴:焼成硬質。回転ヘラ切り。底部外面ヘラ記号。底部周縁やや磨減。備考:木葉下窯産か

2 台帳:P3 材質:瓦 種類:平瓦 残存:側縁部片 法量:厚1.9, 重量130.1g 色調:灰色 胎土:礫(白透, 白), 骨針微量 特徴:両面糸切り痕。凹面布目痕および側縁部ヘラ削り。側面部ヘラ切り。

## 第78号住居跡

1 台帳:No.1 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部55% 法量:底径(8.2) 色調:灰色 胎土:礫(白), 骨針少 特徴:回転ヘラ切り。内外面やや磨減。底部外面ヘラ記号。備考:木葉下窯産か

2 台帳:P7 材質:須恵器 器種:杯 残存:体部下半10%欠失, 口唇部若干欠失 法量:口径11.6, 器高4.0, 底径6.8 色調:灰色 胎土:礫(白多, 灰), 骨針微量 特徴:底部外面回転ヘラ削り。底部外面ヘラ記号「人」。使用による磨減がみられない。備考:木葉下窯産か

3 台帳:P11 材質:須恵器 器種:杯(もしくは有台杯) 残存:口縁部20% 法量:口径(15.2) 色調:明灰色 胎土:砂(白多, 白透少), 白雲母多 特徴:口縁部内面および外面体部若干磨減。備考:新治窯産

4 台帳:P3 材質:須恵器 器種:甕 残存:胴部片 法量:一 色調:外面灰色, 内面・破面白灰褐色 胎土:礫(白少) 特徴:外面平行叩き。内面

同心円文叩き。焼成軟質。

5 台帳:P2・4・5 材質:須恵器 器種:甕 残存:胴部片 法量:一 色調:外面灰色, 内面・破面白灰褐色 胎土:礫(白, 白透) 特徴:外面平行叩き。内面同心円文叩き。焼成軟質。

6 台帳:P8 材質:須恵器 器種:甕 残存:胴部片 法量:一 色調:外面灰色, 内面・破面白灰褐色 胎土:礫(白, 白透少, 灰少) 特徴:外面平行叩き。内面同心円文叩き。焼成軟質。

7 台帳:P6 材質:須恵器 器種:甕 残存:胴部片 法量:一 色調:外面灰色, 内面・破面白灰褐色 胎土:礫(白, 白透) 特徴:外面平行叩き。内面同心円文叩き。焼成軟質。

8 台帳:P15 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部35% 法量:口径(22.4) 色調:橙褐色。外面煤けて黒色味を帯びる。胎土:小石(白褐), 礫(白, 白透), 砂(白多, 白透, 透) 特徴:口縁部ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラ削り。胴部内面縦方向ナデ。

9 台帳:P1 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部45% 法量:口径(19.2) 色調:明橙褐色。部分的に黒褐色 胎土:礫(白, 灰少), 砂(白, 透, 灰), 骨針微量 特徴:口縁部ヨコナデ。胴部内面縦方向ヘラナデ。

10 台帳:P10・12・13, No.7 材質:土師器 器種:甕 残存:上半部80%欠失 法量:口径(9.0), 器高(10.9), 底径3.2 色調:外面橙色・褐色, 内面赤橙色 胎土:礫(白褐多, 白透多, 灰少, 透) 特徴:口縁部ヨコナデ。胴部外面ヘラ削り。胴部内面横方向ナデ。外面上半部煤ける。内面上半部汚染により暗色化。全体的に火を受けており, 器面表面荒れている。

## 第80号住居跡

1 台帳:P1・14・15, No.1・8・10・11 材質:須恵器 器種:杯 残存:口縁部40%欠失 法量:口径13.7, 器高4.9, 底径7.9 色調:灰色 胎土:礫(白, 灰), 骨針多 特徴:底部外面回転ヘラ削り。口縁部内面および外面底部周縁やや磨減。備考:木葉下窯産か

2 台帳:P3, No.1 材質:須恵器 器種:杯 残存:体部80%欠失 法量:口径(13.2), 器高4.8, 底径8.0 色調:暗灰色 胎土:礫(白, 透少, 灰少), 骨針少 特徴:回転ヘラ切り。口縁部内面やや磨減。備考:木葉下窯産か

3 台帳:P2 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:口縁部65%欠失, 体部下半35%欠失 法量:口径14.4, 器高6.1, 高台径8.6 色調:灰色 胎土:礫(白, 灰) 特徴:底部外面回転ヘラ削り後ヘラ記号「=」。焼成硬質。外面の一部に自然釉。底部内面高台溶着痕(同器種正位の重ね焼き)。口唇部内面および高台接地面やや磨減。備考:木葉下窯産か

4 台帳:P5 材質:須恵器 器種:有台杯蓋 残存:天井部20%, 口縁部若干 法量:口径(15.4) 色調:灰色, 口縁部外面暗灰色 胎土:砂(白, 灰色), 骨針微量 特徴:天井部外面回転ヘラ削り。備考:木葉下窯産か

5 台帳:P11 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(18.9) 色調:褐色 胎土:礫(白透多, 白多), 白雲母多 特徴:口縁部ヨコナデ。胴部内面横方向ヘラナデ。備考:新治窯付近産

6 台帳:P4 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部15% 法量:口径(21.6) 色調:褐色 胎土:砂(白多, 白透多), 白雲母多 特徴:口縁部ヨコナデ。胴部内面横方向ヘラナデ。備考:新治窯付近産

7 台帳:I1 材質:鉄 器種:鏃 残存:完形 法量:長11.3, 重量10.0 g

8 台帳:No.2 材質:鉄 器種:鏃 残存:鏃身部付近 法量:残存長3.5, 重量3.0 g

9 台帳:I3, No.4 材質:鉄 器種:刀子 残存:両端部欠失 法量:残存長6.4, 重量6.4 g

10 台帳:I2 材質:鉄 器種:刀子 残存:両端部欠失 法量:残存長4.8, 重量4.5 g

## 第81号住居跡

- 1 台帳:P2 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部45% 法量:底径(7.9) 色調:灰色 胎土:礫(白) 特徴:回転ヘラ切り。底部外面ヘラナデ。底部周縁若干磨減。
- 2 台帳:P25, No.1 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:10%(口縁部若干) 法量:口径(14.1), 器高5.8, 高台径(9.0) 色調:灰色 胎土:礫(白, 灰少), 骨針微量 特徴:口縁部内面・高台接地面やや磨減 備考:木葉下窯産か
- 3 台帳:P 18, No.5 材質:須恵器 器種:有台盤 残存:底部外周25% 法量:高台径(11.9) 色調:底部中央灰色, 底部外周茶色 胎土:礫(白, 灰少), 骨針 特徴:底部外面回転ヘラ削り。同器種正位の重ね焼き。高台接地面および底部内面やや磨減。 備考:木葉下窯産か
- 4 台帳:No.3 材質:須恵器 器種:有台杯蓋 残存:鈕部(周縁若干欠失) 法量:鈕径2.7, 鈕高1.3 色調:灰褐色 胎土:— 特徴:鈕上面の中央と周縁が磨減する。
- 5 台帳:P 6 材質:須恵器 器種:甕 残存:口縁部若干 法量:— 色調:外面・破面明灰色, 内面暗灰色 胎土:礫(白少), 骨針微量 特徴:内面に薄く自然釉 備考:木葉下窯産か
- 6 台帳:P8・9・28, No.4・5 材質:須恵器 器種:甕(もしくは深鉢) 残存:底部20%, 胴部下端20% 法量:底径(19.8) 色調:底部灰色, 胴部明褐～橙褐色 胎土:礫(白透多, 白少), 白雲母多 特徴:胴部外面斜位平行線文叩き。外面胴部下端横方向ヘラ削り。胴部内面横方向ナデ。胴部に粘土紐接合痕が部分的にみられる。 備考:新治窯産
- 7 台帳:P10・13～15・27, No.2 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部30%, 胴部上半10% 法量:口径(21.2) 色調:褐色, 橙褐色 胎土:礫(白透多), 白雲母多 特徴:口縁部ヨコナデ。肩部外面縦方向ヘラナデ痕。外面胴部下半縦方向ヘラミガキ。胴部内面横方向ヘラナデ。口縁部外面・内面頸部から肩部にかけて粘土紐接合痕。胴部外面煤ける。胴部内面汚染により暗色化。 備考:新治窯付近産
- 8 台帳:P21, No.4・7 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20%, 肩部40%, 胴部下半10% 法量:口径(23.7) 色調:外面橙褐色, 内面褐色 胎土:礫(白透多), 白雲母多 特徴:口縁部ヨコナデ。肩部外面縦方向ヘラナデ痕。胴部外面縦方向ヘラミガキ。内面胴部上半部横方向ヘラナデ。外面胴部煤ける。外面肩部に焼土付着。内面上半部汚染により暗褐色化。内面下半部表面荒れる。 備考:新治窯付近産
- 9 台帳:P24・36, No.3・7 材質:土師器 器種:甕 残存:底部外周40%, 胴部下端35% 法量:底径(9.6) 色調:橙褐色, 褐色, 暗褐色 胎土:礫(白透多), 白雲母多 特徴:底部外面木葉痕。胴部外面縦方向ヘラミガキ。胴部内面横方向ヘラナデ。 備考:新治窯付近産
- 10 台帳:P17, No.5・6 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20%, 胴部上半30% 法量:口径(18.2) 色調:橙褐色 胎土:礫(白透多, 透多, 白) 特徴:ロクロ成形。胴部外面ヘラ削り。外面頸部以下が煤ける。内面は全体的に汚染し、暗褐色化している。
- 11 台帳:P4・23・33, No.1・4 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(21.4) 色調:褐色 胎土:礫(白透多, 白), 白雲母 特徴:口縁部ヨコナデ。胴部内面ナデ。肩部外面縦方向のヘラナデ痕。胴部外面煤ける。 備考:新治窯付近産
- 12 台帳:P37 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部10% 法量:口径(22.1) 色調:橙褐色 胎土:礫(白多, 白透多), 砂(白多, 白透多, 透多) 特徴:口縁部ヨコナデ。胴部内面横方向ナデ。内面全体が汚染により黒褐色化。
- 13 台帳:S2 材質:石(流紋岩) 器種:砥石 残存:50%か 法量:残存長6.6, 幅4.0, 厚3.3, 重量155.1g 色調:白色, 暗褐色斑紋 特徴:使用面1面(A面)。中央で折れたものか。
- 14 台帳:S4 材質:石(流紋岩) 器種:砥石 残存:50%か 法量:残存長6.2, 幅4.5, 厚3.1, 重量86.9g 色調:白褐色, 暗褐色斑紋 特徴:使用面4面(A～D面)。中央で折れたものか。
- 15 台帳:S3 材質:石(含細礫中粒砂岩) 器種:敲石 残存:50%か 法量:残存長11.1, 残存幅5.3, 厚4.0, 重量321.4g 色調:明灰色 特徴:

側面に敲打痕が巡る。

## 第82号住居跡

- 1 台帳:P31, No.2 材質:須恵器 器種:杯 残存:20% 法量:口径(12.6), 器高5.2, 底径(7.7) 色調:明灰色, 体部外面自然釉がかかり暗灰色・緑褐色 胎土:砂(白), 黒色吹き出し多 特徴:底部外面ナデ。口縁部内面および外面底部周縁磨減。
- 2 台帳:P42, No.2 材質:須恵器 器種:杯 残存:20% 法量:口径(13.5), 器高5.2, 底径(8.1) 色調:灰色 胎土:礫(白, 灰少), 骨針少 特徴:底部外面中央部1方向ヘラ削り。口唇部内面および外面底部周縁やや磨減。体部外面に自然釉薄くかかる。 備考:木葉下窯産か
- 3 台帳:No.1・3 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部30%, 体部若干 法量:口径(13.5), 器高4.7, 底径(6.6) 色調:灰色 胎土:礫(白) 特徴:回転ヘラ切り後, 底部外面ナデ。外面底部中央ヘラナデ。内面底部中央ナデ。摩減痕はみられない。
- 4 台帳:P20, No.3 材質:須恵器 器種:杯 残存:体部30% 法量:口径(13.8), 器高4.2, 底径(7.4) 色調:上半部黒色, 下半部灰褐色 胎土:礫(白透多, 白), 砂(白透多, 白), 白雲母多 特徴:外面体部下端手持ちヘラ削り。 備考:新治窯産
- 5 台帳:No.2 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部外周50% 法量:底径(8.0) 色調:白灰色 胎土:礫(白少, 灰少) 特徴:回転ヘラ切り。外面底部中央手持ちヘラ削り。焼成軟質。
- 6 台帳:P21 材質:須恵器 器種:蓋 残存:口縁部10% 法量:口径(19.7) 色調:灰色 胎土:礫(白多) 特徴:天井部外面回転ヘラ削り。外面自然釉薄く付着。
- 7 台帳:P10 材質:須恵器 器種:有台盤 残存:底部, 口縁部10% 法量:口径(16.9), 器高3.5, 高台径10.7 色調:灰色 胎土:礫(白, 白透少, 透少, 灰少), 骨針微量 特徴:底部外面回転ヘラ削り。高台接地面磨減。底部内面やや磨減。外面底部中央墨痕と朱墨痕。高台内側は墨痕薄くみられる。 備考:木葉下窯産か
- 8 台帳:P6, No.3 材質:土師器 器種:杯 残存:30%(口縁部15%) 法量:口径(13.2), 器高4.1, 底径(7.1) 色調:外面橙褐色, 内面黒色 胎土:礫(白透少), 砂(透, 白), 骨針少 特徴:外面底部および底部周縁回転ヘラ削り。内面ヘラミガキ(底部不定方向)・黒色処理。口縁部内面磨減。
- 9 台帳:No.3 材質:土師器 器種:杯 残存:底部20% 法量:底径(7.5) 色調:外面褐色, 底部中央黒色。内面黒色。 胎土:細砂(透) 特徴:外面体部下端・底部手持ちヘラ削り。内面ヘラミガキ(底部1方向)・黒色処理。
- 10 台帳:P23～25・35・36・38・39・45・47, No.2・4 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部35%, 胴部20% 法量:口径(22.6) 色調:褐色, 橙褐色 胎土:砂(白透多, 白少), 白雲母 特徴:口縁部ヨコナデ。胴下半部縦方向ヘラミガキ。胴部内面横方向ナデ。胴部外面煤ける。内面頸部以下, 汚染により黒色化。 備考:新治窯付近産
- 11 台帳:P29・37・45, No.2 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20%, 肩部30% 法量:口径(22.3) 色調:褐色。外面肩部以下暗褐色。内面一部黒褐色。 胎土:砂(透, 白透, 白少), 白雲母 特徴:口縁部ヨコナデ。肩部外面ヘラナデ痕。胴部外面縦方向ヘラミガキ。頸部内面横方向ヘラナデ。胴部内面横方向ナデ。 備考:新治窯付近産
- 12 台帳:P29 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(20.3) 色調:橙褐色, 褐色 胎土:礫(白透多), 白雲母多 特徴:口縁部ヨコナデ。胴部内面横方向ヘラナデ。外面煤ける。口縁部内面橙色。 備考:新治窯付近産
- 13 台帳:P33 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(24.2) 色調:褐色 胎土:礫(白透), 白雲母 特徴:口縁部ヨコナデ。頸部内面横方向ヘラナデ。外面頸部下端に点々と粘土紐接合痕あり。頸部外面に若干焼土付着。 備考:新治窯付近産
- 14 台帳:P13 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部10% 法量:口径(19.6) 色調:外面橙色。口縁部内面橙色。内面頸部以下褐色。 胎土:砂(白透多), 白雲母多 特徴:口縁部ヨコナデ。内面頸部以下横方向ヘラナデ。 備考:新治窯付近産

## V 奈良・平安時代の遺構と遺物

15 台帳:No.3 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部15% 法量:口径(13.0) 色調:内面から口縁部外面にかけて黒褐色。頸部外面褐色・明褐色。胎土:砂(透多) 特徴:口縁部ヨコナデ。内面横方向ヘラナデ。

16 台帳:P19 材質:土師器 器種:甕 残存:底部35% 法量:底径(9.8) 色調:外面暗褐色,底部中央黒色。内面明褐色。胎土:砂(白透多,透多,白),白雲母 特徴:底部外面木葉痕。外面胴部下端斜方向ヘラミガキ。底部内面ヘラナデ痕。備考:新治窯付近産

### 第84号住居跡

1 台帳:P14 材質:須恵器 器種:杯 残存:口縁部30%欠失 法量:口径14.0,器高4.7,底径9.6 色調:灰色 胎土:礫(白,灰少,透少),骨針少 特徴:底部外面回転ヘラ削り。外面底部周縁に円周方向の割れあり(内面まで達していない)。口唇部磨滅。備考:木葉下窯産か

2 台帳:P15, No.4 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部(周縁40%欠失),体部50% 法量:口径(13.2),器高4.9,底径(10.3) 色調:灰色 胎土:礫(白,灰少) 特徴:回転ヘラ切り。底部外面回転ヘラ削り。内面やや汚染。口唇部および底部周縁磨滅。備考:木葉下窯産か

3 台帳:P1 材質:須恵器 器種:杯 残存:完形 法量:口径11.2,器高3.5,底径8.4 色調:灰色 胎土:礫(白,白透少,灰少) 特徴:基本的底部面回転ヘラ削り。底部外面ヘラ記号「一」。口唇部磨滅し少々欠失する。外面底部周縁および底部内面やや磨滅。口縁部外面暗色化しており,同器種正位の重ね焼きと思われる。備考:木葉下窯産か。

4 台帳:P11 材質:須恵器 器種:杯 残存:60%(口縁部はほ欠失) 法量:口径(11.4),器高3.8,底径(7.5) 色調:明灰色 胎土:礫(白少,白透少,灰少),砂(白,透,灰少),骨針少 特徴:底部外面回転ヘラ削り。口唇部磨滅。外面底部外周および底部内面やや磨滅。備考:木葉下窯産か

5 台帳:P7 材質:須恵器 器種:有台杯蓋 残存:完形 法量:口径11.9,器高2.6,鈕径2.0,鈕高0.9 色調:灰色 胎土:礫(白,白透少),骨針少 特徴:天井部外面回転ヘラ削り。口唇部細かく欠失。内面中央部周辺磨滅。備考:木葉下窯産か

6 台帳:P5・8・9 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:底部(高台部30%欠失,底部中央若干欠失) 法量:高台径(9.4) 色調:暗灰色,破面茶褐色 胎土:礫(白多,白透少,灰少),骨針 特徴:底部外面回転ヘラ削り。焼成硬質。高台接地面および底部内面磨滅。備考:木葉下窯産か

7 台帳:P4・6 材質:須恵器 器種:甕 残存:口縁部15% 法量:口径(19.6) 色調:灰色 胎土:礫(白,白透少),骨針 特徴:外面平行線文叩き痕。口頸部内外面ヨコナデ。内面の頸部と胴部の境界に横方向のナデ。胴部内面無文円形当て具痕。備考:木葉下窯産か

8 台帳:P10・12 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部40%,胴部上半20% 法量:口径(20.0) 色調:暗橙褐色,褐色 胎土:礫(白,透,灰) 特徴:口縁部ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラ削り。胴部内面ナデ。外面胴上部に焼土付着。内面は全体的に煤けている。

9 台帳:P13 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(13.8) 色調:暗褐色,赤橙色 胎土:砂(白透多),白雲母多 特徴:口縁部ヨコナデ。胴部内面横方向ヘラナデ。内外面煤ける。備考:新治窯付近産

### 第13号土坑

1 台帳:No.1 材質:須恵器 器種:瓶 残存:高台部15% 法量:高台径(9.4) 色調:外面自然釉がかり暗灰色,内面・破面灰色 胎土:礫(白),骨針微量,黒色吹き出し多 特徴:底部外面にナデ。高台接地面摩滅。

### 第3号溝状遺構

1 台帳:P36 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部40%,体部25% 法量:口径(13.5),器高3.9,底径(8.9) 色調:明褐色 胎土:礫(白透少,灰少),砂(透多,白,白透) 特徴:底部外面回転ヘラ削り。底部外面の一部にハケ目。底部内面の外周に沈線。備考:原の寺瓦窯周辺産か

2 台帳:No.15 材質:須恵器 器種:杯 残存:10% 法量:口径(12.6),

器高3.8,底径(8.8) 色調:明褐色 胎土:砂(白透,透,白少) 特徴:底部外面回転ヘラ削り。備考:原の寺瓦窯周辺産か

3 台帳:No.19② 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部外周20%,体部10% 法量:口径(12.5),器高4.7,底径(7.9) 色調:明灰褐色 胎土:礫(灰少),砂(白透,灰少,白少) 特徴:底部外面ナデ。口縁部やや磨滅。外面底部周縁磨滅。備考:木葉下窯産か

4 台帳:No.20 材質:須恵器 器種:杯 残存:体部20% 法量:口径(12.7) 色調:明灰褐色,灰褐色 胎土:砂(白透多),白雲母多 特徴:口唇部磨滅。内面やや磨滅。備考:新治窯産

5 台帳:P32, No.18 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部20% 法量:底径(9.0) 色調:明灰褐色 胎土:礫(白透少,灰少) 特徴:底部外面回転ヘラ削り。外面底部周縁磨滅。

6 台帳:No.21 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部20% 法量:底径(8.6) 色調:灰色 胎土:礫(白,灰少,白透少) 特徴:底部外面回転ヘラ削り後ヘラ記号。

7 台帳:P54 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部50% 法量:底径(7.2) 色調:外面体部明灰褐色・底部灰色,内面灰色 胎土:砂(白,白透多),白雲母多 特徴:外面体部下端・底部手持ちヘラ削り。外面底部周縁および底部内面やや磨滅。備考:新治窯産

8 台帳:No.19① 材質:須恵器 器種:杯 残存:底部60% 法量:底径(6.7) 色調:明灰色 胎土:砂(透,白少),白雲母多 特徴:回転ヘラ切り。外面体部下端手持ちヘラ削り。底部内面および外面底部周縁やや磨滅。備考:新治窯産

9 台帳:No.18① 材質:須恵器 器種:蓋 残存:口縁部10% 法量:口径(15.9) 色調:明灰色 胎土:砂(白,白透),白雲母多 特徴:天井部外面回転ヘラ削り。備考:新治窯産

10 台帳:No.18 材質:須恵器 器種:蓋 残存:口縁部15% 法量:口径(15.7) 色調:明褐色 胎土:礫(白透),砂(透,白,白透),骨針微量 特徴:天井部外面回転ヘラ削り。備考:原の寺瓦窯周辺産か

11 台帳:P65 材質:須恵器 器種:蓋 残存:口縁部20% 法量:口径(15.8) 色調:灰色 胎土:砂(白,透微量),骨針 特徴:天井部外面回転ヘラ削り。備考:木葉下窯産か

12 台帳:No.18② 材質:須恵器 器種:蓋(無台杯蓋) 残存:15%(鈕欠失) 法量:口径(13.8) 色調:灰色 胎土:礫(灰少,白少),骨針微量 特徴:天井部外面回転ヘラ削り。口唇部細かく欠失する。備考:木葉下窯産か

13 台帳:P48 材質:須恵器 器種:蓋 残存:口縁部10%,天井部20% 法量:口径(14.0) 色調:灰色,白雲母多,黒色パミス粒 特徴:天井部外面回転ヘラ削り。色調から正位有台杯と逆位蓋が組み合う重ね焼きか。口唇部磨滅。備考:新治窯産

14 台帳:P29 材質:須恵器 器種:有台杯 残存:底部30% 法量:高台径(12.1) 色調:暗灰色 胎土:礫(白,灰少),骨針少 特徴:焼成硬質。底部外面回転ヘラ削り。底部外面中央部に研磨痕。底部内面磨滅する。備考:木葉下窯産か

15 台帳:P24 材質:須恵器 器種:甕 残存:口縁部10% 法量:口径(22.5) 色調:暗灰色,頸部外面黒灰色 胎土:礫(白),骨針多 特徴:頸部外面薄く自然釉。備考:木葉下窯産か

16 台帳:No.18④ 材質:須恵器 器種:甕 残存:肩部片 法量:- 色調:外面青灰色。内面赤灰色。胎土:礫(白,白透少),骨針多 特徴:外面横位平行線文叩き痕。内面無文当て具痕。備考:木葉下窯産か

17 台帳:P30 材質:須恵器 器種:甕 残存:破片 法量:- 色調:外面黒灰色。内面灰色。胎土:砂(白),骨針多 特徴:外面平行線文叩き痕。内面凹凸がみられる。外面薄く自然釉。備考:木葉下窯産か

18 台帳:No.18③ 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部15% 法量:口径(21.8) 色調:外面黒褐色・暗褐色。内面褐色 胎土:砂(白透多,白),白雲母多 特徴:口縁部ヨコナデ。頸部内面ヘラナデ。備考:新治窯付近産

19 台帳:No.22 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 色調:口縁部橙褐色,胴部褐色 胎土:砂(白透多,白),白雲母 特徴:口縁部ヨコ

ナデ。頸部以下横方向ヘラナデ。備考:新治窯付近産

20 台帳:P42 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部20% 法量:口径(21.7) 色調:褐色, 暗褐色 胎土:砂(白透多, 白), 白雲母多 特徴:口縁部ヨコナデ。胴部内面ヘラナデ。備考:新治窯付近産

21 台帳:P68 材質:土師器 器種:甕 残存:口縁部10% 法量:口径(23.6) 色調:橙褐色 胎土:砂(白透多, 白), 白雲母多 特徴:口縁部ヨコナデ 備考:新治窯付近産

22 台帳:P64 材質:瓦 種類:平瓦 残存:隅部 法量:厚2.1 色調:灰色 胎土:礫(白, 白透, 透, 灰少) 特徴:凹面糸切り後布目痕。凹面側縁部ヘラ削り。凸面糸切り痕。端面部ヘラ削り。備考:原の寺瓦窯産か

23 台帳:P19 材質:瓦 種類:平瓦 残存:隅部 法量:厚1.9 色調:明灰色 胎土:礫(白, 白透, 透, 灰少) 特徴:凹面糸切り後布目痕。凹面側縁部ヘラ削り。凸面糸切り痕。狭端面にワラ状の圧痕が多数みられる。備考:原の寺瓦窯産か

24 台帳:No.22 材質:瓦 種類:平瓦 残存:側縁部片 法量:厚1.2 色調:褐色 胎土:礫(白少, 灰少), 砂(白, 透, 灰少, 角閃石・輝石類) 特徴:凹面糸切り後, 布目痕。凸面糸切り後, 指頭圧痕。備考:原の寺瓦窯産か

25 台帳:No.15・19③ 材質:瓦 種類:丸瓦 残存:玉縁部破片 法量:厚0.9~1.0 色調:外面黒褐色。内面橙褐色・褐色。破面橙褐色。胎土:砂(白, 白透) 特徴:凸面ナデ。凹面布目痕。

26 台帳:P66 材質:土師質 種類:球状土錘 残存:完形 法量:長2.8, 幅3.2, 孔径0.6, 重量29.8g 色調:褐色, 橙褐色 胎土:- 特徴:-

27 台帳:No.16 材質:石 種類:不明 残存:破片 法量:2.7×2.4×1.0 色調:赤味を帯びた褐色 特徴:火を受けた穿孔貝巢穴痕跡軟質泥岩と思われる。

## VI その他の遺構と遺物

ここでは、その他の遺構として溝状遺構と性格不明遺構を報告する。また、遺構に伴わない遺物も掲載する。

### 1 溝状遺構

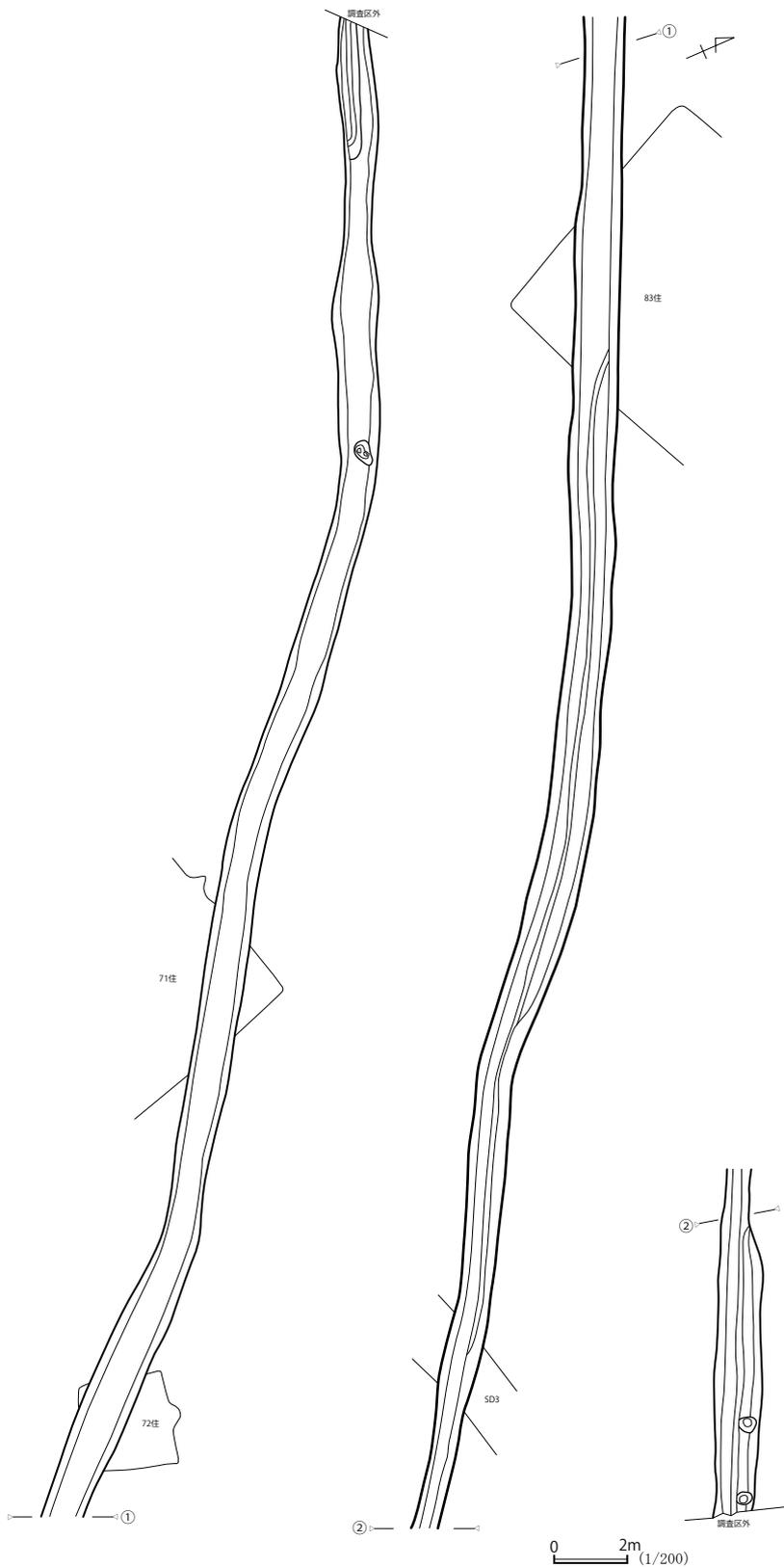
溝状遺構は2基検出した。その内、第3号溝状遺構は出土遺物から奈良・平安時代の遺構とし、第V章で報告を行っている。

**第1号溝状遺構** X～Y-10～19区に位置する。当遺構は、第3次調査区から続いており、調査区の北西から南東に延びている。第71・72・83号住居跡と第3号溝状遺構を掘り込んでいる。確認できた長さは約100m、幅は80～140cm、深さは確認面から5～40cmを測る。深さは、調査区北西側が浅く、南東側が深い。覆土は黒褐色土を主体とする。

遺物は少なく、陶器の徳利1点が図化出来た(第116図1)。遺構の時期は、中世以降と思われる。

### 2 性格不明遺構

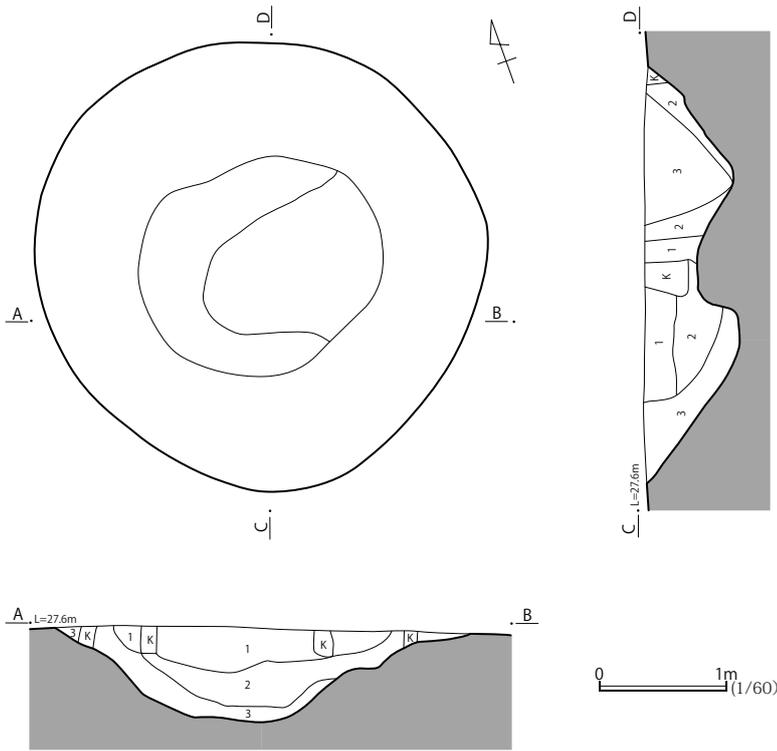
**第4号性格不明遺構** Z-15区に位置する。平面形は不整形で、底面は凸凹している。規模は、直径約3.5m、深さ70cmを測る。覆土は外側に黒色土、内側に褐色土が堆積する。遺構の形態から、風倒木痕と思われる。



第114図 第1号溝状遺構



第1号溝状遺構



**第4号性格不明遺構堆積覆土**  
 第1層 明褐色土層(ローム土主体 締まりやや有り)  
 第2層 褐色土層(ローム土主体で黒色土が少量混じる 締まりやや有り)  
 第3層 黒色土と褐色土の混合層(締まりやや有り)

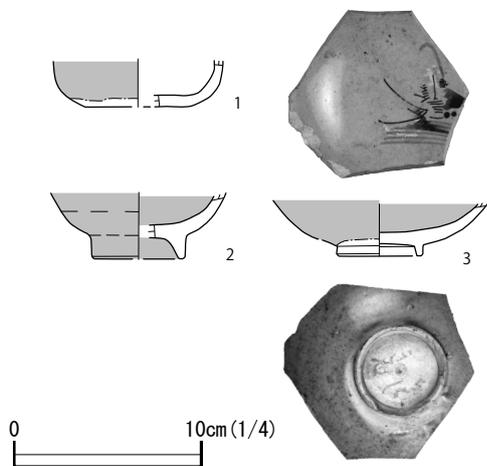
第115図 第4号性格不明遺構



第4号性格不明遺構



第4号性格不明遺構覆土堆積状況



**第1号溝状遺構・その他の遺構出土遺物観察表**

- 遺構:第1号溝状遺構 台帳:No.4 材質:陶器 器種:徳利 残存:底部15% 法量:底径(5.6) 色調:素地褐色 技法等:脚部外面に鉄釉を施す。底部外面に糸切り痕が薄く残る。
- 遺構:第82号住居跡 台帳:No.3 材質:陶器 器種:碗 残存:底部25% 法量:高台径(4.6) 色調:素地褐色 技法等:内外面透明釉,貫入あり。高台接地面露胎。備考:肥前産。豊島区分類呉器手石碗(1650年代~1740年代)。
- 遺構:第82号住居跡 台帳:P.2 材質:陶器 器種:石碗 残存:底部法量:高台径4.4 色調:素地白褐色 技法等:見込部に呉須絵で山水楼閣文を描く。内面及び体部外面に透明釉,細かな貫入あり。底部外面に刻印「□(富?)永」。底部外面に墨書あり(文字不明)。備考:肥前産。豊島区分類薄茶碗(1690年代~1770年代)。

第116図 第1号溝状遺構・その他の遺構出土遺物

## VII 自然科学的分析

## 鷹ノ巣遺跡から出土した炭化材の樹種および炭化種実

**はじめに** 鷹ノ巣遺跡は、那珂川水系の中丸川の支流である本郷川左岸(東岸)の那珂台地上に位置する。これまでの調査により、旧石器時代の石器、縄文時代の土器および石器、弥生時代の住居跡と土器、石器、ガラス玉等の遺物、古墳時代の住居跡と土師器、須恵器、石製模造品、ベンガラ等の遺物、奈良・平安時代の住居跡、溝状遺構と土師器、須恵器、文字瓦等の遺物が確認されている(鈴木ほか,2013)。

本報告では、古墳時代後期の焼失住居跡から出土した炭化材を対象として、木材利用を確認するための樹種同定を実施する。また、弥生時代後期および古墳時代後期の住居跡から出土した炭化種実を対象として、植物利用を検討するための種実同定を実施する。

**炭化材の樹種同定****(1) 試料**

試料は、第71号住居跡の炭化材10点、第73号住居跡の炭化材3点、第77号住居跡の炭化材20点、第85号住居跡の炭化材2点の合計35点である。

**(2) 分析方法**

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler 他(1998)を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

**(3) 結果**

樹種同定結果を第7表に示す。炭化材は、広葉樹3分類群(コナラ属コナラ亜属クヌギ節・コナラ属コナラ亜属

コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・アカメガシワ)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に径を減じたのち、多数が集まって火炎状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、道管は単独で放射方向に配列する。道管の接線方向の直径は、最大で約120  $\mu$  m。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・アカメガシワ(*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.) トウダイグサ科アカメガシワ属

環孔材で、孔圏部は1-5列、孔圏外への移行は緩やかで、小道管は単独または2-4個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、単列、1-30細胞高。

**(4) 考察**

古墳時代後期の住居跡から出土した炭化材には、合計4種類が確認された。各種類の材質等についてみると、常緑広葉樹のアカガシ亜属は、暖温帯性常緑広葉樹林の主要な構成種となる高木で、木材は重硬で強度が高い。

第7表 樹種同定結果

住居跡	時代	遺物番号	形状	種類
第71号住居跡	古墳時代後期	C18	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C34	破片	アカメガシワ
		C51	破片	アカメガシワ
		C56	破片	アカメガシワ
		C60	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C62	破片	アカメガシワ
		C74	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C80	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C89	破片	アカメガシワ
		C117	破片	アカメガシワ
第73号住居跡	古墳時代後期	C7	破片	コナラ属アカガシ亜属
		C14	破片	コナラ属アカガシ亜属
		C19	破片	コナラ属アカガシ亜属
第77号住居跡	古墳時代後期	C24	柱目状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C36	柱目状	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C40	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C41	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C74	柱目状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C126	柱目状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C155	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C156	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C157	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C158	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C159	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C161	柱目状	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C165	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C166	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C167	柱目状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C168	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C171	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属コナラ節
		C173	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属コナラ節
C179	破片	コナラ属コナラ亜属クヌギ節		
C180	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属コナラ節		
第85号住居跡	古墳時代後期	C50	ミカン割状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
		C68	分割状	コナラ属コナラ亜属コナラ節

落葉広葉樹のコナラ節は、二次林の主要な構成種となる高木で、木材は重硬で強度が高い。クヌギ節は、コナラ節と共に二次林を構成する他、より湿った環境を好み、後背湿地や河畔等にも生育する高木であり、木材は重硬で強度が高い。アカメガシワは、伐採跡や林縁部等の明るく開けた場所に生育する高木である。木材は軽軟で強度は低い。

住居別に種類構成をみると、第71号住居跡ではクヌギ節とアカメガシワ、第73号住居跡はアカガシ亜属、第77号住居跡と第85号住居跡はクヌギ節とコナラ節で構成される。第73号住居跡では資料数は少ないが、全てがアカガシ亜属であり、クヌギ節やコナラ節が全く確認できないなど、他の住居とは異なる組成を示す。また、

第71号住居跡もクヌギ節は確認できるが、全体ではアカメガシワの占める量が多い。

住居の出土状況と樹種を細かく見ると、第71号住居跡は、住居の中央に「コ」の字状に大型の部材が並び、そこから縁辺部に向かって放射状に部材が配置する。樹種をみると、中央の「コ」の字状に並ぶ大型の部材3点と住居北東隅から中央部に伸びる放射状の部材1点の4点がクヌギ節、その他の放射状の部材がアカメガシワである。「コ」の字状に並ぶ部材は、出土位置等から梁の可能性があり、重要な部材を中心に強度の高いクヌギ節を利用し、その他の垂木などにアカメガシワを多用したことが推定される。アカメガシワは軽軟であるが、人が乗って簡単に折れるほど脆くもない。住居の構造を検討する必要は

## Ⅷ 自然科学的分析

あるが、今回の結果から第71号住居跡ではアカメガシワの垂木でも必要な強度は得られた可能性がある。

第73号住居跡は、住居の中央付近に大型の棒状の部材(C14)が北西から南東方向に伸びるように出土し、その周囲からC14に直交する方向のやや大きい部材(C7,C19),その他小片が出土している。同定した3点は、いずれも垂木などと考えられ、強度の高いアカガシ亜属の利用が推定される。

第77号住居跡は、住居の中央から外側にむかって放射状に配置した炭化材が多く、一部に放射状の部材に直交する方向の部材も認められる。この出土状況から、炭化材の多くは垂木に由来すると考えられ、垂木に直交する部材(C126)は梁等の部材に由来する可能性がある。選択された20点の炭化材は、クヌギ節12点、コナラ節8点であり、強度の高い木材を利用したことが推定される。出土状況と照合した範囲では、樹種による部位の違いはみられない。

第85号住居跡は、住居の南西床面上付近を中心に炭化材が出土している。比較的大きい部材では、住居の中央から外側に向かって放射状に出土しており、垂木などと考えられる。選択された2点はクヌギ節とコナラ節に同定された。

出土状況を比較すると、資料数は少ないが、第85号住居跡の利用状況は第77号住居跡に似ている。一方、同じく垂木と考えられる第73号住居跡は全てアカガシ亜属であり、異なる樹種が利用されている。また、第71号住居跡は、強度を要する部位を中心にクヌギ節が利用されるが、垂木と考えられる部材に強度の低いアカメガシワが利用されており、他の住居とは木材利用傾向が異なる。この違いについては、住居の構造の比較なども考慮した検証が必要である。

本遺跡では、これまでも弥生時代後期や古墳時代後期の住居址から出土した建築部材と考えられる炭化材の樹種同定が実施され、弥生時代後期ではクリやエノキ属を中心にエゴノキ属とトネリコ属が混じる組成、古墳時代後期ではクヌギ節を中心にコナラ節、クリ、モクレン属等が利用される結果が確認されている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2013)。今回の結果では、第77号住居跡や第85号住居跡の結果は、これまでの結果と整合する結果といえる。第71号住居跡の結果も強度を要する

部材にクヌギ節が利用されていると考えれば、これまでの結果に近い結果である。一方、アカガシ亜属は、これまでの調査では、本遺跡では確認されていない。

伊東・山田(2012)のデータベースを用いて、ひたちなか市内で古墳時代後期の住居跡出土炭化材について樹種同定を実施した例をみると、本遺跡よりも海に近い船窪遺跡群や半分山遺跡では、アカガシ亜属、コナラ節、エゴノキ属、イヌシデ節、ムラサキシキブ属など多くの樹種が混在する種類構成が見られる。また、本遺跡よりも那珂川沿いにやや内陸に入った武田西塙遺跡では資料数が少ないが、アカガシ亜属とモミ属が確認されている。これらの報告を考慮すれば、本遺跡周辺でもアカガシ亜属の木材は入手可能であったと考えられる。第73号住居跡については、出土した中で比較的大型の部材3点がアカガシ亜属に同定されたが、他にも小片が多数出土していることから、今後これらの樹種についても調査し、全体の種類構成についても明らかにすることが期待される。

### 種実遺体の同定

#### (1) 試料

試料は、弥生時代後期とされる第68号住居跡から5試料(覆土 No.16 ~ 18,20,22)と、古墳時代後期とされる第71号住居跡から2試料(土器内 P17,18)、第76号住居跡から1試料(土器内 P 1)、第77号住居跡から1試料(土器内 P18)、第85号住居跡から1試料(土器内 P44)、第86号住居跡から1試料(覆土 No. 2)より出土した炭化種実であり、合計で6遺構11点である。試料は全て乾燥した状態で容器内に入っており、炭化材や菌核、土粒等も確認される。

#### (2) 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実を拾い出す。

炭化種実の同定は、現生標本および石川(1994)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2012)等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示し、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。また、保存状態が良好な一部の栽培種を対象として、デジタルノギスを用いて炭化種実の大きさを計測し、結果を一覧表に併記する。欠

損等で完全な計測値を得られない場合は、残存値にプラス「+」で表示する。

分析後は、炭化種実を分類群別に容器に入れ、炭化種実以外の分析残渣を容器に戻して返却する。

### (3) 結果

結果を第8表に示す。また、炭化種実各分類群の写真を第118図に、主な炭化種実の計測値等を第8表に示して同定根拠とする。全11試料を通じて、被子植物6分類群(モモ、サンショウ、イネ、オオムギ、コムギ、オナモミ属)13個の炭化種実が同定された。16個(85住、86住)は分類群・部位ともに不明で同定ができなかった。

炭化種実以外は、炭化していない草本4分類群(ヒゴクサ節、エノキグサ、アカザ属、ゴマ)の種実が22個、炭化材が15個、菌核が31個、貝殻片が1個、岩片が1個、土粒19個の、計89個が確認された。なお、栽培種のゴマ(71住)、中生草本のヒゴクサ節(68住)、エノキグサ(68住)、アカザ属(71住)は、混入の可能性が高いため、考察より除外している。

炭化種実群は、木本2分類群(落葉広葉樹のモモ、サンショウ)3個、草本5分類群(イネ、オオムギ、コムギ、オナモミ属)10個から成る。栽培種は、第76号住居跡(土器内P1)よりモモの核が1個と、第68号住居跡よりイネの胚乳の破片が2個(覆土No.18)、オオムギの胚乳が1個(覆土No.22)、コムギの胚乳の破片が1個(覆土No.20)の、計5個が確認された。モモ核は、長さ17.6mm、残存幅14.0mm、厚さ12.2mmを測り、背面にネズミ類による食痕と考えられる円状の欠損がある。オオムギ胚乳は両端を欠損し、残存長3.8mm、幅2.0mm、厚さ1.7mmを測る。

栽培種を除いた分類群は、第68号住居跡(覆土No.18)より低木のサンショウの種子の破片が2個と、第77号住居跡(土器内P18)より一年草のオナモミ属の総苞の破片が6個の、計8個が確認された。

### (4) 考察

各住居跡より出土した炭化種実は、栽培種のモモ、イネ、オオムギ、コムギと、落葉広葉樹のサンショウ、草本のオナモミ属に同定された。弥生時代後期とされる第68号住居跡より確認された穀類のイネ、オオムギ、コ

ムギと、古墳時代後期とされる第76号住居跡より確認された果樹のモモは、本遺跡周辺で栽培されていたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時の住居内で利用された植物質食料と示唆され、火を受けたとみなされる。イネ、オオムギ、コムギは、本遺跡の弥生時代後期(東中根式)とされる第55号住居跡からも確認されている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2013)。

栽培種を除いた分類群は、第68号住居跡より、やや湿り気が多い林縁などに生育する落葉低木のサンショウと、第77号住居跡より、明るく開けた場所に生育する一年草のオナモミ属が確認された。当時の調査区周辺の林縁や草地などに生育していたと考えられる。サンショウ、オナモミ属は、本遺跡の弥生時代後期(東中根式)とされる第55号住居跡からも確認されている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2013)。なお、サンショウは、果実や葉が香辛料等に利用可能である。出土種子に利用の痕跡は認められないが、当時利用された可能性は十分に考えられる。

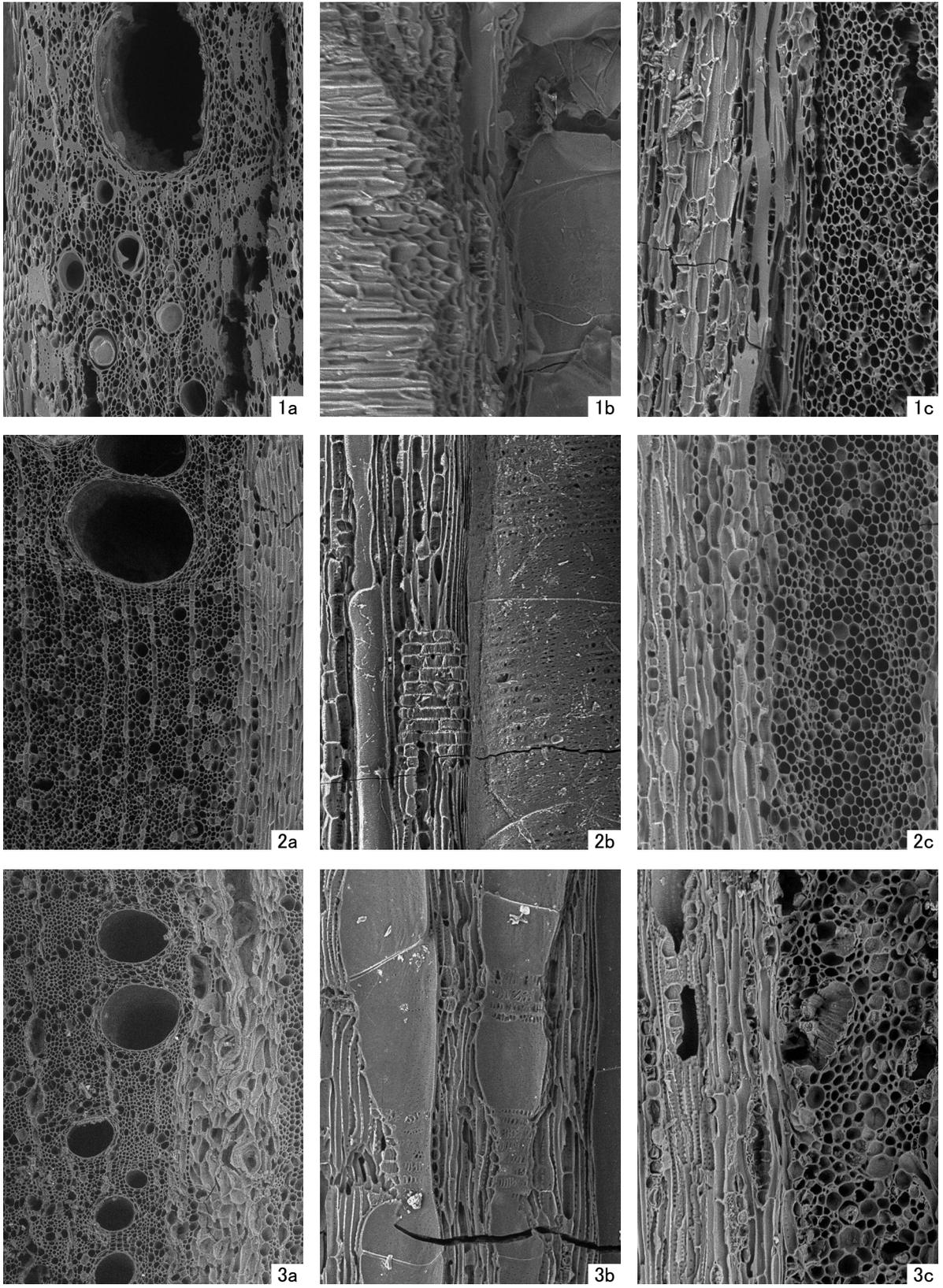
### 引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.  
石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.  
伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.  
伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.  
伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.  
伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.  
伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.  
伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,449p.  
中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑(2010年改訂版) 東北大学出版会,678p.  
パリノ・サーヴェイ株式会社,2013,鷹ノ巣遺跡から出土した炭化材の樹種と炭化種実.「鷹ノ巣Ⅱ -第2・3次調査の成果-」,財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告第41集,財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社,110-122.  
島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.  
鈴木素行・窪田恵一・色川順子・小松崎恵子・稲田健一,2013,鷹ノ巣Ⅱ -第2・3次調査の成果- 財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告第41集,財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社,126p.  
鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種-.誠文堂新光社,272p.  
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

第8表 炭化種実同定結果

住居跡	遺物番号	時代	分類群・部位・状態				個数		計測値(mm)			図版 番号	備考			
							種実	他	長さ	幅	厚さ					
第 68 号住居跡	覆土 No.16	弥生時代後期	炭化材				-	1	-	-	-	-				
			菌核				-	3	-	-	-	-				
			土粒				-	4	-	-	-	-				
第 68 号住居跡	覆土 No.17	弥生時代後期	菌核				-	1	-	-	-	-				
第 68 号住居跡	覆土 No.18	弥生時代後期	サンショウ	種子	炭化	破片	2	-	3.1	2.2	1.4	+	2.3			
			イネ	胚乳	炭化	破片	2	-	2.7	+	2.2	+	1.9	+	4.5	
			ヒゴクサ節	果実		完形	1	-	-	-	-	-	-	-	-	混入の可能性
			エノキグサ	種子		完形	4	-	-	-	-	-	-	-	-	混入の可能性
			炭化材				-	5	-	-	-	-	-	-	-	
			菌核				-	13	-	-	-	-	-	-	-	
			土粒				-	5	-	-	-	-	-	-	-	
第 68 号住居跡	覆土 No.20	弥生時代後期	コムギ	胚乳	炭化	破片	1	-	2.9	+	-	-	-	6		
			エノキグサ	種子		完形	2	-	-	-	-	-	-	-	混入の可能性	
			炭化材				-	4	-	-	-	-	-	-		
			菌核				-	11	-	-	-	-	-	-	-	
			貝殻片				-	1	-	-	-	-	-	-	-	二枚貝類?
			岩片				-	1	-	-	-	-	-	-	-	
			土粒				-	8	-	-	-	-	-	-	-	
第 68 号住居跡	覆土 No.22	弥生時代後期	オオムギ	胚乳	炭化	完形	1	-	3.8	+	2.0	1.7	7	両端欠損		
			炭化材				-	4	-	-	-	-	-			
			菌核				-	3	-	-	-	-	-			
			土粒				-	1	-	-	-	-	-			
第 71 号住居跡	土器内 P17	古墳時代後期	ゴマ	種子		完形	1	-	3.1	1.6	0.9	-	黒ゴマ, 混入の可能性			
			土粒				-	1	-	-	-	-	-			
第 71 号住居跡	土器内 P18	古墳時代後期	アカザ属	種子		完形	13	-	-	-	-	-	-	混入の可能性		
			炭化材				-	1	-	-	-	-	-	-	混入の可能性	
第 76 号住居跡	土器内 P1	古墳時代後期	モモ	核(食痕)	炭化	完形	1	-	17.6	14.0	+	12.2	1	ネズミ類食痕: 背面		
第 77 号住居跡	土器内 P18	古墳時代後期	オナモミ属	総苞	炭化	破片	6	-	6.1	+	5.5	+	4.4	+	8.9	計1個体分
第 85 号住居跡	土器内 P44	古墳時代後期	不明		炭化	完形	-	2	1.2	1.1	-	-	-	-		
						破片	-	3	-	-	-	-	-	-		
第 86 号住居跡	覆土 No.2	古墳時代後期	不明	果皮?	炭化	破片	-	1	28.0	+	19.4	+	8.5	+	-	木質
			不明(茎?虫えい?)		炭化	破片	-	10	33.8	+	23.9	+	6.5	+	-	
合計							35	83								

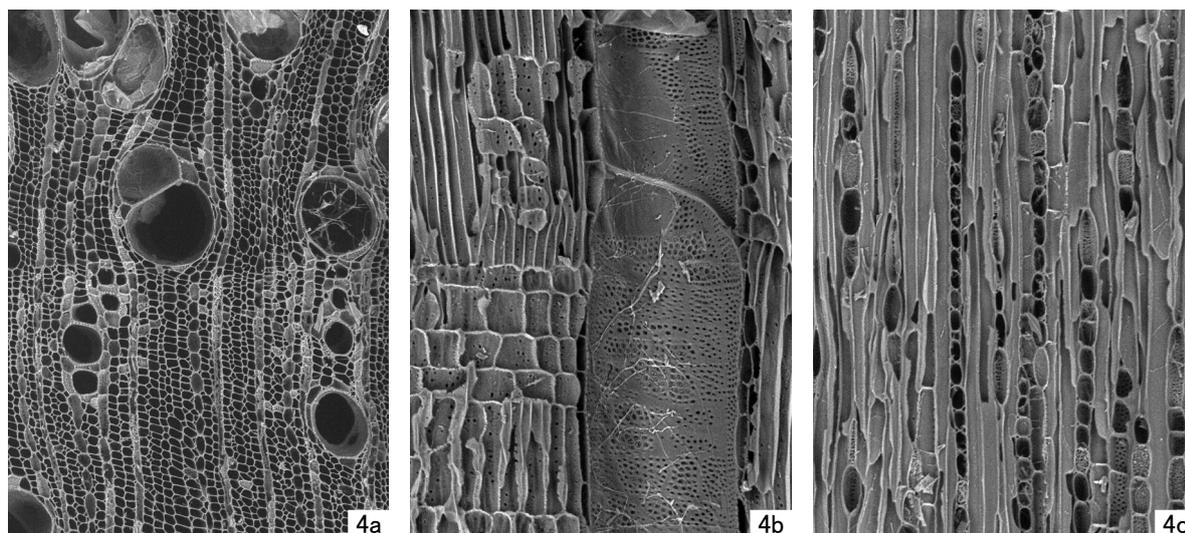
注) 計測はデジタルノギスを使用し、欠損等は残存値に「+」で示す。



- 1.コナラ属コナラ亜属クヌギ節(77住;C168)
  - 2.コナラ属コナラ亜属コナラ節(85住;C68)
  - 3.コナラ属アカガシ亜属(73住;C7)
- a:木口,b:柁目,c:板目

100 μ m:a  
100 μ m:b,c

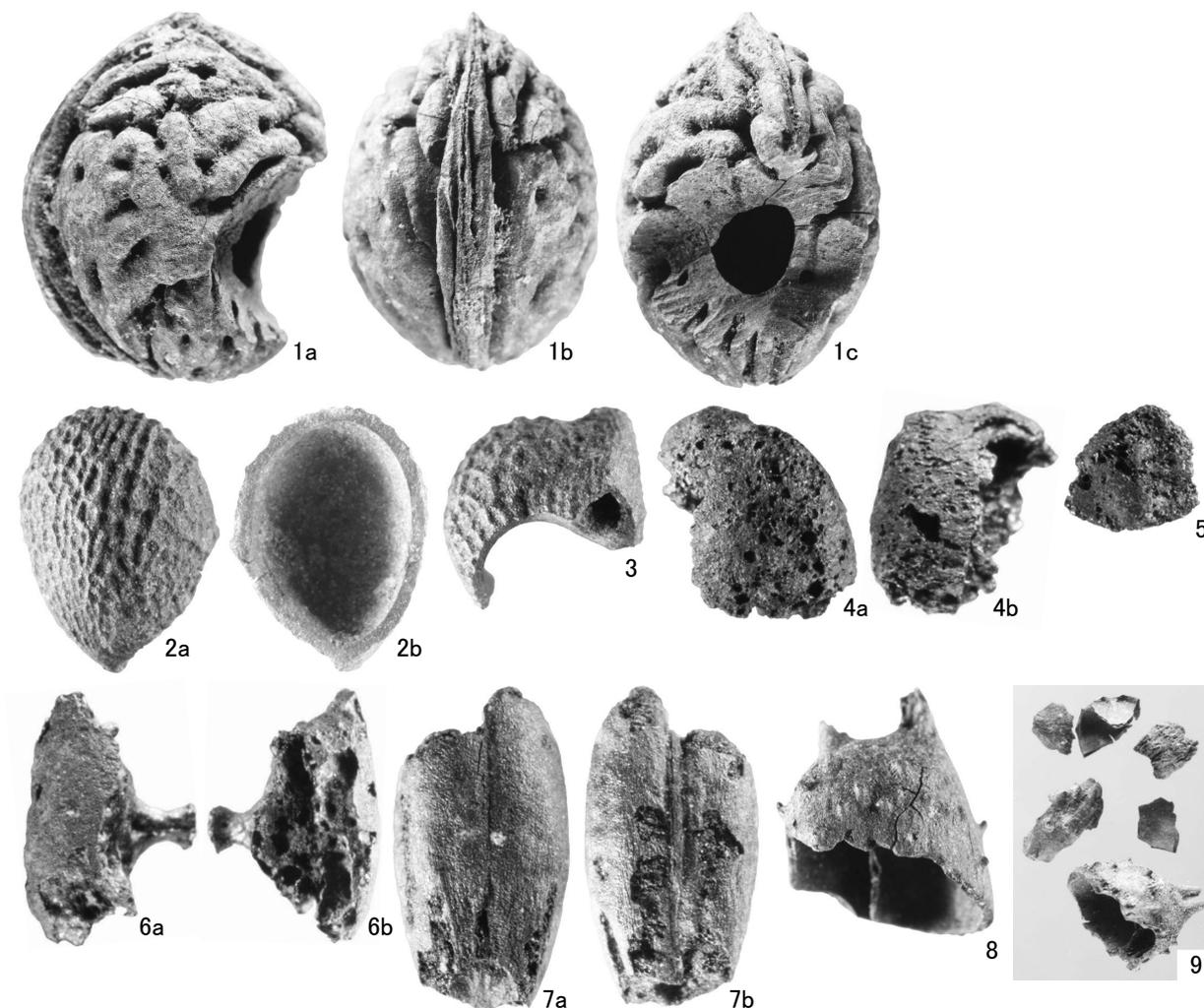
第 117 図 炭化材(1)



4.アカメガシワ(71住;C89)  
a:木口,b:柁目,c:板目

100 μ m:a  
100 μ m:b,c

第118図 炭化材(2)



- 1. モモ 核(食痕)(76住;土器内P1)
- 2. サンショウ 種子(68住;覆土No.18)
- 3. サンショウ 種子(68住;覆土No.18)
- 4. イネ 胚乳(68住;覆土No.18)
- 5. イネ 胚乳(68住;覆土No.18)
- 6. コムギ 胚乳(68住;覆土No.20)
- 7. オオムギ 胚乳(68住;覆土No.22)
- 8. オナモミ属 総苞(77住;土器内P18)
- 9. オナモミ属 総苞(77住;土器内P18)

2mm 2mm 1mm  
(1,9) (8) (2-7)

第119図 炭化種実

# 写真図版





1 全景(真上から)



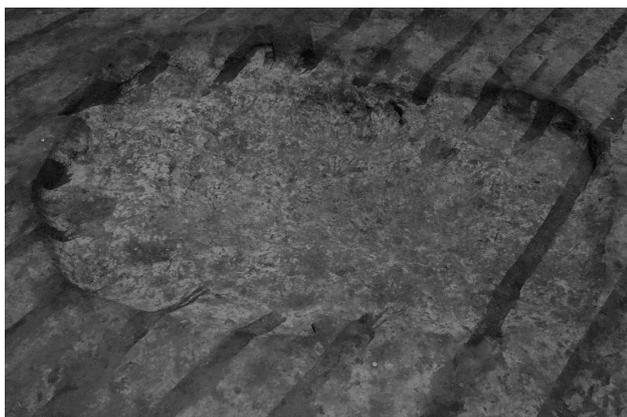
2 全景(西から)



1 全景(東から)



2 全景(南東から)



1 第68号住居跡



2 第68号住居跡遺物出土状況



3 第69号住居跡



4 第69号住居跡竈



5 第69号住居跡遺物出土状況



6 第71号住居跡



7 第71号住居跡竈



8 第71号住居跡炭化材出土状況



1 第71号住居跡竈遺物出土状況



2 第73号住居跡



3 第73号住居跡竈



4 第73号住居跡遺物・炭化材出土状況



5 第76号住居跡



6 第76号住居跡竈



7 第76号住居跡遺物出土状況1



8 第76号住居跡遺物出土状況2



1 第76号住居跡竈遺物出土状況



2 第77号住居跡



3 第77号住居跡竈



4 第77号住居跡遺物・炭化材出土状況



5 第77号住居跡炭化材出土状況(住居西側)



6 第77号住居跡出入口付近遺物出土状況1



7 第77号住居跡出入口付近遺物出土状況2



8 第83号住居跡



1 第83号住居跡竈



2 第83号住居跡遺物出土状況



3 第83号住居跡竈周辺遺物出土状況



4 第85号住居跡



5 第85号住居跡竈



6 第85号住居跡遺物・炭化材出土状況



7 第85号住居跡遺物出土状況



8 第85号住居跡遺物出土状況



1 第86号住居跡



2 第86号住居跡竈



3 第86号住居跡遺物出土状況



4 第86号住居跡竈周辺遺物出土状況



5 第70号住居跡



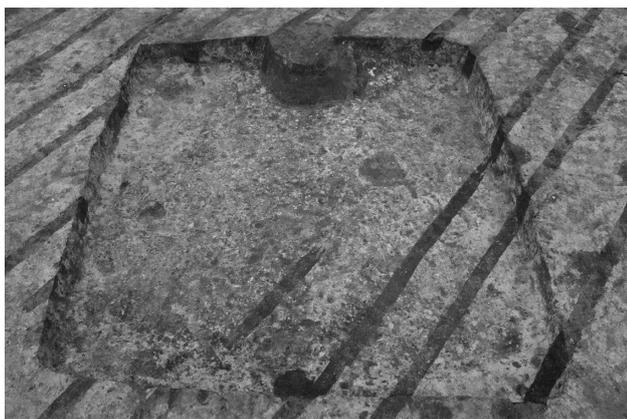
6 第70号住居跡竈



7 第70号住居跡遺物出土状況



8 第72号住居跡



1 第78号住居跡



2 第78号住居跡竈



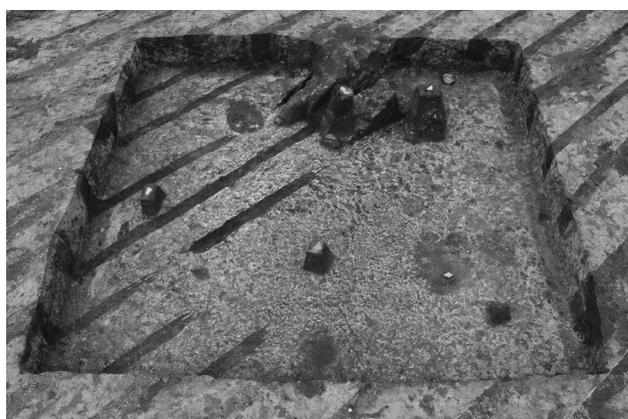
3 第78号住居跡遺物出土状況



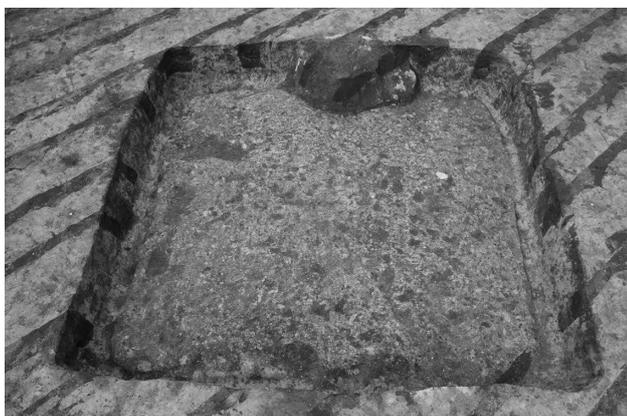
4 第80号住居跡



5 第80号住居跡竈



6 第80号住居跡遺物出土状況



7 第81号住居跡



8 第81号住居跡竈



1 第81号住居跡遺物出土状況



2 第82号住居跡



3 第82号住居跡竈1



4 第82号住居跡竈2



5 第82号住居跡遺物出土状況



6 第84号住居跡竈



7 第84号住居跡竈



8 第84号住居跡遺物出土状況1

図10 住居跡 奈良・平安時代



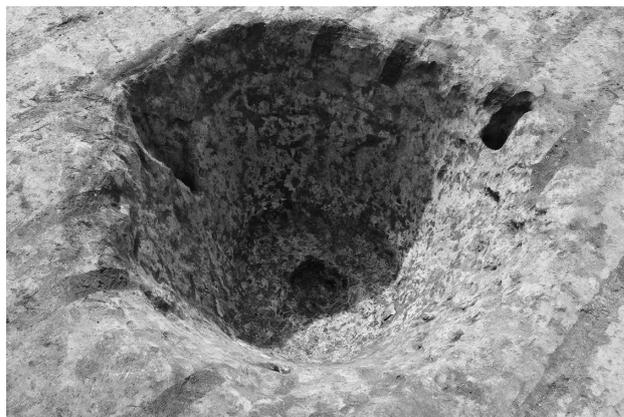
1 第84号住居跡遺物出土状況2



2 第84号住居跡遺物出土状況3



3 第84号住居跡遺物出土状況4



4 第13号土坑



5 第13号土坑覆土



6 第3号溝状遺構



7 第3号溝状遺構遺物出土状況1



8 第3号溝状遺構遺物出土状況2



SI68-1



SI68-2



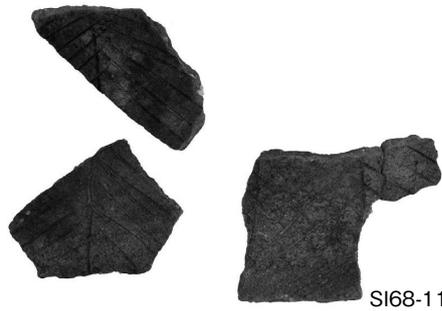
SI68-4

SI68-5



SI68-8

SI68-9



SI68-11



SI68-12



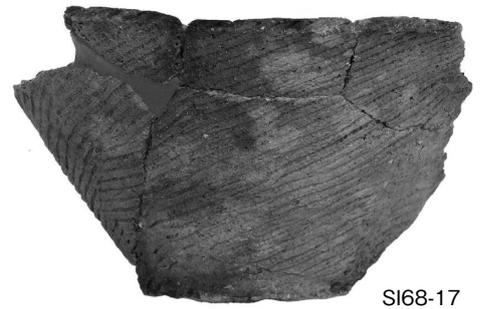
SI68-13



SI68-15



SI68-16



SI68-17

1 第 68 号住居跡出土遺物



第 13 図 -1

2 弥生時代出土遺物



1 第76号住居跡出土遺物



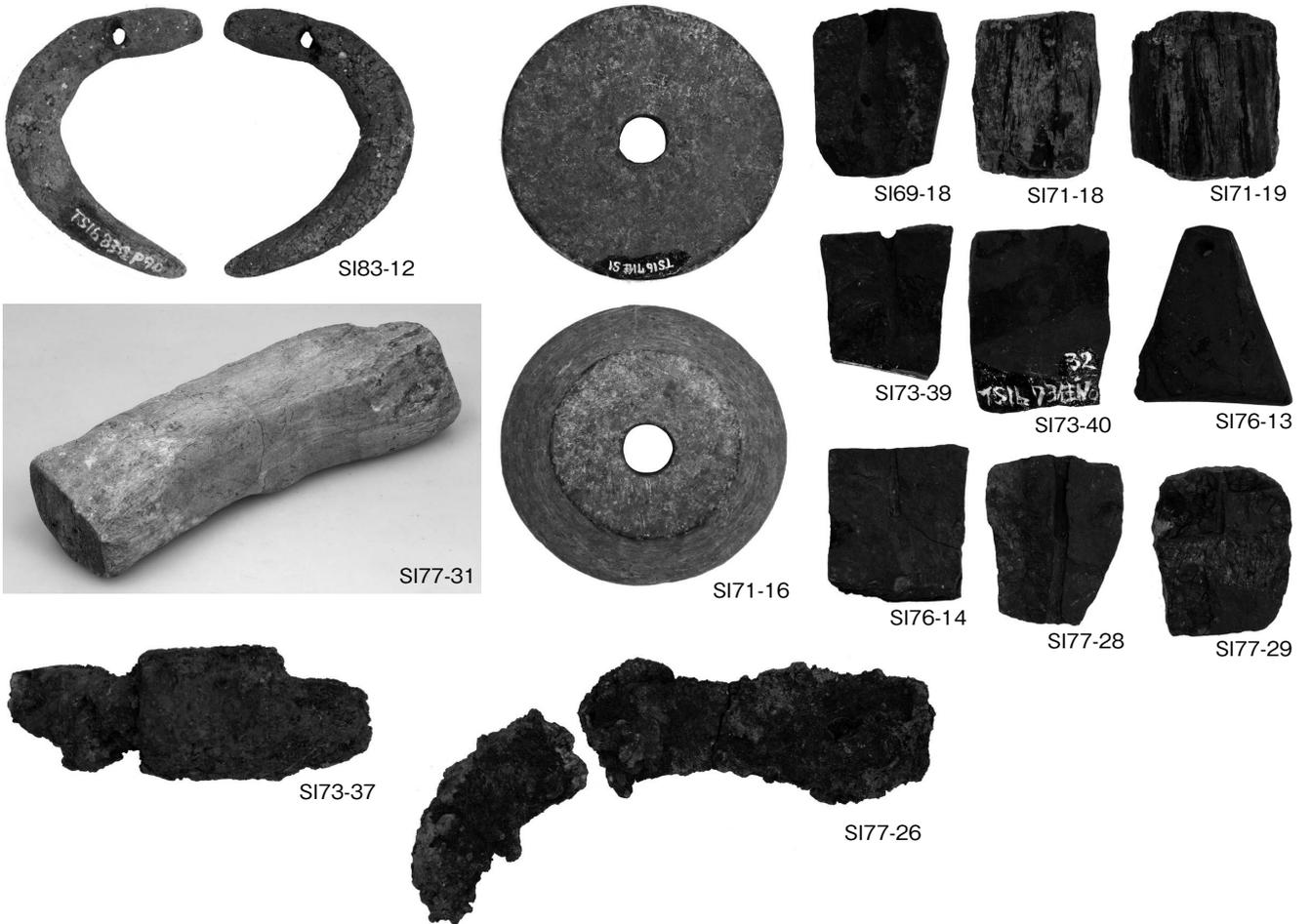
2 第77号住居跡出土遺物



3 第85号住居跡出土遺物



1 第 86 号住居跡出土遺物



2 古墳時代住居跡出土土製品・石製品・鉄製品



1 第 80 号住居跡出土遺物



2 第 84 号住居跡出土遺物



3 奈良・平安時代遺構出土瓦・石製品・鉄製品

# 報告書抄録

フリガナ	タカノス サン
書名	鷹ノ巣Ⅲ
副書名	第4次調査の成果
シリーズ名	(公財) ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告
シリーズ番号	第43集
編集者名	稲田健一
著者名	鈴木素行, 佐々木義則, 稲田健一, パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
発行機関	公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社
発行機関所在地	茨城県ひたちなか市大字中根 3499 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター内
発行年月日	2018年1月19日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号						
なかのすいせき 鷹ノ巣遺跡	ひたちなか市字部田野 宮後・西原	08221	204	36° 22' 15"	140° 34' 32"	25.0 ~ 28.0 m	20160518 ~ 1130	8,574 m <sup>2</sup>	市営墓地の 拡張事業に 伴う記録保 存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な出土遺物	特記事項
鷹ノ巣遺跡	集落 遺物包蔵地	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 中世 近世	住居跡 16基 溝状遺構 2条 土坑 1基	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 瓦 ガラス小玉 等	炭化材樹種・炭化種子の同定

要 約	古墳時代の住居跡は、すべて6世紀の時期と考えられる。内4基は、一辺が7mを越える大型の住居跡で、1遺跡の1時期に4基もの大型住居跡が確認されるのは市内で初めての事例である。
-----	--



2016年度調査員一同

---

(公財) ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社文化財調査報告 第43集

### 鷹ノ巣Ⅲ - 第4次調査の成果 -

2018年1月19日発行

編集 公益財団法人 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

発行 公益財団法人 ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社

(〒312-0011) 茨城県ひたちなか市中根 3499

TEL 029-276-8311

印刷 株式会社高野高速印刷 (〒310-0035) 茨城県水戸市東原 2-8-1

---

